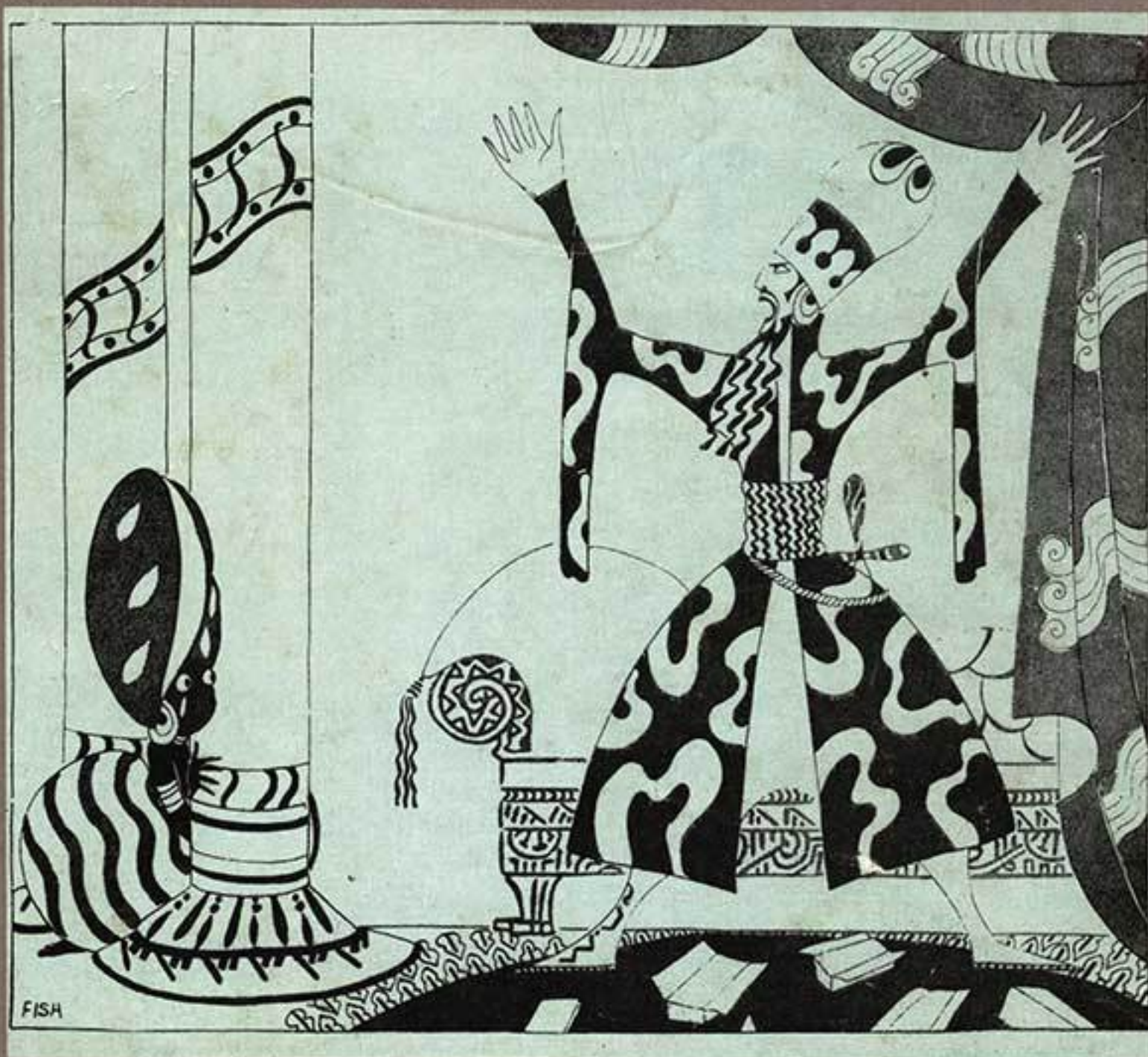


奇譚クラブ

新しい風俗文獻誌

9月号



1963・9

昭和三十三年八月二十日印刷 昭和三十三年八月九日 日発行九月号（第十七巻第九号毎月一回一日発行）

昭和三十三年四月二十日第三種郵便物認可昭和三十三年六月十七日国鉄大島特別換乗証第112号

奇譚クラブ

9月号

定価二百円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



今月の新版分譲品

足拳開股責

略号 (あけ)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 梨花悠紀子

辻村隆氏の手によって高々と天井近くまで引き上げられた片足。これ以上は開けないという程まで真一文字に裂かれた両の太股。分譲品用として特に撮影したSマニヤ待望の股裂きフォト。

猪吊り

略号 (いの)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 梨花悠紀子

両手と両足を一緒に一つに括りまるで四つ足の動物を釣り下げるようにぶら下った梨花嬢。全身を無防備の中に放置して、浣腸、擦り等々あらゆる責めの触手にさらしている吊り責の法悦境。

苦悶の裸身

略号 (くせ)

大手札四枚一組 四〇〇円

モデル 関谷富佐子

色気の漂う肉つきのよい若妻が両手を鴨居に釣られて逃げるこ

の出来ない裸身をさらしている。張り切った肌に炸裂する激しいムチに全身を縛るおねじりするように悶えさす関谷夫人、苦痛に耐えかねたその甘い表情は、悦虐にむせび泣く感極ったエクスタシーか。

バンド晒し

略号 (はと)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

アテゴムのボタンも鮮かにメンスパンドを穿かされてはいるが、悲しくも後手に括られてはいるため手で掩ってかくすことすら出来ないで、只徒らにあらわなバンドをさらしているばかり……。

バンド見せ

略号 (はみ)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

自らの手でズロースを脱ぎパンドを穿くことを命ぜられた娘は、羞しさに真赤になりながらも、男の目の前ではき替えた。自由のきく手でアテゴムを触りながら恥じらいを見せた月経帯のムスメ。

責め衣

略号 (せめ)

大手札三枚一組 三〇〇円

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

普通ガラス製浣腸器といえは二十CC、大きくとも三十CCであるが、これは又一〇〇CCという馬鹿でかいシリンドラーを握って自らの手で浣腸を施すという、浣腸マニヤひかるの浣腸ポーズ。

エネマ挿入

略号 (えね)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

中央のゴム球を握ったり放したりすると一端の嘴管からは激しい勢で水や空気がほとばしる。他端を浣腸液のコップに入れると忽ち悪魔の管と早変わりするのだ。エネマの嘴管を挿入するに至る二枚のフォトと挿入し終った一枚のフォトの組写真。

月経帯責め

略号 (つけ)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 梨花悠紀子

黒メリヤスの月経帯をはかせられて、あさましくも当てゴムをむき出しにされた梨花さんが、ロープでぐるぐる回ると高小手に縛り上げられ、もう無茶苦茶にゴロゴロと蒲団の上をころげまわされる。

太い浣腸器

略号 (かふ)

イルリガートル

略号 (いるり)

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 梨花悠紀子

一〇〇〇CC入りのイルリガートル、挿入便器、オシメ、オシメカバー等にとりかこまれて、自らの手でイルリガートルの嘴管から多量の薬液を注入し、激しい便意にもたえ苦しみながらオシメを当ててカバーを着用するに至る連続場面をキャッチしました。

踊り子緊縛

略号 (りこ)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 絹川 文代

キャパレーフロアードで、ほんさつきまで踊り狂っていた踊り子が控え室へ帰ってきた途端、後手高小手に縛り上げられて安楽椅子の上で開股しはりにされているその惚々とする脚線美。

四馬孝画

浣腸責絵画

女体浣腸図絵

原画原寸大複写

B4判 各一枚 二〇〇円

一、女学生

略号「かき1」

セーラー服の可憐な少女、嗜虐的な養護教師二人に便秘を直すためだといって、太いガラス製浣腸器で無理矢理に浣腸される。上半身と足首とを縛られた少女は、今や治療という域を超えて、二人の男女の教師によって、激しい浣腸責めを加えられることになるのだ。

二、看護婦

略号「かき2」

美しい見習看護婦が若き医師の実験台となって、医院の一室

で浣腸を施される。部屋の柱に両手を縛られて抱えさせられ、右足は柱に、左足は挙げて壁に括られ、真白く可愛いヒッチを晒したまま、強烈な浣腸液をガラス製浣腸器によって、次々と注入されるのである。

三、ヒマシ油

略号「かき3」

数度にわたる浣腸によっても女が飲み込んだダイヤは出て来なかった。今は最後の手段だと押さえたヒマシ油を浣腸器の先へととりつけたガムの管によって注ぎ込む。嘔吐を催しそうにな

四、空気ポンプ

略号「かき4」

清純な乙女が捕われの身となつて、ズベ公の手によって腸の中に空気ポンプから空気を強制注入されようとしている。自動車のタイヤに空気を入れるそのポンプは、強い力で乙女の腸内にシュッシュッと激しい勢で空気を送り込む。やがて腹部は張りきるばかりに膨満することだらう。

五、逆吊り浣腸

略号「かき5」

両手と両足を開いて竹に括られ、両足首を吊るという逆吊りのポーズで釣り下った美しい女体。嘴管を受け入れる臀部が丁度目の高さで待っている。老人は、恐怖の浣腸器を手にして負圧の腹部に対して強制的な注入を行おうとする。口を開けてこの酷い仕打ちに耐えようとすると八等身の娘。

六、大の字浣腸

略号「かき6」

二本の棒の棒に、両手と両足を文字通り大の字に縛り上げられて高々と空間に吊り上げられ

七、強制洗腸

略号「かき7」

これから、お前のお腹の中をすっかりきれいに洗滌してやろうと、若い女は処置台の黒いレザーの上に坐らされ、両足首は高々と天井から下った縄に釣られた。イルリガートルから流れてくる薬液は、彼女の口から腹の中へ注ぎ込まれる。胃と腸に充滿した液体は、洗面器の中へ吐き出させられ、再び注入されるのである。

八、リスリン浣腸

略号「かき8」

三日間の排便を禁止させられた女の腹部は、ぶっくりと大きくふくらみ、革のベルトで胸から胸を縛られ、片足を宙に吊られて、恥しいリスリン浣腸を拒む術とてない。溜りに溜った彼女の便は、激しい勢いで体外に噴出するの、今や時間の問題となつた。ああ、その目まじしい光景よ。

四馬 孝画

女体浣腸羞恥場面図絵決定版

第一集

A5判感光紙極鮮明焼付

四枚一組 五〇〇円 略号(かん1)

第二集

A5判感光紙極鮮明焼付

四枚一組 五〇〇円 略号(かん2)

始めての浣腸絵画として分譲を試みました「女体浣腸嗜虐場面」(か6)は、大好評裡に多数の皆様御注文を得ましたので、引き続き、浣腸責絵画「女体浣腸図絵」の分譲を開始、これも又、分譲をはじめて日の浅いにも拘らず、申込殺到の有様にて大いに意を強くしております。目下分譲中ですので、未見の方は是非お申込み下さい。表紙裏に詳細広告してあります。

以上の二点は、いずれも浣腸責をテーマとした嗜虐的なもので、縄などを用いて女体を拘束することと主眼を置いております。その後マニヤの方の要望で、縄などを一切用いない納得すく浣腸図を求め、声が上がり、ここに四馬氏を煩して完成しました。

即ち、花恥しき乙女が、美容のため、或は便秘の治療、食当りの洗腸、果てはプレイの一種として等の理由で、恥しいながら、諦め

て、やむにやまれず浣腸を施されるといったロマンチックな甘いムードの漂う浣腸の絵なのです。従って、ここに展開される二集八葉の浣腸図は、すべて縄や鎖などをを用いず、手足は自由のままに羞恥にのたうつ美しい姿態が望まれます。今までの「浣腸責」とは違った味合いで、マニヤの方々の胸の奥底に迫ることでしょう。

【第一集】 四枚一組

一、保健室の女学生

体操の最中に急に腹痛を訴えた美しい女学生、早速保健室に伴われて、保健医の手によって三十Cの浣腸器でグリセリンの浣腸を施される。セーラー服のスカートをまくり上げてブロースをずらし、真白なお尻を医師の目の前につき出して受ける浣腸……。

二、オシメカバーと浣腸

保健婦のおばさんが手にした太

い浣腸器から、情容赦もなく浣腸液を注入されたお嬢さんは、ぶっくりと可愛いお臍をのぞかせておむつを当てられ、ピンクの美しいカバーを穿かせられるのであった。恥しげに、便意を耐えているお嬢さんの可憐な表情……。

三、便秘の新妻と浣腸

もう一週間も用便に行かないという二十才の新妻、ベッドにうつ伏せになって、信頼する夫から施されるグリセリン浣腸。真紅のパンティをずり下げて、肉づきのよい真白な臀部をつき出して、懸命に力んでいる美しい顔。夫は挿入便器を今まさに排泄しようとする新妻のお尻へ当てる……。

四、セーラー服と若き医師

面長の大人びた顔立の美しい女学生の患者とたった二人きりで診察室の中で、エネマシリンジによる浣腸を実施する青年医師。消化不良による軽い腹痛であったが、彼はこの美貌の女学生に対して、浣腸をやってみたくて仕方がなかった。ワクワクする胸を押さえてシリンジの嘴管を注入するのであった。

【第二集】 四枚一組

一、お友達にされる浣腸

外出先から帰るなり、急に腹痛を訴えるBGのお友達を自分の

部屋に連れ込んで、パンティを膝頭まで脱がせて、二〇CCの浣腸器で浣腸する短大生。シュミーズを胸までまくりあげて、浣腸の羞恥と腹痛を戦う美しくもいたましい嗜虐的なポーズと表情……。

二、秘結は美容の敵

舞台を終った美しい踊子、美容のために毎晩行う浣腸を、今日もアパートの近くの診療所の医師に施してもらったのであった。踊りできたえたムチムチとした肉づきのよいお尻をすっかりむき出しにして、医師の前に差し出せば、太いエネマの嘴管が迫ってくる……。

三、病院での浣腸

「さあ、お浣腸をしましょうね」看護婦の制服がよく似合う年若い看護婦が手に五〇CCの大きな浣腸器を持って近寄ってきた。覚悟していたことながら、自分が浣腸されると思うと、羞恥と驚きとで顔が真赤になった。それでも、スカートを下し、ブロースをめくって、ベッドの黒革の上で白いお尻をむき出しにするのだった。

四、若妻エネマの浣腸

原因不明の発熱で寝ていた新妻が恥かしそうに腹痛を訴えるのでよく聞けば便秘ということだ。早速愛用のエネマシリンジを持ち出された。洗面器になみなみと作られた石鹼液がどくどくと妻の腹の中へ注入されてゆくのだ……。

夢幻の中のトルソ	絹川文代
浴槽の女神	梨花悠紀子
脚下の黒髪	大塚啓子
縄による弄び	絹川文代
拒否、哀願、勘言、諦観	
捕われの終結	大塚啓子
引廻しのワンカット	東浦ひかる
顔と足の悦唐表情	関谷富佐子

アイデア画 倉庫の鼠	四馬孝・画
妊婦の浣腸二題	四馬孝・画
助産婦の診察―便秘した妊婦	
マソヒスチック・グラフィ	
大井川の渡し人足	滝れい子・画
「ぼやぼやするんじやないよ」「足を濡さないように、静かに歩きたら」	
女体切腹 花吹雪女弁天小僧	滝れい子・画
傑作責画 クリップの惨酷	四馬孝・画
新婚夫婦のブレイ エフ付の荷物	四馬孝・画

巻頭口絵	
第二グラビヤ	
憂囚のまざなし	梨花悠紀子
夫婦のSM写真(読者提供フォト)	
絞首刑のプレイ	新宮明夫
椅子の下の悦唐	梨花悠紀子
柔軟性の実験	黒川不二男・画
調理台上のいけにえ	大塚啓子
疑惑のおののき	絹川文代
巻頭雑文 あなたまかせのよせがき帖	編集 同人 (34)
告白 自虐鬼の懺悔	長岡愛一郎 (38)

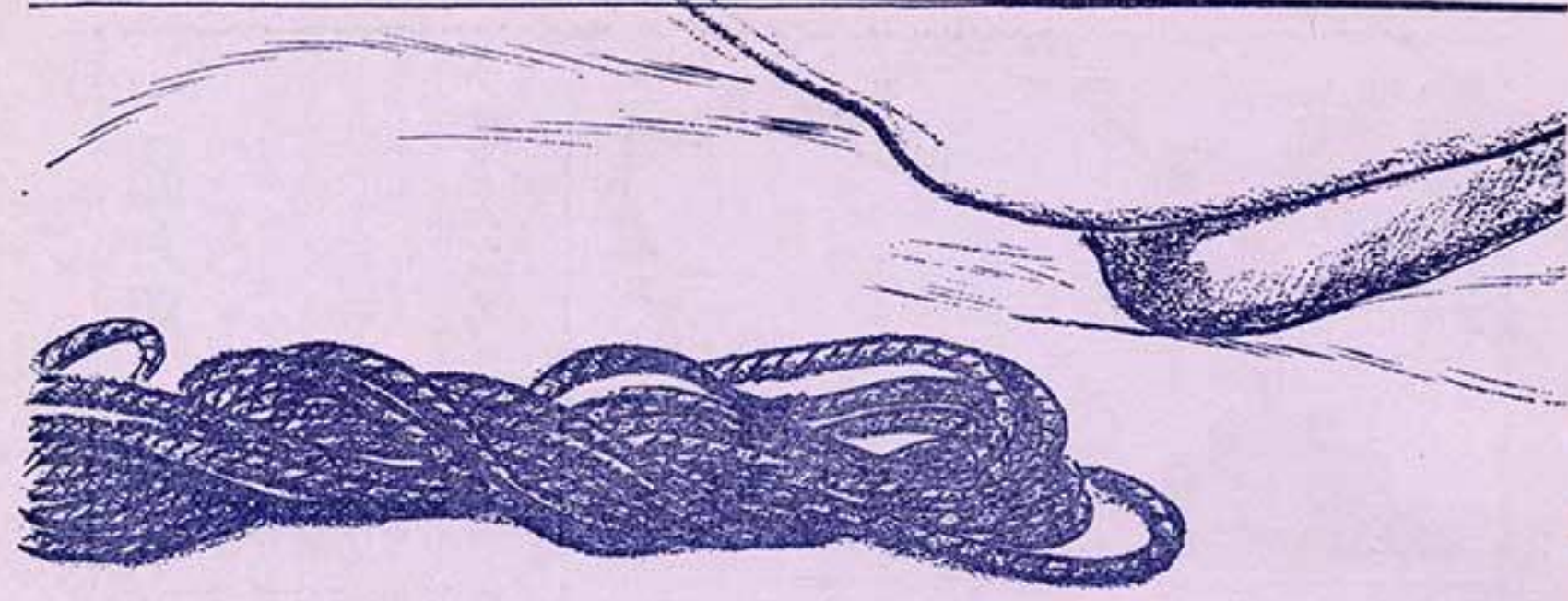


告白通信 五、六、七、八月号の魅力ある

終身刑	責めの感想	柴島 令子 (47)
浅子像		田川 一 (56)

パンティ難感		柴里 雷九 (58)
女性切腹の追想		川崎 進一 (62)
映画通信 邦洋画は惨酷ムード		武林 長作 (64)
美保子の処方箋		東山 映史 (66)
マソ、マソ&マソ		藤井 泗郎 (68)
長篇SM小説 宇宙のどこかで		平 伏人 (80)
女相撲ファンタジー		佐治 麻造 (82)

首投げと足の裏の魅惑		女素 舞夫 (90)
ガン作・マニヤのノート		芳野 眉美 (98)
女相撲の思い出話	文と画	津谷 正春 (100)
薔薇赤く		万田 不仁 (102)
被虐愛さんげー		田島 直士 (118)
マソ芸術考(女性男装管見)		
△女やくざを中心に▽		
灼熱の乗馬ズボン「殉国の妖花」		藤山 秀緒 (128)
検便 随想		栗瀬 長 (137)
告白 自己愛の記録		渡部 かね (140)
女子バレー部の罰則		並原 睦夫 (142)
(あるフェチシストの告白)		
△体験告白▽溺死体		鷺野 時江 (148)
図書紹介ある女囚の記録		大熊 正 (152)
切腹とその姿態の雑感		浜路貞之助 (158)
病院惨酷物語		山岸 操 (160)
「臨月腹」に期待して		瀬沼 五郎 (164)
読者通信(奇クサロン)		東山 映史 (180)
「映画通信」復活した新東宝映画		



「臨月腹」妊婦フォト……分譲

「妊婦新作フォト」として、先月号で初めて分譲を開始しました、安原さゆりさんの妊娠九カ月の写真は、大好評を得ましたが、その時予告しました通り、ここに臨月の写真を分譲することができました。ここに発表しましたフォトは、分娩二日前に撮影したもので、その意味からも、まことに貴重な風俗文献であると信じます。写真の出来ばえも、編集部からのアドバイスにより撮影されましたので、前作と比べて隔段の進歩が見られます。何卒、九カ月の妊婦腹と比較してごらん下さい。

臨月腹ヌード

大手札 二枚一組 三〇〇円

略号(りく)

モデル 安原さゆり

お臍を中心に、まんまるく太鼓のように、ふくらんだ出産前二日の膨大なお腹を、斜め正面と側面から狙いをつけて、刻明に妊娠中の腹部の有様を印画に記録した全裸の妊婦フォト。

臨月腹アップ

大手札 二枚一組 三〇〇円

略号(りと)

モデル 安原さゆり

物凄くふくれ上った臨月の女の腹部を、膝の上から胸部までを切りとって、大写真とし、むくれ上ったお臍を中心に焦点を合せ、妊娠線もあらわな便々たるお腹。

臨月妊婦の全身像

大手札 二枚一組 三〇〇円

略号(りく)

モデル 安原さゆり

出産を目前にひかえて、もうこれ以上は大きくなりませんという皮膚もはちきれそうな巨大なお腹を、大いばりでせり出して立ち、或は、お腹をかかえてどっしりと坐したところを、全身あますところなく、つぶさにマニヤの方々に見て頂くというフォト。

臨月腹の側面

大手札 三枚一組 四〇〇円

略号(りと)

モデル 安原さゆり

立ち上った妊婦の膨大な腹部を最もよく、特徴づけて見ることが出来るのは側面からのカメラアン

グルである。前面にむっくりと突き出た腹部、背後にしゃくくうようにつき出された臀部、これほど妊娠中の女性の生態をありありと露出したものはないでしょう。

臨月腹の背面

大手札 二枚一組 三〇〇円

略号(りも)

モデル 安原さゆり

臨月の妊婦の前面ばかりでなくその背面から狙いをつけて、臀部の有様や、背後から見た腹部のせり出し模様などを、とくとごらん頂くために、特に背面からの分もつけ加えました。

臨月垂れ腹

大打札 三枚一組 四〇〇円

略号(りみ)

モデル 安原さゆり

出産を二日後に控えて、せり出した妊婦特有の垂れ下ったお腹。八、九カ月の頃のように、只前に大きく突き出るだけでなしに、この写真のように垂れ下ってくると分婉間近かということが出来る。◎以上六種の「臨月腹」の写真の分譲を出来ることが出来ました。提供の方々に厚く御礼申し上げます。目下、写真部に於て妊娠中の読者の方に交渉中ですので、近しい中、撮影できるかもしれません。

辻村 隆

緊縛女体撮影風景

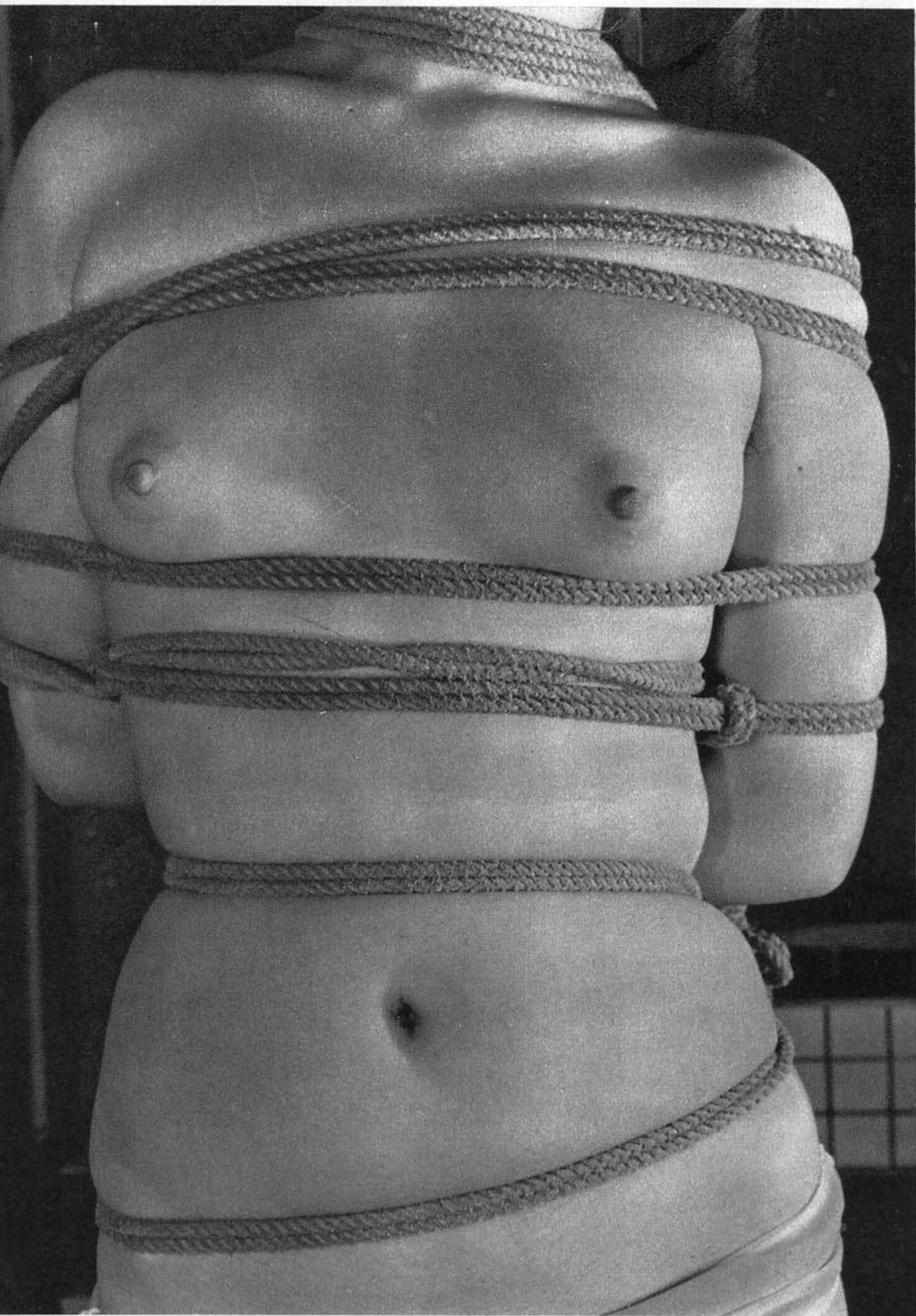
モデル 大塚啓子

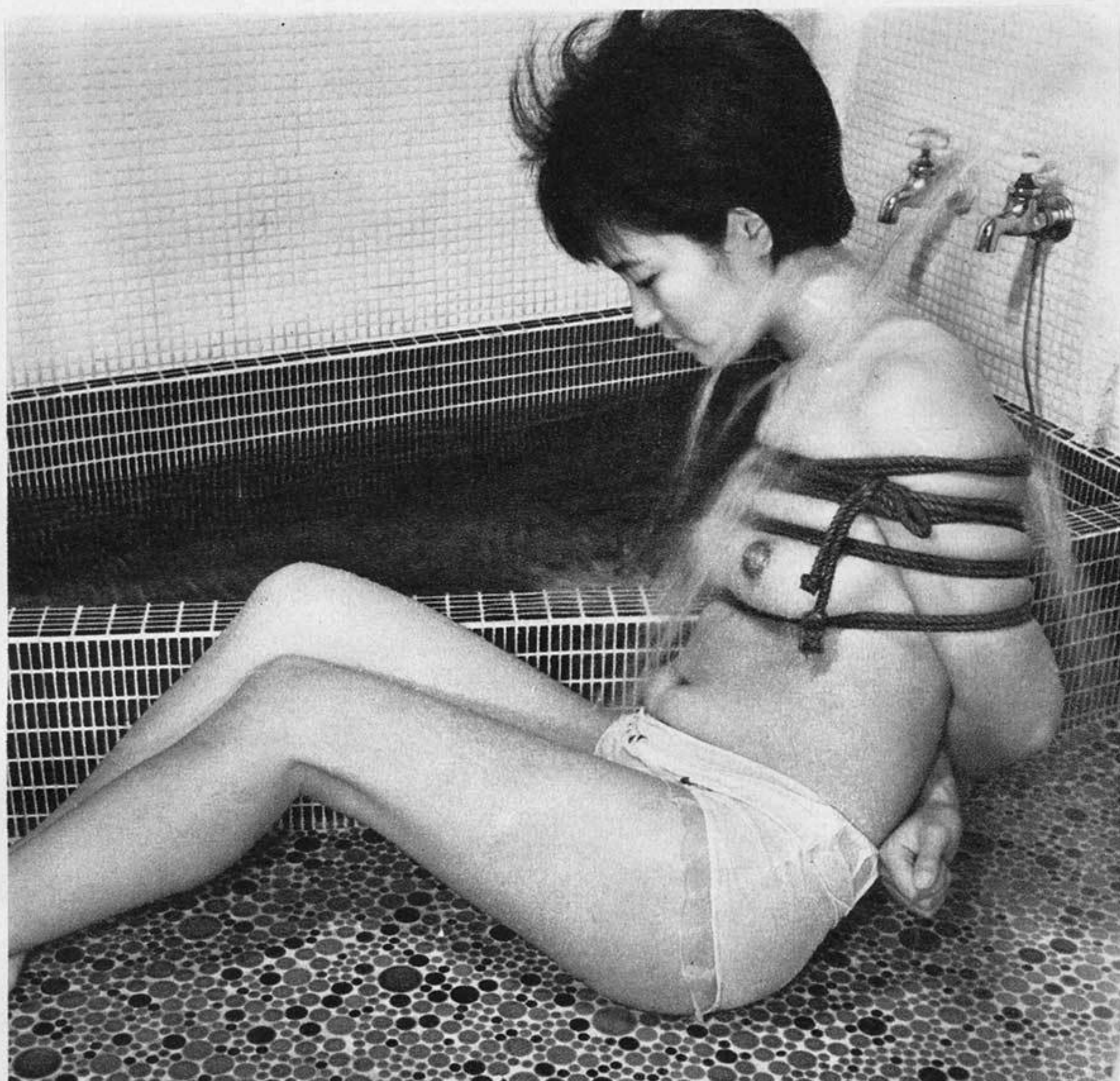
大手札四枚一組 四〇〇円

略号(むら)

豊富なアイデアを駆使して強烈な縛りを敢行することで定評のあるベテラン辻村隆が、全裸のモデル大塚啓子を用いて、厳しい逆エビ責めを施したときに、その指導ぶりを記録した十数枚の連続フォトの中から、強烈なもののみ四枚を選び出しました。

一、胸に二巻き厳しい後手しぼりに、首縄、両足首を揃えて固くしぼり、背中の縄に連結している辻村隆の縄さばき。
二、更に、腰から尻にかけて縄を施し、柔肌のすべてに縄の網目を作ってゆく。縄尻を咽喉にまわして、髪を引っ掴んで仰向かせようとする辻村隆。痛さに呻めき喘ぐ大塚啓子の全裸の曲りよう。
三、両足首の縄は徐々に締めつけられて、まるで全身がじんがらめの大塚啓子、踏みつける辻村隆。
四、逆エビ縛りが完成して、一本棒のように荷造りされた大塚啓子の足首を持ち上げて、逆さに引き上げる辻村隆の快心作。



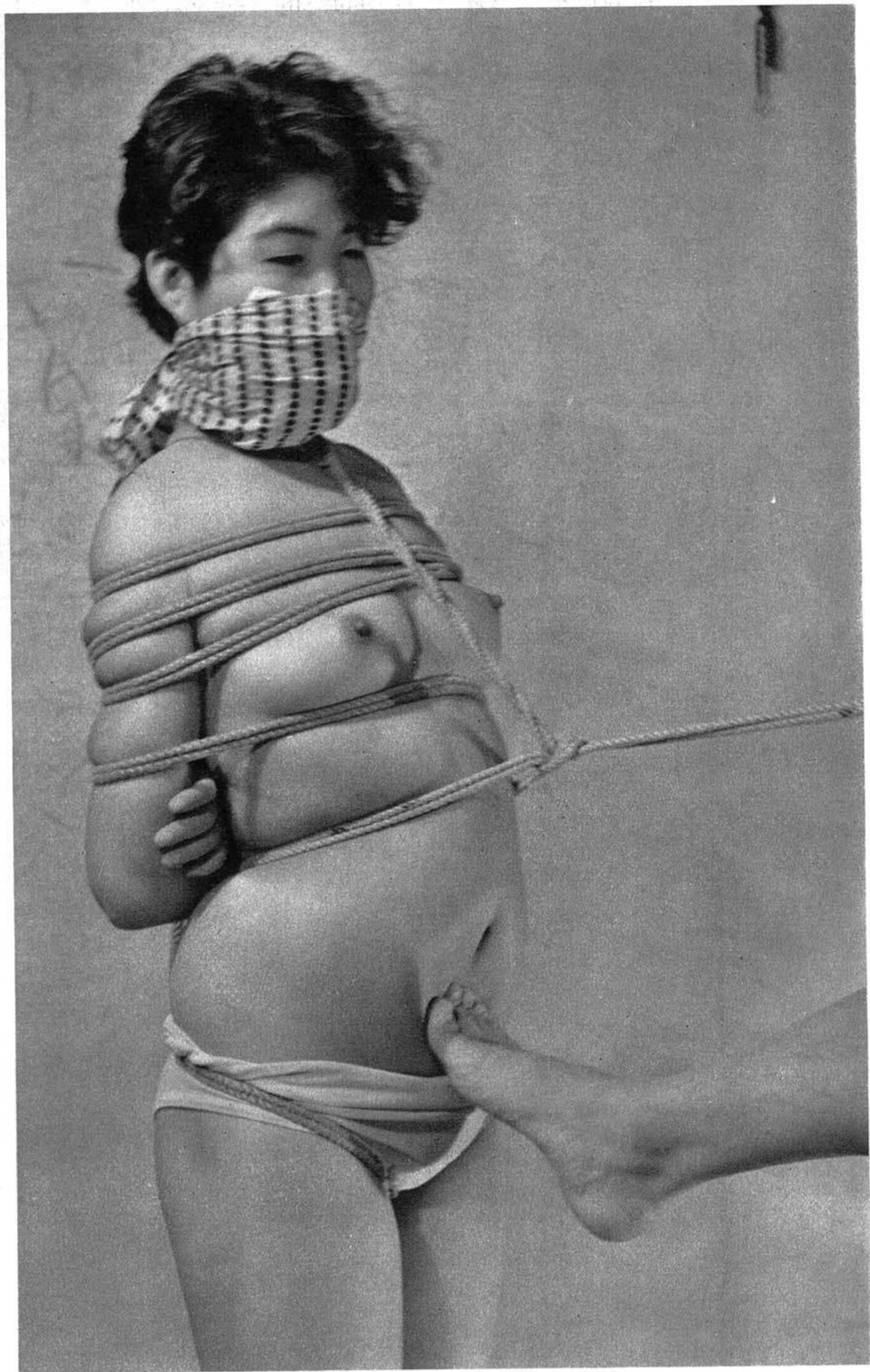




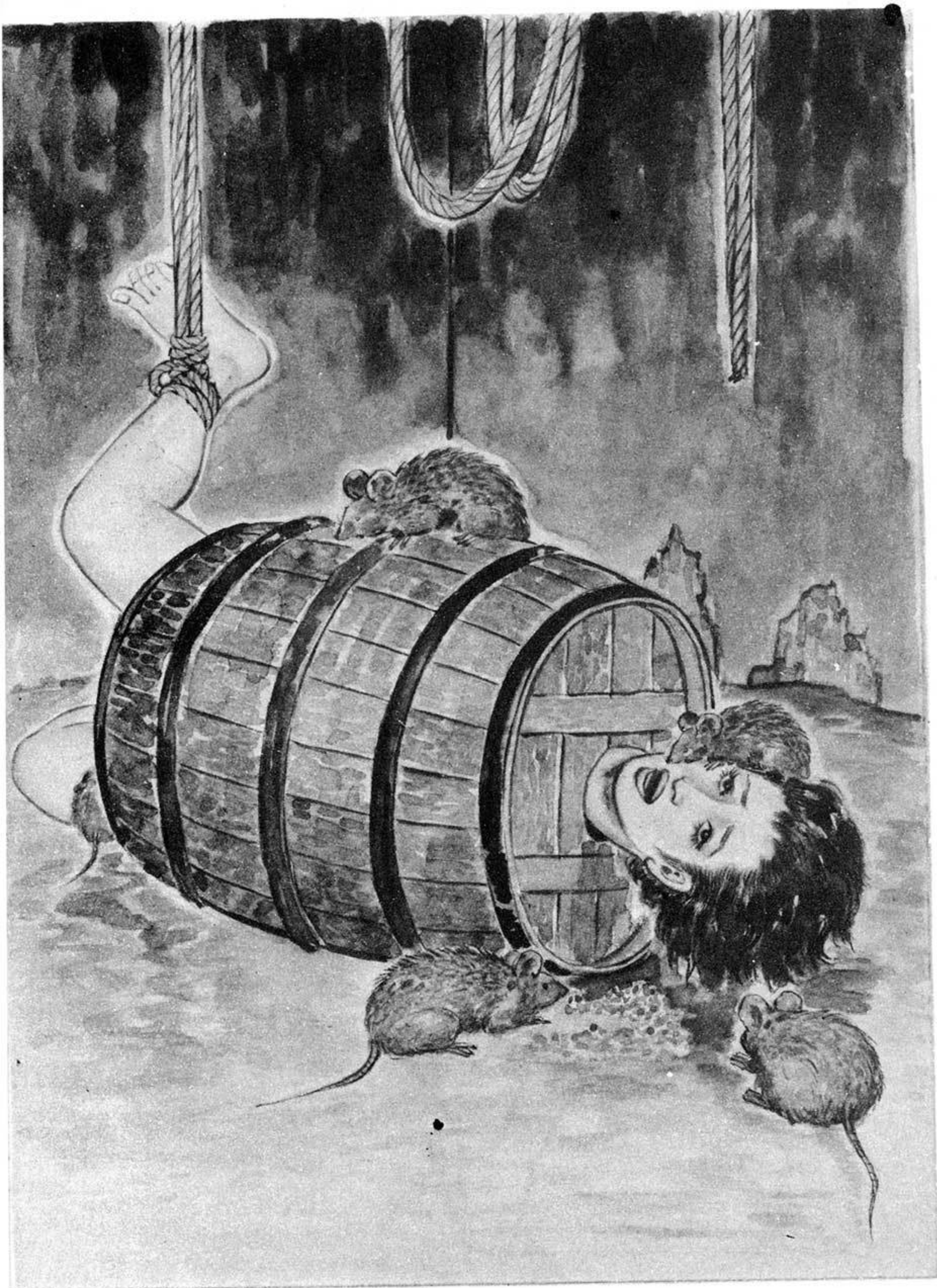




















吹雪女并天小僧

鐘一花散りしきり

月光に

切腹の女
肌青かりし





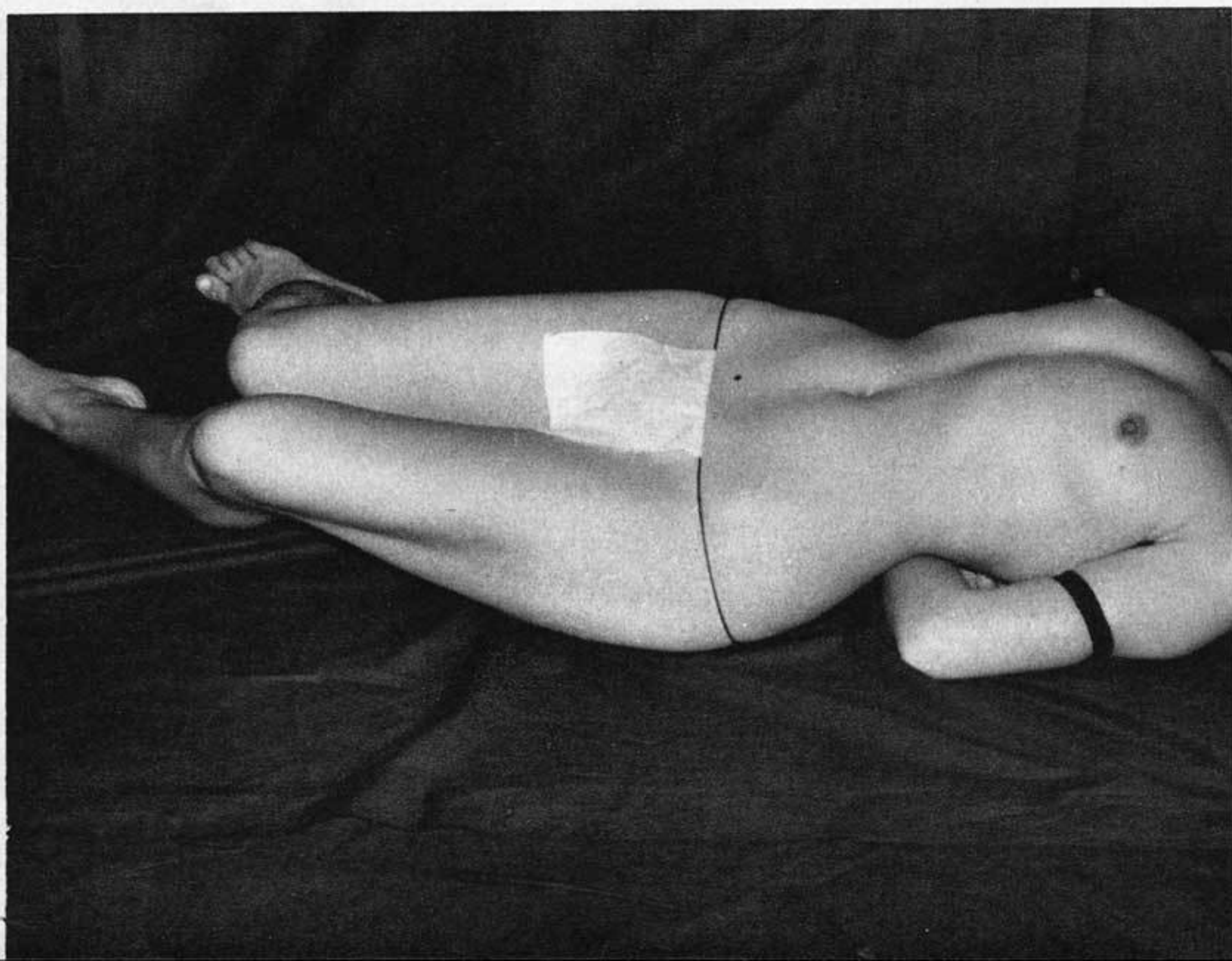
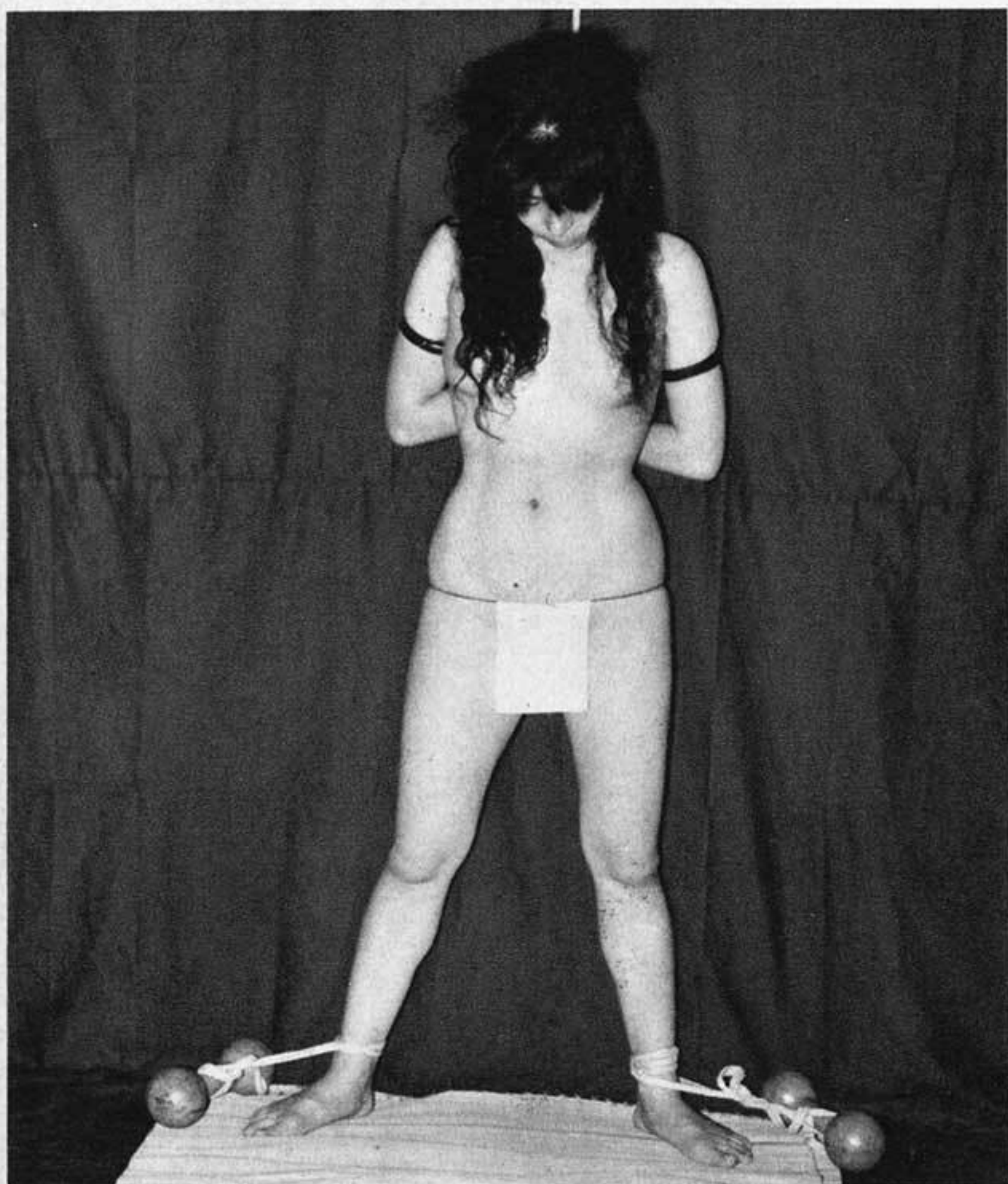


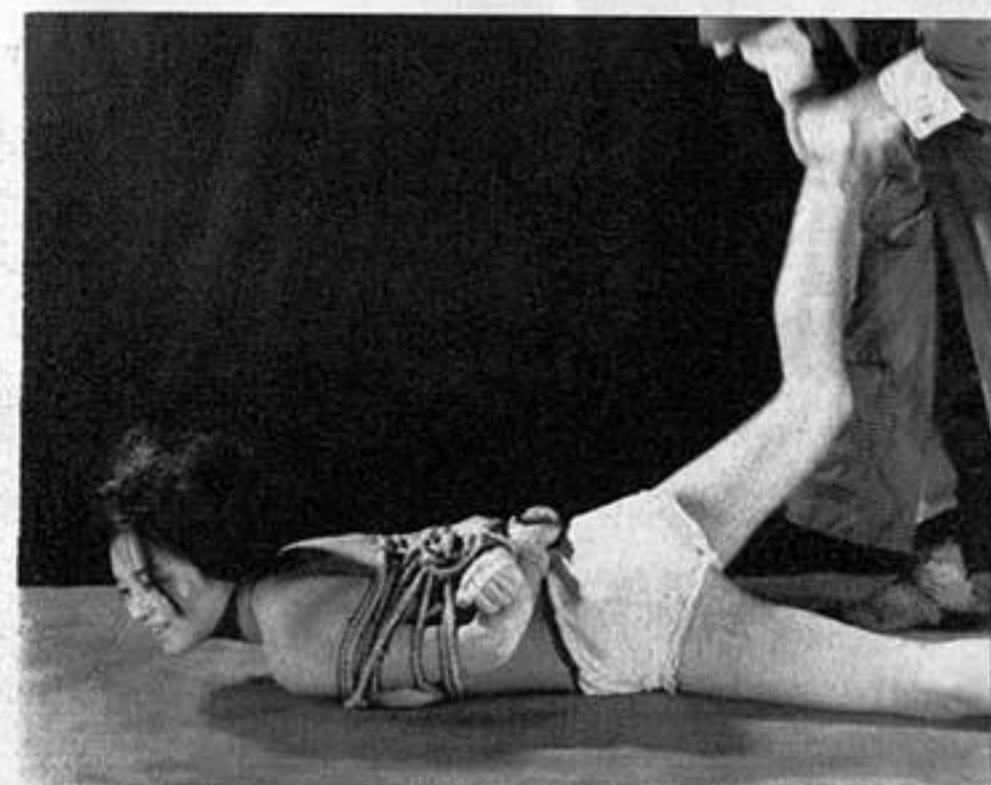
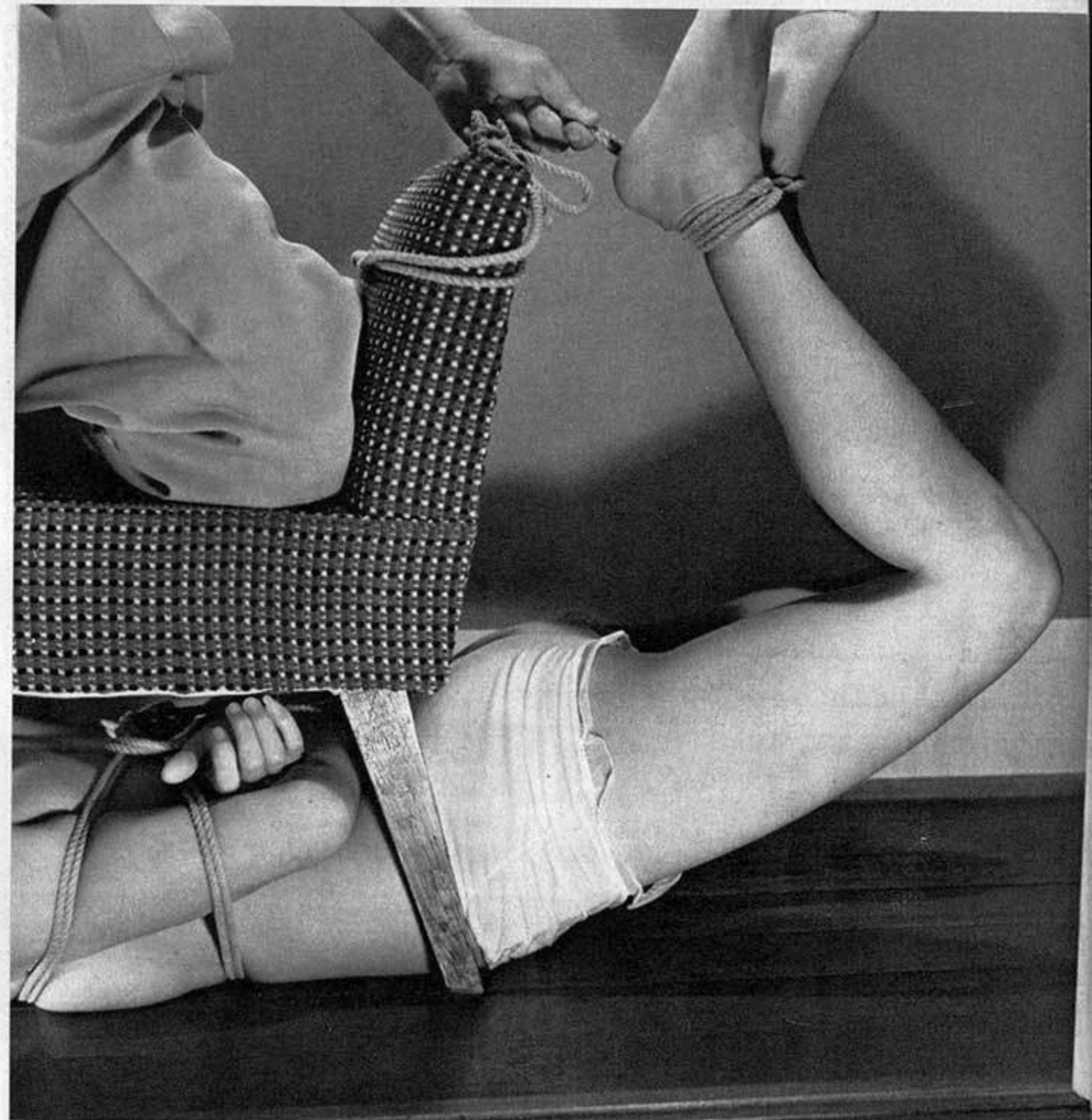














新しい風俗文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1963年 9月号

(第17巻 第9号 通刊 第180号)



巻頭雑文

あなたまかせの
よせがき帖

編集同人

先ずは御挨拶

本誌が発刊されてから、早いもので、もう十数年になる。その間、いろいろと編集上の裏ばなしや読者のこと、モデルのこと等、話したら面白いと思われるようなことが沢山あったが、それらは一部断片的に編集後記として発表されたり、辻村氏、塚本氏の手記として掲載された以外、余り載せられなかった。読者からの要望が強かったにも拘らず、何故掲載されなかったのであらうか。面白く

書けば書く程、真実を、そのまま書けば書く程、話題にのる人のプライバシーを傷つけることになるということが、第一の難点であった。本誌が一部の週刊誌のように、個人の名誉なんかは問題にせずに、只ウケルということだけを考えて煽情的に書くということの方針としているのだったら、相当話題になりそうな材料は度々入手していた。

しかし、本誌のゆき方としては、そういったやり方は極力排撃していたので、従来は折角の材料があっても、発表はさしとめていたのだ。今回は出来るだけ、そういった点に注意しつつも、読者の皆様方に参考になるような話題を、編集同人が手わけして提供したいと思っている。

出来るだけ肩のこらない、雑談的なものにしたいたいと思っている。或は文体や書きぶりが途中で変わるかもしれないが、それは数人が手分けして書くためなので御諒解願いたい。

投稿原稿

毎日、相当量の郵便物が到着するが、やは

りなんといっても、一番かさばるのは投稿原稿である。中には何百枚という原稿を小包で送ってくる人もあるが、殆どは第五種郵便のいわゆる開封というやつである。これだと五十瓦当り十円だが、中には密封してくるものがある。第一種便だと信書並みで二十瓦当り十円なので、一番超過をとられ易いのは、この開封していない原稿である。

どさりと十数篇の原稿が机上へ積まれる。期待を持って封を切つてゆくのだが、読者を魅了するような内容のものは、やはり編集子の眼を第一にひくのは当然であろう。読むのに厄介なのは、横書きの原稿だ。これは全く読みづらいし、そのままでは印刷に回せないから、若し載せるとすれば書き直す必要があるので、急場の間に合わない。

読者通信は便箋に書いてくるのが多いが、最近では殆ど、そのまま印刷に回すので、横書きのものは完全に没である。以前は人手があった頃は、読者通信の原稿は一応全部原稿用紙に書き直していたのだが、ここ二、三年以前からは、書き直すことをやめている。勿論文字の誤ったものや、送り仮名の違ったものは直しているし、発表に支障のある箇所は削ってはいるが、書き直すことはしていない。

投稿原稿の内容を区別してみると、はっきりした統計をとったわけではないが、なんともいってもMのものが第一番に多い。Mの内容の告白物といった形式が予想に反して案外多いのである。これは考えようによっては、自慰的、露出症的といえるかもしれない。これに反して、Sの告白形式が予想に反して少いように思う。

嘗て、北海道の或る都市に居住される読者から『女を縛る法』という、Sの告白物が投稿されたことがあった。これは、数人の女性を手なづけて次々と縛つてゆく過程を詳細に書いたもので、ドンファン的人物の手記になっていた。嘘でないという証拠のためにこのうので数葉の写真さえ挿入されていた。この内容はSの読者であれば、十分に読みたいという意欲を起させるものではあったが、どう考えても、公開しにくい性質を持っていたので、大分保留にされていたが、結局写真は返送して原稿は掲載中止になった。Sの告白というものは、書く本人も非常に書きづらいだろうし、掲載する側にしても、余りあからさまのものは敬遠せざるを得なくなる。

それに引きかえ、Mの告白のものは、書く方も書きよい、というより、時には書くこと

により一種の露出症的快感さえ覚えるということがいえるし、掲載も比較的容易だ。従つて、Sの内容にしても、M女性の告白という内容だったら、比較的無難だと思う。しかもとまりのある文章を（少くとも雑誌にのせることのできる）書くということは、誰にでもできるものではないし、ましてや、女性にはニガ手らしく、従つて投稿も少い。

東浦ひかる嬢からは、相当長篇のものや、告白の原稿をよく寄せられる。彼女は文章を書くことが大変好きらしい。でも、失礼ながら、どうも、そのままでは載せにくい。残念だが仕方がない。暇があったら、なんとか手を加えてと考えているのだが……。

男性中心主義

SとかMとかいっても、この世はやはり男性中心である。即ちサジズム（加虐）は男性のSであつて、女性のSではない。女性にとつてはMになるわけ。従つてマゾヒズム（被虐）は男性のMであつて、女性にとつてはSになる。他の雑誌や週刊紙には、よくこのことを誤って混合して使っているのがある。

大分前になるが、沼正三氏も、本誌上でこのことを詳して書いていたが、S、Mといっ

でも、いずれも男性中心に考えねば解釈しにくいことになってくる。

F(フェチ)にしても、女性の下着というものに焦点を合してゆくと男性本位というところがいえる。女性の穿き古した汚れた下着に狂崇するということは、一見して男性の風上にもおけぬ奴と見られ勝ちだが、この場合は女性も客体となり、その男性は主体になる。

Fといえば、女性の身体を中心に考えてみると、第一に考えられるのは、足(脛、脚を含む、派生して靴にも及ぶ)次に少いように見えて案外多い対象物は、鼻(鼻翼、鼻孔)乳房、臍といったところは、今や平凡とさえ考えられるくらいだ。

変ったところでは耳がある。(耳垢についての告白もたしかあった)耳朶や耳の穴に、敏感な性感帯を持っているという若い女性からの読者通信を読んだことがある。

腕については、八、九年も前に告白物が載ったことがあるが、これに対する反響は非常に少いように思った。足に比較して腕に対する狂崇が少いということは、前者はより隠蔽されているのに比し、後者はより露出されているためであろうか。

いずれにしても、女性の身体各部に強い

関心が持たれ、ハダカが鑑賞され、ストリップが流行するのは、なんといっても男性中心の世の中なのだからだろう。

読者からの通信

読者からの通信や編集方針についての希望を書いた手紙なんかが大変多いのは、こういう特殊な内容の雑誌であるためだろう。

昭和二十七、八年頃には、読者からの要望を毎月とり入れて誌面を充実していたことがあった。あの頃は現在とは逆に月毎に発行部数が増えていたので、増頁につく増頁で、編集部でも人手に余裕があり、短大出の女性編集部員を専属の読者係として、読者通信欄のサービスも十分にやれた。文通の幹旋や手紙の転送、或は通信に対する返信なんかも、この女性部員の手でやってもらえた。

この女性は書店で本誌を読んで、編集をやりたいと志願してきただけあって、二十二才の若さであったが、非常に理解があつて、いろいろと編集内容についても、独自の意見を進言するなど、大いに期待されたのだが、三十年夏に、本誌が休刊したため、残念ながらこの女性部員も他のスタッフともども解散の憂目にあつてしまった。

読者の本誌に対する要望、これは出来るものなれば、具現したいというのは、やまやまなのだが、部数も頁数も昔日の俤もなく痩せ細ってしまった今では、毎月確実に発行するということがだけが、やっとなという有様なので、数多い要望には、とても御希望にそい得ないというのが実情である。

切腹特集号とか女斗特集号、或は鼻責特集号、浣腸特集号、果ては女装特集号とかいったものまで飛び出してくる。しかし、これは発行部数の点で、中々困難である。それらを総合して一本とした本誌でさえ、一般大衆誌から見れば、まことに微々たる発行部数だから、更にこれを細かく専門化してゆくということは、不可能に近くはないか。

勿論、読者の立場からだけいえば、自分の好みのもののみを収録された雑誌が安価に手に入るとすれば、これに越したことはないのだが、しかし、これが高価になっては徒らに高嶺の花となってしまう。それで、読者の方々の通信によくあるのだが、浣腸なら浣腸、マゾならマゾ、女相撲、切腹と、それぞれ自分の好みのもののみを自分で集めるという方法である。

これには、先ず雑誌の綴った針金を除いて

各頁をバラバラにしてしまう。そして自分の好みのものの頁を月を追って綴り合す。好みの種類によっては違うが、一年分の雑誌で一月分位の分量になって、あたかも、〇〇特集号といった一冊が出来上るのである。これだと、自分の読みたくない箇所は捨ててしまうのだから、保存にも至って便利である。

この方法は案外多く行われているのではないかと思う。好みの特集号を御希望の方は、一度試みられたらと考える。

会館の設立

最近発行の或る自動車雑誌を見ていたら、会館（クラブ・ハウス）開設の記事が出ていた。会員には正会員、参事会員、賛助会員、特別会員、準会員、名誉会員などの区別があって、相当の入会金、会費を徴収して運営するよう仕組みになっているらしい。

本誌の読者の要望なんかから、考えてみて大変羨ましいと思った。本誌なんかでも、愛読者を中心とした集まりの殿堂としての会館を常々欲しいと思っていた。

座談会、展示会、撮影会、研究会等を心おきなく催すことも出来るし、会員相互の交歓には誠に便利である。少くとも東京と大阪の

二大都市の郊外に、菊会館（仮称）というような建築物がほしいものだ。ゴルフの会員になるのには五十万も百万もの入会金が入用なのだから、その程度の負担力のある会員が数名もあれば、簡単に出来るのだがなあ、と思うのだが如何なものだろうか。

勿論、理想的なのは、新しく設計して好みのものを建てれば、舞台やスタジオなんかの設備も思いのままに出来るのだが、古い家を買って改造してもいいだろう。建築費、或は建物の購入費さえ最初に集まれば、あとの經常費は会費から十分捻出できると思う。

寮のような形にして、読者の中から二、三名のホステスを常置してもよいし、或は別荘番のような恰好でもよい。交通の便利な郊外の高台に新築できたら、同志的会合の殿堂として大いに利用価値があると思われる。最初のうちは設立委員の出資で建設し、場所や利用方法なんかについては、或る程度軌道にのってから、誌上に発表することにした。

差し当り、大阪で例をとれば近鉄奈良線沿線の石切あたりの高台が適当ではないか。電車でも自動車でも、都心から二、三十分で出られるし、夜ともなれば眼下に、繁華街の赤い灯青い灯を望むことができる。

今のところ地価もそう無茶に高くないから一応編集部の手で百坪単位の土地を手当てしておくのも一法だろう。今まで、多くの読者の方々から、会館とかクラブの運営或は利用方法については、いろいろと立派な御意見を頂き、その一部は誌上に発表したこともあったが、なにしろ資金的な背景がないため徒らに机上の空論に終ってしまっていた。負担力のない者ばかりではないのだから、ここらあたりで実現させてみたいものだ。文通をした、い、交際をしたい、お逢いしたい、という熱心な読者が少くないのだから、自分の趣味のために、いささかの資金を投じてもいいのではなからうか。

なるべく広い地面と豪華な建物がほしいのだが、最初からそう贅沢なこともいっておれないので、漸次増築するという予定で土地だけは広くとっておきたい。新興宗教に見られるような、あの豪勢なものは望めなくても、一寸した別荘風の近代的なものがほしい。新興宗教といえ、あの狂信的な浄財寄進の万分の一の熱意でもあれば、会館なんか立ちどころに出来るのになあ、と語り合ったことがあった。今も昔も宗教的な建造物の立派さには、只々感じいる外はない。

〔告白〕

自虐鬼の懺悔

長岡 変 一 郎

一

『自虐鬼』——とはまた旨い形容詞を用いたものだ……と、吾乍ら独りで感心してもみるのである。

こと程左様に、私は幼い頃から、人生も晩年に近い現在に至っても、未だその『自虐』の悪癖が止まないで困っている。

尤も『自虐』と一口にいても、読者諸君には、何んのことだかピンと来ないだろう……と思われるので、もう少し詳しくお話する事にしよう。

いまにして思うに、そもそも私という人間は、多分に『先天的異常性格』の持主であっ

たのだらうと考えられる。

私は四、五才の頃には、もうその悪癖が萌し始めていた事の記憶がある。然し、そのことについては詳しく述べない。

私の癖も、殊更に悪癖等と誌上を借りて迄、告白発表する必要もないであろうが、私の執著して止まないものは糊であった。糊をいじくりまわすことこそ、私の幼少からの悪癖の一つであった。——糊——とは即ち、粘着に用いる糊。洗濯物につける米糊もそれなら、又卓上事務用としての「フェキ糊」もそれであった。つまり練製糊……という事になる。

糊をいじくるまわすことは、その頃の私に

とっての、無上の快楽であった。

私はまた、己が肉体を緊縛する事にも、興味と快楽を覚えるのだった。

然し、近所の子供達と泥棒ごっこ等をして戸外の人目に付く処で縛られるのは、羞しくて嫌であった。

従って、幼年期から少年期迄の私には、縛られたいマゾヒズム的な欲求を、満たしてくれる何人も現われなかつたのも、蓋し、致し方ない事であった。

只——糊の悪戯だけは、独り家人に隠れて機会ある毎に、ずっと続けて少年期迄を過ぎて来た。

聴て私が、少年期から青年期へ移行する頃になって、又一つの違った悪趣味が、頭をもたげ始めた。

それが即ち——現在の五十余才の今日に至るも、猶、煩惱の夢去り止まぬ……美女緊縛の姿態に現われた性的魅力の追求——そのものであった。

私は、小説雑誌の口絵やら挿画の中から、そうした美女緊縛場面を描いたものを漁っては、どれかれ無しに片っ端から切り取って、スクラップして行った。

で、思春期となり自然、異性に対する関心も高まって、私は十七才の春に、大阪松島遊廓へ遊びに行った。

ところがその結果は、何と——インポテンツであった。

私は幻滅の悲哀と愕きとで、無我夢中で我が家に馳せ帰ると、大急ぎで今迄集めた彼の美女緊縛の絵を前にした。

——何だ？高い銭を出して女郎買等に行くことないじゃないか——。

そう思ったのが又きっかけとなって、それからは絶対——美女緊縛図絵との関係が、断ち切れぬ因縁となって、私をして遂に『自虐鬼』の名に相応しい人間にしてしまったのである。

ある。

二

ところで、これ迄の私の告白事項だけでは何もそう大袈裟に『自虐鬼』等という程の事もないのであって、実は私の自虐行為の内訳は本誌昭和二十九年十二月号誌上に於ける『糊と泥と砂』及び昭和三十年一月号誌上での『糊の執著』の中にも、入っていた事をから申せば、賢明なる読者は「ああアレか」と首肯されることだろうと思う。が、まあ念の為にもう一度、その片鱗を紹介すれば（自己絞扼砂への埋もれ。糊に依るマゾヒズム）というようなものである。

そして私は、彼の二篇と本篇とを以て、以上で私のアブノーマルな半生記の総集とした意向の下に、本篇のペンを執ったもので、私は私のこの赤裸々な懺悔録を読まれた人々が、只一片の興味本位でなく、即ち、アブの世界に耽溺する者——最後に来るべきは幸か不幸かという事の、自覚に役立てば……と念願している次第である。

大分話が横道に外れていたようだ。——この辺で、又、本筋に話を戻そう。

先にも述べた通り、私という人間は、幼にして既にマゾヒストの兆候を現わしていた。

それが、思春期に至って、始めての異性との交渉に、不幸インポの幻滅を体験してよりその事が猶一層の動機となって、私のアブ行為に、更に拍車をかけるような結果を招来してしまったのであった。

いつの間にか私は、マゾヒストから、想像的サディストに移行していった。私はその後の衝動に駆られると、必ず例の美女緊縛の絵画や写真を引っ張り出して、それらの傑作品を目前に並べるのであった。

私は、最初の女体との交渉に、インポの苦汁を嘗めたにも拘らず、依然として女肌への愛着が、断ち切れなかったのである。

私の嗅覚力は、人一倍鋭敏であり、美女肌の香りに限りなく憧憬し、幻惑されるのであった。

私はどうかして早いとこ、恋人の一人でも抱えたいと焦ったが……それが、どうしても旨い具合に行かなかった。

いきおい、私は又しても、なけなしの財布をはたいては遊里に足を踏み入れたのであった。

そして、二度目からの私は、美女緊縛の場面を想起する事によって、目的を達する事を体得するに至った。



私の職業は洋裁職であり、当時の社会は巷に失業者の溢れていた彼の—浜口内閣—金解禁政策の前後であった。

「異常多淫症」——そういう言葉が、私の様

な人間を指して用いられるのであろう。

何せもう私という人間は、自分と同年配の青壮年達より、常に五倍以上の精力を乱費していたもので……それも女体との交渉が主な

ら、まだしも良かったであろうが、私の異常性欲が乏しい財力の工面のつく迄まち切れないので、自然——それだけでなく、以前から下地のあった例のアブ行為が、益々強烈な新考案を加えて、それこそ、時を選ばず実行された。

三

その頃、たばこ屋等の店頭に『キレー紙』という一袋五銭の、チリ紙がよく売り出されていた。私はこのチリ紙の匂いが、一番、美女肌の匂いに似ているように思った。

私は洋裁仕事をし乍ら、常に右のチリ紙を懐中するようになった。

そして又、例の『縛られた女の絵』も一緒に持つ事を忘れなかった。

そうすると、私は仕事をしながら、何時も体を動かす度に懐中から仄かに鼻先に立ち上って来て匂う美女の香？ を嗅ぐ事ができるし、猶——どうにも我慢のならぬ欲求に駆られた場合は、直ちに便所に行つて、例の美女緊縛絵を眺めることもできるのだった。

偕て——読者諸君。『大自然の天理は、不自然を無言の裡に審判する』とは、真実でしょうが？——

何故なら——私の視力は非常に鈍つて来た

のであった。——無論肉体そのものも気倦るかったし、人一倍金銭の欲しい私が、アブ行為から来る心身の衰えに「ヘトヘト」になつて、仕事の能率が何時も同僚に敗れをとるようになって来た。

私は大いに反省の要を感じた。

当時の月刊『健康の友』等を貪り読み、何としても一日も早く、正常な結婚を為す事が以上の悪癖を解消せしめる最善の道であると悟つたは良かったが……偕て、その結婚の相手はおろか、せめて未来を誓える恋人すらも、どういう訳か私には出来なかった。

私は、財力に乏しい貧乏人ではあったが、——だからといって全然生活力もない程の、意久地なしではなかった筈である。容貌……いや、それだつても決して悪い方ではない。唯、難をいえば——私には片親しかなかった。無論、私が終始面倒を見なければならぬ——老母であつた。

私は昭和八年の春。思い切つて独立した。誰一人、鏝一文の補助さえしてくれぬ、文字通りの血の出るような独立であつた。

独立当座から半歳余りは、さすがに身を慎んで、例の悪癖から遠ざかり、専ら本業に精出したお陰で、生活にも少々の余裕ができた

し、肉体は勿論、健康を取り戻していた。

「お宅の大將は、ようまア感心に働きゃはりまんナア……」

「早よう、どこぞ、ええ嫁さん世話して上げんならん……」

近隣の人々は、口を揃えて私を称賛してくれたが、——一年経ち二年経つても、依然として私への縁談は持ち込まれなかった。考えてみると、一体私という人間は、事毎に消極的な人間であつたように、思われもする。

私は、異性に対する種々な求愛の術を、書物に依つたり又、友達から教つても、どういふものか？ その術が旨い工合に施せなかった。——しかも私の体内には、生来からの異常性多淫の血が流れていたのだから、甚だ以て始末が悪かつた。

又しても何時の間にか私は、遊里に通い且つ、暫く中絶していた例の「アブ遊戯」を復活せしめていた。

この頃からの私は、もう以前のような簡単な方法では、到底満足できない程昂進しつつあつた。

それかあらぬか、私の雇っている職人や徒弟達は、皆、いい合したかのように永續して居着いてくれなかった。二年足らずの内に

職人徒弟共に十数回も入れ替り立ち替りした

——。何職でも左様だが、特に当時の洋裁下請業者は、雇用人次第で没落もし、繁栄もするのだった。——だから——

雇人の続かぬ私の家は、当然、没落の憂目を見なければならなかった。

四

私の、真の「自虐鬼」というに相應しい行動は、以上に述べた様な、人生の悪環境と生来自身の異常性に依るとはいえ——思えばその後の数年間が最も猛烈を極めた『アブ耽溺のルツボ』だった。

例の「美女緊縛画」も、静止物である事に魅力が薄らぎ、自然——活動するもの、即ち映画演劇内に現われる『美女緊縛場面』のそれを求めて、広い大阪市内を東奔西走……時には宛ら夢遊病者のようにさ迷つた事もある。

私は、老母を遠い親戚に預けて家をたたみ他人の同業者の家を職人として転々した。

彼の「糊と泥と砂（昭和二十九年十二月号掲載）」に於ける怪奇な行動も、この職人時代のことであつた。

私は、人々の寝静まつた、独りぼっちの二階の仕事場で、随分と怪奇な自虐行為に耽つたものだ……。

あらゆる刺戟に麻痺しつつあった私は、より以上の刺戟を求めて、凡ゆる独想考案に依る快楽を貪った。

私は極めて小心者であった。——そして多分——男性としての魅力にも缺ける処があったのであろうか？——。

それ故にかどうか、私は遊里の巷に於ても女には殆んどモテル事がなかった。それが又、私にはやるせなく、もどかしかった。

私は友人の誰彼が、Y談に花を咲かせる時——何処その誰は「何々」だとか、或は何様の妓は「あれこれ」だとか噂しているのを聴くと、自分も一つそういう女と遊んで見たい氣持がして堪らなかったが、これ又、目指す相手に出会して満足した事は、後年に至る迄只の一度もなかったのであった。

私はもう、目茶苦茶な方法でアブの泥沼の中へ惑溺していった。

尤もその方法というのも、結局煎じつめれば、私は次のような物を使って、それを行い且つ陶醉境を求めた。——その「物」とは一体どんな物なのか？ 即ち——上選飴、米糊、フェキ糊、団子、餅、トリモチ、その何、ゴムバンド、電気絶縁テープ。ざっと以上のよ

うな物を使って、私は自分自身を虐待した。

勿論——この虐待が、私に執っては陶醉境であり、ここらあたりで『自虐鬼』の「自虐鬼たる所以」が、大いに面目？を現わしたのであった。

私は常に、美人の肌の香に憧憬し、かつまた美人を見れば、必ずその女を素っ裸にして高手小手に縛り上げる……そんな妄念に駆られずには置かないのである。

アノ美女の肌から発散する、甘酸っぱい天然香料の匂い。ああ私は堪らない——。

私は戸外を散歩する時も、常に風の流れる方向に注意する。——衿足の美しい濃化粧の美人が、前方からこちらに向って来るのを認めると、すかさず息をつめて、その美人との間隔を縮める。

すれ違う時は、勿論私は相手より風下の位置にあって、そしてすれ違う瞬間に、つめていた息を急に大きく吸うのである。

——衿足を撫でて香るや春の風——

まことこの句のように、春先に匂う美女の香には、私にとって全く惑溺の世界である。とはいえずれ違い様の匂い等というものはホンの瞬間に漂うだけである。漂って来ない時も多い。

私はすれ違い様に、素早くその女を裸体にして縛り上げてしまふ！。

——いや、勿論想像の世界である。——私の妄念がそうさせるのだ。

一体私の様なアブニストが、万一にも美人コンクールの審査員にでもなったとしたら、それこそもう大変であらう——。

何故ッ？ とはいわずもがな。……私は皆んな素っ裸にして縛り上げ、肌の匂いの優劣に依って「ミス」を選定するであらうからだ。

五

私は随分、女の縛り画や写真を集めた。

そしてそれ等を更に私の氣に入るように、種々と縄のかけ増しや、又、猿轡の嵌めてない原画に猿轡を補足したりもした。

その方法に就て、少しく説明してみよう。一体、口絵にしても、挿画にしても、印刷された既製のものに、後から何らかの補足を為すという事は、当然無理な事に違いない。

それは、原画が汚れるからだ。

例えば、縄目を補足するとする。——只、原画の上から自分の思うように、縄をかけ増して行つたとして、当然印刷インクと同じ色合に溶け込ます術はないものだ。

それに……縄目は姿態線の上側になるので

あるから、実感の伴うようにするには、その原画の姿態線を縄目の下に隠してしまわねばならない。——とすると自然、原画より濃い色を用いなければならない事になる。

何れにしても、旨い具合には、行かぬものである。——猿轡の補足にしても、勿論然り。

私は種々と考え抜いた挙句（これはどうしても、新しく書直すのが上策だ）と思った。

然し私には画才がなかった。

殊に視力は人並以下で、軽度の乱視眼でさえあった。

ところで私の持つ異常性欲望が、遂にそうした悪条件をも克服して、実に素晴らしい方法？を考案した。

私は先ず……製図用紙と上質の画用紙を買い求めた。

次に2Bの上質鉛筆。及び、吸取紙を鉛筆様に固く巻いたもの、ナイフ、糊等を用意して、愈々「責め絵の製作」にとりかかった。

かねて蒐集して置いた「美女緊縛画」の中から、縄目や猿轡の補足によって、より以上の逸品となる可能性のあるものを選び出し、その上に先の製図用紙を重ねると、下敷の絵画が上の用紙に映るのである。

そこで画才のない私ではあったが、一念というものは恐ろしいもの……私は下敷の画を丹念に写し取るのであった。

いう迄もなく、製図用紙は極く薄い紙であって、いくら上質の鉛筆で描くとはいえ、余程注意してかからぬと、折角の途中で破ってしまう怖れがある。——それに、軽度とはいえ乱視眼の私は、時々拡大鏡でも用いぬと、細かい線等二重になってしまうので、如何に身から出た錆とは思いつつも、その苦勞は並大抵ではなかった。

だが私は、一生懸命であった。——着物の柄や、バックのボカシ等には、鉛筆の芯を削った粉を用意の吸取紙棒の先につけて、上手にそれを応用した。——要するに右の方法によって出来る絵は、人物画の輪郭そのものは原画通りであり、変って来るのは、即ち、自分の好みに応じた縛り方と、猿轡のかませ方等である。

さて——製図用紙に思いのままの鉛筆画が描けたら、今度はそれを画用紙に貼りつけるのである。

それは何故かという、薄っぺらな製図用紙に描いた鉛筆画では、何か知らず貧弱であり、且つ、早く汚れるのと、保存に困るため

であった。

或は読者の中にも、この私の今いうようなやり方を、私より先に行われていた方があったかも知れぬが……何しろ鉛筆画をそのままでは、直にうす黒く汚れてしまふし、ギラギラ光って下素っぽいのであって、そこで——以上の描け上った製図用紙を、別の厚紙である画用紙に貼着けるのである。

この場合……素より製図用紙の側に糊をつける事は困難であって、先ず適当な柔かさの糊を厚紙に万遍なくすり込む。

次に絵の描けた製図用紙を、よくよく注意して貼り直す事のないように、一遍に画用紙に貼りつけるのである。

そうすると、糊の水分が鉛筆画の鉛分に溶け込んで、そこで始めて「シツクリ」と落着きを見せた——つまり、ギラギラ光らぬ絵になり、従って保存も可能となる訳である。

六

以上のような方法を考案してからの私は、本職画家の描いた「責め絵」の口絵や挿画を素材として、種々と自分の嗜好に叶った趣向に依るものを製作した。

私はこの製作の為に幾夜も幾夜も徹夜した事さえあった。

無論、本職の洋裁仕事の終業後にしか、行動できない職人生活であつてみれば、当然、不自然行為は又々健康を損ねずには置かなかった。

私が一カ月に受取る労賃は、当然僅少でしかなかった。

尤も、以上の悪癖を廃めれば……健康で真剣に働きさえすれば、相当の収入はあるのであつたが、悲しい哉——私という人間の体内に巣喰つた異常の虫が「ノーマル」への道を塞いでしまつて「アブ」へ「アブ」へと誘導するのだった。——やがて彼の日華事変が次第に進展し、男性の洋裁師は、徴兵又は徴用等によって一人、又一人と姿を消して行つた。



無論、私にだっていつ何時「徴用」がくるかも知れない状態にあつた。

何せ、帝国主義軍閥横暴のその時代に、徴用に取られた場合のことを思うと、さすがの私も例の悪癖の総てから遠ざからねば……の一大決心をした。

私は、責絵複製と自虐遂行に用い蒐集品の全部を焼き払つた。

そして、不図した動機を擲んで洋裁職を廃め、自分でも生来、夢にも考えた事のない筈の、これ迄の職とは全然百八十度の転換ともいふべき「香具師（テキヤ）」仲間に身を投じた。

そこで私はアパートの一室を借り、同時に彼の遠い親戚に預けていた老母を呼び迎えて茲に再び独立して一家の主となった。

人生——とは真に不

思議である。

即ち、何事につけても消極的で、意久地なしの私が、露店商人になるさへあるに、その中でも、最も精悍と謳われる「香具師（テキヤ）」に等、なり終せる筈がないのであるのに——それがどうした風の吹き廻しか？ 私

はこの香具師稼業で相当の成功を納めた。

それとともに、私は気性迄が積極的に變つて来て、正義を愛するようになり、何時か人知れず「柔道」等も習った。

日華事変から、大太平洋戦争にかけての時代は、香具師の数も次第に尠くなり、風紀もその昔から伝え聴くような乱雑さは肅正されつつあったが、それでも未だともすると、顔を利かせて横暴な態度に出る者もいた。

私は、それら横暴な輩を目撃すると、片っ端から時世を説いて正当な道へ誘導する事に努めた。

私はA警察署管内での、この道での新参に似ず「幹部責任者」となった。

そうして私の懷中は常に温かく、勿論——男性的魅力にもポリウムがついて来た。

(こうなればもうしめたものだ。今度こそ財力はあるし、それに、女は有り余っているんだ——いくらでも好きな別嬪の選り取りで結婚ができるぞ！)

そう思って私は、毎日の生活に否、商売に張切っていたのであったが：時既に遅し——とでも私にとってはいうのであろうか？——未だ積極的なアメリカ空軍の、日本々土襲来はなかったが、それでも一日数回の警報の

出る頃の事とて、人心怯々——市立結婚相談所等に申し込は多くても、さて、いざ双方の見合い……という段取りになって、何時もそうした警報の為に、時間の食い違いが生じ、且つ、そのまま話が有や無やになる事も多かった。

それが又、私には堪え切れ無い焦悴であった。——私にだっていつ何時、召集或は徴用が来ないとも限らぬ日々であり、そんな事を思うと、もう真面目に結婚出来る相手を持つ氣に等なれなくなって来たのであった。

七

それ以来の私には、遂に又もや、その昔の異常性欲望が、猶一層の強烈さを加えて寄せて来たのである。

私は又しても「責め絵蒐集」に狂奔するようになった。

勿論この時代になって、彼の焼払った以前の蒐集品と同じものを探し漁るという事は、それこそとんでもない難事であったし、又、映画にしても演劇にしても、もうこの時代のそれはいわゆる——政府の国策的健康娛樂なるものばかりの上映上演で、實際大衆に欣ばれるもの——殊に私の求める美女緊縛場面の現われるの等、殆んど観る事ができないのだ

った。

然し今回の私には、財力とそして暇があった。

私は、香具師稼業に事寄せて、遠く郡部に足を延ばし、旧家に取り入って、種々と都会ではもう手に入りそうもない古書籍や絵画を譲り受けた。(無論、例の嗜好に合致したものを前提として選んだ事は、いう迄もない……)

私のこうした秘密な努力は酬いられて時には以前より素晴らしい逸品を、入手する事さえあった。

早いもので、私の年令は最早、四十才を越えていた。「縛られた女の姿態に現われる、性的魅力の追究——」そいつを、どうしても実地にやってみたくて堪らなくなった私は、そうしたモデルを求めて、遂に又、遊里にも足繁く通うようになった。

その、モデルを求めるのに、当時の私にとって、凡ゆる周囲の状況を考慮しての最適の場所は、何といっても、京阪天満線「橋本遊廓」であった。

もうその当時では、余程氣をつけて遊ばない……殊に私のような稼業の者は、何時その筋から因縁……を吹っかけられるかも知

れない状況の中であって、いわば「サド、マゾ」の対抗遊戯に俟つより他ないこの種の遊びは、流石に至難を極めた。

それに——私の所謂「注文」というか「好み」が少々厄介でもあった。何せ私の好みというものは、先ず第一に、モデルとなる可き女が「純日本風である事」——第二、——中肉中背、撫肩で肌の美しきもの——。衿足長く美しきもの。無論美顔であること。以上

右のような注文条件に当嵌る妓を、当時の廓に探し出すさえ骨が折れるのに、さて、探し出せても、その妓が果してモデルになる事を承諾するかどうか？……。

私にもし、伊藤晴雨氏のような、マゾ性女性を観破する力があつたら、或は私のこの時の要求なり欲求は、案外易々として果されておつたかも知れなかつたが、不幸にして私にはその観破力がなく、殊には内外慌しい世相の中にあってみれば、妓を縛って魅力を追究したいそうした欲求も、遂に満されぬままに太平洋戦争は終局を告げ、同時に私は着のみのままの、一戦災者としての惨じめな自分の姿を荒廢した焼跡に見出したのであった。

終戦翌年の春未だ浅き頃——私は老母を連れて現在の、この北九州の炭礦地に移住して

来た。

そしてN炭礦に就職して、多少腰が落着いて来た頃を素早く見止めた礦業所の勞務係が、私に妻を世話してくれたのである。

私は人生の半ばを過ぎた遅蒔ながらの夫婦生活に、それでも当座の裡は神妙に暮す事ができた。

けれどもこの妻は、永年都会生活に馴れ染んで来た私の理想とは、凡そ甚だしくかけ離れた性格の持主であつた。

いや、こんな話は止そう——それよりも、現在の私の心境と、環境と希いに就いて、忌憚なき告白をして、本篇の締めくくりとしたい。

八

私は現在——五十四才になる。そして——今は又しても独身である。

最近の人生は、七十年と唱えられていても私の寿命はアト——即ち六十迄は持つまいと覚悟している。

然してこの残り藪い余生の裡で、どうかして一度でも、私の求めるタイプの美女を、心ゆくまで縛り上げて見たい——。

私のこの遠い年来の宿望を見事叶えてくれる女性に巡り会う事ができたなら、私はもう

何時なんどき死んでも本望である。

尚——万一それさえ叶わぬようなら、せめて画でなりと、私の嗜好に叶ったものが、出てくれる事を期待し切望する。

私は今にして思う。——人生アブの海に泳ぐ程、楽しい事はない。

だが又人間は、このアブを上手に駆使するに足る技巧を体得する事によって、時には苦悩の人生を、愉快化する事もできる。

要は、溺れさえしなければ、それでよいのだ。

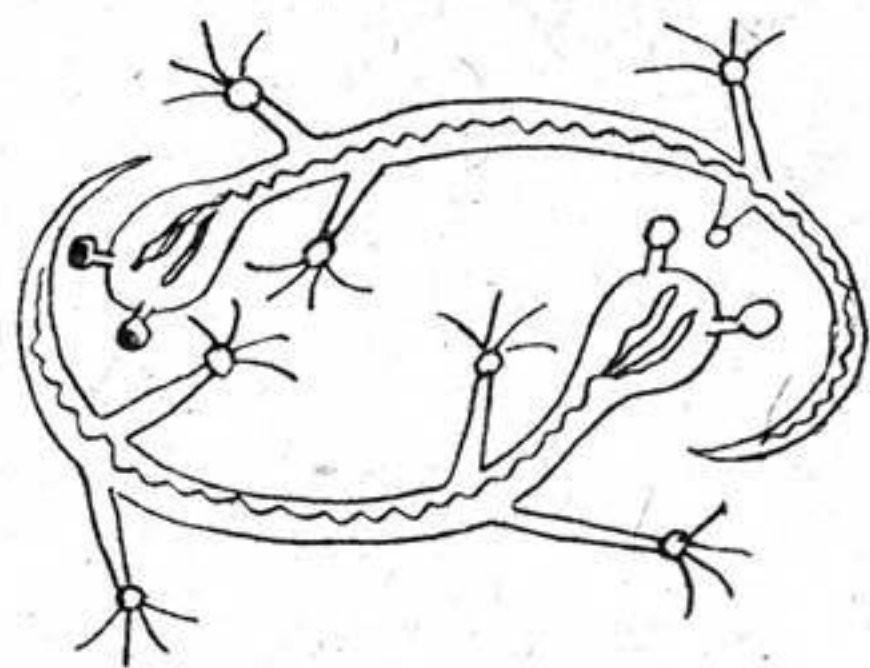
アブにしる、ノーマルにしる、共に人生常備の味方と為すこそ、肝要であろう。

それにしても、近頃の私は、又しても昔の悪癖、縛られた美女の姿態を求めての、映画演劇観劇行脚を始め出した。私の想像的サディズムの官能が、ここにして再び芽をふき花を咲かせてきたという感がするのである。

以上、私は余りにも過去のことはかりを書きすぎた嫌いがあるかもしれない。陰惨で暗黒であつた過去は私達だけで終つたのだ。

現在は明朗で平等な自由の時代である。私はせめてもの老後を、自分の嗜好に殉じて愉快に暮したいと願っている。

(完)



告白通信

五・六・七・八月号の

魅力ある責めの感想

柴 島 令 子

昭和三十八年四月二日。私は天星社へ、お手紙を出し、詳しく、お聞き致しました。

五日、奇ク、編集部より、お返事をもらいました。八日早速、二百円を、お送り致しました。十一日、奇譚クラブ、五月号を受取り、その日から、私の、心は大きく変わり、奇クの愛読者となりました。生まれて初めて、女の人の縛りを私は、只熱心に見取れました。

五月号の、第一グラビヤ、三木、浜田嬢コンビの『サジスチンと可憐なペット』『責められた愛情の交錯』この女の人二人の姿は、

私の心を大きく変化させたのです。三木、浜田嬢コンビ。どの人が誰か、この写真では、判りません。然し、縛られている方は、確かに美しい脚の持主、特に、五月号の『責められた愛情の交錯』の、大型の写真、私は、このグラビヤを毎日のように見るのです。このコンビの、グラビヤは、六月号にも『狙った美しいペット』『可愛いSの関係』で出ています。この方では、本当に、二人が、よく出来ておりました。

次に、五月号ですが、絹川嬢の四枚の鼻な

ぶり。六月号の、同じ絹川嬢の、鼻のいたぶり。でも、この方の絹川さん、私は、パンティを穿いてもらいたかった。五月号の『和装縛りの美的感覚』館典子嬢は、私の思うところ、裸になるのを嫌ってますね。それとも、人妻の様です。然し、六月号の『令嬢夢幻の構想』で、見せた、ワンピース縛り、私の一番、好んだ、タイプのお嬢さんです。でも、一度、館嬢を、七月号の、巻頭口絵の中の、四馬孝先生の『這い寄る蛆虫』の構想で責めて見たら、と私は願っております。お嬢さん

から転向、百八十度回転も、いいでしょう。

五月号で『長襦袢と縛しめに耐えた表情』で初めて逢った、梨花悠紀子嬢。六月号で『赤のテープと黒アミ』『鼻責めの第一段階』『エビしばりへの序曲』テープで口をふさがれた、あの、表情。そして、裸の皮膚へ喰い込む、縄の無暴さ、パンティ一枚の梨花嬢。替って、黒いアミを、顔に覆ったあの表情。上の方もそうだったが、片方の乳房のあの縄。然し、美しい二本の折り曲げた脚。ページ変り、梨花嬢は、手で、鼻を押えられ、下段では、小道具で、鼻を押し上げられた梨花嬢、次へ行き、エビ責に縛られ、横に倒され、上段では、髪を掴まれ、然し平気な顔の表情、然し、縄は梨花嬢を痛めている。下段では、その姿態のまま、縛った上から踏まれている、あの、顔、哀れな、パンティ一枚の梨花嬢、運命や如何に、といったところ。

七月号『麗身ポーズ十二態』絹川文代嬢の縛られた姿態。ページ、右から下へ、「アア」「どう」「ネ、解いて」「駄目なの」「嫌よ……」「痛ア」「観念するわ」「パンティわ、駄目よ」「否、嫌やわ」「許して」「ネエーお願い」「本当に駄目なの」と、言葉をつめました。

五月号へ戻って『緊縛のスローカーブライオン』『水責めと水垢り』六月号の『柔肌と縄のコントラスト』『白の祭壇に上ったイケニエ』『豊満への羨望と抵抗』七月号『柔肌の起伏』『破られた下着』『全身緊縛の表情』八月号『豊かさの強調』『蕨蚊責め』以上の大塚啓子嬢。特に、五月号の『緊縛のスローカーブライオン』の、大塚嬢の顔の表情。六月号の『白の祭壇に上ったイケニエ』のあの、縛り方。七月号の『破られた下着』の大塚嬢の緊縛姿態、黒い長い髪の垂れた顔の表情。八月号の『豊かさの強調』で大塚嬢の横顔、くぼんだ肌、先ず、乳房、そしてお腹の線、それに、大塚嬢の背中に男の膝頭、これが、よかった。

さて、八月号へ集中し、絹川嬢の『革手套に抱かれて』：七月号の『諦観とロマンの期待』私は、あの絹川さんの、美しい肌、その上に強く巻かれた縄、アアア私は、溜息が出るばかり。八月号の『責めプレイの法悦境地』『透明の息苦しさ』どちらも梨花嬢。責めプレイの方は、足元が寂しかったが、透明の方は、目が集中し、暫らく動けませんでした。透明の猿轡、胸に巻かれた縄、然も、梨花嬢の、あの、顔の表情、もっとも、

額のシワがよかった。見事だ。

八月号、『足吊りの白肌』絹川嬢の美しい肌、そこへ縛った縄、足を吊られ、少し口を開いた絹川嬢、黒いパンティが印象的だった。『麗姿悶悦三様三態』上段より、「どう貴女達も、縛られて見ない事、肘が痛いって私は、なれたわ」「でも、後手に回されりゃ、少し痛いわ」「私は、痛いのを、我慢してるのよ。顔を見て」

八月号『重圧に泣く女』二段。梨花嬢。上段は、下段よりよく出来ていました。本当に苦しそうな表情、足の投げ出した格好、梨花嬢の顔を見ていると、悲鳴が聞えそうです。八月号『責めの第一序曲』梨花嬢の、あの、表情。私も、何かを考える時、この様な顔になります。この写真を見ていると、私の脳裏に幼い時、母親と死別した事を、思い出しました。今、母の写真、二十一歳位の若い時の写真、バスガールの姿、これを私は大事にしているのです。

さて、私の、奇クに対する感想も、これ位で終り、次に、五月、六月、七月、八月号の、四馬孝先生の絵を中心に、少しお話しさせて下さい。五月号『倉庫の中の美しい荷物』暗い倉庫の中で、一人の女は、一本の柱

に、雁字搦見に縛られ、その前途は、一体何か。救いの手か、仕置きのみチか。

六月号『くつわ』人妻らしき女は、パンテイ一枚にされ、腕は、足首に固定した縄で縛られ、口に激しく……。七月号『オラン・ウータンの檻』可愛い一人の乙女を、檻の中に、後手に縛って入れ、足は、一定の間隔に開かされ女は、檻の外の白衣の男に、許しを願うのだ。と、その時、黒い固まりが動き、大きく立ち上がった。女は、それを見て、悲鳴を上げるのだった。逃げられぬ、檻の中、乙女は、その中へ縛られている、オラン・ウータ

ンは、近かずく……運命は……。

八月号、は、四つ上げさせてもらいます。

『美の破壊』これ程、強烈な、鼻責は、私は初めて見ました。七月号でしたが、『美鼻汚辱』『美貌翻弄』これより、この絵は、激しく、迫力があり、本を、逆さにして見れば、一層、強烈でした。『おもひ責め（ぶらんこ）』この絵も、私の一番好む構想で、一度このとおり、否、似たものでいいですから、絹川嬢に一度、やってもらえないでしょうか、私の気に入った責めです。この絵を見ていて、私は、思いました。この姿で、もし、

揺らせば、女は、失神してしまうでしょうね。絵でこの様な迫力です、モデル嬢を使っていますと、きつと、いいグラビヤになるでしょう。

『空気ポンプ』私は、浣腸責めというのを、まだ見た事はありません。この絵は、私の胸に、高鳴りと、慄えが来しました。一度、これも、モデルさん……と言っても、浣腸責めの、フォトは多くありますね。あどけない瞳。セーラ服は私も一番好きです、まして、その上、縛ってあるんですもの、セーラ縛り、一番好きかも知れません。読み物に、つきまじては、只一つ、七月号から、第四回として、載りました『花と蛇』これは、楽しく読まして、もらいました。団鬼六様、御身体御大切に……。

読者となって、まだ至って日の浅い未熟者の私が、憶面もなく読後感などを書き綴りまして、不遜のやつとお笑いにならないかと、心配しております。若しお気にさわる個所がありましたら、お許し下さい。

これで、私は、ペンを置きます、では奇く愛読者の皆様、私も、ささやかな読者の一人です。何時までも、愛読者でありますよう……心から、申し上げ、ペンを置きます。

☆賞金☆

優作	一篇に付	一万円	若干篇
秀作	一篇に付	五千円	若干篇
佳作	一篇に付	二千円	若干篇

懸賞（告白と手記と体験） 原稿募集

☆規定☆

一、真実味溢れる告白、どうしても発表してみたいという自らの手記、或は自分で体験された貴重な事実を盛り上げた体験記を広く読者の皆さまの中から求めます。文章の巧みさよりも、実際に体験されたもので

あるという真実の裏付のあるものが大切だと思ひます。従って必ず自作のものであることは勿論、未発表のものに限ります。二、枚数には制限はありません。用紙も必ずしも原稿用紙でなくとも結構です。締切日も別にやかましくきめませんから、いつでも、どしどしお寄せ下さい。入選作は最近号に掲載の上、賞金をお送りします。応募原稿は読者原稿と区別するため第一頁に「懸賞告白」とお書き下さい。

終身刑

平 伏 人

序 章

光子女王様との、不思議な生活が始ってから、まださ程の年月が過ぎたわけでもないのに、奴隷の分際で、伏人は本当に申し訳けない事を致しました。あれだけ忠誠を誓った筈ですのに、取り返しつかない、あやまちを私は、おかしてしまったのでございます。

あの事を光子様に発見され、はげしいお調べを受けた後、もったいなくも私をお捨て遊ばすかわりに、奴隷めに荷して下さった此の

罰は、終生私の背に、重く乗しかかる終身刑にも等しいものでございます。しかし私は心から、光子様の足下にひれ伏し、恐らくは、一生、解き放たれる事のない、一匹の家畜にもおとる生きた御道具として、いつまでも、いつまでもおそばに、お仕える事でございましょう。

それは、二週間程前に私が社用で関西に出張した時の事でございます。いつもの様に、革褌の錠を貴い光子様の御手で、ガチャリとはめられ、玄関に四ッ這となり、お別れの鞭

を賤しい奴隷の尻に、ピシリピシリとお当て下さる女王様に、

「貴い御主人様を三日間の間、お世話も出来ずにお傍を離れる奴隷をお許し下さいませ。一刻も早くお傍にもどり、賤しい家畜のお務を致します」

と、御あいさつをして旅立った私でしたのに……。

一、

関西での仕事も順調に進み、いよいよ明日の『第一富士』で帰京する事になった私は、

退屈なままに、大阪南の或るバーへ入ったのです。いつもの様に、カウンターに席を取った私は、

「オールド・パー、オンザロック」

と注文すると何となく店の中を見廻しました。時間も十一時近く店の中は相当な数の客で、にこった空気は店内の薄暗さと共に、私の目が悪くなったのではないかと思う程、くすんで見えます。目をカウンターの際に移した私は、一人の女性を発見して、思わずハッと致しました。忘れもしない、浅田かおるだったのです。

二、

それは一昨年の夏の事でした。やはり大阪へ出張した時の事です。つい、おっくうなままに放って置いた虫歯が、急に痛み出し、宗右エ門町のY歯科に私は応急の処置を求めて入ったのです。その玄関で私は此んな場所には珍しい、赤い、ハイヒールを発見したのです。待合室で待つて居る間に、私のマゾはむくむくと起き上り、やもたてもたまらなくなつた私は、手帖のメモを破り、

「女王様、私は貴女様の賤しい奴隷でございます。どうか、此の美しいハイヒールで私をふみにじって下さいませ」

と書くと、小さく折りたたんで、其のハイヒールの中へさし込んだのでございます。そして、其の赤いハイヒールのつま先に舌を当てて、ペロペロ舐めると、私はもとの席へ何喰わぬ顔でもどるのでした。待合室は私一人しか居ないし、一体誰の靴だろう、私の空想は果しなく続きます。

「平さん、どうぞ」

若い女の声は私の空想は中断されました。

其の声と入れかわりに、五十年配の主婦らしい人が降りて来ました。いよいよあのハイヒールの持主がわからなくなりました。二階の診察室へ上った私は、思わず、足を止めました。二十才位でしようか、五尺三寸はある長身を白衣につつんだ、エキゾチックな美人を、そこに見出したのです。此の方なら、当然あのハイヒールを、おはきになっていい筈だ、ああ、何としても此の方の足下にひれ伏したい、私の胸はおどるのです。治りようを終わった私は、後がみを引かれる思いで外に出ました。心なしか、私の痛がる様子を、冷然と見下す、あの方の顔に、サディスティックな笑を私は見た様な気がするのです。「又明日来て下さい」と事務的な彼女の言葉に僅かの希望をもって私はホテルへ戻りました。

翌日、Y歯科へ行った私は、一寸待たされた後、最後の治りようを受けたのです。診察台にすわったまま、彼女を待つ私は、昨日の事が、ばれたのではないかと、おどおどせずには居られませんでした。戻って来た彼女の治りようは、昨日よりはるかに荒っぽい様でした。

「さあ、これでいいわ、東京へ帰ったら、すぐ治りようするのよ」

彼女の声に追い立てられる様に私は玄関に戻りました。靴をはこうとする私は、足の裏に何かひっかかる物に気がつきました。取り出した私は、其れが、小さな紙きれだったのに一しゅん、ドキリと致しました。其れには「昨日の手紙が、あなたの書いたものでしたら、今晚九時三十分難波駅前のピジョンに来て下さい。お話があります。」

赤いハイヒールの女

A・K

と書かれてありました。

三、

時間通りピジョンで落合った二人は、どちらがさそうともなく、ホテルMの一室で向い合つて居りました。私が名乗った後、彼女は自分が浅田かおると言い、あの歯科医院の助

手として、目下先生が病臥中なので、一人で仕事を見て居る事を教えて呉れたのです。

「平さん、あなたは気の弱いひきょうな人ねあんな手紙を私の靴に入れるならなぜ私に合った時、両手をついてたのまないの、私だって、医者の方だし、変態性の何だかと言う事位知ってるわよ、私、勇気のない人大嫌い、あんたみたいな人、人間の屑だよ」

と言うと、演技だったのでしょうか、思いきり私のホホに平手打をくわせるのでした。我を忘れて、かおる様の足下にひれ伏した私は、お美しいおみ足にすがりつき、可愛らしい、ふっくらした、足指にしゃぶりつくのでした。

「ケダモノ、けがらわしいよ!!お前なんか、こうした方がいいんだよ」

かおる様は、見違える様な、荒々しい口調でおっしゃると、私の頭を、グイグイ、力一杯ふみにじるのでございました。

「もっと強く、女王様」

引きつった様なうめき声を私はあげるのでした。何も責具がないままに、かおる様は、私を裸にすると、寝巻のひもで、手と足を前で一緒に縛り上げ、私のバンドを取ると、思いきり、体中所嫌わず打ちすえるのでした。

それから一時間後、私達二人は、又あう約束もせず別れたのです。勿論、私は、ひつつこく再会を願ったのですが……。

其の後、かおる様には、お目にかかる機会もなく、私は光子様という御主人様に飼われる身となったのでございます。

四、

二年ぶりに、かおる様を発見した私は、一人でカウンターに居られるお姿に、

「あの女の人、何時も一人？」
とホステスにたずねました。

「ええ、前にはよく、女の方とお二人で見えただんですけどね、此のごろは、何時も一人ですよ」

此の答に、安心して私は、かおる様に近づきました。

「浅田さん、しばらくです」

「……」

「平です、Y医院でお目にかかった」

やっと気がついた御様子です。

「あら、びっくりしたは、こんな所で」

それから看板まで飲んだ二人は、思い出のホテルMで、女王様と奴隷として相對する事となったのです。裸になった私の、革褌姿にかおる様は何かを察した御様子でした。

「平、お前、此の変なもの何よ! 誰にしてもらってるのよ、ヨシッ! 今日、私がお前の飼主だから、こんなものははずしてしまふよっ!」

と、おっしゃると、ハンドバッグの中からハサミを取り出すと、革褌を切りさいてしまふのでございます。私は、光子様に申し訳けない気持で一杯でしたが、此のしゅん間のマゾのたかぶりは、神聖な私の光子様に対する気持をも、ふり捨てるだけの強さを持って居たのでございます。

「お前の、東京の飼主に、帰ったら、よく自分の身体を見てもらうがいいよ。キット、死ぬ程、お前を責めて呉れるよ、有難く思うんだよ!」

かおる様の、お言葉は、私のマゾをますますかりたてるのです。

やがて私は、バンドの鞭の嵐の中に、自分の体がのうち廻るのを、どうする事も出来ませんでした。背、尻、私の体は、赤いみみずばれでおおわれます。

「女王様、有難うございます。有難うございます。ヒーツ、ヒーツ」

私のウメキ声と共に、赤いジュウタンの上に血がしたたります。

「当り前だよ、ケダモノノ 犬ノ 畜生ノ」

口汚くののしると、かおる様は、私の髪の毛をつかんで、バスルームへ、引きづり込むのです。タイルの上に、だらしなく大の字にのびた私の身体の上で、かおる様のポリウームのあるおみ脚が、二本の円柱の様に開きます。やがて夢幻の世界から、目をさました私は、別れぎわに、自分の住所を命ぜられるままにかおる様に、お知らせしてしまったのです。此れが私の終身刑の原因になろうとは露しらず……。

五、

三日ぶりで帰京した私は、予想通り光子様のきびしいお取調を受けたのでございます。

「伏人、白状おし、お前は何処で奴隷の革褌を取ったの、どこで此の鞭傷を受けたの、お前は私の家畜なんだよ」 勝手に他人のなぐさみものになっていいと思うのかい。ヨシッノ どうしても白状しないなら、今日限り、ひまをやるから、出てお行き」

後手に縛った私を、ベッドの前に正座させはげしく背を鞭打ちながら、責めつづけるのです。

「申し訳けございません、皆白状致しますから、どうか、私を捨てないで下さいませ」

私は必死になってお願いするのです。すべてを正直に白状する私の話を聞いて居られた光子様は、一通り話がすむと、

「ヨシッノ 今から五日間、会社を休みな、そして心を入れかえるんだよ」

と申されるのでした。それが、どんな苦しい事であっても私は、光子様のお傍に置いていただく為に承知する以外にありませんでした。それから五日間の私の生活は異様なものでした。前の様に直接身体に受ける苦痛は、ほとんど有りませんでした……。

第一日目、私は、ベランダに犬の様に鎖でつながれ、終日四ッ這になる事を命ぜられたのです。残飯もあたえられず四ッ這の私に、光子様は洗面器に貴い御神水をたたえ「今から五日間、これだけがお前の食べ物だよ、他のものはやらないから。あまり身体を動かすと、お腹がへるから、じっとしておいで。それから、便所に行きたくなったら、ここにするんだよ」

とおっしゃると、砂の入った、ミカン箱をベランダに出して下さるのでございます。此の様にして二目をむかえました。光子様は全然私の事など忘れた様に、時々御神水を下さり足して下さる以外、まるでお顔を見せて下

さらないのでございます。二日目も夜になつたころ、私はあまりの空腹とさびしさに、とうとう禁を破り、犬の分際でも「御主人様、お願いでございます。何か残飯でも投げて下さいませ」

と人間の言葉で哀願してしまったのです。珍しく光子様は、怒った御様子もなく、ベランダの戸を開けると、
「犬のくせに人間の言葉を使って、駄目じゃない。随分お腹がへったらしいね。じゃ、これでも喰べるんだね」

とおっしゃって、フタをしたどんぶりと、割箸を持って来て下さるのでした。一体何を食べさせて下さるのだろう。

「さあ、ワン公ノ御主人様の体から出たものだよ、有難く頂だいするんだよ」

光子様は、どんぶりのふたをあけるとあわれな人間犬の前に押しやるのでございます。勿論度の強いマゾの私です。想像の世界では、幾度となく光子様の固形排泄物を口にしましたものでございますが、今、目の前に見て、どうしても口にする事が出来ないのです。久しぶりの光子様の鞭におののき乍ら、何度もどんぶりに顔を近づけますが、口にする勇氣が出ないのでございます。この様な私にえ

きらない態度に、業をにやした光子様は、割箸で小指の先程の大きさの固形物を取り上げると

「さあ、お食べ、これにも、女王様の栄養のかすが、少しは残っているんだから」

とおっしゃると、無理やりに私の口をこじあけて、箸の先を押し込むのでございます。何とも言えない異様な味臭に、私は思わず、「ゲーツ」と胃の中から込み上げる自然の力ではき出してしまったのでございます。

光子様の貴い身体から出た犬として当然有難涙にくれて押しただくべき下されものを、身の程しらずの下すの犬は拒否してしまつたのです。当然光子様は激怒されました。

「バカッ！ 何だいそのさまはッ！ お前はかおるのは有難がつて飲んだくせに、此の光子様のは食べられないのかよ！ お前が喜んで、これを食べられる様になる迄、絶対に許さないからね、私を裏切った罰を

思い知るがいい」

光子様のはげしい叱せきと、鞭の下で、ただひたすらお許しを願ひ、ベランダのコンクリートの上に、額をすりつけながら、私はだんだんと自分の態度が間違つて居た様に感じてくるのでした。たしかにかおる様の神水を口にした自分は、絶対の飼主である光子様の固形物を食べられないわけではない、そうだ、思いきって食べ様、其れが犬の自分には、ふさわしい食物なのだ。私は自分に言いきかせ



ると、夢中で、どんぶりに顔を突込、舌の先で、ほんの少しですが口へはこぶのでした。目をつぶって思いきって飲み込みました。此のしゅん間、私は、完全に身も心も、光子様の家畜になりきった事を思い、口中の不快感を吹き飛ばす様な快感を感じるのでした。

一日毎に、食べる量もふえ、湯飲み茶碗に三分の一位は口に入る様になった最後の五日目、久しぶりで、室内に入る事を許された私は、風呂に入り身を清める事を命ぜられました。湯上りの私に、床に這う様に命じた光子様は、

「今日、夕方から私のお客様があるから、よくお仕えするんだよ、もっとも、お前みたいな、汚らわしい奴隷を、人前に出すわけにはゆかないから、こうしてやろう」

とおっしゃいますと、私の身体にギリギリと細引をからませ、後手に縛り上げてしまいました。そして、洋服ダンスの中へ入る様に命じると、鉄のパイプに私の首輪の鎖を巻きつけ、口に光子様のアンネのメッシュパンティをくわえさせるのです。

「そのままでじっとしててんだよ。これからお客様がくるからね」

無情にも、扉をパタンとしめてしまったの

でございます。

六、

あれからどの位時間がたったでしょうか、恐らくは三十分ぐらいだったのだでしょうが、暗闇の中で後手に縛られ、首輪の鎖でパイプにつるされ、メンスパンティを口にくわえさせられて、ただ何時終わるとも知れない屈辱の姿体で待つ私にとっては、二時間にも三時間にも感じられる長さでした。其の間中、

「光子様、本当に申し訳ございませんでした。奴隷の分際でおかしたあの罪は一生消える事のない罰を天が私におあたえ下さったものと思い、奴隷の一生がいを通じて、つぐないの責苦をお受け致します」

と真心を以てお詫びの言葉をくり返して居たのでございます。

はなやいだ、光子様のうるわしい玉声で私



は我にかえりました。

私はお客様とは一体どんな方だろう、改めて、心の中に何とも言えない、しつとが起きて来たのです。しかし、私のしつとは直ぐ消え去りました。お客様は御婦人だったので

す。しばらく、お話が続いた後、声がとだえたと思ったとたんに、私の目の前が急に明るくなりました。下を向いて、恥しさに目を伏せる私のホホに小気味よい平手打の音が鳴りました。

「ゲダモノ、顔をお上げ！ お客様にごあいさつをするんだよ」

光子様のお言葉に、私は、おずおずと目を開けました。私は思わず「アッ！」と驚きの声をあげると、口にしたメンスパンティを落してしまいました。

「バカヤロー！ 何をきょとんとしているんだよ。ワン公、久しぶりだね、ホホホホ、全くいいさまだよ、光ちゃん、うまく馴らしたもんね」

何うした事でしよう、それはかおる様だったのです。後で聞いたのですが、光子様はかおる様と同じ高校の出身で、三年先輩に当るのだそうです。そして、学生時代は所謂エスのお相手だったのだそうです。今でも文通をしている唯一の友人なのだそうでした。そして、大阪のかおる様と再会したバーでホステスの言っている居た、同はんの女性とは光子様の事だったので。私が帰京して、五日間の再教育を受け始めた三日目にかおる様から光子

様に次の様な手紙がとどいたのだそうでございます。それは……

「光子さん、昨日偶然の機会に貴女がおっしゃって居た、奴隷の平にありました。私も驚いたのですが、まさか、私が二年前に、頭をふみつけてやった男が、今貴女の奴隷になっているとは、全く偶然にしても、こわいみたいね。貴女も私も、同じ様なサド性たっぷりな女ですもん、近い中に東京へ務める事になりましたから良かったら、平を二人の共通の奴隷にしません。私のサドぶりが、決して貴女に負けない事は、平が自分の身体で貴女にお知らせする筈です。」

光子お姉様

かおる

さて話を前を前に戻します。あわれな姿で、二人の前に引きすえられた私は、光子様から次の宣告を受けたのです。

「伏人ノ 今日から、私と、このかおる様が此の家の御主人様になるんだよ。もっとも、私が絶対の女王様、かおるは私の侍女、けれども、お前には御主人様だよ、そしてお前は奴隷で家畜、わかったね、それから、お前が一生私達の奴隷の境遇からぬけられない様に

今から、お前の背中に、入墨をしてやるから」

私は、ベッドに両手足をくくりつけられ、

医者として、幼稚な知識しかない、かおる様の手で入墨をされたのです。

直径三糎程の大ききで「奴隷」と書かれ、

(投稿告白)

女性の下着と私

川田 一

最近の奇クを読んで、私が女性の下着に

ります。

興味を持っている事が、決して自分一人だけのものでなく、所謂同好の方が相当数あり、かつ女性の側に於ても、これら男性の性向を異常なものと見ず、かえって、そういう男性に自分の身につけた下着類を与えて、その渴をいやさせて下さるといふ御申し出を拝見して大変心強く、身内の引き締まるのを覚え、私の下着探求遍歴の中、その目覚めともいふべき想い出を綴ってみました。私は既に三十五才にもなり、安定した勤めを持っておりますが、この性向に關しては余り恵まれておりませんので、御理解ある御婦人の共鳴を頂きたく思っております。

私は幼時より下町に住み、たしかにこの方面には機会が多かった様に思います。中学生の頃のある夏、私は同級の友人の別荘のある房州のT町へ招かれて海水浴へ行つたことがあります。現在の中学生と異り、當時は男女共学など及びもつかず、女学生といつても、通学の途中で、ちらっと後姿を眺める程度でした。それが、その別荘に滞在中は、友人の姉妹が二人、食事などの世話をしてくれましたが、はしなくもその美しい姉妹によって、私の女性下着に対する執着が開眼させられる事になってしまったのです。

「所有主佐野光子」と其の横に入墨された私は、永久にお傍を離れ得ない、終身囚として、光子様の御手に、全生命を握られる家畜に登録されたのでございます。

キリでさす様な痛みを背に感じながら、「これで、いいのだ。これで、いいのだ」

と私は自分に言い聞かせるのでした。

新しいかおる様という、光子様の侍女、私にとっては、御主人様を得て、私共の生活は新しい世界を迎えるのでございます。

しかし、これくらいの事は、まだまだ私にとっては序の口であって、それからの家畜生活こそ、私の生涯にとっても記念すべき日々であったのでございます。

あくなき嗜虐性に富んだ、年若い二人のサジスチンによって、家畜であり、奴隷であると仕込まれた無抵抗の私が、どのようなムゴイ生活を強いられたか、それは一篇のS・Mストーリーとして、きっと皆様の興味をそめることでしよう。

次の機会に、皆様にお話し申し上げたいと思います。

では、ごきげんよう

(終り。)

私が友人より先に海より帰ってきてきて廊下を通ったとき、竹竿に水洗いした海水着と共に、ブラジャー、パンティなどが華やかに干してあったのでした。私は兄と二人だけの男兄弟で、若い女性の下着なんか全く縁のない日々だったので、パンティはともかくとして、ブラジャーだけは、どうしても何であるか理解できなかったのです。

恐る恐る指の先でさわって見てみると、突然、姉妹が室から出てきたので、驚いてとびのきました。下着にさわっていたことをはつきり見つけられて、大変バツの悪い思いをしました。しかし、それから二人の姉妹と親しくなってから、ブラジャーが乳当てに用いることなどを教えてもらったことなどを覚えております。

私たち、下着愛好者は、女性の下着そのものが興味の中心になるものか、或は若い女性の体臭の移り香がしみ込んだ下着に興味を持つのだろうか、自分でも不思議に思うことがあります。たしかに、男性の用いることのない女性の下着に対して、珍しさからくる興味はあります。しかし、女性の肌に直接触れている、或は触れるであろう

下着であるから、より興味を持つのでしよう。だから、着古して体臭の移った下着であつたら、より有難いのです。

若くて美しい女性の、まだ体温の残っているパンティを脱ぐなり、すっぱりと頭の上からかぶせられたら、どんなに感激でしょう。私の空想ではいつも、そんな場面が夢として出てきますが、まだ実際には一度もやって貰ったことはありません。多くの女性の中には、逆に男性の顔に、自分の脱いだばかりのパンティをかぶせてみたいと思う方がおありだと思ひます。私達マニヤにとっては、こういった女性の心理もよくわかりますが、実際には中々そういう機会が掴めないのだと思ひます。

穿き汚した自分の下着に対しては、普通の女性は羞恥を抱くものですが、その自分の今まで穿いていた下着が、男性の崇拜物となったり、或は玩弄物となったりするということは、殊に近代的な若い女性にとっては、何らの意味で関心があるのではないかと、自己流に解釈してみるのですが、御婦人からの御感想を御洩しいただければ幸いです。

『浅春山荘シリーズ』

「浅子像」

柴 里 雷 九

私は自分の最愛のペット、浅子の身体と寸分違わぬ全裸像を作ろうと志した。これは私が思春期の頃から念願していた一つの夢であったが、功成り名遂げた現在、浅子という天真爛漫で無邪気な娘と親しくなつて、初めて、この素晴らしい夢が実現することになったのである。私の胸は青年のように高鳴り指は昂奮におののいたが、浅子は私の心の中も知らぬげに、只、この珍しい試みにはしやきまわるのだった。

霧が流れた。

林間に潑んだ乳白色の霧が私達の歩行につれて流れたのだ。

ここは、上信越国境の山の中、四月といつても春まだ浅い今日、私は自分のために新築したコテージに私の可愛いペット浅子を連

れてやって来たのだ。

すでに初老といわれる年になった私も、自分自身では未だ心身共に若く、健康であると思っているが、世間では、何かと奇行者呼ばわりをしているようだ。二十一才の浅子を連れて山に来たという今日の行動も口さがない

世間の雀達には、私を変人扱いする絶好の材料になるのであろうが、自分の口から言うのも少々テレルが、功なり名をとげ、生活にゆとりの出来た今日、私は私なりの生き方に満足し、少しの後めたさも感じていない。

老妻すでに無く、子宝に恵れなかった私には、フトした機会にめぐり会った、きわだつて肌の美しい浅子が唯一の生きがいのようになっている。

残雪をいただく山々にかこまれた私のコテージは、思いきって野趣を盛込み、荒切りされただけの丸太を組合せ、杉の皮を葺いた

けたついでに、浣腸用にと、後にも穴をあけたらどうだろうなどと、おかしい事を考えるのもマニアならではの感がある。

こんな奇怪なパンティが現われるのも、パンティはこれまでは下着の一部にしか過ぎないと考えられていたのが、最近では独立した衣裳とみなされるようになってきたからではないだろうか。

「本当のおしゃれは見えない所から」とかなんとかいう商魂のキャッチフレーズの然らしむる所かも知れない。これが、奇妙な形のものは別格としても、一般的になったカラーパンティの流行にみられるのだと思う。ピンクあり、ブルーあり、イエローあり、バイオレットあり、遂には時代の流れと共に、シャープトーンまで現われる始末。フルーツカラーが流行といえ、一体何と表現したらよい色調のものが生れるのであろう。

色はそれを好む人の性格を表わすという。とすれば、ピンク系は情熱的、バイオレットの好きな人は、自己愛の強い見えっぱり、ブラック系は堅実型、白は言うまでもなく純潔などと、私なりに判断してみるのも面白い。もっともこれは多分にこじつけで、真憑性は甚だ少いのだが。

ところで、このパンティが女体に与える医学的影響はどうであらうか。昔パンティ（いや昔は殆んどがズロース的に長目のもので、パンティがこんなに一般化したのは戦後の女性開放の産物らしい）といえは殆んどが綿製品であった。ところが最近では、大部分がナイロンのような合成繊維製品である。ナイロンといえば、雨ゴートによく用いられるのも分る通り、甚だ通気性の少い、吸湿性の悪いものである。これがパンティに使われるとなれば、腰部がむれないのが不思議である。そうでなくても、兎角湿気が多く、不衛生になり勝ちな部分を、ナイロン系の合成繊維で覆うのは考えものではないだろうか。野暮ったいようでも、綿やウールに帰れと、私は言いたい。

この事はパンティのみではなく、ブラジャーについても言えそうである。こうした下着が、おしゃれの一言の下に、女体の衛生を害しつつあると言っては言い過ぎだろうか。

だが、綿やウールの、通気性も吸湿性もよいパンティであっても、これがアカや分泌物で汚れていては、興覚めどころか不衛生の上もない。下着は常に清潔であれとは、おしやれ講座の第一課どころか、小学校幼稚園の

頃から教えられている事柄である。

しかるに、物の本によれば、パンティの清潔度はBGが最低とある。それから学生、人妻となり、最も洗濯のゆきとどいた清潔なものを着けているのは、ストリッパーとか夜の蝶とか言われる一群の方々という。

思うに、BGは、人前にパンティを見せる事もなく、さりとして、コーヒー代や映画、スケート、スキー等のレジャー費用に忙しくパンティ代はどうしても後まわしになる事と、毎日のお勤めはつい洗濯の機会を少くするためであらうか。

衛生智識豊かであるべき学生が案外非衛生なのは、「えい、めんどくさいわ」との、不精な学生気質のなせるわざか。

ところが人妻ともなれば、夫君の目があるため、清潔は絶対不可欠の条件であらう。

そこへいくと、常に楽屋で裸身をさらさねばならないストリッパーや、職業柄、夜の蝶のパンティが清潔なのはうなずかれる。もっとも、こうした人々は、洗濯はあまり得手ではないらしく、よければ、サッサと捨てて新品を買うとも聞いている。その捨てられたのが貴重なのだというマニアの声も少くないようだが――。

女性切腹の追想

武 林 長 作

それは昭和二十年八月十八日の夜半に起きた出来事だったのです。当時、私は主計少尉として金沢市の或る部隊におり終戦を迎えたのですが、終戦の詔勅がラジオから流れ敗戦を知った人々は、日本の何処でもそうであったように、軍人も又一般の市民も全く生気を失ない悲嘆にくれ、なすべきことを知らず、本当に一時は死の灰に埋もれ、あらゆる生物が、その動きを止めてしまったような状態でした。

そのような中で、私の隣の部隊では敗戦を知るや酒保係の下士官が悲憤慷慨のあまり、隊内の便所に駆け込み牛蒡剣といわれる帯剣

で腹を真一文字に掻切り、医務室に運ばれる途中で絶命するという事件があり、又極度の悲嘆から一億玉碎を叫び、女性三名を含む一家五名が自宅の玄関横の居間において円座を囲み、短刀や日本カミソリ等で、それぞれ見事な切腹を遂げるという悲しいことも起りました。然しこのようなことは決して珍らしいことではなく、当時は幼い子供やほんの一部の人達を除いては戦争に破れ外敵が本土を侵したならば、その時こそ最後の最後まで断乎として戦い、然る後従容として自らの命を断つ、これが我々日本人の誇りであると固く信じていたものでした。ですから戦直後、各地

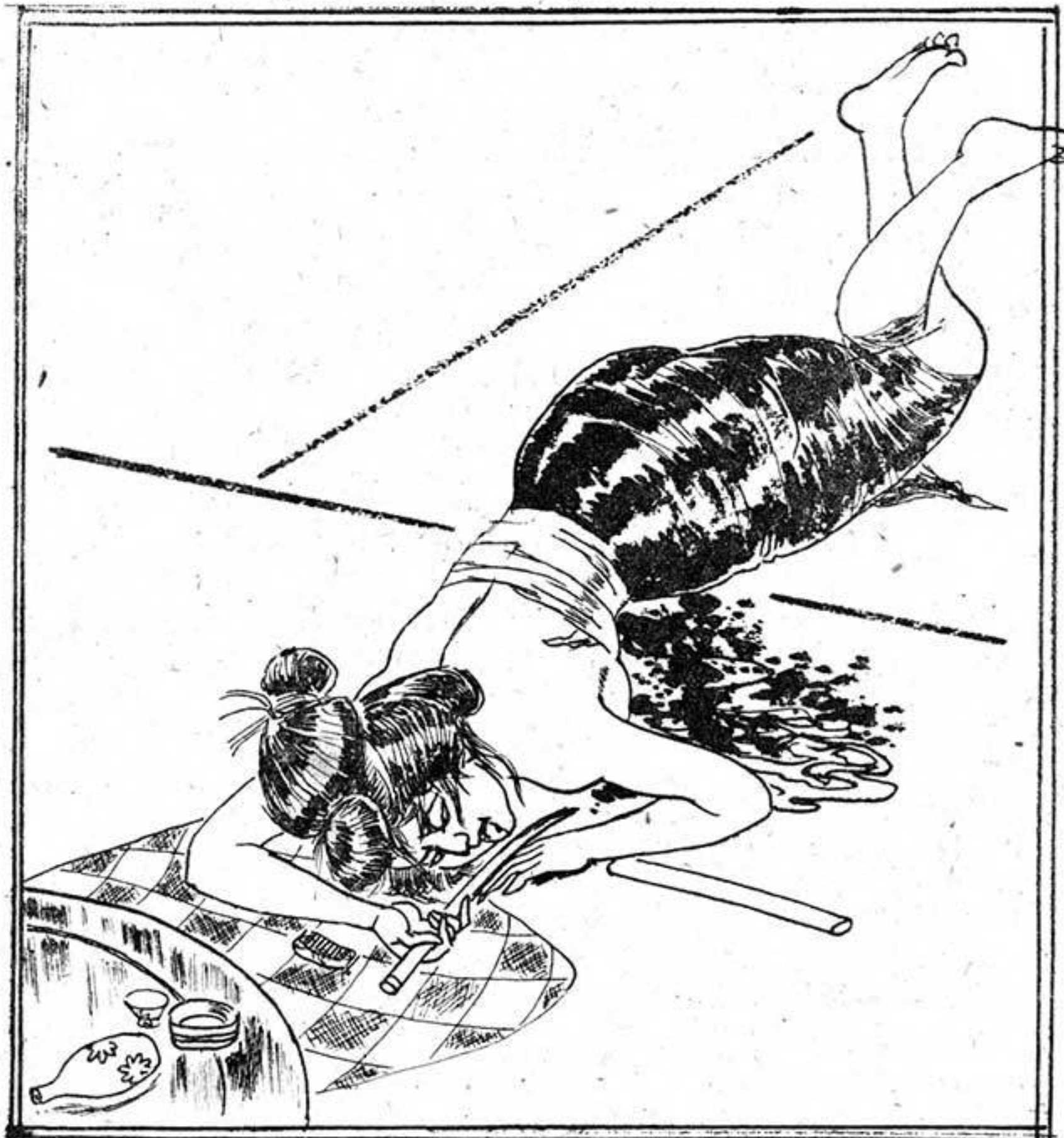
で古来から行われた勇壮な且つ又崇高な切腹という手段による自決が男女を問わず数多く行われたものです。

私も敗戦を知ったときは潔よく割腹し、日本人の誇りを守り通そうと思ひまして夜の点呼後、個室のベッドの上で上衣を脱ぎ、上半身をあらわし軍袴を脛下まで押し下げて肥満した腹部をすっかり出してから、私物の軍刀の鞘を払い、切先十厘程を残して白布を巻き右手で確っかり握り左手で部厚な下腹を軽く撫で廻し、気持を落着かせながら、今まさに軍刀を力一杯突き立てようとした途端、巡回中の不寝番に抱き止められ果たし得ず、翌朝

部隊長から懇々と説諭され死を思い止まったようなことがありました。

本題から逸れてしまいました。それから丁度三日後の八月十八日に復員する仲間と、ささやかな別れの宴を市の中心街に当たる香林場からほど近い或る料亭で催すことになり余り気は進みませんでした。仲間と連れ立って、その料亭に赴きました。

その女将は愛想よく、「どうせ明日か明後日は外国の兵隊が入って来て、私共はどうなるか解からないのですから、今夜は特に芸妓をサービスで出します。どうぞ御ゆるりとしていらしゃい」と申しまして四名程呼んでくれましたので、酒席は大分華やかになり、年若かだった私共は敗



戦の苦痛を暫しの間打忘れて酒を飲みかわしておりましたが、その中に敗戦の話から追いつめられた現在の日本人は一体どうしたら良いかという話題になり、N子という芸妓が切

寝てしまいました。それから、どの位時間がたったか判かりませんが、ふと何にか低く呻くような声に起され、はっと我に返って耳を澄ましますと、ど

腹の問題を持ち出しました。すると他の芸妓達も一様に異常な関心を示し色々の角度から切腹について語り合いました。話の途中でK子という妓が興奮した真剣な顔つきで

「外国の兵隊がこの町に入って来て若し私達に無体なことをしたなら、その目の前で腹を掻き切って臓物を擲み出して叩きつけてやる。その積りで、用意してきたのよ」と席をたち間もなく何処からか立派な黒塗りの鞘の短刀を二振り持って来て見せてくれました。

一振はK子のもの、他の一振りは同じ芸妓仲間のE子の持ち物で、何れも昔は武家の奥方が持っていたものだと思われておりました。

それから暫らく話が続き私の仲間、それぞれ帰隊したのですが、酒に弱い私は、不覚にも適量を過ぎたため、遂に正体もなく、その座敷で

うも隣の小部屋からのような気がしたもので
すから、急いで電灯をつけ隣室の入口が壁で
仕切られ私のおります部屋の反対側にありま
すので廊下を廻り隣室の入口に参りまして障
子越しに気配を窺いますと、果たして中から

腹の底から絞り出すような切なげな呻き声が
幽かに漏れてきますので、誰かが急病にでも
なったのではないかと思い、急いで障子戸を
開き中へ入って見ますと、途端に生臭い血潮
の臭いが鼻をつきました。私は一瞬、そこに

【映画通信】

邦洋画は残酷ムード

東山映史

邦画では、東映の中村錦之助、有馬稲子
主演の「武士道残酷物語」の不義の男女が
後手に縛られ、顔に白い布をかぶせられ、
首を斬られるシーンや、生き埋めシーンな
ど。

また、松竹の内川清一郎監督の園井啓
介、桑野みゆきの「残酷の河」の園井の忍
者の岩瀬隼人の口べらしのために、河に流
されるという残酷な出来事。また、郷の若
者多助が支配者の勘介（加東大介）の娘ち
ず（桑野みゆき）をだまし、砂金をもって
逃げようとして、ちょうどやってきた隼人
ともども捕えられ、万年杉につるされるシ

ーンなどさすが「残酷」という文字を使用
しているだけに、残酷シーンが多い。

これは邦画だけでなく、洋画にも多く、
世界の映画界が「残酷ムード」に酔いしれ
ているという感じ。

洋画では「バイキングの復讐」の吊るし
責の晒しシーンがサジステックで迫力が
ある。バイキングの本拠の洞窟みたいな場
所で、若い男と女が背中あわせのバンザイ
型に縛りつけられ、ぐったりとしている。
若い女は巫女（みこ）で、恋愛は禁じられ
ているのに、男を愛してしまい、それが発
覚して、男と一緒に晒しの刑を受ける。ふ

棒立ちになってしまいました。思い直して電
灯のスイッチを入れますと、私の目に飛込ん
で参りましたのは実に凄惨な光景でした。

先程同席していました豊満な肉体をしたK
子という二三才になる妓が、牡丹模様の派手
な腰巻一枚という姿になり、その腰巻も紐が
切れたのかずり落ちて殆んど全裸に近い状態
で横仰向きになり、両足を突張り右手を固く
握りしめ左手で血の滴たたる先程見せてくれ
た短刀を確か握り、ふくよかな白い腹を臍
下二、三種の箇所を中心として縦横十文字型
に掻き切っております。

傍らに駆け寄って声をかけましたが既に意
識はなく蒼白に変わった愛くるしい顔一面に大
粒な脂汗を浮べ口を僅か開けていました、
もう呻き声も殆んど聞きとれない程で、身体
を小刻みに震わせ大きな呼吸を間を置いてし
ていますので、慌てて女将を起し近くの医師
を呼び手を尽くしましたが、その場で遂に絶
命してしまいました。

医師の話では二、三時間前に切腹した模様
で然も深く掻き切ったので肝臓や小腸などが
数ヶ所断ち切られ、手の施しようがなかった
との事でした。助からないまでも隣室におっ
たのに苦悶していた間中、介抱もしてやれず

つうの縄ではなく、イバラらしい痛そうなトゲトゲのたくさんある縄で縛られているのがミソ。皮のムチで、さんざん打たれたらしく、娘の半裸の傷アトがつき、なまなましく血が流れている。男女が縛られているのは大きな牛車で、やがてこの牛車がごとごと動きだす。二人はそのまま、丘の上に運ばれる。それはハゲタカの餌食にするんだというセリフが吐かれる。

当世流行の残酷な戦闘場面が、いろいろあって、ラスト近くにクライマックスの責め場がある。このSシーンはちょっとコッている。

イングリッド軍の悪臣のために捕えられたイロン王の新妻が、城の一室に閉じこめられ、壁のクサリで両手を縛りつけられていて身動きできない。

このクサリ縛りはあまり迫力はないが、とにかく壁からのびているクサリと手錠に両手首をつながれている。

その女の顔のすぐ前に小さなガラスの箱が据えられている。なかには、毒グモがはいっている。砂時計の仕掛けがあって時間がたつとその箱のフタが開いて、毒グモは

女の顔にかみつくであろうという、ジワジワ型のSシーン。眼の恐怖の表情のアップだ、それを助けに城壁をよじのぼっていくバイキング王イロンの弟の勇姿がなんどもうつされる。この映画のクライマックスである。

また、「生血を吸う女」もエログロ、サジステイックな映画である。死んだ娘に若い女性の生血を注射することによって生き返らせる。

そして、その女たちを殺しロウ人形にして水車小屋の中の舞台をかざる。そのロウ人形が、火あぶりの、ジャンヌ・ダルクとか、死刑になる女とか、首づりの女とか、サジステイックな人形ばかりである。そのぎせいになるロッテが口に猿ぐつわをはめて椅子に縛りつけられたり、手術台に厚いゴムヒモで縛りつけられて、身動きできない。口には嚴重な猿ぐつわをはめられ、目は恐怖におののいている。そして注射針で生血を吸われていく、そして死体はロウ人形にされるのだ。そのシーンが長いカットでくり返しくり返しスクリーンに現われて愛好者の目を十分に楽しませてくれる。

本当に可愛想なことをしたと後々まで悔やまれてなりません。か弱い女性の身でありながら、あの様に男子も及ばぬ程の見事な切腹をしおわせたものと、全く驚嘆の外はありません。余程彼女は気丈な性質の持ち主であったのでしょう。

傷口は男子でも余程のものでないと困難な程の大きさに臍下三糞位のところを横真一文字に約二五糞、小腸間膜に達する程の深さに割掻いており又鳩尾から白線に沿って縦に約十七、八糞、これも深々と切り下げておりました。

腹筋が切断され収縮したため切り口が何れも大きく開き黄白色の部厚い脂肪層がむき出し腹腔内からは夥しい出血があり色々の臓器が生きもののように血潮にまみれて寝具から畳の上にまで流出し実に凄惨な光景でした。然しK子さんの死顔には先程までの苦痛の影は見受けられず、安らかに笑みをさえ浮べているようでした。枕元に置かれた血潮に色どられた遺書には敗戦を嘆き日本女性として若しも外敵に身を穢されるようなことにでもなればこの上もない恥である。そのようなことにならぬ前に死を選ぶという意味のことが認められておったように記憶しています。

“美保子の処方箋”

藤井 泗郎

間遠に降り継いだ雨が上ると、空は嘘のよう
に蒼く眩しい肌を覗かせ、風が草花の熟れた
香りを受けて、梅雨の名残りを吹き払って
ゆく。もうそこまで来ている烈しい夏のリス
ムが聞えてくるようだった。今、美保子の座
っている教室の窓にも白く厚い雲がかげり、
校門に続くポプラの樹々も爽やかな光りと風
の中で颯々と眩しく揺れていた。

“もう夏休みも近い” 薄いブラウスに包ん
だ胸が、一度に堰を切ったように激しい鼓動
で波打った。グループで又、軽井沢の別荘に
行き、破目を外して遊ぶ興奮が、ちらっと頭

の片隅をよぎったが、しかし、それよりもも
っと美保子にとって胸を締めつける愉悦が、
陽光にふくらむ眩しい窓硝子をみつめる彼女
の瞳の中に狂はしく燃えたぎってくるのだ。

この“演劇について”というゼミナールが
始まる前、教室に入ってきた咲子の口から、
思いもかけないニュースが伝えられた。立花
真弓が、事もあるうに美保子のグループと対
立する矢部キミ子に、手紙を送ったというの
だ。咲子は、例のオーバーなゼスチュアで、
真弓がキミ子に宛てて書いた手紙の内容を報
告した。それによると、真弓が美保子のグル

ープから身を退きたい事、出来ればその事で
美保子の怒りにふれたくないから、一時休校
するなりして冷却期間をおき、それから改め
てキミ子のグループに入りたい、どうかキミ
子の力で弱い私を守って欲しい、とそういう
主旨の手紙だった。

“あたし、その手紙読んで、てんで頭にき
ちゃってさ、勿論その手紙はキミ子の奴から
盗んできたんだけど、真弓の前でおどかして
やったのよ。この手紙持ってあたしと一緒に
お姉さまのそこへ行こうって、そしたら真弓
の奴、おどおどしちゃってその手紙、びりび

り破いちゃったの” 大事な証拠品を台無しにされて、咲子は頭をかき、例の茶目気たつぷりの表情で、上目使いに美保子の顔を伺った。咲子達が”お姉様”と呼んでいるように美保子はこのグループの美しい顔役（ボス）だった。大きく澄んだ黒い瞳は、あまりその時時の感情に乱れる事なく、冷く高い鼻と薄く紅を曳いた形のよい唇、そして、いかにもその容貌に似合った優雅で気品に満ちた姿態は、このT学院に学ぶ男生徒はいうに及ばず女生徒にとっても注視の的なのであった。物に動じない美保子の瞳が、この時ばかりは一瞬曇り”本当なのね”と低く問い返した声に、怒りがこもっていた。咲子は黙って大きく領ずき、固く握った美保子の右こぶしを確かめると、そそくさとその場を立ち去った。

長い間、教室の窓に眼をやり、物思いに耽っていた美保子が、きつとした眼付きで”或る決心”をした時は、この時間の講義も終りに近づいていた。美保子は空白のノートの端を破り何やら書き込むと、彼女の前に座っている康子の背中を突いてそれを渡した。康子はそれを読むと美保子を振り返ってニヤリと笑った。そして、そのメモは順々にグループの間を縫っていった。美保子が、その美しい眉をひらいた或る光景を思い浮べ、胸にひろがる愉悅に思わず瞳を熱く潤ませた。或る決心”を、大胆に行動に移したのは、それから間もない土曜日の夜だった。

美保子の家は、隅田川べりの工場地帯にあった。昼間は、工場の巻き上げる煙と機械の騒音が街を包んだが、川風が湿っぽい夜の匂いを運ぶ頃には、二〇〇米程川下にかかる変わった形の大橋の上を、ゴトゴトと都電が通り、時折り自動車のヘッドライトが、きらりと光って通り過ぎる程度で、あとは嘘のように違まり返るのだった。小資本ではあったが、運送会社の社長であった父に、幼く死に別れた彼女は母の手で裕福に育った。彼女の自宅から一、二丁離れた場所に、川に背を向けた倉庫があり、日中は大小のトラックが出入りしI県から貨車で運ばれる圭砂を降したり積んだりしていた。

小沢という、五十年ばいの小太りの男が美保子の持っていたこの倉庫を買いとってからもう五年になる。生前、父と同業であり、又良い飲み友達だった小沢は、父の死後も時々美保子の家に顔を出し、母と故人の思い出話をしたり、美保子の美人ぶりをひやかしていったりした。美保子が十八の時、つい誘われて倉庫に遊びに行った彼女は、そこで始めて、小沢のりょう奇的な生活の秘密を知り、同時に、そのむごたらしい犠牲とされてしまった。ここで、その時美保子の上に起った暗い、恐ろしい話にふれておこう。

小沢はサジストで、どこで話をつけるのか同好家の会員を募集し、会費をとっては責めの悦楽に興じていた。何年振りかで見る倉庫の二階に来て、美保子は、そのあまりの変りように眼を瞠った。天井には、縦横に鉄の梁が渡され、滑車には、様々な太さのロープが垂れ下り、じゅうたんで敷きつめられた室の中央には、ベッドあり、照明器具あり、移動式のカメラ、スタンド、様々な形の椅子、それに、実際に使ってみなければ納得できないような、大道具や小道具が揃っていて、その上、室の片隅には硬質ガラスで囲った浴室まであり、四方の壁は何枚も重ねた石綿が張りめぐらされて、巧みに防音の役目を果たしていた。小沢に欺かれたとも知らず、美保子がこの会場を覗き見た時、会員である男と女のあられもないプレイが、生々しくひろげられていたのだ。

生れて始めて見る光景に度胆をぬかれて、思わず腰を浮し逃げようとしたところを、予



め小沢と示し合わせていた男達の手が伸びて、美保子は容しやなく、ブラウスからスカート、シューミーズまでむしり取られて、後手にきりきりと縛り上げられた、と思うと滑車

が廻って否応もなく宙吊りにされた。例えれば、朝露を受けて今開いたばかりの初々しい花に似た美保子の裸体は、ブラジャーとパンティだけを残して、残酷な照明の中に浮き上

むき出しにして飛び上り、美保子のパンティに手をかけようとし、はっとした美保子がロープの痛さをこらえて身を固くした時、
「皆さん、皆さん、お静かに」

り、生れて始めて受ける縛りの苦痛が、きりきりと柔らかな肌に喰い込んでくる。それよりも、この密室に集っている十数人の男女達の、興奮と好奇にギラギラ漲った眼がまるで針を突きさしてくるように、美保子の羞恥にすぐむ白い肌に襲いかかるのだ。

この新鮮な犠牲を眼の前にして、会員達は思わず口笛を吹き、足を鳴らし、何やら喚き散らしては、一人一人、吊された美保子の足下に来て、右に左にぐるぐると廻し乍ら思い思いに言葉を掛けるのだが、「許して許して」と泣きじゃくる美保子の耳には何も聞えず、只、会場一杯の熱っぽい騒音が、耳の奥でがんと鳴り続けている。

今しも、赤ら顔の小男が興奮を

一際甲高い声を挙げて一人の若い女が立上り、その小男を制して美保子の足もとに歩み寄った。一瞬騒ぎは納まり、みんなが動きを止めてその若い女に注目した。ブラジャーと黒い皮のホルセットをつけたその若い女は、みんなの方に向き直った。

「みなさん、せっかく今夜は私達の手もとに新鮮な果実が届いたんです。めいめい勝手な事をせず、この果実を充分に美味しく頂くじゃありませんか」 「賛成々々」という声と拍手が一齐に起った。女は満足したように一つ頷き、

「つきましては、ここに吊し上げた、お人形は」といい乍ら女は右手を上げて、美保子の丸くふつくとくびれた尻を、バンティの上から器用につまみ、容れない力でつねり上げた。そのあまりの痛さに、あっと美保子は涙がこぼれそうになった。

「未だこんな経験は始めてですから、あまりひどい事をするとかわれてしまいます」

「いいじゃないか、こわしちゃえ」という熱い野次が飛び、それにつれて男達が笑った。「女は女同志、このお人形のお仕置は私にお任せ下さい」女はいい終ると、会員達の同意を求めるまでもなく、つかつかと室の隅

に歩いて行き、皮製のむちを取って引き返した。会員達は、いよいよ始まるぞと夫々身を乗り出すようにして、女が一つ、びゅうと素振りする黒い鞭を見守った、女の注文で、美保子の身体はやや下に降され、鞭で打ち易い空間に止った。

美保子は恐怖の眼を大きく睜らいて傍らに鞭を持って立つ女の顔を盗みみた。女の顔は冷淡というよりむしろ、これから打ちのめす眼の前の美しい少女への自分の行為に、半ば陶醉しているといった風で、残忍なよろこびの笑みさえ泛べているではないか、

「許して下さい、お願い」心底から撻りつくような思いで美保子は泣きじゃくった。「許して? いいのよ、私は許してあげたいけど、私のサド侯しゃくが許さないのよ」女は唇を曲げて憎々しげにいい放った。

みんなはこの言葉にどっと一齐に笑った。

我が意を得たりといった表情で、女は得意気にみんなに向き直った。「ねえ、みなさん、今夜は特に男性の方が多いから、私から一つ男性に特別サービスを致します」そういったかと思うと、女は素早い手つきで、美保子のブラジャーをひきちぎり、いきなりそれを丸め、右手でぐいと髪の毛を掴んで後ろへ引張

り乍ら、美保子の口の中に無理に押し込め、腰に吊っていた皮のサルグツワを殆んど眼の下までおおうようにして締め上げた。恐怖と羞恥にからからに乾いた口に詰め込まれた自分のブラジャーと、きつく締められたサルグツワの慣れない皮の臭いに、思わず美保子は息が止るようなショックを受けた。

「さあ、準備完了」女はひとりごとをいって床に落ちていた皮鞭を拾い上げると、先ず、丸くくびれた美保子の白い尻をめがけて、力一杯振り降した。「ひーっ」うなだれていた美保子の顔が、電気にでも打たれたように、

おお向けに反った。二回、三回、四回、両手両足の自由を奪われて吊されている自分を忘れたように、美保子は、間断なく襲いかかるこの無慈悲な鞭から逃れようと懸命にもがいた。白い裸身は、くるくると宙に廻り乍ら、赤い縞模様の数を増して伸び縮みした。この鞭の苦痛から逃れようとする懸命な運動が、彼女を喘がせ、きつく締めつけられたサルグツワの中で、大きく呼吸が乱れ出すと、顔は火のように火照り、喉の奥がひゅうひゅうと鳴った。

やがて鞭音が止み、ロープがゆるめられて床に転がされた時、美保子は張りつめていた

神経が一度にゆるんでぐったりと寝そべってしまった。長い間、後ろ手に吊り下げられていた為、肩の関節がしびれてずきずきと痛んだ。しかし、犠牲の務めは、之で終ったわけではなかった。鞭で打たれ、身体のおちこちが全て火傷のあとのように、かっかっか熱を持って痛み出し、美保子は本能的に会員達に背を向け乍らも、同じ姿勢を保っている事ができなかった。その様子をじろりと見降すと、若い女は今の運動で乱れた髪をターパンでまとめ上げ乍ら

「さあ、みなさん、今度はお待ち兼ねの浣腸よ、どなたか手を貸して下さいませんか？」と薄ら笑いを泛べて呼びかけた。待っていましたとばかり、男達が腰を上げかけると女は手を上げてそれを制し、「あっ、駄目、このお人形さんは始めてでこわれ易いんだって事、お忘れになって？」と二、三人の女を指さし、どうぞと手招いた。美保子は、女達の手で軽々と抱き上げられ、鋼鉄の錠がやたらにとりつけられた奇妙なベークライトの台へ運ばれた。

鞭痕の痛みをこらえ乍ら、美保子は、次に起る危機に尻込みした。混乱した意識の中では、これから自分がどんな役割りを果さなければなら

なければならないのか、正確に判断する事は難しかった。しかし、無理矢理、女達にうつ向けにねじ伏せられ、両手と両足の距離を短かめに、鋼鉄の錠で四ヶ所に固定され、すると降りて来た太いロープで下腹と太腿の部分を三角の形に巻きつけられて吊り上げられた時、先程、女のいった言葉が明瞭によりみがえった。「私は浣腸されるのだ、こんなに大勢の人の目の前で、しかもこんな恰好をさせられて、美保子は気の遠くなるような羞恥と屈辱に身をふるわせた。

ぎりぎりに吊り上げられた腰につれて、ピョンと突張っている足の筋肉がひきつってけいれんを起しそうだった。「嫌、嫌よ、かん忍して」美保子は声をふり絞って悶えるが、それは無惨にもサルグツワの中で声にはならず只、激しく首を振り続けるだけで、前方に傾斜した顔面は、その都度真赤に充血した。そして、その夜の、奇妙で、残忍なプレイは、女の一人が、グリセリンの溶液を満したイルリガートルを捧げて、おもむろに、眩しいライトの中におびている美しい犠牲に近付いた時、最高頂に達した。女は、美保子の耳もとで、止めを刺すようにゆっくりいった。

「さあ、お人形さん、これが済んだら、おし

めもきつく締めてくれるし、それでも我慢出来なければ、ちゃんとは後始末もしてくれるのよ、勿論……あそこにいる男の人達がね、ふっ……」

生れて始めて受けた生々しい屈辱の夜が明けてから半月もの長い間、美保子は放心したように自分の室に閉じ籠って過した。訝かる母にも答えず、学校も休んで、寢床の中にもぐっては思い出したように泪ぐんだ。若い身体は、あの晩の激しい縛りの痛みも、鞭の傷痕をもみるみるぬぐい去っていったが、眼をつむると、明るいライトに照し出されて、惨めな芋虫のように伸び縮みしている自分の裸身がありありと浮び上った。しかも自分の意志を完全に無視して強要された、あの忌むしい浣腸の責め苦、灼きつくような腹部の痛みと、途方にくれる膨張感、それをじーっと熱ぼく見守る男達の眼の光りが、そのまま凶器となつて、真紅な羞恥に燃える美保子の肌に切り刻まれるのだ。

「小沢のおじさんが……私をこんなにしたんだわ」思い悩んだ後、美保子は必らず小沢の太った脂顔を憎々しく思い浮かべる。今にして思えば、あの場所に、小沢がいなかったの

は、せめてもの慰さめだった。しかし、小沢は、あの場所に集った男女の会員達から、新鮮な犠牲を提供する事で、プレミア・ショウの観覧料をかなりの額、受け取ったに違いない。唯、「おじさん、おじさん」と平常、馴っている美保子の受難を、眼のあたり眺めるのに忍びず、そつと姿を消したのだ。それに、あの場所に備えられたカメラだって、私の知らない間に、何度シャッターを切ったか判らない。

美保子は、十八の少女とも思えぬ推理を廻らせて、それ以後、小沢の出入りする場所や彼の遍歴、そして現在、副業としているに違いない、秘密なクラブ組織を根気よく探っていた。そして美保子の真しな努力は、最初の推理の正しかった事を立証した。つまり、小沢は本郷にある本宅の他に、上野に小綺麗な料亭を持っていて、もう二十年も連れ添った半ば公認の妾がその差配をしている事、又本業の傍ら自分の道楽を副業に結びつけ、この界わいに縄張りをもつやくざのS組と気脈を通じ、地方から上京した家出娘を誘って、例の倉庫の二階で一通りの責めの訓練を施したあと、料亭に連れ戻り、女中働らきをさせ乍ら、その道の旦那衆に高額料金をとって

は、奥の密室で彼女達をモデルに特別ショウを開催している事。又、その他にも若い女を二人程囲って、あちこちと忙がしく泊り歩いている事……などが判った。しかし、美保子が探し当てようとしたものは、小沢が現在行っている人非人に等しい商法や、何人もの妾を囲った不潔な生活等をあばき出す事ではなかった。それよりも、もっと高価な発見が、思わず美保子を小踊りさせた。

春の朝、ひっそりと咲き初めた可憐な花を、土足で踏みにじった者への激しい怒りが美保子の胸の中で消える事なく燃え続けた。今、美保子がしなければならぬ事、それは、小沢への復讐でしかなかった。

快よい初夏の夜風が、川面を渡り、折からの満潮に暗い水面が乱れて、月の光を砕いていた。表に廻れば、重いシャッターの閉された何の変哲もない下町の、ひっそりとした暗い倉庫のたたずまい。だが、一步その中に足を踏み入れれば、異様な熱気に包まれて、眩しい程の明るさが室一杯に溢れ、様々な形をした責めの器具が無気味に並んでいる。

今、この室の隅に立つ美保子の脳裡に、一年余も以前、始めてこの室で責めさいなまれた夜の傷ましい思い出がよみがえる。あの事

があつてからも厚かましい小沢は憶面もなくこの場所に美保子を誘い出そうとした。小沢は、この美しい清純なモデルの為に、どんなに男達が欲望をかり立てられ、法外な入場料を払って悔いなき計算していたのだ。美保子は唾をかけてやりたい気持を押えて、三度に一度はその誘いにのって彼をよるこぼせた。始め、彼女を被虐者としてし込みにかかった小沢は、間もなくそれが間違いであった事を知らされた。美保子が、上から下まで黒いタイツに身を包んで、右手に鞭をたずさえ登場すると、被虐の悦楽を求める、男達の群れは、狂気して鼻孔をふくらませた。

美保子は、親子ほども年の違う年ばいの男達を冷然と縛り上げ、打ちすえ、靴で踏みにじった。或いは、足かせをつけさせた下帯一枚の馬にまたがって、容しやなく腹をけり上げ、尻を打ちすえたり、鼻の穴に、水に湿した綿を突っこんで固く栓をし、便器を口に咥えさせ、揚句にはその便器に向って力任せに男の顔をねじ伏せたりした。その度に、男達は呻き声を上げるのだった。

美保子にしてみれば、激しく鞭打つ男の人々々の顔や姿が、あの晩、散々彼女の羞恥を貪った男達の再来と思えたに違いない。

こうして美保子は、この密室を自由に使用する権利を室の合鍵と共に用心深い小沢から受け取った。

午後八時——グループの女達は立花真弓を引き立ててこの密室に集って来た。あごの角ばった、男のような体格の康子が真弓の背中を力任せにどやしつけると、両手にゴムの手袋をつけた杉子が、床に崩折れた真弓の豊かな髪を撫んでぐいっとその顔を仰向かせた。

「あっ」その痛さに彼女は思わず形のよい口を開き呻き声を洩らした。本能的な恐怖に四肢がかすかにふるえ、大きく睜いた瞳に、みるみる涙が溢れてきた。

「お姉さま、待って、待って下さい、何かの誤解ですわ、お姉さまを怒らせるような事、真弓は何にも……」
「ふん」みなまでいわさずに、咲子が鼻を鳴らし、いきなり真弓の頬を平手打ちした。「黙って聞いていりゃいい気になって、じゃ何かい、アタイが出たらめをいったっていうんだね、此奴」
「右手が伸びて真弓の唇をつねり上ると待ってましたとばかり、杉子が後ろから左腕で真弓のあごを抱え込み、ゴムの指を二本いきなり鼻の穴に差し込み、荒々しい力で上向けた。思いがけむ鼻責めにあって「あっ」とたじろぐ真弓を

尻目に、女達の手は我先に伸びて彼女の衣服をひきむしった。もがこうとすれば、杉子の指に責められる鼻が今にも千切れそうに痛んでぼろぼろと涙が耳に伝った。ブラジャーが取り去られ、ピンク色の乳首が覗き一瞬の間に真弓はうつ伏せに転がされた。

康子がロープを手にして馬乗りになり素早く両手首と両足首を縛りその縄尻を一つに括り上げた。康子が仕事をしている間に、セツ子は、前へ廻って真弓の口の中へハンカチを丸めて押し込み、皮のサルグツワで、しっかりと締め上げた。女達は手足の自由を奪われて芋虫のように惨めにもがいている真弓を見下した。俗に汚れを知らぬというのだろうか真弓の眩しい肌は、どんな隅々までも造型の美が行き届き、熟れた果実の匂いに満ちていた。責める者の悦楽は、どんな場合にも、責められるものの美しさによって倍加される。今自分達の前に差し出された美しい真弓が同性である杉子や康子達の目に、些かの掛値なしに高価なものとして映ったのも又当然であった。しかし彼女達は画家や彫刻家のようにモデルに手を触れずに美を鑑賞し造型するに、あまりに縁遠い人種であった。モデルの手足をとり身体をゆさぶり、責めさいなみ、

踏みにじり、いわば美を自己流にデフォルメ（変型）する事によってのみ満ち足りる。だから康子が求めるものは、真弓のしみ一つない白い肌と思う存分鞭を当てて赤いしまを彩る事であり、杉子の場合は鼻や乳首を思う存分つねり上げて真弓の苦痛にゆがむ顔を覗き込む事であったし、又セツ子は形よく盛り上ったヒップを眺め乍ら自分の手で浣腸を施す時の、真弓の羞恥と苦痛を想像した。

「みんな、何ぼやばやしてんの、早く吊り上げて一むち入れておやり、咲子と良子、あんな達はライトとカメラだよ」

真弓が、この室に連れこまれてから一言も口を開かずに腕を組んでいた美保子が凛とした声でいった。真弓は軽々と抱き上げられると、手荒く逆エビの恰好に吊り下げられた。

「あっ、うう……」

そのあまりの痛さに、真弓は押しこまれたハンカチもろ共歯をくいしばった。手足をひとために吊り上げるロープと、自分の身体の重みの板ばさみになって背中中は弓なりになり脇腹の筋肉がきりきりとひきつる。手首に巻きつけられた縄は骨が碎けるばかりに益々強く喰いこんでくる。ピシッ、ピシッ、遠慮えしゃくもなく彼女の裸に二本の鞭が乱れ飛ん



だ、真弓を挟んで向うとこちらから美保子と
康子が交互に皮の鞭を振り上げ、振りおろし
た。

ぴりぴり、ぴりぴり、その度に焼けごてを

当てられるような痛みが身体中を走った。

「あっ、あーっ、いたーっ、やめてやめて」

さるぐつわの中で、真弓は絶叫した。しか

し、それは言葉にはならず、唯かすかな呻き

声になった。蛇のようにおそいかかる鞭から
必死になって逃れようとする渾身の力も、た
だ僅かに梁の上の滑車を動かしただけで、張
虎のように、首を上下させるのが精一杯だっ
た。額にも、鼻陵にも、うっすらと脂汗が浮
き、苦痛は頂点に達した。

鞭の洗礼を受けたあと、床に降された彼女
を待っていたのは、グループの陰語でいう、
「お披露目」であった。それは、新入生の観
迎の儀式で、何かの本で読んだ美保子の発案
によるものだった。うつ伏せになって喘いで
いる真弓をひきずり起すと、女達は妙な形の
回転椅子の背後から、うつ伏せのまま真弓を
もたせかけ、椅子の後脚のかなり上の位置に
ぎりぎり、その足を殆んど膝の上まで括り
つけた。真弓の下腹が椅子の頂点を境に烈し
く屈折して、両手首の縄尻は前脚の下方に短
かく結びつけられた。今、自分がどんなポー
ズで女達の前にさらされているかを考えて、
真弓は火のような羞恥におそわれた。せめて
一寸でも上体を起し、膝を曲げる事が出来た
ら……。

しかし、女達の行き届いた括りつけ方は真
弓の願いをみじんに打ち砕いた。杉子が髪を、
掴んで顔をひき起し、左手の指を又鼻の孔に

差し込んできた。

「それでは、新らしく私達のグループに入つた、立花真弓さんを御紹介致します。さあ、いいかい真弓」

杉子は他の女達が椅子に座るのを確かめてからゆっくりいった。「わたし達のグループに入つて来た者は先ず正式に自己紹介をし、新入の挨拶をしなくちゃいけないのよ、判つて？」

喋り乍ら杉子の指は、情容しやもなく鼻の奥を探り、それをいきなり吊り上げ、指を曲げて左右に打ち振つてはいじめ続け、ぼろぼろと涙をこぼし乍ら苦痛にゆがむ真弓の顔を、楽しそうに覗き込むのだ。

「いいかい、私が教えてあげるから、ここにいるグループの方達ひとりひとりにちゃんと挨拶しなけりゃ駄目よ、先ず自分の名前をいったら『至らぬ者ですが、今後共どうかよろしくお願い致します』ってそういうのよ。そうしたら椅子を一回廻して、お前のからだをよく見て貰うんだよ、よくって？」

否応もなかった。真弓は杉子のしつような鼻責めに「うっ、うっ」と、呻くばかりだった。「さあ、それじゃ先ず、お姉さまに挨拶するんだよ、ほらはら挨拶するのに下を向い

てちゃ駄目でしょ、ちゃんと上を向いて」

杉子は右手で髪の毛を掴み、荒々しく顔を起そうとした。しかし窮屈なポーズで括りつけられてゐる真弓にとっては、僅かでも顔を起す事は容易ではなかった。

「しっかりおし、このノロマ」杉子は左手にかみの毛を持ち変え右手を伸して、突張つてゐる真弓の尻をいやという程つねり上げた。

「あつ」その痛さに真弓の顔がびくつと反つた。「さあ挨拶はどうしたの、ええ？」「お願いです、かん忍して、もうかん忍して」哀願する眼に涙がこみ上げ声がかすれた。「お前は何て諦めめの悪い娘なの、私達の『おひろめ』にけちをつける気かい」杉子は自分の思い通りにならない真弓に腹を立てた。「康子、ラチが明かないからちょっと性根を入れてやってよ」杉子に促されるまでもなくがん丈な身体の康子が皮鞭を持って真弓の後に廻った。ぴし、ぴし、小気味よい音を立てて鞭が尻の上で鳴った。忽ち、白い丘陵に何本もの赤いしまが浮き上る。ひーっ、ひーっ、絶叫が、鞭の音に合わせるように甲高く上り真弓の髪の毛が大きく乱れた。

「さあ、どうすんの、挨拶するのかい、しないのかい」杉子が又、鼻の孔に指をさし込ん

だ。「いいいます、何でもいうから、もうかん忍して、あつ、うーっ」

真弓は観念した。この女達には、慈悲のかけらもないのだ、いうなりにならなければこの上どんな事をされるか判らない。康子が鞭を納めると、真弓はべっとりと脂汗を浮べ肩で大きく喘いだ。「少しは利いたようね、じゃ素直に挨拶してごらん」真弓は身体の痛みをこらえ乍ら教えられた科白をいった。いい終る迄に「声が小さい」とか、顔をもっと上げて」とか注文が飛び、その度、杉子の指は、ようしやなく真弓の肌をつねり上げた。

先ず美保子への挨拶が終わると回転椅子は杉子の手でゆっくりと右廻りした。自分の姿が後ろ向きになる時、真弓は烈しい羞恥と屈辱に全身が火照った。杉子はそれを承知で、その位置にくるとわざとノロノロとした廻し方をした。女達は低い声で、野卑な言葉を交しては意地悪く笑った。

「早く早く」口には出さなかったが真弓はその瞬間、針のように神経が尖つて胸が痛んだ、二度目の挨拶が終わって、椅子を廻し始めた杉子が、その位置にくると、「あら、靴下が下っちゃったわ」といい乍ら手を離してし

まったので真弓の高く反った尻は又、暫らく女達の前にさらしものになった。真弓の恥かしさを勘定に入れて故意に杉子が意地悪をしているのだ。早く回して下さい、お願い、お願いです。この恥かしい椅子がのろのろと六回廻り終るまで真弓は、この言葉をくり返した。それだけが、身体を自由を奪われた彼女に出来る唯一の抗議であった。

——長い忍従の時間が過ぎてやっと「お披露目」が終ると、セツ子が待ちかまえていたように、ぬるま湯で作った石けん液を洗面器に満して近ずき30ccのガラスの浣腸器に、それを吸い上げた。

「さあ今度はお浣腸しましょうね、気分がすーっとしてよ」

セツ子はわざと意地悪く、細かい石鹸の泡を浮べた浣腸器を、真弓の眼の前につきつけた。

ああ、浣腸、それを聞くと真弓はぞっとした、小さい時から、その奇妙な形をした冷たいガラスの容器が近ずくと、彼女は火のついたように泣いて拒み続けた。それが看護婦は勿論、母の手から施される時も嫌悪に身がすくんだものだ。その忌わしい浣腸を、セツ子はみんなのみている前で強制しようとしてい

る。目の前に差し出されたガラスの容器をみると、真弓は、恐怖と屈辱に全身をふるわせた。良子が抜け目なくカメラを動かして近づく。非情なカメラの眼は眩しい程のライトの明るさの中で、恐らく身動き出来ない真弓のどんな細部までも、刻明に写し出すに違いない。あらゆる方法でようしゃなく責め立てる美保子達の冷酷さに真弓の誇りは、ぼろ屑のようにずたずたに引き裂かれた。

「さあー、セツ子に任して、私達は高見の見物ね」

女達は、廻りに並べられた椅子に腰を掛けて、一様にニヤニヤと薄ら笑いを浮べ乍ら真弓の苦悶の表情を覗き込んだ。30ccの石けん水は、セツ子の手で一滴も余さずに注入され真弓はやっと椅子から降された。下腹がゴロゴロと鳴り、異様な膨張感につれて早くも突き上げるような便意が襲ってきた。「お、お願い、行かせて、私、もう」恥かしさで目がくらみそうになり乍ら、あごを引き、吐く息がかすかに吸う息が大きくなり顔には脂汗が浮いてくる。「駄目々々、あんな少ししか入れないで、そんなお駄々をこねるんじゃないのよ、その代り今、上手におしめをして上げるから、しばらく我慢して頂戴」

セツ子の言葉は冷酷であった。みんなが、手とり足とり、真弓の身体を床に押えつけ、セツ子が馴れた手つきで、おしめをあてがいその上からゴムのおむつカバーをぴったりとはめた。排泄が許されるまでの間、真弓は、室の一角を仕切ったベークライトの台の上に連れて行かれた。その表面には、手足は勿論、首や胴まで固定する事の出来る様々なサイズの鉄の錠が植えられていた。真弓は大字なりにうつ伏せにされ、手首足首を夫々四ヶ所に括りつけられた。浣腸の為に膨張した腹部が、ぴったりと床に押しつけられ、手首や足首がひきつられて、その例えようもない痛さに真弓は呻き続けた。

杉子の手で、背中に五ヶ所、小指の半分程のもぐさが据えられ、火がつけられた。忽ち五本の白い煙りが立って、チリチリと真弓の肌を焼き焦した。この不意の灸責にあって真弓の苦痛は絶頂に達した。背中をおそう熱さから逃れようと身体を動かせば、思わず下腹が堰を切ったように一時に流れ出そうになる。しかし真弓の自尊心がそれを許さない。歯をくいしばり、ひーっ、ひーっ、と甲高く悲鳴を上げ乍ら、この文字通り腹背の苦痛に耐えなければならぬのだ。もぐさが燃えつき

るまでの僅かな時間が、真弓にとってはどれ程長く感じられた事か。やがて、杉子と康子が銃を外して彼女を引き起し、両手首を後ろ手に括って夫々左右から背中に手を廻し足を持ち上げた。セツ子も手を貸して、ゴムのオムツカバーとおしめが取り去られた。良子と咲子が床の上を滑らせてくる異様な便器を目にすると、思わず身体を硬直させた。

「いやーっ許して、いやいやあんまりです」涙を浮べて烈しく首を振る真弓を女達是否応なしにその便器にまたがせた。ああ何という事だろう、透き通るような、硬質ガラスで出来上ったその洋式の便器が、ライトの中でガラガラと不気味に光っているのだ。

美保子は、腕を組んだ美しい姿態で立っていた。女達にいじめぬかれる立花真弓の苦悶の表情が、激しければ激し

い程、彼女の胸にわだかまる過去の不快な傷痕がぬぐわれてゆくのだ。先日、咲子が注進した、矢部キミ子への手紙の一件などは直接

今度の計画に結びつく材料ではなかったし、又、口軽な咲子が告げた話の内容にどれ程の真実性があったかも疑わしい。ただ、やっと掛って捕えた美しい囚に、今逃げられるような事があったら、この計画は台無しになってしまう。彼女が、夏休みを待たずに、その計画の実行を急いだのはその為だった。

あの狡猾な小沢を、骨の髄まで叩きのめす方法は、彼が宝物のように溺愛する娘の真弓に、美保子自身の受けた数々の凌辱をそのまま味わせる以外にないのだ。子供運に恵まれぬ小沢の本宅には、胸を病んで療養中の精薄児が一人いるだけだった。真弓は上野の料亭にいる妾と小沢の間に生れた子であった。美しく健康に育った真弓に対しては、鬼のような小沢もやさしいだけの父になり変った。その秘密を知った時、美保子の復讐心は、はっきりとその方法を

今度の計画に結びつく材料ではなかったし、又、口軽な咲子が告げた話の内容にどれ程の真実性があったかも疑わしい。ただ、やっと掛って捕えた美しい囚に、今逃げられるような事があったら、この計画は台無しになってしまう。彼女が、夏休みを待たずに、その計画の実行を急いだのはその為だった。



読みとった。「真弓は責めるのだ」それは強いていえば、小沢夫婦の手で惨めなモデルに仕込まれていった大勢の、若い無知な娘達へのせめてもの供養でもあったろう。美保子が恥かしさを忍んでクラブに出入りし、責めの技術を会得したのも、康子たちグループの女を仕込んだのも、小沢を促して、娘の真弓をT学院に入学させたのも、全てこの復讐を裏切るものにする為の布石であった。

ガラス張りの浴室の中で身体を洗滌された真弓は、又サルグツワをはめられ、先刻灸責めにあったベークライトの台に今度は仰向けに転され開いた両手首に錠をかけられ、足首を縛った縄尻を頭の上にある錠にやや股を開き気味に括られた。

真弓の身体は、背中の上部を僅かに床につけただけで殆んど胴体が直立し海老のように折れ曲った。持ち上げられた尻が、かすかにふるえた。身体の到るところが先刻加えられた鞭と灸と浣腸の責めにズキズキと痛んだ。ライトの光りが、その惨めな受難の姿をくっきりと浮き上らせ、セツ子が側らの高いテーブルの上で、イルリガートル浣腸の支度にとり掛った。

「さあ、お腹に力を入れちゃ駄目よ、今度は

グリセンリでやるから、ちょっと泌みるけど我慢するのよ。お通じがないようだからたっぷり入れて差し上げるわよ」セツ子は軽くハミングし乍ら浮々とそういうと右手に持ったイルリガートルの嘴管を真弓に近ずけた。咲子の手でカメラのシャッターが鳴り、身もたえする真弓の身体を杉子と康子が左右からしっかりと押えつけ、セツ子は、六〇、八〇、一〇〇……と注入されてゆく分量をゆっくり口ずさんだ。

今度は前にも増した激痛が起り真弓は不由な姿勢でもだえ続けた。「こっちへ連れて来な」美保子が、腕時計を覗き込み乍らいうと、真弓は美保子の前まで床の上をひきずられた。

激しい波のように襲ってくる便意に、彼女は、歯をくいしばり眼をひきつらせた。身体が、ぶるぶると小刻みにふるえている。

「これをはめてやって」

美保子の差出したものは、Y字型をしたゴムの吊りバンドであった。

火のついたように疼痛を伴った便意が、下腹めがけて押し寄せてくる。最早、誇りも、羞恥もかなぐり捨てて時が来た。真弓は必死になって只排泄させて貰う事だけを願った。

「そう、あと二、三分の辛抱よ、ちゃんと時間通りに行ったわ、貴女は、奉仕を終ったのよ。ただし……」美保子は、そこでニンマリと笑ってかがみ込むと、床の上で悶える真弓の髪の毛をつかんで荒々しく、その顔をこじ上げた。

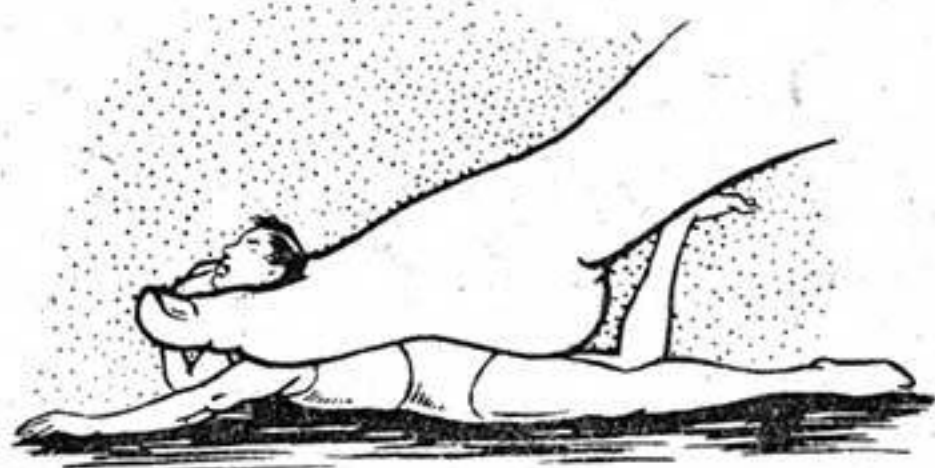
「ただし、その後であの人達がどんな事をするか、ゆっくり見物させて貰うわ」

全ては計画通りに運んだ、もう間もなく、美保子が指定した時間に、学院の男生徒が数人、この場所に集ってくるのだ。真弓は、その惨めな姿を異性の眼の前にさらすのだ。勿論、排泄の時間を長びかせたのも、その後仕末を男達の手でさせる魂胆からだ。彼等は、決してそのままでは済まない。又新たな責めが、彼等の流儀と方法で真弓の上に加えられるだろう。それを私達はゆっくりと見物すればいいのだ、あとは今夜写した写真をまとめこの娘の父親の目の前に叩きつけるのだ。脂切った狡猾な小沢の顔が悲痛にゆがみ、うち震える姿が目に見えるようだった。美保子は美しい顔を上げると、晴ればれとした声でいった。

「咲子、お茶の用意は出来たの？」

マゾ、マゾ、&
マゾ

平 伏 人



前回に引続き、勇気あるマゾヒスト諸兄にのみ可能な、マゾ実行の手引きを御紹介致します。

四

女性の靴にあこがれる方へ。

唯単に女性の靴を美的に、芸術的に観察する方は、銀座通りのシューズ・ショップのシュー・ワイドを眺めて居れば事足りるわけですが、我々マゾヒストにとって、女性の靴は我々を踏みこむ道具であり、又我々が奴隷として、御みがき申し上げなければならない、大事な宝物であります。そして、マゾ派フェチシストにとっては、ペロペロなめ廻したく

なる貴重な貴重な女王様の下されものであります。

では、此の女王様、此の多数の女王様方の美しい御足にはかれる、靴に如何にしたら、自由に近づけ、又さわる事が、出来るでしょうか。では御教え致しますよう。私が実行した方法は次の通りです。

私は自分が、よく靴をみがかせる、上野の靴みがきのおばさんに、週に一度だけ、其の場所を私に貸して呉れる様にたのみました。勿論、一日につき三千円を代金として支払う事を条件にしてです。始め、おばさんは、一見紳士風の男性の此の不思議な申し出に、とまどって居る様でしたが、私が、或る日、仕事の終わった、おばさんを近くの喫茶店にさそい、私の正直な性向を話し、目の前に三千円の札を置くと、ようやく、絶対におばさんに迷惑をかけない事を条件に、承知して呉れたのです。其の翌日を皮切りに私の靴みがきが約一カ月にわたって、週一回ずつ、計四回続きました。昔の軍服の古いのを引っ張り出し、素通しの目鏡と、マスクで変装をし、私はござの上に、小さな座ぶとんをしいて、いともあわれな姿で其の上にすわりました。

一日に平均三十人位の、御客様があります

が、其の中私の待ち望む、女性の方は、大体五人位しか、居らっしゃいません。靴みがきの看板を出して居る以上、男の客を断るわけには行かず、此れも、何時現われるか知れない、女王様の為にやるのだと自らを慰めて、精一杯の仕事をして居りました。そして待ちに待った、女性の御客様が現われると、特に念入りに、御みがき申し上げるのです。貴い御靴をみがき乍ら、スカートの間から、かすかに見える、色々なパンティーも、女王様方各自の御趣味が伺えて、楽しい仕事でした。そして御足を交替される時などは、わざと自分の手を、靴台の上に置いて、知らずに此の手を踏みつけて下さる、女王様の御足を御待ち申し上げるのです。

此の様にして私の靴みがきの最終日がやって来ました。私はとうとう、すばらしい脚線美をした、美しい女王様を御迎えするチャンスを得たのです。其の方は近くの商店に御勤めになって居る方らしく、黒のエナメルハイヒールを御持ちになって、

「一寸、ほこりで、よごれたから、夕方迄にきれいにしておいて」とあまり、よごれて居ない靴を私に渡すと、小走りに、立去って行きました。私は此の宝物を手にとると、如何

にして、此れを自分の物にするが、考えつづけました。そして私は、すばらしい計画を思いついたのです。私は其のハイヒールを新聞紙につつむと、自分の後にかくし、彼女の現われるのを待ちました。そして夕方を待ちに待った。彼女が現われると、

「申し訳ありません、御嬢様の靴を、一寸席をはずして居る間に盗まれてしまいました。此れは御わびの印です、どうか御受取り下さい」と言って一万円札をさし出したのです。

彼女は、一寸ためらった居た様子ですが、以外に素直に、

「いいわ、これから気をつけてね。私、此の近くの、S屋という、洋装店に居るから、若し、私の靴が、見つかったら、とどけて頂戴、其れ迄此れあずかって置くわ」と言う私のさし出して居る、一万円札を受取って、さっさと、行ってしまったのです。

それから、どうしたかって……

其の女性は、靴みがきの、おばさんから、私の事を聞いて、わざわざ私を試しに来たのでした。それは後日、私が其のハイヒールを持って、彼女の勤め帰りを待ち、再会してわかったのです。見違えるような一応紳士然とした私の告白を聞いて彼女は、心よく私に其

の靴を永久に下し置かれる事を御許し下さったのです。天下晴れて、貴い宝物を手にした私が、今でも、前折その靴を出しては、愛撫して居る事は勿論です。

彼女とは其の後、如何したかとおっしゃるのですか……

勿論、実行派ナンバー・ワンを以て認じる私の事です。うまくやって居るとだけ申しそえて置きましょう。

五

女性の尿、使用済用便紙を御希望の方へ。前回に鼻汁、唾の入手法を御知らせ致しましたので、今回は一歩進んで、女性の尿にあらがれる方の為、に私のアイディアを御教え致しますよう。

場所は喫茶店が一番良いと思います。そして、先ずトイレに入り、此れをきれいに流して、水洗用のコック、又は鎖りに適当な細工をして、流せない様にして置きます。そして次に入る人が、自分の好ましい女性の番に当るまで、気長く待つ事です。何度でも、場所をかえて、くり返す事です。そして、待ち望んだ方が入られたら、勇を鼓して、直ぐトイレに入る事です。我々に夢をあたえる、妙なる神水、そして、タツプリ、神水をすった、ちり紙が、便器の中で待つて居る事は確実に。唯、忘れてならないのは。必ず、コック又は鎖りの細工をとり除き、水洗可能な状態にもどして置く事です。

(以上)

Mフット・シリーズ

足の味覚

略号 (そは)

大手三枚一組 三〇〇円

絹川文代、杉 早夫

犬の生態

略号 (そろ)

大手三枚一組 三〇〇円

絹川文代、杉 早夫

長靴は悶ゆ

略号 (そに)

大手四枚一組 四〇〇円

灰皿の男

略号 (そほ)

大手四枚一組 四〇〇円

絹川文代、高田 一

股責の地獄

略号 (まそ)

大手四枚一組 五〇〇円

大塚啓子、高田 一

足舐の構図

略号 (そへ)

大手四枚一組 四〇〇円

縛りの過程

略号 (そと)

大手四枚一組 四〇〇円

絹川文代、高田 一

使役の凌辱

略号 (そち)

大手四枚一組 四〇〇円

絹川文代、高田 一

なぶり者

略号 (そり)

大手五枚一組 五〇〇円

絹川文代、高田 一

長篇 S M 小説

宇宙のどこかで

△ 泰平洋戦争の話 △

佐 治 麻 造

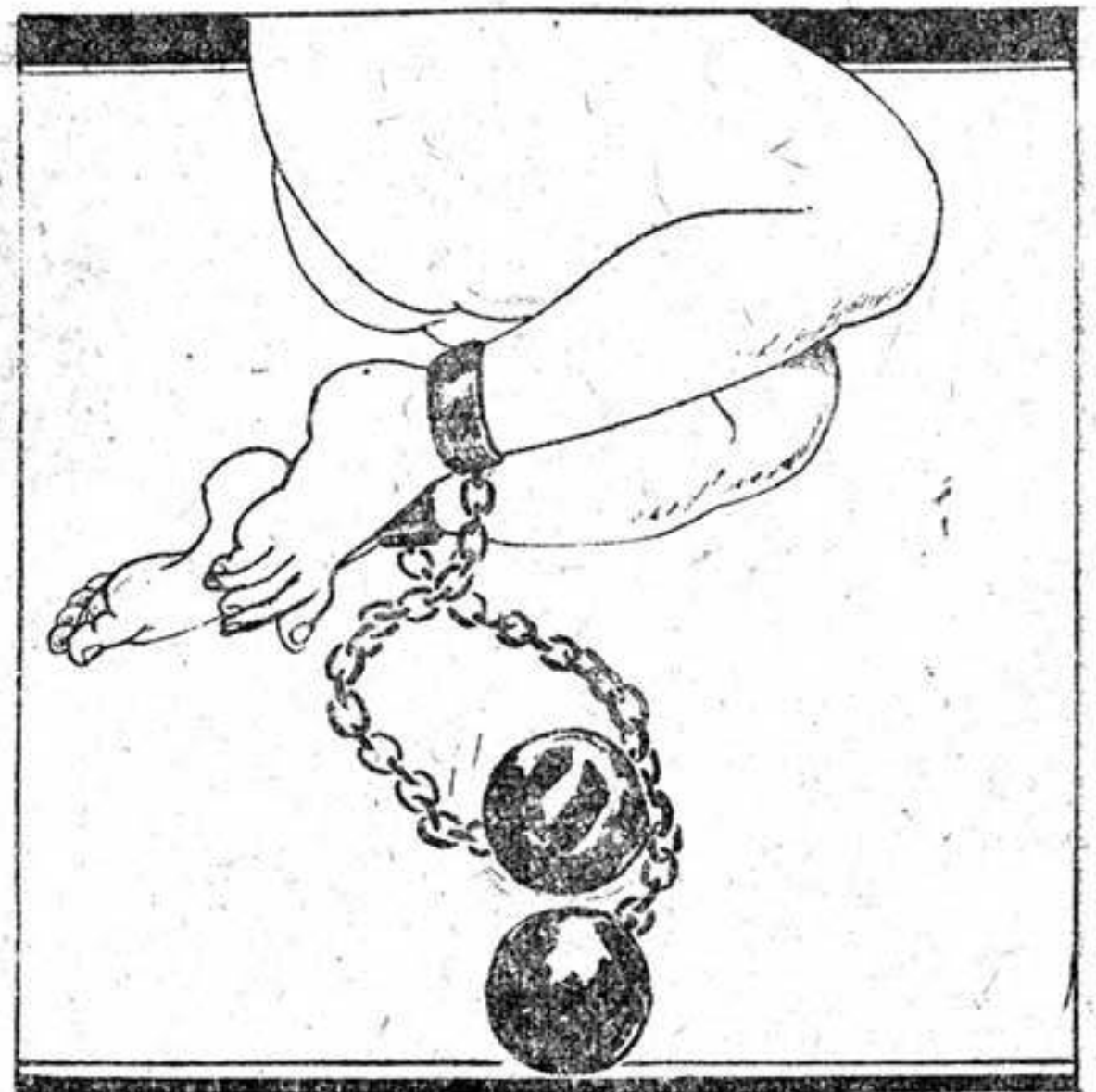
一
沢山ある大きな檻の中に二十名位宛入れられた百数十名の懲役囚達に混って、武林一郎の一二三号囚も毎日々々苦役を課されて呻吟した。仕事は米作りで、食糧自給の一環として課されたノルマは苛酷だった。

二百町歩もの水田を年三期に分けて営々と耕やし植えそして刈り取るのだ。星を戴いて檻を曳き出され、星を仰いで檻に帰る日々の連続に囚人達の血と汗は絞り取られた。そして与えられる食事は糠と砂糖と草の葉のみで、自分達の汗の結晶の米は一粒すら口に入れさせては貰えない。鞭は容赦なく所構わず鳴って、倒れた囚人は碌に食事も与えられないで哀れた息を引取って行った。懲役囚の数が

増えれば耕地は無尽蔵に拓かれて行く。そして数が減っても耕地は減らないのだった。

足鎖もなく、手錠も数が足りないらしく滅多に嵌められる事はなかったが、苦役に精根すりへらす囚人達には反抗や脱獄等は考える力さえ失われて居た。唯鞭を恐れおののき乍らひたすらに水田の中を這いずり回る彼等の腰や背や膝はもはや曲って伸びず、空を仰ぐ事すら稀になってしまい、夜漸くぶち込まれた檻の床に泥の様に崩れ乍ら鉄格子の施錠の音を聞くのが、彼等の唯一の楽しみなのであった。

大きな日除け帽子だけは被らせて貰えたが、それとても意地悪い看守に難癖をつけられて理由もなしに屢々取上げられてしまう。直



射日光に灼かれる全身の皮膚はポロポロと剥けて鞭痕に沁みる汗が切なかった、捕縄で作られた囚人禪の股縄は柔かい皮肉を責め苛んだ。どうせ鉄鎖をつけられた身は恥も体裁もなく禪をとらせて欲しかったが、哀願の末に漸く許される用便の時以外は固くきつく締め上げて居らねばならないのだ。脂と汗が滲み込み、そして鞭のお礼を申し上げるために水田の中にひれ伏す度に泥水を吸い込んだ囚人禪は忽ち乾いてしまつて其の痛さは全く泣き度い程であつた。

腰をくびつて強く締めつける鉄鎖は既に所々赤錆が浮いて海老錠も錆びついてしまつたが、腰鎖と連鎖とは入獄以来片時も解かれる事なく一年余りが過ぎた或朝、三十名程の囚人が獄庭に集められた。苦役に打ちひしがれた彼等の腰や背は、不動の姿勢を命じられても中々伸ばす事が出来なかつた。

「受刑成績が良い貴様達を移送する。」

看守長の軍曹はそう怒鳴つてニヤリと笑つた。

「移送先は監獄ではない。従つて籍はここに残る。どこに行つても神妙に服役するんだぞ。獄外労役であるから、最少限の処置として首枷を嵌める。いつも言う様に、本来ならば鼻環や足錠を四六時中つけられて当り前の身なんだぞ。それを忘れないで働け。」

重い鉄の首環を嵌められ、後手錠を受けた一郎達は連鎖をロープで繋がれて追われた。

小さな貨物船に積み込まれ、ノロノロした三日程の航海の末、連れて来られた所は相当な大きさの島であつた。洋上にポツンと浮んだ其の島は全島ボーキサイドの塊りであることが最近発見されたのであつた。既に二百名近くの懲役囚がその無人島に送られ、夜を日について採掘作業に従事し、そして一ヶ大隊の守備隊が貧弱な装備

で守備して居た。

露天掘りで採掘した赤ちゃけたポロポロの鉱石を海岸の集積場に積み上げる暇もない程に相次いで船がやって来て運び去つて行き、囚人達を叱咤する鞭は絶間なく鳴り響いた。体力尽き果てて働けなくなつた囚人は、守備兵達の銃剣術の稽古台にされた後海に投げ込まれた。一郎の鎖仲間の一二四号も或朝とうとう起き上れなくなつた。一郎の励ましにも拘わらず、一二四号は土牢から這い出るのが漸くのことと、あなぐらの入口で地面に倒れたまま動こうともしない。鬼の様な看守が現われて鞭を当てたが低く呻いて弱々しくもだえるのみであつた。真赤に焼いた鰻が尻に当てられジュツと言う音と共に肉を焼く臭いと煙が立ちこめ、一郎は思わず眼をそむけた。一二四号は微かに喚いたが、其の声は細く消え喰い込んだ禪の股縄を液体が滴たり流れた。

「駄目だな。えーと、半端なのが一匹居たな。そいつを連れて来いよ。」

一二四号の首環が外され、錆びついた腰鎖の錠が壊された。一年半の間、同じ鎖に繋ぎ合わされて過して来た一二四号が胴にロープを巻かれて地面を曳き摺つて行かれるのを見送つて、一郎は暗然として声を呑んだ。斃れた囚人の補充は次々に連れて来られ、暫くすると連合軍の捕虜達も三十名ばかりやって来た。余りに苛酷な苦役に不平そうな様子を見せた数名の捕虜は忽ち鞭で撲り殺され、或いは銃剣の錆となつて、残りの者は震え上つた。守備隊の残飯を主とした粗末な食事は、量こそタツプリ与えられはしたが、捕虜達にとっては飢じくなければ到底咽喉を通る代物ではないらしかつた。

輸送船は時々紅十字經由で捕虜達の本国から送られて来る食糧や

薬品等を積んで来るらしい様子であったが、彼等の口には一かけらすら届かなかった。捨てられて居た空箱を発見して騒ぎ出した数名の捕虜は三日間の絶食の末、銃剣で脅かされて汚物を食べさせられた。

船が次第に間遠くなって、海岸にはボーキサイドが堆高く積まれる様になった。豊富だった食糧も次第に窮屈になって、苦役の鞭は幾分か緩やかになったものの、囚人達の食事は半分近くに減らされた。そして遂に採掘を中止して全員が食糧作りに追われる様になった頃、一郎の祖国は遂に連合国に降伏したのであった。

二

或る日の朝、一隻の駆逐艦と二隻の小型輸送船が現われた。信号の指示によって守備隊長の陸軍少佐は単身で舟艇を操って駆逐艦に赴いたが、やがて敵の将兵に囲まれて帰って来た。彼は渾一本の姿で両手には手錠が光り、婦人兵に縄尻を握られて無念の歯を喰いしばって居た。金髪を海風になびかせた婦人将校のキビキビした指図によって、ボーキサイドの堆積の上には機銃が据えられ、既に全員砂浜に集められて居た降伏者達にその銃口が向けられた。生き残った十数名の連合国兵の捕虜達は抱き合って喜んで居た。捕虜達の腰の連鎖が未だ解いてないのを見て婦人将校は細い眉を逆立てた。あわてふためいた看守達が解こうとしたが、錆びついた錠に手間取った。

「早くしろ！ 此のジャブー奴」

捕虜達は自分の腰の周りでウロウロする看守達を撲り蹴って、母国の兵から渡された瓶をラッパ飲みしタバコを深々と吸い込み等して足踏みして焦れた。遂に拳銃が鳴って運の悪い看守の一人が朱

に染まって砂浜に倒れた。解放された捕虜達は動物的な唸り声と共に次々に看守達に襲いかかって丸裸かにし、腰から奪った手錠を後手に嵌め、そして自らの腰からかなぐり捨てた囚人渾を力任せに締め上げる。守備兵達の列を怒りに燃えた裸の大男達が瘦せた脚で蹴散らして荒れ狂い、潜んで居る看守達を次々に引き摺り出して行った。肋骨も露わな男達が、与えられた衣服に身を包んで、味方の兵達に扶けられ乍ら舟艇で去ったあとには、報復を満喫させられた三十名程の看守達が全身に無数の鞭痕とあざを見せて赤ちやけた砂浜の上を後手錠でのたうち呻いて居た。

一郎達の懲役囚達も恨み重なる彼等のそのさまに心中快哉を叫んで、今や自由の身となった捕虜達の姿を羨ましくも切ない思いで見送り乍ら、熱い砂浜に膝を折って坐ったまま陽に灼かれて居たのであった。

敵兵の一隊は降伏軍の幹部を更に数名引き出し、裸にして手錠で検束すると、守備隊長と一緒にして調査のために島内に入って行った。砂浜に残った兵士達は裸にされ二人宛手錠で繋ぎ合わされて次々と輸送船に運ばれた。勝利者達は少しでも意にそむく者には容赦なく鞭を加え、見せしめのために数名が砂浜を朱に染めて倒れた。懲役囚達は最後にそのままの姿で運ばれた。一郎が両手の甲にスタンプを押され乍ら振り返ると、海上に低く横わる島から数番の黒煙が立ち昇り、そして彼が蒸風呂の様な船艙に追い込まれた時、鈍い爆破音が断続して聞え初めて来た。

送られて来たジャブー島は、連合軍の空襲でかなり荒れて居た。各地から集められた捕虜達は其の復旧作業に駆り立てられた。腰の鎖を鳴らして苦役する虜囚達に、褐色の肌をした娘や青年達の鞭が喰

い込み小石が飛び、そして唾が吐きかけられた。

「あら、彼奴だわ。」

被害者に偶然発見された連中は、直ちに報復裁判にかけられて簡単に処刑されて行った。

第何次だかの送還船に積まれて一郎が変り果てた祖国の土を踏んだのは、敗戦後一年近く経ってからであった。乗船する際に普通の復員兵と同様、腰の鎖を除かれた一郎は、懲役刑もうやむやで済んでしまふかと考えて雀躍りした。噂によれば軍は解体されてしまったとの事、彼は不安と期待に胸おどらせて故国の港のタラップを降りた。

音に聞えた軍港も激しい空襲と艦砲射撃を受けて見るかげもなかった。港内には未だ夥しい艦船が半ば沈み、赤さびの腹を見せて残骸をさらして居るのを眺めて彼の胸は痛んだ。下船した所に柵があって復員者達は次々と身体検査を受け番号を体から消された後、ちぐはぐな粗末な衣服を与えられ、裸に馴れた体に嬉しそうに着て湯茶の接待を受けて居た。列が進んで身体検査が近ずいた頃、一郎は愕然とした。数ヶ所で忙しく立ち回る白衣の男女に混って占領軍の憲兵の白いヘルメットが点在するのはいいとして、軍刑法に問われた彼にとっては最も恐ろしくも忌むしいあの陸軍憲兵の制服が見えるのだ。彼等は全部婦人で其の腕に巻いた白い腕章に黒く記された憲兵の文字が既にはっきりと読み取れた。一郎の膝はガクガクしたかも知やどうする術もなかった。

「案ずることはないのじゃないかな。誰もひっくくられた者は居ない様だし……」

彼の淡い希望も所詮儚なかつた。ジャボ島の軍監獄で体に刷られ

た囚人番号は、捕虜になると同時に消されて捕虜番号を刷り込まれて居たのだったが、其の番号を照合して居た娘さんがハツとした様子で書類を顔上げて彼を眺めそして合図した。待ち構えて居た婦人憲兵が二人、さっと動いて彼の前後を挟んだ。前に立った婦人憲兵の右手がスカートの腰の革サックから手錠をキラリと引き抜いた。

「手をお出し」

「何、何故ですか？ 私は何も……いや、もう……」

背後に立った婦人憲兵が彼の両肘を後ろからしっかりと握った。彼は意味の分らぬ事を口走り乍ら握られた右手を振り払った。右手首に振り下ろされる手錠を左手で夢中に払いのけてもがいた。途端に掴まれた両肘が激しく痛んで彼は呻いた。

「おやっ！ 抵抗するの？」

激しいビンタの音に周囲の視線が一斉に集中した。

「おとなしく縛に就かないと、ひどい目に遭うわよ。いいの？」

バシッ、ガチンと右手首に喰い込んだ鋼鉄の環を感じ取った彼の全身から力が抜けて行った。右手首が自然に右手首の方に近寄って行って、鋼鉄の環に捉えられた。背後の婦人憲兵が彼の両肘を放して手早く腰縄を打って手錠を前で押えて腰をくぶり上げてしまう。

「可哀想にねえ、切角帰って来たと言うのに……」

腰掛けた若い娘さんが、机を並べた年かさの婦人に話し掛けるのを耳にし乍ら、

「こっちへ来るんだよ。」

彼は縄尻で尻を打たれて、幌を掛けたトラックの荷台に追い上げられた。

「何故逮捕されなきゃならないのか教えて下さい。」

腰縄を金具に結びつけて居る婦人憲兵に彼は訊ねた。我乍ら滑稽な質問だった。

「呆れたもんだね。お前は懲役刑を執行されてる身なんだよ。捕虜になってぼけたのかい？」

「そ、それはそうですが……。もう軍は解体したと聞いてたもんですから……。」

「軍は解体しても罪は消えやしないわよ。憲兵は此の通りちゃんと残ってるんだからね。尤も女ばかりだけど……。おとなしく待っていでよ。それからね、先刻からのお前の口の利き方は何よ！ これから氣をつけて口を利くんだよ。いいかい。正座おし！」

「ハ、ハイ……ハイ。」

がつくりとうなだれた彼は両手の手錠を眺め、そして下腹部に環になって今も残る錠の痕を見やって涙をこぼした。矢張り自由の身にはなれないのだった。宣告された刑期は勤め上げねばならないのだ。未だ十年以上も残って居る刑期を思つて彼は喘いだ。懐しの故国の土を踏んで嬉しそうな復員者達の声が潮騒の様に聞えて来て彼の胸は情けなさ口惜しさに張り裂けんばかりであった。やがて一名の懲役囚が捕縛されて追い上げられて来た。

「お、お願いです。一日だけ、いや三時間でいい、見逃して下さいまし。この近くに女房が居るんです。一目だけ会ったら……必ず必ず戻って参りますから……。慈悲でございませう、お願い致します。これ、この通りでございます。」

四十前後の其の男は、腰縄にせかれた手錠の両手を胸の下あたりで合掌して泣いて哀願するのだったが、婦人憲兵は相手にもせず、

一郎の向い側の金具に男の腰縄をしっかりと結びつけた。

「その気持はよく分るけどね。そう言う訳じゃ行かないのよ。あら、そんな恨めしそうな眼で見ないでね。これが私達の職務なんだから。」

男は永いこと啜り泣いて身もだえして居たが、やがて諦めたのか上体を前に深く倒して指先で眼頭を拭って泣きやめたのだった。其の復員船には四名の懲役囚が乗って居た。

三

一郎達は、そのまま其のトラックに揺られて、近くの監獄に送り込まれた。占領軍の方針として警察組織と行刑機構は優先的に復旧、充実させられて居たので、其の監獄には戦争の痕は全くなかった。変化と言えば男子の職員が極端に減って殆んど女性ばかりである事位だった。

「武林一郎。お前は二五六号だよ。教えといて上げるけど、刑期の残りは十二年と十ヶ月ね。」

婦人係官に言われて彼は驚いた。

「そ、そんな……。ジャボ島の監獄に入れられてから、もう三年半以上経って居ますよ。」

「ホホホ。捕虜になってた期間は勘定しないのよ。分って？」

軍より引継がれた懲役囚達は、その罪状如何を問わず破廉恥罪の扱いであった。頑丈な革の腰枷、第三種手錠足錠の重量感、鉄の首環も冷たく嵌まった。其の頃には胸鎖や腋鎖の戒具は採用されて居なかつたのが、せめてものことだった。占領軍の指示によって採用された新式の『錠』が切なく嵌められたが、それにもまして情けなかつたのは鼻環であった。鼻の壁にぶら下ったステンレスの環のみ

じめさに、彼は腹の底から哭いたが、続いて嚙まされた非情な嵌口具のために彼の号泣は鼻声にしかならなかった。

異臭を放つ囚人食を啜る時だけ外される嵌口具、苦役の時のみ前手にされて幾分の自由が利くが、苦役に呻吟する時以外は後手に固定される手錠、そして足鎖を吊る鎖の短かさ加減。正規の懲役刑の苦しさ辛さが骨身にこたえた。嘗ては航空艦隊のエースとして大空を駆けめぐった身を、二十才になるやならずの小娘に虫けら同然に取扱われて一言半句の口答えすら叶わない境涯のみじめさに馴れるには一年を要した。窄衣も海老責めも鉄砲手錠も何回となく味わった。鞭は日常茶飯時の事、電気鞭の痛さも死ぬ思いで堪えたし、重屏禁の恐怖も骨身に沁みた。牛馬の様に鼻繩を曳かれて町の中を歩かされる屈辱にも胸が熱くならなくなった頃、漸く三級囚にして貰えた。ここに入獄してから三年余り経ってからのことであった。「二五六号。奴隷にして欲しいの？　そう。じゃ来月の競売にかけてやるわね。」

貨幣価値の下落のことは薄々知って居たものの、自分の体に付けられた価格を洩れ聞いて一郎は仰天した。奴隷刑期五年を以て買取られて行った先は繊維問屋であった。終戦のどさくさで成上った此の店は、小さい乍らもビルを副都心の一角に持って居た。奴隷を持つのは初めてと見えて事務所の片隅に引据えられた一郎の周りに社員達が集まってガヤガヤ言った。女子社員の事務服の明るい水色が鮮かに眼にしみる。

「一匹だけなの？　三、四匹は買うって社長さん言ってらしたけど。」

「どんなことをさせるのかしら？」

「掃除と雑役に決ってるじゃないの。品物の出し入れがえらなかった

けど、これからは此奴にさせる訳ね。」

「ねえ。けど此奴若くて中々ハンサムじゃない？　ちょっと勿体ないと思わないこと？」

四十名程の社員の殆んどは女性であって、若い男の社員は二、三人しか居ない様だった。三階から降りて来た小柄な社長が、女達をかき分けてやって来た。四階建の体裁だけのこの小ビルは、一階が陳列売場、二階三階が事務室で、地下と四階は倉庫になって居て、エレベーター等はないのだった。

「此れだな。ふん。」

四十過ぎの目の細い社長がそう言って、よく磨いた赤靴の先で一郎の額を小突いた。

「予算に合った適当なのが、これしか居ませんでしたのよ。予定額を聞き出すのに一苦労でしたわ。」

一郎を落札して曳いて来た眼のきつい整った顔立ちの年かさの娘が言った。

「いやいや結構々々。二人分働かせればいいんだ。しかし何だな、奴隷商の家の娘さんだけあって中々眼が高いよ。これは掘出物だな。飼糧屋にはもう申込んだかい？」

覚悟はして居たものの、完全に品物同然の扱いをされて一郎は大量の涙を正座の腿に落した。

「登録番号の下二桁をとって十二号と呼ぶか。庶務課の所管だが、君が主に取扱ってくれないか。」

眼のきつい娘が頷き社長は立去った。

「久江さんのお家は奴隷商だったの？」

眼の大きなティーンエージャーの娘が尊敬の色を浮べて訊ねた。

「あなた知らなかったの？ 久江さんちはね、凄い資産家で旧い家柄なのよ。江戸時代からやっこを一手に扱ってらしたの。」

「やっこって何なの？」

「昔の奴隷よ。あんた何も知らないのねえ。」

若い女達が二、三人でガヤガヤ言っている。

「これ、ちょっと立って」

中腰にさせた一郎の首環に社名を刻印した鉄札をつけ乍ら久江は苦笑いをして、

「あんた達、無理もないわねえ。長い間の統制だったものね。」

「そうよ。奴隷が自由販売になったのは半年前よ。昔は私の家にだって二、三匹は居たのよ。よく覚えてるわ。鎖をチャラチャラ鳴らして朝から晩迄働いてたけど、私が未だ小学生の時に皆徴発されて連れて行かれてしまったのよ。」

下ぶくれした顔立ちで鼻筋の細い娘が言った。

「おいおい、皆いい加減に仕事をしろよ。」

中年の男に叱られた娘達は肩をすくめ合って散って行った。

四

苛酷な苦役に馴れた身には、朝早くから夜おそく迄ののべつ幕なしの雑用と力仕事も左程えらいとは思わなかったが、情けないのは社会の人々に混って自分独りだけが浅間しい鎖錠の身である事であった。監獄の様に定った獄則がある訳でもなく、気まぐれな娘達は勝手次第に雑用を命じ顎でこき使った。そして思い通りに彼が働かなければ直ぐさま久江に言いつけた。久江は殆んどの場合、非が一郎にあるとして鞭を鳴らして彼を罰するのであった。大抵は嵌口具を嵌められて居たし、何かの都合で嵌められて居なくても、一言半

句の申し開きも許されはしない。

「奴隷をこき使うのはとても愉快ねえ。何を言いつけたって、ハイ、ハイとやってくれるじゃないの。」

久江に鞭打たれて今日もヒューヒュー呻く一郎を眺め乍ら、娘達は笑い興じて帰り支度を初めた。

「痛かったかい？ あの子達の方が少し無茶だって事は分ってるのよ。しかしどんな場合でもね、罰を受けるのは奴隷の方なのよ。それがけじめと言うもののなの。」

口の利けない一郎は、一瞬恨めしげに彼女を見上げたが、すぐに眼を伏せた。

「おそくなったわ。私も早く帰らなくちゃ……。」

久江は事務服のポケットから手錠を取出して一郎の背中で二度鳴らし、首環や足錠、そして其の他の『錠』を素早く点検すると檻に追い立てた。一日の労役を絡えた一郎は、守衛室の土間にある小さな檻に入れられて夜を過すのだ。

「あ、おばさん！ 頼んだわよ。」

廊下で守衛の妻に出会った久江は、一郎の鼻繩を引渡すと身を翻して化粧室に飛び込んだ。二間続きの守衛室には初老の守衛夫婦が住んで居る。鍵を一郎の嵌口具に挿し込み乍ら

「あの娘はいつもきつく締めること。痛かったら。」

びんに白いものが混った守衛の妻は、一郎を常にいたわり憐れんで呉れた。

「お腹減ったろ？ 今日ね、うちの人の誕生日なんだよ。少しだけとお喰べ。」

奴隷食の他に少量与えられた人間並みの食物を、這いつくばって

煙張った一郎は咽喉が詰った。

「そら、水をここにおくよ。けど、檻に入れると言うのにさ、何も手を縛らなくてもいいと思うんだけど。鍵があったらねえ。」

夜だけの責任を持つ守衛には、檻と嵌口具の鍵しか渡されて居ないのだった。奴隷具店に行けば同じ型の鍵は買えるのだが、規定から言えば奴隷登録証が要る訳だし、そこ迄はして貰える筈はなかった。親切な守衛の妻女は、一郎を便所につれて行って呉れ、小さな風呂場で水を浴びせて呉れた。

「さ、もう入るかえ？ 可哀想だけど……。」

一郎が小さな檻の中に這い込むと、鉄格子扉がガチャンと閉まってカチツと錠が掛った。

「若い身空で本当に可哀想だねえ。毎日々々何の楽しみもなしにさ。あ、今日も又、鞭を大分当てられたんだね。薬をつけてやればよかったねえ、明日の朝つけてやるから辛抱おしよ。」

憐れみの言葉を鉄格子越しに聞き乍ら一郎が檻の固い木の床に横になった時、守衛が巡視から帰って来た。

「おい、もう寝たのか？」

食事を済ませた守衛が、楊子で歯をせせり乍ら檻の傍に立って声を掛けた。

「起き上らんでもいいよ。どうだ？ 辛いか。」

「お前さん、眠らせておやりよ。息もつけない位こき使われてるんだからね。足に重い鎖つけられたままです。お前さんみたいに昼間寝てるんじゃないんだからね。」

土間の流しで食器を洗い乍ら妻女がたしなめた。

「それもそうだな。しかしなあ、お前も気の毒さね、たまにはつま

い物も喰わせてやりたいんだが、何分の安月給でなあ。お前、戦闘機乗りだったそうじゃないか。それが小便臭い娘っ子達に毎日々々いたぶられて、さぞ口惜しかろうて。」

「ほんとよ。今日もね、雑巾を啣えさせられて床を雑巾掛させられてたのよ。昨日は売場でお客様の顔を見たって言うのでさ、鼻環に分銅をつけられて一日中ヒーヒー言って働らいてたし……。」

「あの久江って言う三十娘は家柄を鼻にかけて高慢ちきな女だよ。わしは好かんね。」

守衛は安煙草を半分にちぎって火をつけた。

「喫いたいのか？ しかし、なまじ喫うと却っていかんからな。しかしなあ、お前は命を賭けて戦った拳句にさ、運悪くフン捕ってそんなざまになった訳だがな、この社長に比べりゃ気の毒を絵に描いた様なもんだ。聞いたか知らんが、この大將は陸軍のポツタム大佐さ。終戦の時、内地に居たのが運のいい所でな、蓄積物資を手荒く横流しして資本を握った野郎さ。若い別嬪の二号を囲って豪勢なもんさ。」

薄々は知って居た一郎は、今更の様に腹の底から怒りがこみ上げて来た。やる方ない悲しみと憤りに思わず拳を握って身をもがくと、手錠の短い鎖がグツと張って鋼鉄の環が手首の骨に喰い込んだ。

「お前さん、そろそろ回る時間だよ。」

守衛の妻は前掛で手を拭き乍ら土間から上って粗末な鏡台の前に坐った。生返事した守衛は妻の跡を追って畳に上った。

「檻の中の男がひがむじゃないの。駄目、駄目よ……。」

女の声が細く消えて一郎は歯を喰いしばって妄想と戦う他なかったのだった。

女相撲ファンタジー

首投げと足の裏の魅力

女素舞夫

夏は女相撲の季節。

真夏の太陽の下、街を歩く女性の肌も汗ばみ、ハイヒールを履いた足も蒸れて芳香を漂わせています。夏は一年間を通じて最も女相撲の魅力の溢れるシーズンです。

さあマニアの皆様、夏の女相撲を大いに楽しみましょう。と申しまして、日頃女相撲に限り無き愛着を寄せ乍ら実際に観る機会とてない私は、顔見知りの女性達に女相撲を空想して、秘かに楽しんでいますが、知った女性達なるが故に、その素晴らしい実感は充分私を楽しませて呉れます。

さてマニアの皆様は女相撲の何処に魅力をお感じになりますか？　そもそも女相撲の魅力は、女性同士ががっぷり組んで揉み合う乳房、躍動する大きなお尻、太股あたりかと思われませんが、私は七月号女相撲熱戦譜に述べました如く、首投げと女性の足の裏に限り無い魅力を感じているのです。

首投げ……は、決り手の中で最も強引な手であり、首を捲かれるのは肉体的に苦しく、精神的にも圧迫を感じるものです。首投げは大抵の場合、掛け方も一緒に折り重なって倒れます。首投げは投げる方にとって痛快な手

であり、倒される方にとっては全く嫌な手なのです。

私の首投げに対する興味は、倒されるのが背の高い女性の場合に限ります。大柄の女性が首投げで敗れるのは一種あわれを感じるものです。あくまで背の高い女性が自分より背の低い肥った女性に首投げで倒されるのであり、この逆の場合は全然興味が湧かないのです。また、私の女相撲に感じる、もう一つの魅力は女性の足の裏です。勿論女性の乳房、お尻、太股にも魅力を覚えますが、それ以上に足の裏に対し異常なまでに愛着を寄せてい

るのです。

女性の足の裏……背の高い女性の十文以上の
の而も、汗と脂でべとついて匂う位の足の裏
に、たまらない魅力を感じるのです。

普通、女性の足の裏は美容の見地からも、
清潔なのが良いに決っていますが、女相撲の

場合、奇麗な足の裏よりは脂で汚れている方

が魅力が倍加するでしょう。この意味からも、

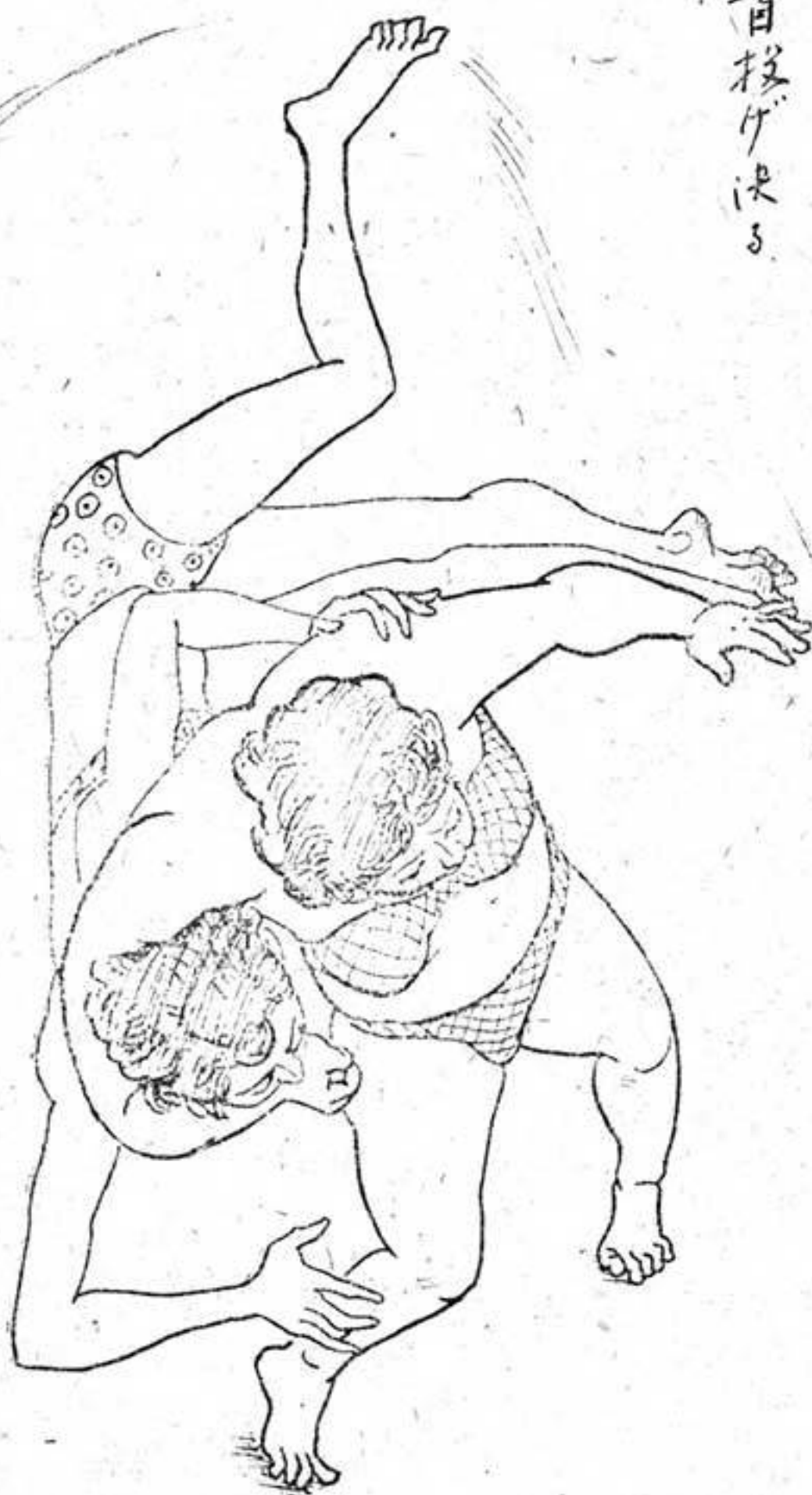
女相撲の土俵は畳の方が適当だと思います。

背の高い、色白だが脂足の美貌の女性が、

肥った女性に首を抱えられ長身を折り曲げて

喰下って苦戦する姿は、正に女相撲の醍醐味

首投げ決る



と申せましょう。マニアの皆様、素晴らしいと
お思いになりませんか、

では私のイメージにぴったり合った二人の
女性をモデルにして、ファンタジックに描い
てみたいと思います。

○ ○ ○

真夏の或る夜、私は玄関を入ると、そこに
脱いである二足のハイヒールに気がついた。

奥の部屋から若い女性の明るい笑い声が声え
る。私はこの女性達を待たせていたのである。

二足のハイヒールは、可成り大きさが違い、

一つは横中の広い、ずんぐりした靴で、もう

一足は細長い、恰好の良いハイヒールであ

る。多分、十文七分位はあるだろう。中は、

くっきり足の裏の跡が付き汚れている。私は

足を入れてみる。べっとりとした感覚が私の

足の裏に伝わった。横は一寸窮屈だが踵は指

が二本入る位余っている。次に手に取り嗅い

でみた。足の裏特有のすえた匂いが鼻をつく。

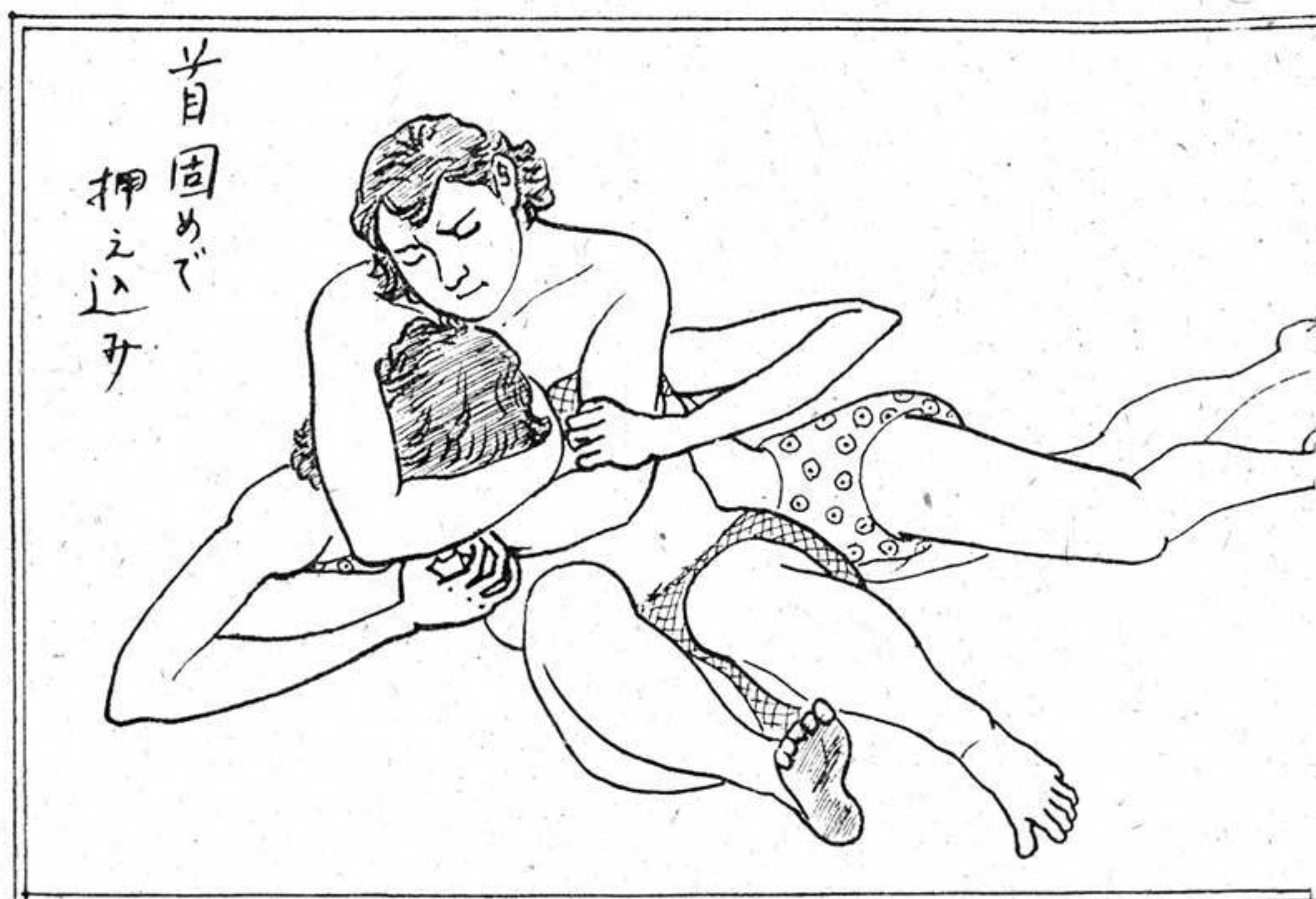
この靴は瑞枝嬢のハイヒールに違いないと

思い乍ら八帖の部屋の襖を開けた途端私はあ

っと驚いた。

二人の女性が相撲の仕切りの真似をしてい
るではないか……。二人は私の顔を見るや、

ぱっと顔を赫らめて慌てて離れた。



ここでこの二人の女性のことを詳しく紹介しよう。

背の高い女性は：瑞枝嬢。

昭和十二年生れ、廿六才、身長一六六糎、体重四八キロ、足の文数十文半。細い首筋、よく切れたウエスト、大きなお尻、色白のスラリとした八頭身、眼尻の切れ上った美貌の女性。

肥った女性は：幸子嬢。昭和十五年生れ、廿三才。身長一五六糎、体重五八キロ、足の文数九文半。太い首、太い腰、大根足で小麦色の固太りのアニコ型。丸顔の稍眼尻の下った愛嬌のある女性。この様に全く対照的な二人なのだ。私の顔見知りのBG達である。

『ほう、お相撲やってたの、面白いね。遠慮なく続けなさいよ。僕が行司になってあげてもいいよ』

私は高鳴る胸を抑え、平静

を装って言った。

『いやですわ、今のは冗談半分、真似してただけですよ』

二人は盛んに弁解する。聞けば二人は退屈凌ぎに、茶目っ気のある幸子嬢の発案で腕相撲を始め、足相撲に移り、遂に本当の相撲の真似をしてみようと言う事になったそうである。

私は、予てより、対照的な体格のこの二人の女性に相撲を取らせたいと思っていた矢先だったので、千載一遇のこのチャンスを逃したなるものかと思ひ、

『女性がお相撲したって、ちっとも可笑しい事じゃないさ、柔道だって盛んにやってるもの、それにこれをごらんよ』

言い乍ら奇ク七月号の『女相撲熱戦譜』を見せた。

『わあー凄い！首投げってどんな手かしら、長身女性と肥満女性ね、丁度私達みたいじゃないの』

茶目っ気のある幸子嬢は少からず興味を示した。しかし瑞枝嬢は一寸眉を顰めて

『いやだわ、女性がお相撲するなんて』

仲々応じそうにない。幸子嬢は悪戯っぽく

笑い乍ら

『ねえ、瑞枝さん。腕相撲は私が勝ったし、足相撲は脚の長い貴女が勝ったでしょう。本当のお相撲で勝負つけないこと?』

私は嬉しくなって瑞枝嬢に盛んに勧めた。『他に誰も見ていないし絶対喋らないから』と、漸く彼女を承知させた。

『いやだわ! じゃ、ほんの真似だけよ』
 洩々立上った。そして自分の足の裏をちらと見た。私は長身の瑞枝嬢の足を注視した。

彼女はすうりとした恰好の良い長い脚だ。その寸法は十文半はあるだろう。指の長いほっそりした足をしている。しかし畳の上を歩く度にぺたぺた音をたてる。私は思い切って尋ねてみる。

『瑞枝さんは何文なの?』

『十文半です』照れ臭さそうに答える。

大体、女性は自分の足の大きいのを気にしている。しかし私は彼女位の大きい足が好きだ。

『貴女、脂足なんだろう?』

失礼と思ったがわざと聞いた。彼女は恥しそうに頷いた。

幸子嬢が瑞枝嬢の足を見ながら……

『ああ、それで瑞枝さんは、ストッキングが早く汚れるのね。いやだわ』

『仕方ないわよ』

瑞枝嬢もムツとした様子だ。

『幸子さんは何文だい?』

『私は九文半です。瑞枝さんは背が高いから足も大きいわね、でも巾は私が広そうよ』

そう言い乍ら幸子嬢は、自分の大根足を出して瑞枝嬢の長い足と並べて比べる。幸子嬢の九文半の足は、指が短く巾の広いむっちりとした感じの足だ。瑞枝嬢の十文半の足は指が長く、巾の狭い細長い感じの足である。長さは瑞枝嬢の足が三廻近く長く、巾は逆に幸子嬢が可成り広い。

『足の中は広い方が安定性が良いのよ、お相撲、私の方が強そうね』

幸子嬢は長身の瑞枝嬢の肩に攜り乍ら、自分の足の裏を瑞枝嬢の足の裏にぴったり合わせる。

『わあ! 気持が悪い、べとべとしてるわ、瑞枝さんはひどい脂足ね。臭いがしそうよ』

瑞枝嬢もさすがにむっとしたらしく

『悪かったわ、私はどうせ脂足ですから』

彼女は私の手前、ひどく気にしている。

『いや、瑞枝さんみたいな美人は足の裏くらい汚れてた方が反って魅力があるよ』

私は二人をとり成す様言ったが、事実その

通りりだと思った。

長身の瑞枝嬢の十文半の足の裏は、脂足のため汚れている。色白の彼女だが足の裏だけが土踏まずを除いて赤味を帯びてべっとりとしている。特に夏は、靴で蒸れて、何とも言えない臭いを漂わせているのだ。かなり離れていてもぶいんと匂って来る。私にとつて何物にも代え難い素晴らしい魅力なのだ。

彼女の足の裏に頬ずりして、その細長い指に、しやぶりつきたい衝動にすら煽られるのだ。しかし彼女は私の思いを知る由もなく、反って大きい足と脂足を揶揄われたと思ったらしくつんとして横を向いた。

『さあ、始めようか』

私は二人を促した。

勿論揮の用意などある筈もなく、たとえ、有っても普通の女性が承知するわけがない。

『思い切り投げつけるわよ、首投げでね』

幸子嬢は、先程の奇クを想い出したのだらう。悪戯っぽく笑い乍ら瑞枝嬢を見上る。

『そうはさせないわ』

瑞枝嬢も言い返す。いよいよ面白くなって来た。女性はいざとなると男性より敵愾心は強いと聞いていたが本当だと思った。

『最初から始めないと面白くないから』

私は二人を八帖の部屋の両側に坐らせる。扇子を持出し、部屋の中央に進み出た私は、呼出しの口調を真似て、

『東しい、幸子さーん、西しい、瑞枝さーん』

二人は思わず吹き出してしまったが、立上り部屋の隅で四股を踏み始めた。その背に向って、

『かたやー幸子さん、こなたー瑞枝さん』

今度は行司のふれだ。私も仲々忙しい。

彼女達は笑いを噛み殺して部屋の両側で拍手を打ち、中央に進んで向い合って立ち四股を踏む。東方、肥った幸子嬢は大根足を大きく上げてどしんと力強い四股を踏む。太腿がぶるんと震えはち切れそうだ。

西方、背の高い瑞枝嬢は、長い恰好の良い細い脚を小さく上げて四股を踏む。畳にぺたんぺた音がする。脂足の故である。次いで蹲居の姿勢から立上り仕切に入る。幸子嬢は、じつと腰を落して瑞枝嬢を睨む。肥っているだけに仲々堂に入っている。背の高い瑞枝嬢は足の開きを狭く腰高の仕切り、二人は顔を見合せて笑い出した。私は二人の体格や四股、仕切りから判断して相撲は肥った幸子嬢が強いだろうと予想した。私は解説調で、

『この勝負は離れて瑞枝嬢、組んで幸子嬢有

利でしょうね、長身の瑞枝嬢は立合、突張り、突張り切れない時は、長身を利した外掛けが賢明な策ですね。肥満の幸子嬢は低く押込み瑞枝嬢の長身を起して寄立てれば体重に優るだけに有利になります。又長身瑞枝嬢の首を巻き、思い切った首投げに出れば、瑞枝嬢苦しくなります。』

これは幸子嬢に特に聞かせたかったのだ。私は日頃から肥った幸子嬢が背の高い瑞枝嬢を首投げに倒すシーンを想像しており、何とか実際に見たかったのである。仕切りを数回重ねた後、私は制限時間一杯を告げた。愈々待った無し最後の仕切り！

(第一回戦)

二人の女性は顔を見合わせて構えた。『はっけよいや』

肥った幸子嬢が一瞬早く立ち、激しくぶちかまし、喉輪で押し立てた。瑞枝嬢は長身を仰け反らせて、忽ち後退し、十文半の足を部屋の外に踏出して敗れた。

『押出し、幸子嬢の勝ち、肥満の幸子嬢の嬢の激しい喉輪攻めに長身の瑞枝嬢、あっ気なく土俵を割りました』

私はアナウンス調で叫ぶ。

『ずるいわ、喉を攻めるなんて』
瑞枝嬢が抗議する、
『押しの基本よ』
幸子嬢は澄まして答える。

(第二回戦)

幸子嬢が又もや喉輪で押し立てた。瑞枝嬢の首をはたく様にして引落した。瑞枝嬢は今度はこれを避けて頭を下げて押返そうとした。幸子嬢は、咄嗟に長身の瑞枝嬢の首をはく様にして引落した。瑞枝嬢はこの奇襲に思わず前へのめって四っん這いになった。

十文半の細長い足の裏がはっきり見えた。『素首落し、幸子嬢の勝ち。押し込んでおき瑞枝嬢頭を下げて押返す所、素首落し見事に決りました。長身の瑞枝嬢、首を押えられて四っん這い！ 或は肩透しでしょうか』
私は愈々胸が高鳴るのを覚えた。

『これで二勝よ、問題にならないわね』
幸子嬢が勝ち誇った様に言う。
『よし、今度は負けないわ』
瑞枝嬢も漸くファイトを燃やして来た。

(第三回戦)

今度は長身の瑞枝嬢が早く立ち激しく突張

って出る。リーチが長いだけに有利だ。幸子嬢も思わず身体が浮いて後退、部屋の外に突出されてしまった。

『突出し、瑞枝嬢の勝ち。漸く一矢を酬いました。長身の瑞枝嬢初めてその本領を発揮しました。やはり突張りを生かすべきですね』

瑞枝嬢は笑い乍ら言った。

『幸子さん、どお？』

『よし、今度は投げつけるわよ』

幸子嬢は突張られた頬の辺りを撫で乍ら憤然として言った。

(第四回戦)

両女性、中腰のまま立上った。肥満の幸子嬢はいきなり長身の瑞枝嬢の首を巻いて首投げを打った。この強打な速攻に腰の高い瑞枝嬢は残す暇もなく、もんどり打って倒れた。『首投げ、幸子嬢の勝ち、長身の瑞枝嬢脆くも敗れました』

私は嬉しさに胸が震える。

『やったわね！』

投げられた瑞枝嬢が、くやしそうに言って起上った。既に全身汗をかいている。

女相撲も愈々白熱化して来た。

(第五回戦)

二人は殆んど仕切りもせず、ぶつかった。

今の首投げに味をしめた幸子嬢は再び瑞枝嬢の首を巻く、しかし瑞枝嬢は構わず長い脚を飛ばせて外掛けを掛ける。十糧も背の高い瑞枝嬢の外掛けに幸子嬢は身体を弓なりに反らせて耐える。瑞枝嬢、長引いては面倒と激しく長身を浴びせれば、さすがの幸子嬢も腰が砕けて仰向けに倒れた。

『外掛け、瑞枝嬢の勝ち、幸子嬢再び首投げを狙って長身の瑞枝嬢の首を巻きましたが、瑞枝嬢、素早く外掛けで反撃、見事に幸子嬢を降しました。瑞枝嬢十八番の外掛けが遂に出ましたね。これで幸子三勝二敗、愈々面白くなってきた』

『瑞枝さん、背が高いから足を掛けられたらかなわないわね、さあ、もう一回やるわよ』

幸子嬢も丸っこい顔に闘志をみなぎらせて意気込む。

『暑くて暑くてたまらないわ、もう止ましよう』

瑞枝嬢は肩で息をしながら、畳の上に坐った、横坐りした長い脚が美しい。その足の裏は、滲み出た汗と脂に畳の汚れがつき、赤黒く見える。素敵な色だと思った。

『何言ってるのよ、未だ勝負はついてないの』

よ、さあお立ちなさいよ、さあ早く！』

今外掛けで負けた幸子嬢は瑞枝嬢の手を取って立たせようとする。負けん気が強いのだ。絶対自分が強いと思っていたのが鮮かに外掛けで破れたのがくやしかったのだろう。

余り気乗りのしない瑞枝嬢を無理に立たせて幸子嬢は早くもぐっと構える。

『仕様のないお転婆さんね。もう、この一回だけよ』

瑞枝嬢は三ツ年上らしくたしなめる様に言って仕方なく応じる。

(第六回戦)

幸子嬢は闘志満々、長身の瑞枝嬢に組みついて又も首を巻こうとする。瑞枝嬢は嫌って左手で防ぎ乍ら

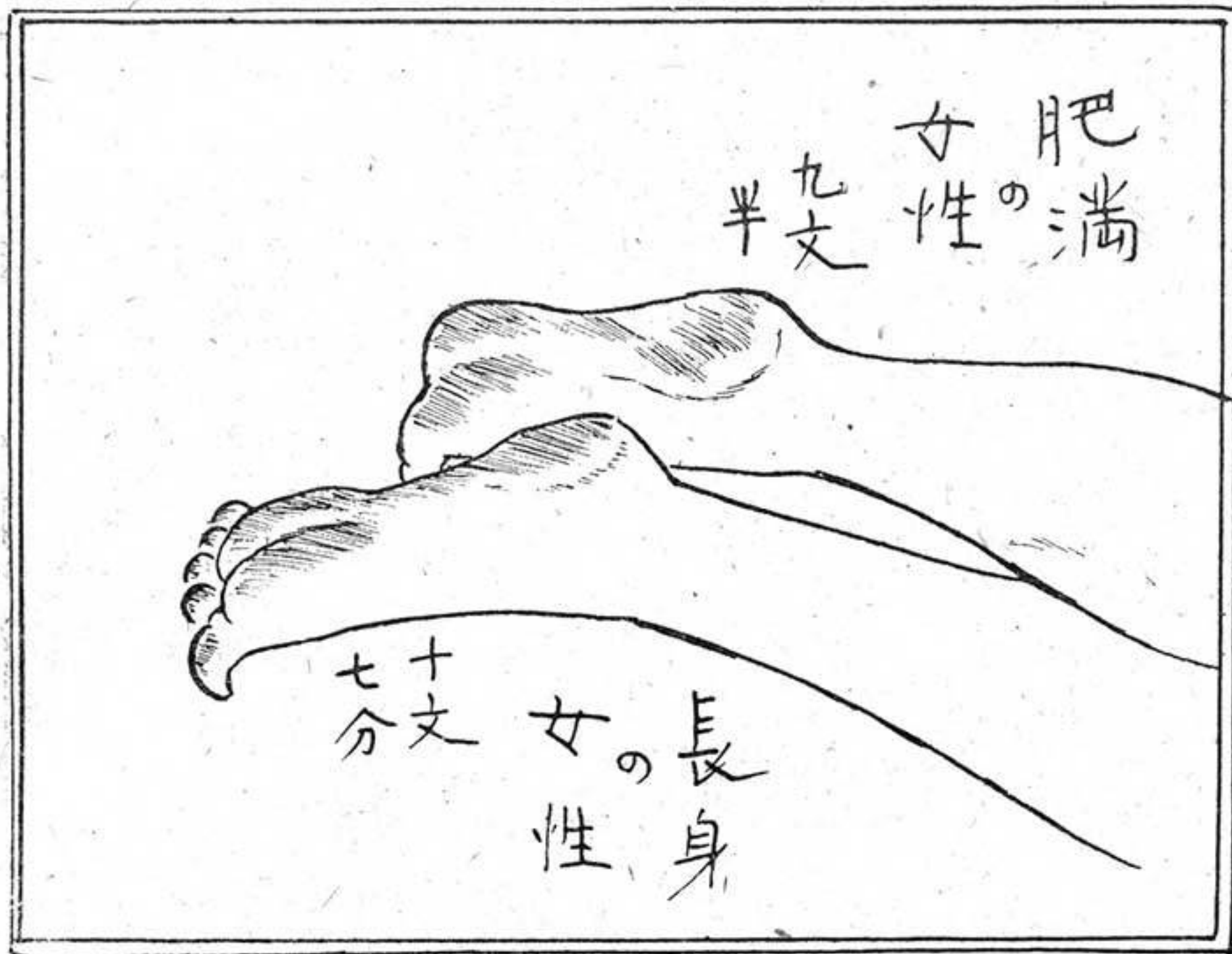
『貴女、どうして、私の首ばかり巻くのよ。嫌な幸子さん』

そう言って一寸睨む。美しい眼だ。

『貴女の首は細くて巻き易いのよ。それに貴女は背が高いから又、外掛け、かけられたら危いもの』

幸子嬢はそう言い返して、遮二無二瑞枝嬢の首を巻こうとして二人は激しく揉み合う。

確かに彼女の言う通りである。幸子嬢より



十糎も背の高い瑞枝嬢に外掛けをかけられるのは確かに脅威だ。しかし瑞枝嬢の首を巻き右腋深く抱え込めば、瑞枝嬢は長身を折り曲

げざるを得なくなり、外掛けには行けなくなり、逆に防戦に追込まれる事となる。つまり背の高い相手の外掛けを封じるには、首を巻き、抱え込むのが最善の策なのである。二人が逆の場合はどうであろうか、しかし、これは余り効果がない。何故ならば肥った幸子嬢の首は、太く短い猪首と言う奴で巻き難い。たとえ長身の瑞枝嬢が肥満の幸子嬢の首を巻いたとしても、重心の低い幸子嬢には首投げは決らない。首投げは長身で腰高の女性に掛け易いわけだ。

さて、二人の女性は激しく争っている。

執拗に首を巻こうと攻める幸子嬢。これを嫌って懸命に防ぐ瑞枝嬢。揉み合う事しばし……。遂に力に優る肥満の幸子嬢は、自分より十糎も長身の瑞枝嬢の細い首を伸び上げる様にして巻いた。瑞枝嬢嫌って頭を下げ、逃れ様とした

が、幸子嬢は追いつきり遮二無二、瑞枝嬢の首を抱えた。瑞枝嬢、突嗟に長い手を伸して幸子嬢の太股を取り、小股掬いで反撃しようとした。足を取り、引くり返そうと言うのだ。しかし幸子嬢は左手で瑞枝嬢の右手を抑えつけて封じ、右腋深く長身の瑞枝嬢の首を抱え込んでしまった。こうなると完全に幸子嬢有勢となった。

瑞枝嬢は長身を折り曲げ、幸子嬢の太い腰に喰下り防戦一方。幸子嬢一腰いれて、強引な首投を打つ。瑞枝嬢よろめいたが危く足を送って残す。また首投げ。残った残った。既に両女性汗みどろ。しかし幸子嬢より首を抱えられている瑞枝嬢の方が遙かに苦しう。背中から、お尻から、太股から、汗が畳の上に滴り落ちる。投げられまいと懸命に踏んばる十文半の細長い足の裏も汗と脂で愈々べとついて来たらしい。

私は彼女達の足元に眼を注いだ。攻める幸子嬢の九文半の巾広い足と防ぐ瑞枝嬢の十文半の細長い足が纏れ合う。幸子嬢の巾広い足は、太く短い指が畳にめり込む位、力が入っているのに対し、瑞枝嬢の足は細長い親指が稍上に反っている。恰好の良い指だが余り力を入らない感じである。二人の足の表情から

も相撲の強弱が伺える様な気がする。幸子嬢は右腋深く抱え込んだ瑞枝嬢の顔を覗き込み乍ら笑いかける。自信満々、余裕を見せて、まるで首投げを楽しんでる様に見える。

『瑞枝さん、どお？ 投げるわよ』

瑞枝嬢、首を強く巻かれ、苦しそうな表情だが、これも笑い乍ら言い返す。

『そうは簡単に投げられないわ』

幸子嬢は引ずる様な首投げを打つ、瑞枝嬢腰を引いて必死に耐える。

二人は組んだまま部屋の中を数回廻る。

意外に粘って耐える瑞枝嬢の善戦に大相撲になった。

幸子嬢面倒とばかり、首投げを連発。最後の止めを刺す様に、長身の瑞枝嬢の首を精一杯、右腋深く巻込み、強く締め乍ら、太い右脚を瑞枝嬢の長い左脚に絡ませ、自分から倒れ込む様にして強引な首投げを放つと、さすがの瑞枝嬢も逆に耐え切れず、幸子嬢の大根足に絡ませた、すらりと長い脚を大きく宙に浮かせ崩れる様に畳の上にとっと倒れた。

幸子嬢も勢い余って右腕深く長身の瑞枝嬢の首を巻いたまま、折重なつてとっと倒れ組敷しいた。幸子嬢の五八キロの体重に乳房を強く圧迫された瑞枝嬢は美しい顔を歪める。

『首投げ、遂に決まりました。幸子嬢の勝ち』

私は興奮に震える声で叫ぶ。

幸子嬢は、すかさず抑え込みの体勢に入る。

『離してよ、こんなのお相撲じゃないわ』

必死に跳ね返そうとする。

『これからレスリングよ、どっちか参ったつて言うまで続けるのよ』

瑞枝嬢の顔を上から覗込み乍ら幸子嬢が言う。寝技では幸子嬢が絶体有利だ。体重で十キロも重いし、而も首を巻いて制している。

『貴女があくまでやるんなら、そうむざむざ敗けちゃ、たまらないわ』

瑞枝嬢も闘志を燃やして跳ね返そうと必死だ。しかし幸子嬢の体重は容易に跳ね返せない。瑞枝嬢は長い脚を幸子嬢の腰に絡ませ、胴締めで反撃しようとする。幸子嬢これを避け組敷いたままお尻をずらせて廻る。

瑞枝嬢は長い両脚を大きく上下させ畳を蹴って跳ぬ起き様と跪く、しかし幸子嬢は五八キロの体重でがつちり抑え込み許さない。瑞枝嬢の白い顔が紅潮して来た。苦しそうだ。全身汗みどろ、彼女の十文半の足の裏も畳の上で激しく動き、足の裏の脂が畳にくつきりとつきそうだ。

『どう？ 参った』

勝ち誇った様に幸子嬢が話しかける。

瑞枝嬢は首を横に振り抵抗を続ける。しかし、勝負は九分九厘、幸子嬢のものだろう。

瑞枝嬢は最後の力を張り絞って反撃に出た。

左手を伸し幸子嬢の髪を掴んで引張った。

幸子嬢は思わず怯み身体を浮す所、瑞枝嬢素早く、下から逃れ様とした。しかし幸子嬢も直ぐ立直り再び抑込みにかかる。瑞枝嬢は長い脚を幸子嬢の太い腰に巻きつけ胴締めで反撃する。幸子嬢も胴を締められかなり苦しう。瑞枝嬢の首を益々強く締め上げる、二人はお互に締め合い乍ら、畳の上を転り、上になり、下になりして激しく争う。

私は息を吞んで彼女達の激しい組打ちを見守った。しかし首を抱えている上、体重に優る幸子嬢は、再び長身の瑞枝嬢を組敷いた。腰に巻きついた瑞枝嬢の長い脚をはね除けてぐっと抑え込む。瑞枝嬢は長い脚をばたつかせて必死にもがく、幸子嬢は大根脚を瑞枝嬢の長い脚に巻きつける。二人の足の裏が絡み合う。幸子嬢の九文半の中広い足は稍小麦色。瑞枝嬢の十文半の細長い足は抜ける様に白い。しかし細長い足の裏は土踏まずのほかは、赤味を帯びて汚れている。脂足特有の色だ。その足の裏と裏が激しく動く。勝ち誇

った様な巾広い幸子嬢の足の裏に対し苦戦の表情だ。私は喰い入る様に彼女等の足の裏の動きを見詰めていたが、我を忘れて傍へ坐り込んだ。そして夢中で顔を寄せた。

ぶ・ん・と蒸れた様な足の裏特有の臭気が鼻をつく。瑞枝嬢の足の臭なのだ。近くで見ると幸子嬢の足の裏は、巾広で分厚い感じだ。足指も丸っこい可愛い型をしている。瑞枝嬢の足の裏は実に長い。廿五糎はあるだろう。

足の指は細長く、幸子嬢より遙に長い。滲み出た汗と脂！私の興奮はその極に達した。私はたまらなくなり、赤黒く汚れた瑞枝嬢の十文半の細長い足の裏を抱きしめて頬ずりした。べっとりとした感覚が頬に伝わる。私は細長い足の指の間へ鼻をつけて嗅いだ。臭い

／ 蒸れた様な素晴らしい匂いだ。私は夢中で嗅いだ。私の鼻の頭に彼女の足の裏の汗と脂と汚れがくっついた。

この間も二人の凄絶な組打ちは続く……

幸子嬢が強く首を締めたのだろう。瑞枝嬢は足の裏をぴくっと動かし、彼女の大きなお尻からすーっと音がした。おならを出したのだ。つい夢中で出したのだろう。

『く、く、苦しい』

瑞枝嬢は幸子嬢の太い腕の中で叫んだ。その美しい顔が真赤だ。眼がつり上って苦悶の表情。左手で幸子嬢のお尻を叩いている。

『参った』の合図である。

幸子嬢は漸く瑞枝嬢の首から手を放した。遂に強引な首締めで幸子嬢に凱歌が上った。

ガン作マニアのノート

△バーの死角▽

芳野眉美

週刊文春六月十七日号の「ひとわれを変った人という」という特集記事のうち、「酒場の死角の奇妙な快楽」と題して「ハイヒール

に踏まれて喜ぶインテリ男」というのがあります。即ち、

「あら、またエッチさんがやってきたよ。な

瑞枝嬢も身を起したが未だ起上れず、畳に手をついて首垂れて肩で大きく息をしている。一六六糎の長身だけに、敗れた姿はみじめだった。投げだした十文半の脂足の足の裏が印象的だ。細い首筋に赤く幸子嬢の腕の跡が残っている。

『ごめんなさい、苦しかった？』

幸子嬢は悪戯っぽく笑い乍ら、瑞枝嬢の肩へ手をかけ覗き込む。

私は全身の力が一度に抜けて行くのを感じた。そしてはっとして現実に戻った。空想していたのだ。瑞枝嬢の十文半の脂足の臭いがまだ残ってる様な気がする。

今日も彼女達は明るく元気に働いている。私の空想など知る由もなく……

どという女給たちの嘲けりの声にむかえられて、彼はいつもの場所に落ちつくのだ。いつもの場所……女給たちにチップをやって、カウンターの下に寝かせてもらうのだ。バーのカウンターの下というのは、完全な死角である。お客は絶対に気付かない。この場所で彼は、思うさま女給たちのハイヒールに踏まれるのだ」というものです。この記事が気になったのですが。

バーのカウンターの下は、死角には違いあ

りませんが、「お客が絶対に気付かない」ほど「完全な死角」ではありません。バーの常連になればなるほど、カウンターの内側が妙に気になるもので、カウンターの中に入った、カウンター越しに覗く人は多いのです。それに「カウンターの下に寝かせてもらう」ほどの場所は、普通のバーありません。カウンターの下というものは、バーの設備でうまり、無駄な空間は無いものです。

「女給たちにチップをやって」寝るというのですから、そう大きなバーではないでしょう。女の子が三四人の、ありふれたスタンドバーでしょう。仮りに、記事の通りカウンターの下に寝られたとしても、それこそ歩くのにじやまになって、商売になりません。

とにかく、そこで主人公は、「思うさま女給たちのハイヒールに踏まれる」わけです。問題はここです。

「ハイヒールに踏まれる」と気軽に書いていますが、この記事を書いた人は、ハイヒールのかかとの細い底が、凶器であることに気がつかないのでしょうか。手でも足でもいい、もろにハイヒールで踏まれてみるといいでしょう。傷がつかますよ。

ハイヒールでなく、女性のやわらかな素足

で顔をやさしく踏まれたとしましょう。眼は圧迫されてしくしく痛むし、唇の内側はおしつけられて自分の歯で切り、熱いものが口に出来なくなります。背中や足なら傷はつかないでしょうが、胸や腹部となると、十三四貫の体重を支えるのは意外に苦しいものです。

さて、「思うさま」ハイヒールで洋服の上から、腕や脚や、背中や腹部を踏まれたとしましょう。記事にこうあります。

「女というものは、自分の身が安全だとなると、思うさま残酷になります。ジワジワと攻める西欧型が圧倒的です」

女の子に「残酷に」ハイヒールで踏まれて、男が無言でいられるかどうかです。素足でさえうめき声を出してしまうものです。カウンターの下から男の変なうめき声したら、外の客はびっくりしてしまうでしょう。とにかく、記事によると、主人公はハイヒールで踏まれながら、女給と客の話を聞くのが楽しみなんだそうですから。「死角」はたちまち「舞台」に早変わりです。奇妙な見せ物ですね。猿ぐつわをされていたとしたら、かえって大変なことになります。

「営業所で善良な風俗を害する行為をしないこと」という警察保安係からのきついおたっ

しに違反して、営業停止にもなりかねません。そんなあぶないことを、営業者がするものでしょうか。そんなに踏まれたいのなら、ハイヒールでなく、サンダルを履いた女の子に、いたるところを踏まれてみるのも面白いでしょう。

「奥さんはもちろん正常なひとである。いまだに、ご亭主がMがっていることを知らない」と記事にあります。

ハイヒールのくつ底やかかとの細い底で、身体中に傷つけられた「傷」や「アザ」を、どう奥さんに説明しているのでしょうか。いくら、夫のいいなりになる善良で上品な夫人でも、おかしいと疑問を持ちますよ。

ハイヒール、いや、女性の美しい足に踏まれたというマゾヒストの話としては、興味深く読みました。週刊文春は面白い記事が多いです。

しかし、空想を現実の話として記事にするのはどうかと思います。マゾヒストの話を変人の話として書くなら、まだ現実の話としておかしくないものが外にあるはずですよ。

SMに就いては、一般の知識がまだまだオトギ話の世界にあるようで、残念に思えてなりません。その意味でこれを書きました。

女相撲の思い出話

文と画 津谷正春



昭和廿七年頃であったと思うが女相撲を復興しようとした人があった。実際にはどの程度実現されたか不明であった。それは福島県平市に平井女流相撲興業事務所を設け支配人として小関氏の名が挙げてあった。そして女力士の番付は次の様に掲げられてあった。

東方

西方

張出大関 若駒 ゆき

大関	白藤とくの	大関	富士山い志
関脇	双葉川登起	関脇	阿知乃山あさ
小結	小勇 登め	小結	千田川あい
前頭	岩手山奈美	前頭	小松山登志
〃	清乃海起美	〃	梅の里ゆわ
〃	日照山あさ	〃	若緑 てる
〃	越の海まさ	〃	遠州灘とくの
〃	小弁天きん	〃	別府山まん

〃	清美瀉くめ	〃	小梅 たき
〃	奥州山てる	〃	白百合さち
〃	寿美山とり	〃	備前 ゆき
〃	富士山あき	〃	宝山 ます

以上二十五名

これが私の居る関東方面へ興業にきて呉れたなら、何をおいても見に行こうと大いに期待して居たのであったが、それらしき何んのニュースも聞えてこなかった、平市へ行って聞き廻ったら解るかも知れないと思いつつ、それも果せなかった。この番付の四股名の面白さやそれに依って各地方の女力士が居るようにも想像され、又その名前は如何にも東北等の地方に多そうな古風な名前に、何とも懐しみを憶えたのであった。この番付を見乍ら私は過去に知り合った地方の女の姿を思い出したりした。

私が青春時代にある職場で知り合った秋田の娘は色の白い、きめの細かい肌で背は低かったが小太りして頬の豊かな上唇の薄く両端が幾分上にカーブした黒い瞳の美人であった。抱くと柔かい身体で胸には垂れ乳が大きくゆったりしていた。

駿河の娘は丸い肩に鳩胸出尻で丸い眼をいつも一杯に見開いて厚い唇をしていた。九州

鹿兒島の女は成熟し切った五尺三寸、十七貫の体軀で色浅黒く、腰は横に張って大きかった。それから山陰島根の女は……等とこれら脂の乗った娘や女等が角力禪を下っ腹や股に喰い込んで締め上げた勇み姿を想像するのは何とも言えぬ楽しい思いであった。

それから一年ほど経った頃であったが私は東京の浅草公園の所謂六区の映画街を歩いていた。右側が昔のヒョウタン池の跡、左側はストリップ劇場のロック座や映画館の並んでいるその突き当り、今では映画館になっているが、その頃はまだ空地でそこに女相撲小屋がかかっていたのに偶然行き当たった。

私は無論胸の躍る思いで早速に入場した。小屋の真中に一尺ほどの高さに土俵が築いてあって、周りに見物人が三四十人ほど坐ったり立ったりしていた。その大部分が年寄りか子供連中であって、私のようにホワイトカラーのサラリマンは一人も居ないので、なんとなく恥しい気持ちもしたが、勇を鼓して土俵のすぐ下に腰を下した。見渡すと木戸口の横に棧敷があつて、そこで太鼓を時々叩いて客を呼んでいた。暫く待つとやがて三十五六の男が行司の裳束を着て軍配を持って土俵に上って力士の四股名を呼び上げた。棧敷の後ろ

から二人の女力士が出て来て土俵へ上った。白木綿の半袖シャツに白木綿の猿股をはいた上から色の褪せた黒の禪を締め込んで黒いさがりを着けていた。年は若く十七八才か、一人は角力髷に一人はパーマの頭で背丈は両方とも高くない。顔はまだ中性で子供子供していた。それでもともかくプロ丈に四股を踏むにも両脚を高くあげて勇ましく行司の軍配に仕切った二人は腰を割いて頭を低く睨み合った。「ヨオッ」と掛声あげて組み付いて投げ合ったりしたがもつれ合つてよろよろした。その内に一方が手を付いて負けた。このような力の入らない取組が続いた。総勢は六名の力士で大同小異、見物席からの声援もなく、どうも盛り上る空気がなかった。

その内棧敷で太鼓を叩いて客を呼んで居た三十才位の女が禪を締めて土俵へ上った。無論シャツを着て猿股の上から締め居るのである。髪はパーマで色の浅黒いかり肩のガッチリした女だった。五人抜きと言うのを始めた。組み付いて行き反動をつけて大きく投げ出される。後ろから抱き付いて押し出す足を取って転がす等変化の多い技が見えたが結局はその三十女が五人抜いて勝名乗りを受けた。実際その女が年も多いが身体もよく力も

強く一座の姐御であつたようだ。私は今一人この女に対抗出来る女が居たらと残念に思つた。

このようないで立ちで然も子供のような小型の女では如何にも女角力の感じが出ない。若くても年増でもよい、もっと長身か肥つて体重のある女を集めなくては角力の魅力は湧いて来ない。ストリップでは前をヤツと包むツンパ一つで踊って居るのに、禪一本の女角力がどうして悪かろう。女達が禪一本になるのを嫌がるのだろうか。

私だけではあるまい、天下の女相撲愛好者は柔肌喰い込んで締めた禪一本の女体の相撲姿に憧れているものをシャツと猿股とは情ない。これでは人気の衰えるのも無理はない。水も浸垂る角力髷に薄化粧して紫紺の禪をキリリと締め込んだ勇み姿には身も心も恍惚としてしまうものを惜しい事だ。

私が小屋掛けの女相撲を見たのは、これが最後であつた。今日恐らくは女相撲興行は無くなつてしまつたであらう。別府の温泉には二人連れで客の招きに応じてお座敷角力を見せる女相撲があると聞いてはおるが……。

(おわり)

薔^ば

薇^ら

赤^{あか}

く

被虐愛ざんげ

万 田 不 仁

志賀真理子が突然話かけて来た時、私は驚きと嬉しさで、ぱっと辺りの空気が橙色になったように思った、と言ってもそれ程大袈裟ではなかったのです。私はずっと暗鬱な、孤独な学生々活を過して来ていたのです。それは偏屈な、容易に他人に馴染めない、ひねくれたところのある私の性格にもよることでしたが、もっと大きい原因はファシズムに進んで迎向しようとする国粹主義的な学園の動きの中で、私のような軍事教練に参加出来ない跛の学生の感じる引け目でした。

私の学んだ大学は単位制で、几帳面と言う

よりか小心の為に、およそ文学部の学生らしくない生真面目一筋で、せっせと各教授の講義を聴いた私は最終学年に入った時は、既に大方の単位を取ってしまった後の気怠いような虚脱感に落込んでいる自分を見出してもいたのです。

いつもベルが鳴ると直ぐに現れて、時間一杯みっちり講義する宗教哲学の斎教授が書物で脹んだ古い鞆を抱えて、大股に教室を出ていくと同時に席を立った二十名程の学生たちの後から私も階段の方へいきかけると、藤色の着物に濃い緑の袴をはいた真理子が黒い学

生服の流れの中から引返して、にこやかに微笑みかけたのです。

「あの、『泉』にお出しになった詩、読ませて頂きました」

よく透る声でした。『泉』は文学部の季刊誌で、私は初めて短い詩を投稿してみたのです。好きな安西冬衛の手法を真似た至って恥ずかしいものでしたが。

「私、あんな幻想的な詩、好きです」

何とも言えず私は顔が赤くなるのが自分に解りました。並んで階段を下りると、微かに香水が匂い、髪に結んだ臘脂のリボンが揺れ

て、華やかな若い女の雰囲気には私は忽ち途惑いを感じるのです。

「私も少し詩を書いていきますの。お暇があったらこれお読みになって……」

階段を下りたところで、真理子は立止まって、ポトフオリオから薄い雑誌を取出して私に渡しました。そして、これで用事は済んだと言う風に

「じゃ、また、失礼しました」

軽く会釈して、そのまま校庭に出て、アーケードの方へさっさと足早にいつてしまいました。呆氣にとられた私を残して。

女はチカチカ燃える火繩をくわえた墓の背に跨って登場する。綴子の下帯をしたきりの裸の背に長い黒髪をすべらせ銀の短剣を後手に隠して

栗の樹の股で爛れた夏の月をなめている
觸腰へ女は手をさしのべる 觸腰の番人は深く睡っている

女は盗みおおせた觸腰を兜のようにかむり 墓の尻にひと鞭当てる と 森の中であつと哄笑の声 急霰のような攻め鼓の音がひびく

黒地にクリーム色で『風土』と抜いた十六頁の詩誌。その中ほどにある真理子の詩は、

イメージを自由に繰広げたと云うよりも少々アナクロニズムで、只自分の趣味性に溺れ、遊んだものと言うべきものでした。しかし、そんな傾向は又私の詩に寄せる好みでもありませんから、真理子は『泉』に発表した私の詩の内容から何か共通な文学的嗜好でも見出したのかも知れない。それまでは言葉ひとつ交わしたことの無い私にある興味を抱いたのだろうか。と、私はことによると真理子と近付きになれそうな淡い希望の兆しを感じながらそんな勝手な考えに自分を楽ませて、その薄い詩誌を何度か読返したものです。

真理子は宗教科の聴講生でした。その一年くらい前から私は真理子の大抵は和服の華車な姿を心理学や印度哲学の講義のある教室で、よく見かけていましたし、もう何人かの学生が騎士さながら接近し、追従している様子も知っていました。きっと彼女は富裕な寺の娘だろう——私は真理子の身許をそんな風に簡単に想像していました。何人もいない女子学生の中で際立つ美貌の真理子に私も全然関心がない訳ではありませんでしたが、不具者の劣等感のひどい若い日のこと、迎も近付く勇氣など出るものではなかったのです。

「先日のあの雑誌、お読みになりました？」

次の週の斎教授の時間のあとで、真理子は袴をさらさらさせて寄って来ました。(いやに性急なんだ) 私は一瞬態とらしい苦笑を浮かべましたが、それは自分が真理子に惹かれていている心へ頑な感情が殊更ブレーキをかけようとする、意識的なぎこちなさで、本当はもう真理子が何か言いはしまいかと期待していたのです。真理子は私を大学の傍の喫茶店に誘いました。ゴムの木の陰で私は真理子と可成り長いこと——私には短く思われましたが——話しました。私は自分ながら情なくなる程社交性の乏しい、愛敬のない人間ですが、それでも相手が特に聞き上手だったり、ウィットに富んだ人で、ひょっとと打解けると今度は又自分でもびっくりする程のユーモアや警句を飛ばせることも出来るのでした。お前は全く喜怒哀楽の激しい子だと母によく言われましたが、私は自分の肉体的劣等感の故に固く鎧っている偏屈の甲羅を誰かが巧みに外してくれさえすれば、途端に生き生きとして、時に病的なまでにはしゃぐと言う、先ず一般的には好かれない、扱い難い青年の一人だったのです。私は学生々活の団体的性格が実に嫌でならぬこと、何の目的もなく哲学科に入ってしまったこと、学問の殿堂に籠ろう

などと言う大それた気持は更になが漫然と大学院へ進む心算であること、近頃文学、主に小説に関心をもちだしていること、夜、A・Fへ通ってフランス語を習っていること等々……を真理子に喋りました。真理子は時々情熱的に光る黒い大きい瞳で私の顔を見ながら頷きがちに耳を傾けていましたが、そうすると長い睫が殊に鮮かでした。

「あら、フランス語なら、私の姉は得意よ。うちで教えているんです」

真理子は言いました。何事にも引込思案の私でしたが、ここにひとつ真理子により親しくなる契機がある、折角の機会を逃したくないものだと思います。詩誌「風土」を買ってから私は何とかして真理子の友達になりたいと言う希望が抑え難く胸を占めて来るのに悩みだしていました。大学に入って以来、私の周辺にはまるで女性の友だちがなく、それはその頃僅かながら燃え立った勉強意欲の底に冬枯れの底のような白々しい寂びしさを漂わせる心のひずみになっていたのです。

「僕にも教えてくれるかしら？ 僕、A・Fで今中等科だが……」

口籠りながら、私は真理子の顔を覗きました。

真理子はお寺の娘ではありませんでした。郊外の通称九十九谷と言う丘陵地、その谷間に当る窪地の底の櫓の木陰にかくれた赤い屋根の洋館に姉と棲んでいました。そのあたりは武蔵野の面影も濃い櫓や櫓の林が多く、処々ざっくり切崩された崖が生々しい赤肌を日に晒して、その間を柔らかい赤土の路が深い轍の跡を刻まれたままうねっている、そんな風景が次々と展がるので行人は何やら迷路に入ったような気にもなるのでした。

抽象的な模様の白い鉄の門を押すと、眼も覚めるような薔薇苑でした。玄関に通じる灰色の石畳の途中にこしらえた薔薇のアーチ、薔薇は赤が七分三分の割合で白薔薇を圧して咲き誇って、その華やかな色合は、この窪地の、周囲を林に囲まれた白壁の洋館を頗る幻想的なたたずまいにしていました。が、私の眼には盛んな紅薔薇の炎が劣勢の白薔薇の純潔をひねもす虐げているかの如く見え、私の耳には可憐な白薔薇の身を灼かれる悲鳴が嗚呼と聞えるかの如くでした。

その薔薇のアーチの下で、私は折から玄関から小走りに出て来た背の高い、痩せぎすの大学生に出逢いました。その男は私を横眼にチラと見て、そのまま一層足を早めて去って

いきました。揉上げの長い、青白い顔が私に何か陰湿な不健康なものを感じさせました。

真理子の明るい笑顔に迎えられて、応接間に通された私は、それから長いこと待たされました。倭人と言っている程小柄な老いしなびた下婢が紅茶を持って来たきりで、私は忘れられてしまったのかとさえ思いました。壁にかかった何処か岬の風景を描いた暗い色調の絵やガラス箱に入れた十八世紀頃の帆船の模型を眺めたり、テーブルの上の二、三の美術雑誌の頁をそっとひらいて見たりしていると、鳩時計の秒音がいやに高く聞えるのでした。やっと廊下にスリッパの音がして、ドアが開きました。

「いらっしゃい。真理子の姉です、梢と申します、よろしく」

栗色がかった重たそうな髪を背中に垂らした、三十前の大柄な女で、青いワンピースの胸を纏った太目の緋のベルトが際立った感じでした。華者な体付の真理子とは違い、豊満な肉体のどっしりした厚味が私を気後れさせました。

「煙草どうぞ」

梢は籐編みの椅子に坐ると、直ぐぱっと脚を組んで楽な姿勢になって、精巧な彫物をし

た煙草のケースを眼で示しました。

「煙草、のみません」

「そう、お酒は？」

「まるで駄目なんです、直ぐ熱くなっちゃって……」

「ほほ、真面目でらっしゃるのネ」

白い齒並を見せて、梢は朗かに笑いましたが、笑いながら、その眼は私の体から離れない、どこかしら粘り気のある人柄が予想されるのでした。梢に専攻の学問や学生生活について色々聞かれるうちに、私は未知の女性に対する羞恥と、もうこんな場合に病のように兆す劣等感の虜になって、心が硬くなって来るのでした。

陰気な少年のように受け答えの悪い私に、梢はいたわるような、またあまり静かな口調が薄気味悪い程の扱いで、週に一度木曜日、コペを読んであげましようと言いました。私は真理子が来てくれるのを心待ちにしていたのですが、私をこの部屋に導いたきり出て来ません。段々居心地が悪くなって、帰ろうと思って腰を浮かせました。その時、庭に人声がして、真理子の高い笑声が聞えました。半ば開いている窓ガラス越しに見ると、薔薇苑の間を真理子が一人の少年を追って、赤い着

物の裾をひるがえして、駈廻っているのでした。乳色のスポーツシャツを着た均整のとれた体格のその少年は薔薇の花盛りの苑のあちこちを羚羊のように素早く逃げ廻りながら次第に足が遅くなって、到頭燃えるような真紅の薔薇の陰で、裾を乱した真理子に捕らえられ、羽交締にされて甘えた悲鳴を挙げるのでした。それは私には絵のように美しい乙女と少年の稍しどけない遊びとも見えたが、もっと何やら淫らな悪魔的な戯れにも似た印象も同時に受取ったものです。それは更にあの紅薔薇が白薔薇を抑え虐げているかとも思える、この家の庭の花苑の感じに通うものもありました。

こうして私は木曜日の午後二時間、梢にフランス語を教わることになりました。教授法はA・Fと同様、時間中は日本語を一切使いません。生徒は私一人でしたが、初めて志賀家を訪ねた日に薔薇のアーチの下で擦違った青白い大学生も、薔薇苑で真理子と戯れていた少年も私と違う日に梢から仏語教授を受けていることを間もなく知りました。そればかりでなく梢とその語学の弟子たちと真理子がある偏奇なクラブをつくっていることも……その頃、私は暫く前に私と同じ大学の英文

科を出た従兄の影響で、漸く文学の世界に惹かれたしていました。従兄が傾倒する鏡花をはじめ、あれこれ学業の余暇に読んで、些か小説ずいていました。哲学書ばかり読んでいたあとなので、一方では虚構の世界を辿るのは空しい時間潰しに過ぎないとも思えたものですが、そのうちに私は潤一郎の一連のマゾヒスティクな小説に深く引附けられていったのでした。私のうちに夙くから芽生え、歳月を経て幾つかの経験が加わって、愈々枝葉をひろげる樹となった、そんな揺がない位置を私の内側に占めるに至った女上位の思想、感情を潤一郎の小説は快くゆさぶってくれるのでした。私は今度は逆に書棚を塞いだ哲学書に埋もれた私の過去の時間をうとましく思うようなことにもなりました。言わばひとつの反動でした。もともと私は中学校で受験勉強に入る以前は新刊の小説本や詩集など屢々買込んだ一応の文学少年だったのですが、右翼的なその中学校の校風は文弱の風を排撃しましたし、私自身一時自分から文芸に向ける眼を蔽うてしまったのですから。潤一郎を読むと私は好きなものに敢てそっぽを向いていた自分が偽善者めいて来るのでした。私は、何時の頃からか往来や電車の中で美しい女に逢



迷惑のような気がして途惑いました。交際らしい交際のない私は、ふと少年時代の遅くまでひそかに愛読した少女雑誌の小説に描かれてあった少女たちの誕生日のパーティーの様子などを思い出して、華やかな賑々しい集いに気後れを感じたのです。

火曜日の夕方、待合を経営している母が月参りの帰りがけに下宿を訪ねたので、私は苛立たしい時を過ごしました。

うと、どうかしてその女と親しくなり、何かでその女を怒らせて、あるいはひどい戯れに誘って、その女の膝下に組敷かれてみたいと言病的な希望が抑え難く湧いて来るような女による被虐を好む人間になっていたのですから。初対面の梢が、椅子に深くかけると直ぐ大胆にその見事な脚を組んだ時、私ははや胸苦しい情念の虜になりかけていたのです。「来週の火曜日の晩、うちでささやかなパー

ティーがあるの、あなたもいらっしゃい」

ある日、教室で私は真理子に誘われました。私が梢の許にいくようになってから真理子は急速に親しみを示して、大学の廊下で行違ふ時など一寸片目をつむって片頬に笑窪の出来る、少女っぽい笑みを浮かべたりするのでした。

「姉さんの誕生日よ」

誕生日の集り、私は嬉しいような、幾らか

ス語のテキストを読んだり、その中の詩を暗誦させられたりする私には神聖な教室でもあるその部屋にはもうアルコールと煙草の臭いが充満しているのです。それは私が予想した少女小説的な静かな、清潔な誕生日のパーティーとは凡そ掛離れた頹廢の淀みを予感させる光景でした。客は二人の大学生と一人の少年で、私は早速彼等に紹介されました。大学の一人は、あの痩せぎすの顔色の悪い男で

私が遅刻して梢の部屋に入った時、私が梢の前でフラン

梶田と言いました。他の一人は背は低い、筋骨隆々たる立派な体格の男、皆は花岡と言った。カトリック系の大学に学ぶこの大学生は、臭い息を吐きかけて私を初めから気色悪くさせるのでした。少年は何処か不良じみた感じを身の廻りに漂わせていましたが、能楽師の子で、顔立は驚く程美しく、襟足が殊に初々しく見えました。草色のセパレーツの胸に真紅の薔薇を挿した真理子と、水色の単衣を着た梢は明るい灯影に輝くばかり綺麗でした。アルコールの駄目な私はテーブルの上のお菓子を食べるだけでしたが、姉妹は盛んに葡萄酒を飲み、真理子は勝気そうに瞳を光らせて、雪夫と言うその美しい少年に何か絡んだような物言いをしているし、梶田とヘラクレスは「誰が為に鐘は鳴る」を話題に、頻りに書生ばい議論めいたものを展開するのです。時々、倭人のような醜い下婢が老ばれた足取りでビールや果物などを運んで来ては、梢に何やら囁いたりして、またよたよたとドアの外に消えるのが私には何だか不気味でした。

姉妹は階段を昇っていきます。緑色の絨毯を敷いた広い部屋に入りました。壁に取付け

た亀灯型のライトの鈍い青白い光の中で、梢は梶田と、真理子はヘラクレスと踊るのです。雪夫は神妙な面持で、しコード係を勤めました。

「あなた踊れないから可哀相ネ」

ゲッツイ楽団のタンゴのリズムに乗って、軽やかにステップを踏みながら真理子はヘラクレスの肩越しに言いました。私は真理子のあでやかな笑顔に弱々しく微笑を返して、間の悪い思いでした。曾て小、中学校で体操の時間に運動場の片隅で見学しなければならなかった、あの遺瀨ない白々しい経験の蓄積がこんな踊りの場の片隅の椅子にかけた私の心を重たく閉ざそうとするのです。仄暗く青い光に包まれた二組のダンスは、次第に熱っぽく、私のようにダンスを見慣れない者には鮮やかな技巧と言うより、どぎついぐらいの性的な連想を誘いもする深海の底の人魚の舞でした。長い憂鬱な時間が私の上を過ぎたようでした。

「さ、もういいわ、猛獣狩よ」

『カプリの島』で踊り終ると、パーティーの主賓と言うより進行係のような口調で梢が言いました。猛獣狩？それは意外な言葉でした。

私が自分の耳を疑っている間に、真理子と雪

夫、ヘラクレスが姿を消しました。

梢は自分でレコードを選び、アラビヤ風の曲をかけました。きっと変ったことが始まるのだろうとは思いましたが、間もなくドアが開いて、先ず紺の厚手のパンツ一枚になったヘラクレスが獣のように這い込んで来て、その後からピンクの袖なしに黒のキュロットと言う姿に変わった真理子が右手に長い革の鞭を持ち、人間馬になった半裸の雪夫の背中に跨って登場した時は流石に私もびっくりしました。雪夫は膝頭や向こう脛を庇う為でしょう。野球の捕手が用いるレガースに似たゴムの脛当てをつけていました。

「う、う、う、わんわんわん」

雪夫は猶犬の役目も兼ねているらしく喚き立てながらヘラクレスに迫ります。ぴゅっ、ぴゅっ、と真理子が鞭を鳴らします。中学校では相撲の選手だったと言うヘラクレスは、ずんぐりした頑丈な体を追い立てられ虐殺されるようにする一頭の獣と化せられて、広い草原を象徴するような緑の絨毯の上を右往左往します。そのむき出しの黄色い背中へ真理子の鞭が唸って、忽ち一条二条鞭の痕が皮膚ににじみ出て来るようでした。逃げ惑う無抵抗のヘラクレス。真理子の踵で脇腹を蹴られて、

息を弾ませながら人間馬のガロップを強いられる雪夫。鞭はヘラクレスのパンツの尻にもきびしい音を立てるのです。レコードが二回かけ代えられ、鞭が愈々荒れ狂って遂にヘラクレスが呻き声と共に長々と俯せに延びてしまいました。その大きく息して喘ぐ背中に真赤な血——と見えたのは、真理子が髪に挿していた紅薔薇の一輪が落ちたのでした。もう参って動けそうもない雪夫の尻を平手で叩き叩き真理子が退場すると、続いて梢が梶田を伴ってドアの外へいきました。私は初めて見る迫力のある鞭打の光景に全く気を吞まれてしまいました。

「今度は盲レスリングですよ、ほほほ」

何時入って来たのか老婢が私の耳許で言いました。

白いワンピースに着替えた真理子が席に戻るのを待っていたように梢が荒々しく梶田の手をひいて部屋に駆込みました。先刻の飲酒で大分酔っているらしい梶田は、貧弱な体に褐色の海水パンツをしたきりのみすばらしい恰好で、両眼にかけられた黒い眼帯は尚粘着力の強そうな飴色のテープで固く抑えてあるのです。その元々非力な上に眼を奪われた梶田に紫の海水着姿の白晳の手足を悩ましく

眩いライトの光に浮き立たせた梢が無言で襲いかかったのです。蹴飛ばしたり、足を取ったり、背後に廻って男の首に胸を巻いて引倒そうとしたり、ボクシングもどきに拳を固めてしたたか脾腹を打つなど、酔が廻って足許の覚束なげな梶田を散々に痛めつけるのでした。見ているうちに私は梢の攻撃ぶりが真理子のヘラクレスに対する鞭打の仮借ない激しさに較べて、多分に演技的であることに気付きました。例えば女の執念を思わせる女郎蜘蛛の踊り、脂濃い動きを展開する異国的な舞踊のひとこまが頭に浮かんで来たり、あるいは江戸時代に興行されたと言う盲人と女力士の取組の模様などを想像したりして私はすっかり好奇心に憑かれてしまったのです。私の心の襞に隠れている暗い情念が唆かされ、突動かされて、常の私なら不具の悲しみから一応嫌悪する筈の座頭力士と女相撲の取組など連想させられる俄盲の梶田を痛めつける梢の荒っぽい攻手に内心喝采を惜しまないのでした。いや、こんな風に女が強者の立場に立って抵抗力を殺がれている男を虐げる場面こそ実は私が人知れず熱っぽく空想し、そうした場面を描いた絵や物語に屢忘我の刻を送っていたところの願ってもない光景であった訳で

す。梶田はこれも充分に演技的に散々暴れた挙句、遂に力尽きた恰好で倒れたところを梢が得たりと馬乗りにならぬように組敷いて、それで梢のフール勝になりました。それから前の部屋に戻って、一同焼肉料理を食べたのです。倭小な老婢と葡萄酒に頬を染めた雪夫の給仕で、驚いたことにはたった今あれ程痛めつけられたヘラクレスも、梶田も何事もなかったようににこにこ笑いながら少々下品な冗談な飛ばすではありませんか。六月の生温かい風が窓から滑り込んで、私は梢に無理にすすめられたウイスキーの酔で眼が廻りそう。しかし、私は火照る頭の隅で、真理子が狂燥のあとの冷やかな表情を浮かべて、黙っているのを気にかけていました。あの騒ぎの中の只一人の傍観者であった私の隠している望み、欲望の渦を見透しているような眼の光、私は真理子をこわい女だと思いました。

詩誌『風土』に私は一篇の散文詩を投じました。嬌慢な美貌の王女が森番の少年を戯れの愛の言葉で欺いて死なせようと言う小説的な作品でした。私は書く前に好きな謡曲『綾の鼓』を頭に置いていました。「この間、驚いた？ 私たち時々あんなことして遊んでるの。梶田さんとヘラクレスは何

時もああ言う役よ。姉はフランス語の教授料も取らないし、御馳走もする代りに二人に道化役をやらせるの、雪夫なんか、もっとひどいことされてる……」

学校で真理子に逢うと、恬然とこんなことを言うのでした。もう夏休みが近く、校庭のポプラの木あたりで蟬が鳴いていました。(それにしても少しひどいぞ) 私は真理子に激しく鞭打たれるヘラクレスの背中や梢の豊かなお尻に敷かれた梶田の瘦せた体を眼の前に見る思いでした。真昼の光が私を常識的にしていました。

「それに第一あの三人はマゾなのよ。女にいいめられたいんだからあれで満足してるの」
真理子はこともなげに言うのです。淡い紫の羅のせいで顔色が一層白く、手弱女と言う言葉が似つかわしい容姿なのに……。何とも言えぬ怒りと悲しみの混合した感情に瞬間、私の頭は熱くなりかけました。真理子が嘔くように言った通りの二人の性格であるならば、二人は私の仲間なのだ、私は眼底に彼等と私を繋ぐ血のように赤い絆を見る思いでした。

「あなたはどうか？」
ふと立止まった真理子に私は顔を覗かれま

した。短か目の髪に結んだ黒いリボンが少し強い風に吹かれてそれは揚羽蝶のようでもありました。折柄校庭に人影はまばらで、私は何故か不意にすうっと自分が密閉された部屋の中に閉籠められるような拘束感を覚えたものです。黙って私は眼を伏せました。

「あなたの今度の詩……あなたの気持がよく出てると思った、私には初めから解ってたけど」

真理子は瞬きを止めた大きな瞳で私を見詰めます。

「私、あなたを責めてみたい。あなたみたいな体の人をいじめてみたい」

蒸暑さを呼ぶ蟬の声が途断れました。私は過ぐる晩に知った女の不思議な正体を、今改めて見せつけられた驚きを急には鎮められずに、アーチの下、掲示板の方へ焦点のない視線を送っていました。

フォーヌ(半獣神)の会、そんな大袈裟な名の偏奇な戯れのクラブの会員に私も加わりたい旨を主宰者の梢に私が申出たのは、それから間もなくでした。ノルマルな情欲の持主には気違いじみた愚行としか思えぬ被虐愛の淵に私は我が身をとっぷり浸けてしまいたかったのです。私は自分の生きている時代が憂

鬱でならなかった。蔓延る軍国主義の下では、私のような跛の片輪者は兎角引け目を感じがちでした。大学では退役陸軍少将の教官が巾を利かして、時には学長以上の権力を揮うかに見えましたし、時勢に便乗しようとする教授のある者は戦争は文化の母だなどと教壇で公言する始末、破壊と残虐を肯定するその力の哲学に私は弱者の一人として抵抗を感じました。が、抵抗を感じながら私は自分が時代に合わない虫けらのような存在であることを自覚して、何と言うことか、そこに一種の被虐の喜びめいた、ひりひりする錯乱した自己否定の快さをも味わっていたのです。

夏休みに入ったある雨の午後、私はフォーヌの会の会員資格を得る為、烙印を受けました。縫包の犬の玩具や京人形、様々のこけしの並んだ違い棚の上にローランサンの複製が若い女の居間らしい甘いムードを醸している。真理子の部屋の黄色い絨氈の上に私は俯せにされ、両手は真直ぐ上に伸ばして、雪夫に抑えられ、両足は梶田の青年らしくない骨張った手で固く抑えつけられました。背中にはヘラクレスがまるで猿蟹合戦のあの悪い猿を押伏せた臼のようにどっしり跨って、身動きもならぬ私のお尻の右側に真理子が髪をウェー

ブする時に使う鑊で小さくFと烙印を入れたのです。肉の焦げる異臭、真理子は喉の奥で、くくと笑ったようでした。封建時代の刑罰の有様など一瞬私の頭を掠めました。

「ネ、割に派手なパンツしてるじゃない」

烙印が終ってズボンをはく私に、真理子の机に腰掛けて一部始終を眺めていた梢がにやっと笑って声をかけました。自分から望んだ苦痛の洗礼ではあったのですが、立会人と言ふより傍観者のような梢の冷やかな眼差に逢って、私は俄に堪え難い屈辱を感じたことでした。が、そんな心の屈折を認る暇もなく「さ、今日はあなたがライオンよ、向かって来るとも逃げるともなさいよ、早く、射ち殺すわよ」

雪夫の背に飛乗った真理子に急立てられて、部屋から廊下へ四つん這いになって逃げ出した私です。私ははや些かの自意識もない操り人形然とした演技者と化して、膝小僧をどつどつ鳴らして、よく磨かれた廊下を逃げ惑うのでした。

「ほうほう」

人間馬雪夫を駆る真理子の手にした革の鞭が忽ち私の背を尻を滅多打に打据えます。獣を追う勢子を気取った野性的な掛声を挙げな

がら……白いワンピースの裾がまくれて、形の良い脚が雪夫の胴を締付けていました。

その夏、私たち、梢を除いたフオーヌの会全員は、外房州の農家の離れに暑を避けました。私たちは比較的規則正しい生活をして、午前中は各自の勉強に過ごし、午後は砂原へ出て球技や水泳を楽しむと言う具合で、あまり夜更かしはしませんでした。ここで女一人の真理子は夜はその家の母屋に泊りました。当時しつこい不眠症に悩んでいた私は同じくひ弱な体質の梶田と一緒によく暁暗の浜辺を歩くうち、色々志賀家のことを聞かされました。

梢が我々と行を共にしなかったのは、パトロンであるドイツ人と箱根へ行くことになっていたからだ。

真理子には海軍将校の許嫁がいる。

梢をサジスチンにしたのは以前彼女が勤めていたフランス系商社の某重役の悪癖が彼女のうちに潜んでいた残酷な心を目覚めさせたのだ。

しかし、本当に残酷な心情の持主は真理子だ、彼女は今にペットの雪夫を片輪にしてしまっただろう。

その他、姉妹をめぐる人事、経済に関する

ことどもを多分臆測も交じっているのでしょうが、野次馬的根性さえ窺える調子で梶田は喋ったのです。そして意外にも

「僕はマゾヒストなんかじゃない。実は梢さんから学費の援助を受けているんだよ。あんな頹廢的な遊びは大嫌いなんだが……」

と言ひ、自分としては学業を中途で放棄しても大陸の戦線へ行つて、国家の為に死にたいなどと、更に私を驚かせる真偽の程も計られぬことを言い出すのでした。

「でも君は兵役は免かれると思うけど」

私は思いもかけぬ梶田の意気込みに一応庄されながら言いました。

「いや、僕は志願しても出征するんだ。僕には實際ヘミングウェイのような冒険を愛する気持があるんだ」

静かな海の空は美しい朝焼でした。

「ニュース映画で、戦争のフィルムを観ると僕は実に興奮するんだ」

私は腹の中で笑いました。梢との盲レスリングで梢に組敷かれた時の梶田の恍惚とした表情を見ている私には梶田がマゾヒストでないとは思えません。海辺へ来る前にあの遊びをした晩も終りに梢対梶田の取組があり、梢は透き通る程の絹のキュロット一枚の

汗ばんだ体で、梶田を組敷きましたが、フォールまでの時間を楽しむかのように両足をばたつかせて藻掻く梶田の姿は淫靡とも滑稽とも見えました。未だみんなでするこうした遊戯に充分馴染めない私はじたばた演技的に足掻く男の姿をじっと眺めていることが気恥ずかしくてならなかった。真理子の容赦ない鞭打にも会員の環視の中ではしんから陶醉出来ず、私には鞭打より一層好ましい美女馬乗りの光景にも意気地なく怖気づいてしまうのでした。

雨が降ると、私たちは麻雀やポーカーをしました。勝負事は何でも好きな真理子は、段々気が乗って来ると男の子のように胡坐をかいたり、大胆な立膝で浴衣の間から海辺の日にも焼けぬ青白い太腿や光る絹のズロースのはしを覗かせたりして、その伝法な姿は、和服でしとやかに大学の廊下を歩く女子学生の姿からは一寸想像出来ないものでした。私は元来勝負事が嫌いですし、第一負けてばかりいるので、小額ながらお金を賭けてやる麻雀、ポーカーでみんなの良い鴨にされていました。それでも偶には私も不思議なくらいつくことがありました。恐らく鴨に全く戦意を喪わせない為の配慮がみんなの頭にあったので

しょうが、そんなことに気付かぬ私でもないのにその場は殊更にはしゃいで「久々の快勝だ、いい気持、僕、海岸を散歩して来よう」

などと言って、子供じみた勝逃げをしましたから、また味噌っ漬のようにみんなに軽んじられるのでした。そんな私が得意になったある時、私のあとから梶田とヘラクレスが散歩に出て来ました。雨は小糠雨で、沖合に駆逐艦らしい黒い船が白波を立て、遠い空に鈍い爆音が籠っていました。

部屋へ帰ると西瓜が切ってありました。どう言うものか私はあまり西瓜を好みません。頻りに美味しそうに食べる梶田とヘラクレスを尻目に、少し出っ歯な梶田は、西瓜やソフトクリームを食べるのに都合がいいなどと独りで可笑しがっている、裏口から雪夫が二つ割りにした西瓜のひとつを大事そうに捧げ持って来たのです。

「これ、麻雀大勝のお祝酒のしるしよ、どうぞぐっと飲み干してネ」

雪夫から受取った西瓜の大盃を真理子はおどけた身振りで私に捧げました。西瓜の果は綺麗に抉り取って、そこへ青臭い山羊の乳が一杯入っていました。私は何か不潔な感じが

して尻込みしましたが、真理子に押付けられるまま眼をつむって一気に飲んでしまったのです。奇妙な味でした。私はうっともう少しでもどしそうになりました。真理子はじいっと私の口元から眼を放しません。それから雪夫と顔見合わせて、にっこり笑いました。瞳が潤みを帯びて妖しく輝いたようです。

「いいもの飲んだネ」
雪夫の顔にも会心の笑み、満足そうな微笑が浮かびました。そして、いきなり突立ちあがり、手を拍って、

「ある時山路の疲れにや、この水をなにとなく掬びて飲めば、世の常ならず、心も涼しく疲れも助かり、さながら仙家の薬の水も、かくやと思ひ知られつつ」

と、謡曲『養老』の一節を口遊みながら部屋をひと廻りしたのでした。呆然とした私の肩に手を置いたヘラクレスが小声で「ネクタールさ」

と、教えてくれました。私は自分の胃袋の中に、琥珀の花が毒々しく開いたのを、まざまざと見る思いでした。

秋。学校が始まって間もなく梶田からハガキが舞込みました。

△△では失礼、兎も角愉快的な夏ではあ

った。僕は前から体の具合が悪かったのだが、大学病院で診て貰ったら肺浸潤だそうだ。

左側のルンゲの上の方に空洞らしきものも見えるなんて、大分嚇かされた。で、ことによると××高原のサナトリウムへいくかも知らん。あそここの所長が死んだおやじの親友だったから何とかしてくれるんじゃないかと期待している。尤もプチブルの患者の多いあそこで僕がどんなに惨めだか、想像にあまるけれど……

私は貧しい梶田に病氣と言う不幸が加わったことに同情を禁じ得ませんでした。



木曜日の午後、梢のレッスンを受けにいくと留守でした。

「昨日急に出掛けたの、京都から奈良の方、

うネ」

真理子は言いました。灼熱の夏が去って、大気が澄み渡るように女の瞳も清らかに沈ん

スケッチブック一杯にしてくるわ。あなたに悪いって言ってた、だから今日はゆっくりしてって。何か御馳走するわ」

真理子は丁度詩の雑誌の編集をしているところでした。少し開いている窓から庭の木犀の匂いが漂うて来る静かな日でした。そのままひと句切りつくまで原稿の整理を続けている。海老茶のセーターに襷の多い紺のスカートの女の後姿を私は暫く見ていました。

「さア、いいわ、紅茶でいい？ ああ、それから今日は普通の友だちとしてお話ししましょう」

だ色に見えました。が、私は恋人と逢った若い男が話の間に接吻や抱擁を早くも思わずにはおれないように鞭打を考えずにはいられませんでした。革の鞭、籐の鞭、竹の鞭、麻の鞭、いばらの鞭、稷の鞭、九条鞭、ゴムの鞭……私は真理子が例の倭小な老婢に何か言付けにいった間、ひとり様々な鞭の唸り、その味に思いを傾けていたのです。

「あなた、錦絵なんか興味ない？」

「あまり見たことないが」

机の引出から真理子は大版の錦絵を出して来ました。絵は殆ど私のよく知らない歌舞伎役者の姿や芝居の一場面を描いたものでしたが、中の一枚にいたく心惹かれる、私の嗜好を満たしてくれる絵がありました。それは大奥の女中の夜廻りの図で、暗い夜空の下、白鉢巻に纏がけの頭らしい女中が白馬に跨って、伴の女中たちを従えていく颯爽とした姿が私の美しく強い女への憧憬の念を弥が上にも掻立てるのでした。真理子は錦絵の話から江戸

の遊女のことなど、さきに国文科を出ているだけあって、軟文学の知識のあるところを見せて、妓の指切りの話などしました。私と真理子の奇妙な約束がそんな話題に挑発されたように結ばれたのは、その時分の私の一種自己放棄的な心の動きからでした。

「あなた、私のことどう思ってる、好き？」

真理子は突然聞きました。悪戯っぽい、しかし何処か真剣な眼差が女にこう言う言葉をかけられたことのない私を口籠らせました。

〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集 大名刺判(9×6.5) 印画紙焼付

各組一枚一組(全部送料共)

一組	五枚	三〇〇〇円
二組	十枚	五〇〇〇円
三組	二十枚	一〇〇〇〇円
四組	三十枚	一五〇〇〇円
五組	四十枚	二〇〇〇〇円
六組	五十枚	二五〇〇〇円

Y1	全裸荷造棒しぼり	(大塚啓子)
Y2	乱れ黒髪裸見本	(大塚啓子)
Y3	観念した胡座	(大塚啓子)
Y4	見事な飾り物	(大塚啓子)
Y5	浴室股間縛り	(大塚啓子)
Y6	麗しの緊縛裸像	(愛川悦子)

Y7	逆十字後手縛	(愛川悦子)
Y8	裸身の捕われ人	(愛川悦子)
Y9	逆エビ後手足吊り	(愛川悦子)
Y10	全裸ねわの縛り	(田中芳代)
Y11	なまめかしき緊縛	(花坂道子)
Y12	全裸フトンむし	(大塚啓子)
Y13	蒲団實裸またぎ	(大塚啓子)
Y14	初々しき裸全身像	(岩井知子)
Y15	ヌード股間しぼり	(絹川文代)
Y16	全裸脚掌股間縛	(絹川文代)
Y17	セーラー後手縛り	(川辺砂登子)
Y18	庭園ヌード縛り	(絹川文代)
Y19	全裸全身軀自慢	(愛川悦子)
Y20	豊満双丘くらべ	(愛川悦子)
Y21	追いつめられた裸女	(愛川悦子)
Y22	逞ましきヒツプ	(愛川悦子)

Y23	大の字晒し	(絹川文代)
Y24	縛り正面正坐	(絹川文代)
Y25	胸のポリウム自慢	(愛川悦子)
Y26	麗人受難の巻	(益田房子)
Y27	もうこれで許して	(益田房子)
Y28	むしろれたスロース	(花坂道子)
Y29	全裸縛りの全身	(平野笑子)
Y30	鎮座する縛り女神	(平野笑子)
Y31	囚女後手縛り	(大塚啓子)
Y32	全裸強烈股間縛	(絹川文代)
Y33	ベツド縛りのポーズ	(絹川文代)
Y34	開股一番一直線	(絹川文代)
Y35	縛り腰巻色模様	(絹川文代)
Y36	亀甲股間縛正面	(絹川文代)
Y37	全裸椅子またぎ	(田原美佐子)
Y38	妖艶闊のしぼり	(絹川文代)
Y39	椅子またぎ裸後手	(田原美佐子)
Y40	強烈後手首編締	(田原美佐子)
Y41	ハダカ縛り人形	(絹川文代)

Y42	濃艶ハダカ縛り	(絹川文代)
Y43	あられもなき開股	(大塚啓子)
Y44	全裸変形間正面	(大塚啓子)
Y45	後手立木縛り	(村井知可子)
Y46	全裸後手壁ハリツケ	(愛川悦子)
Y47	全裸寝台羞恥責め	(花坂道子)
Y48	振袖令嬢後手責め	(花坂道子)
Y49	長襦袢後手しぼり	(花坂道子)
Y50	ワンピース縛り	(花坂道子)
Y51	手吊り裸身の乱舞	(絹川文代)
Y52	柱縛り観念の図	(絹川文代)
Y53	不行儀姿態の美	(絹川文代)
Y54	カメラに晒す全裸	(大塚啓子)
Y55	緊縛女体の開陳	(絹川文代)
Y56	膨隆突出した臀部	(絹川文代)
Y57	前手錠全裸像	(大塚啓子)
Y58	股間縛開股の絵	(絹川文代)
Y59	聖壇のさらし者	(絹川文代)
Y60	エビ責めの表情	(絹川文代)

真理子は俄に硬張った顔になって、へんに間
のびた声で言ったのです。

「ね、私のこと好きなら誓ってよ。指を一本
切って」

私は全く吃驚しました。

「ね、私が切ってあげるわ、よく切れる短刀
ですばつと切ってあげる。日本が支那に負け
たら私切腹しようと思っているのよ。その時
に使う短刀でやっただげる」

芝居の台詞みたいだ——と、私は今度は一
気に説得調に言う真理子の唇の動きを、その
言葉に現実感を認められずに眺めるばかりで
した。でも真理子は大真面目で

「あなたの指、切らせてくれれば、私も私の
一番大切なものをあげるわ」

妖精のような魅惑的な科を小柄な体につく
ってみせたのです。

その年の秋は雨が多く、じめじめした日が
続きました。私は夜遅くまで鏡花を読み、ま
た取留もない夢想到心に心を遊ばる日々を送りま
した。読書に倦み、夢想の中から醒めると、
スタンドの灯にスポーツも労働もしたこと
のない白い手の指をひろげて、つくづく見詰め
る私でした。左手の薬指、それが真理子に捧
げる指です。ペーパーナイフをその指に当て

て、そこからぱつと赤く血の噴き出る幻想に
浸って、その都度身震いの来るのを抑えられ
ませんでした。一体血を見ることの嫌いな私
であつたのに真理子の鞭打のひたすら征服欲
の満足の為にするような酷烈さに慣れて何時
の間にか血まみれの被虐さえ甘受する心根に
なっていたものか。それにしても愚かな約束
をしたものですが、それ程にも私の自己否定
の衝きあげられるような衝動は時により抑え
ようもなく跳ね狂っていたのです。私は屢陸
上競技でハードルを飛越える女子選手、乗馬
鞭に拍車を光らせる女騎手、女流飛行家、女
流登山家、外国の女レスラー、そんな女たち
の所謂こやしになりたいと思ひました。彼女
たちに生殺与奪の権を握られた一個の家畜に
なり下がる自分を空想することは私を限りな
く悦ばせる心理的自慰でした。私は真理子に
指を一本切られるよりもいっそ薙刀か何かで
首を刎ねられた後、人知れず地下深い穴蔵に
屍を捨てられる情景を想像して、更に自己否
定の陶醉境を彷徨したことです。

約束の日が来ました。午下がりの中央線の
座席で文庫本を読んでいると、何だか乗客が
私のアブノルムを知っているかのようにじろ
じろこちらを見ている。そんな気がして落着

けない私でした。九十九谷にさしかかると、
櫓や櫓が秋の日に落葉しかけていました。

「真理ちゃん留守よ。まアおあがんなさい」
季節に相応しいレンガ色のツウピースを着
た梢に迎えられました。

「あなた真理ちゃんとか何か約束したでしょ」
梢は私の顔をまじまじと見ました。

「馬鹿ね、あんなこと嘘よ、冗談よ。ふふふ、
真理ちゃんってね、小さい時から、時々とっ
ぴなこと言いだすのよ。もともと本気じゃな
くてよ」

私は緊張が急にゆるんで、眼が醒めたよう
に正気に返りました。何と言う馬鹿なことを
しようとしていたことか、それが自分の独り
相撲に終わったのは蓋し当然ではないか、真理
子といえど結局は異常世界の涯の涯までは走
り出ることをしない女なのかも知れない。私
は薬指を喪なわなかった安堵の半面、熱い、狂
った空想を冷まさされて、白々しい日常性の世
界に突戻された味気なさを持余すのでした。

「フエンシングの試合観にいったのよ、真理
ちゃん。はか細い癖にスポーツ好きよ」

脚を組んで、椅子に反り身にかけて梢は微
笑しています。倭小な体を前踢みに老婢が菓
子盆を持って来ました。私が姉妹の家に出入

りしていた間、あの盲レスリングの開始を告げた時のほか私に物を言わなかったこの老女の鈍い動作も志賀家の妖しい空気に適うものでした。

「梶田がネ、病気になったの。氣病だったのネ、ほんとは。××高原の療養所へいったわ。可哀相なことしちゃった」

風が少し出て来た庭に眼を遣った梢の横顔には、梶田を憐む色は出ていません。夏休み

の海辺で、本当に残酷な心情の持主は真理子だ、と語った梶田はことによると梢に優しい心があると思っていたのかも知らん、甘いなア、サジスチンとはそんなものじゃない。私は腹の中でせせら笑いました。

「細かいけど、あれで仲々粘りのある体だったのに。惜しいわ。ところであなたは真理ちゃんに組んだけど、これからは私の相手にならない？」

梢はテニスの相手でも決めるように言いしました。私はフオーヌの会に入ってから、プレーの時はずっと真理子の相手役を勤めていましたが、予てひそかに梢と組む梶田のように女の膝下に組敷かれてみたい欲求を抱いていましたから即座に承知しました。真理子は専ら鞭打に嗜好が限られているらしく、男と組むようなことはしませんし、それにその激しい鞭打のあまりに一方的な嗜虐性の充足が

〔最新版〕 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

各組一枚一組(送料共)

B 1	全裸エビ責仰向け(関谷)	一組一枚	一〇〇〇円
B 2	逆エビ責め全裸像(水本)	五組五枚	四〇〇〇円
B 3	乳首ペンチ挟み(竹野)	十組十枚	七五〇〇円
B 4	後手十字縛肩口上(梨花)	二十組二十枚	一四〇〇〇円
		三十組三十枚	二〇〇〇〇円
		四十組四十枚	二五〇〇〇円
		五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B 5	足の裏擦り責め(竹野)	B 6	おへソいじめ大写真(関谷)
B 7	剥いだバタフライ(関谷)	B 8	貴方に捧げた裸身(大塚)
B 9	乳房責め絶叫苦悶(大塚)	B 10	無防備双手吊り(絹川)
B 11	豊満臀部エビ縛り(水本)	B 12	一糸纏わぬ股間縛り(水本)
B 13	全裸亀甲股間縛り(関谷)	B 14	足踏付け二つ折り(大塚)
B 15	尻突出しムチ打ち(関谷)	B 16	手錠にもだえる(竹野)

B 17	尻突出エビ責め(水本)	B 18	椅子開股鼻責触手(梨花)
B 19	息もつかせぬ猿轡(竹野)	B 20	投げ出した全裸(関谷)
B 21	美しき尻部の露出(絹川)	B 22	首絞めの悦虐境(竹野)
B 23	後手柱縛り脚線美(竹野)	B 24	強制鼻挟水吞ませ(梨花)
B 25	苦悶にねじる裸身(関谷)	B 26	責めに気を失って(関谷)
B 27	さアどうでもして(関谷)	B 28	豊麗乳房膨隆縛り(竹野)
B 29	投げだされた女体(竹野)	B 30	裸身をくびる麻縄(梨花)
B 31	強烈縛りに悦ぶ(梨花)	B 32	全裸逆エビ片脚拳(東浦)
B 33	踏みつけマゾ境地(東浦)		

B 34	すべてをさらけて(関谷)	B 35	ムチ打ち失神寸前(関谷)
B 36	クリップ鼻挟み(絹川)	B 37	台上のマゾポーズ(大塚)
B 38	吊られゆく美体(絹川)	B 39	拷問に無惨な美貌(梨花)
B 40	マゾ女性の表情美(東浦)	B 41	喰い込む股間縄(絹川)
B 42	炎責めに悶える(梨花)	B 43	犠牲台の人身御供(大塚)
B 44	美肌無茶苦茶縛り(絹川)	B 45	裸身に立つ蠟燭(大塚)
B 46	手枷足枷大写真(四方)	B 47	鎖に悶える足首美(柳初)
B 48	蛇責めに柔肌栗然(梨花)	B 49	鼻の玩弄恍惚境(大塚)
B 50	女囚菱縄さらし(絹川)		

りには時に些か反撥も感じさせられた私は、梢と梶田のゆとりのある、大人らしい脂濃さもあるプレーを羨ましく思うこともあったのでした。

「でもネ、真理ちゃんの意向を聞かなくちゃ、あなたをうちに連れて来たのは真理ちゃんだし、あの子はそう言っただけで、不具者をいじめるのが好きなのよ。だけど私は……」私は頬に忽ち熱い血が昇るのが解りました。劣等感が疼き、屈辱的な気分が私の体を固くしました。梢のこれは真理子と同じような黒い大きな瞳に態とらしい憐憫の色が見えた時、私は少年時代、走れない為に野球から除け者にされた時に似た口惜しさに身悶えする程でした。梢はそんな私に年上の女らしい企みのありそうな笑顔で、こう言うのでした。「でもいいわ、私にはあなたの気持は見通しよ、手始めに軽く遊びましょうか。ふふふ、まアお菓子でも召上がれ」

紫の天鵝絨の窓掛けをひいて……。梢はゴムの鞭を用いました。赤い絨毯の上に転がした私を丹念に技巧的に叩くのです。俯せの背、尻、ふくらはぎのあたり。それから爪先で私を蹴って仰向にして腹と股を叩きました。音は大きくてもゴム鞭、而も洋服を着たままで

すので打撃は手ひどいものでなく、寧ろ心地良いくらいな筈なのですが、あまり何時までも続けられたせいか、頭の奥がずうんと鈍く疼きだすような鬱陶しい気分になったのでした。私は鞭打をはじめると間もなく興奮して、う、うん、うんと、まるで自分が鞭を受けているような切なげな呻きをきつく結んだ唇の間から洩らす、熱狂的な真理子の仕方と違って、外科医の冷静さを思わせる梢の無表情な顔を見ながら唯じっと生温いお湯に浸かっているような具合でした。そのうちに梢はぼんと鞭を投げ捨てると、服の裾を捌いて私の頸の上に跨りました。外国婦人のような肉置のいい梢に馬乗りになられたのですから、それにお尻の割目が私の喉仏に当たるくらいの完全に両方の腿の間に私の頭が埋もれてしまう被さり方ですから随分息苦しくなる訳なのに、

梢は膝頭で自分の体重を可成り支えているらしく私はそう苦しくないばかりか、梢の服の繊維の匂い、香水の微かな匂い内腿の白い皮膚の匂いを充分に嗅ぎ、犬のようにそれを記憶することが出来たのでした。梢は私の体の上で言いました。

「こら、愛すべきマゾ君。こうしてあげればさして重くないでしょ、私は真理ちゃんみた

いな乱暴な扱いはしないわ。でもその代り今にこんな具合にして……」

梢のお尻が浮いて、今度は私の顔の上に移りました。顔に着くか着かない程で少しも重味をかけません。

二、三日過ぎて、私は都心の画廊で偶然真理子に逢いました。ヘラクレスが屈強な護衛と言った形で付いていました。中学の先輩の個展で、従軍画家として大陸の戦線風景を描いたものが大部分でした。画廊内の茶房でお茶をのみましたが、私はヘラクレスの右手に痛々しく、繃帯が巻かれてあるのに驚きました。

「どうしたの？ 怪我したの、何で？」

ヘラクレスは弱々しく笑って答えません。

「切ったのよ、この人」

真理子が小さい声で教えてくれました。途端に私は真理子との約束を思い出し、ではやっぱりヘラクレスがやったのかとぞくぞくと体が震えてしまったのです。あの黄色い絨毯を敷いた、ローランサンの複製や京人形やコケシなどで少女風な雰囲気漂わせている真理子の部屋の凡てがはっきり私の頭の中に浮かびました。スタンドのサイドランプのピシンの灯影に、額を寄せた真理子とヘラクレ

乙組七十集

大手札判印画紙(9×13匁)焼付

各組一枚一組（送料共）

Z	Z	Z	Z		一組一枚	一〇〇円
4	3	2	1		五組五枚	四〇〇円
逆猪	囚女	ゴム			十組十枚	七五〇円
エ手	六三	猿			二十組二十枚	一四〇〇円
縛足	号	轡			三十組三十枚	二〇〇〇円
り					四十組四十枚	二五〇〇円
					五十組五十枚	三〇〇〇円
					六十組六十枚	三五〇〇円
					七十組七十枚	四〇〇〇円
(梨花悠紀子)	(柳初子)					
(大塚啓子)						

Z
 2221201918171615141312111098765
 逆手足吊り (東浦ひかる)
 臍なぶり (大塚啓子)
 ハリッケ (梨花悠子)
 無茶な猿轡 (竹野ひろ子)
 裸身の受縄 (前本妙子)
 く の 字 の 足 指 (桜井葉子)
 喰込む白縄 (東浦ひかる)
 強烈荒縄責 (梨花悠子)
 黒縄高小手 (梨花悠子)
 足吊り嬌態 (絹川文代)
 黒髪いじめ (大井小夜子)
 豊満被虐 (大井小夜子)
 全裸後手縛 (東浦ひかる)
 引き回し (東浦ひかる)
 ザリガニ (梨花悠子)
 淫らな縛り (愛川悦子)
 豊臀責め (絹川文代)
 ローソク責 (東浦ひかる)

Z
464544434241403938373635343332313029282726252423

美肌いじめ
鼻ゼメ仰向
恐怖の瞬間
火箸責め
全裸海老責め
ベッドの痴態
足の裏擦り
閨の女体飾り
首絞めゼメ
鼻孔責め
悦虐放心
手枷足ぐさり
寢室のプレイ
猿轡の妙味
首繩柱しばり
巻煙草責め
尻立てポーズ
エビ責
彼女の好物
ワンピース
荒縄竹棒責
浣腸責ポーズ
鏡に映す裸
苦悶に喘ぐ

(絹川文代)
(加茂良子)
(若原明子)
(梨花悠紀子)
(熱海容子)
(絹川文代)
(大塚啓子)
(竹野ひろ子)
(大塚啓子)
(若原明子)
(梨花悠紀子)
(四方清美)
(花本京子)
(梨花悠紀子)
(絹川文代)
(大塚啓子)
(桜井葉子)
(東浦ひかる)
(竹野ひろ子)
(花本京子)
(梨花悠紀子)
(山路ミヨ子)
(大塚啓子)

Z
70696867666564636261605958 5756555453525150494847

恥しさに耐えて（愛川悦子）
ベッ甲の悶え（梨花悠紀子）
亀乳房責（田中芳代）
強烈的全裸晒（絹川文代）
強制的開股縛り（絹川文代）
白肌全裸縛り（絹川文代）
女大生恥態（田中芳代）
縄トゲ責め（梨花悠紀子）
ゴム人形（竹野ひろ子）
胴縄の重量感（桜井葉子）
オムツ逆エビ（田中芳代）
全裸股間縛り（絹川文代）
檻の緊縛裸体（愛川悦子）
セーラー服（梨花悠紀子）
鏡の中の全裸像（愛川悦子）
痛めた全裸像（大塚啓子）
被虐の果て（大塚啓子）
庭園の惨虐（館典子）
荒縄仕置室（梨花悠紀子）
全裸逆エビ縛（絹川文代）
欄間宙吊り（梨花悠紀子）
全裸猿轡（東浦ひかる）
逆十字エビ（大塚啓子）
酔後の緊縛（絹川文代）

ないけど」

ヘラクレスはむっとした顔を俯けて、何も

言いません。

「そうか、えらいことしたネ、でも……」

「ヘラクレスはネ、あなたみたいに兵隊にと

られない不具者が羨ましいんですって。だか

ら自分で切ったのよ、私が切ったんじゃない

わよ、あなた、へんな勘繰りしないで」

真理子の言葉に、私は迎も冷やかな嘲笑的なひびきを感じ取りました。

真理子の葡萄色の洋服の胸にさした小さな真紅の薔薇の造花が鮮かな色合で、それは偏向性愛の谷間に下りていく男たちの一顰の血汐のようにも見えて来るのでした。

(おわり)

マゾ 芸術考——女性男装管見

(女やくざを中心に)

田 島 直 士

本誌三月号の投書に東京の笹千一氏がマゾ的傾向の時代劇作品を挙げて、これらを再現することを提案しておられた。私もこの案にはかなり賛成だ。しかし、笹氏ほどにはこの方面の知識がない私には、どうしても乏しい題材を想像でおぎなっていく他はない。これまで何回かに亘って、この女性男装シリーズを載せてもらったが、今回は日本の時代劇(映画、テレビ、舞台)に現れた男装女性像をあつかって見ようと思う。さて、笹氏のリストにある作品で私が目にしたものは、次のもの

だ。映画「緋ぢりめん女大名」「大暴れ女侠客陣」(以上宇治みさ子)「振袖剣法」(多摩幸子)「琴姫七変化」(松山容子)

私が笹氏のリストから感じることは、昭和初期の映画について、きわめてくわしいということで、年令的にやや若い私には、とうてい望めない作品を沢山見ておられる所から、氏自身があらすじ等をくわしく紹介されることが望まれる。その代り、最近の作品は私の方がくわしいようであり、宇治のものは本誌五月号にかなりまとまった解説をしてあるか

ら見て頂きたい。

さて、ここで時代劇映画の男装をあつかうにあたって一つの制限を設けたい。これはしかし、私個人の趣味から出たものだから御寛恕願いたい。それは、洋服の場合に乗馬ズボンに長靴、剣という一つの基本型を設けたように、時代劇の場合はやくざ姿、つまりムシリのかつらに手甲脚絆、長脇差が必須。三度笠や合羽もあった方がいい。これらはある意味で一番男性的な活動的なスタイルなのだ。丁度、長靴に乗馬ズボン、剣というのが西欧

の中世の騎士以来、現代の軍人にいたるまでの活動的、且つ装飾的な男装であるように。

こうした姿をした時に女性は最も女性としての魅力が出てくるのだ。小姓姿、袴姿はその点で完全な男装とはいえない。やくざ姿をすることは女としてはぎりぎりの線まで行くことなので、悲壮な美しさがある。それはたとえ楽しみ半分にやっているにしても悲壮な感じはぬぐえない。笹氏の挙げられたリストと私の見たもののうち共通の、残りの作品のうち「振袖剣法」はもうすでに終っており、これは殆ど振袖姿、せいぜい若衆姿だったのでこの関連はなく、余り触れないことにしよう。ところが同じ種類のものでも松山容子のものは一寸ばかりちがう。まずこれについてややくわしく述べて見ることにしたい。

1

このシリーズは、三年前からはじまって一応昨年の暮で終わったが、現在、第八チャンネルで再映している。徳川家の一人娘の琴姫が旅に出て諸国の陰謀や悪の根を絶つという物語で、大体二回乃至四回で一つの話が終っている。この劇では、琴姫は題名通り七変化し、ある時は武家姿、ある時は職人姿と姿を変え

るが、その中で手甲脚絆のやくざ姿が大きな比重を占めている。

ところで主演の松山容子だが、テレビで御覧になった方には今更ここで説明するまでもあるまいが、美人である。目が大きく、ややつり上った引きしまった表情であり、笑顔はとてもやさしい。背もすらりとして申し分ない。松竹のニューフェイスであったというが、二軍止りになってスクリーンには余り顔を見せなかったのは何故だろう。今も松竹と関係があるのかどうか知らないが、もう少し活躍させて見てはどうかと思う。もっとも、これだけ一つのタイプに固定されると、今更メロドラマのヒロインにも使えまいが。一昨年の暮に松竹の企画でこれを映画化することになっていたが、その後企画がつぶれてしまったのだろう。（未だに映画化されていないところを見ると）

松山は立廻りがきわめてうまい。女性としての限界ぎりぎりのアクロバティックな剣法をする。一回三十分のうち、十分位がチャンバラで一回少くとも十人は斬っている。恐らく日本の映画、テレビ史上最大の女殺人王ではあるまいか。女剣戟の大江、浅香には、殺した数では及ぶまいが、しかしスピーディに

斬りまくる点では松山の方が上で、時間にしたら最高かも知れぬ。その斬り方が実に相手を見下したように、無雑作に、残酷に斬る。

これが仲々良い。何しろ自分は徳川家の息女なのだから恐いものなしなのだ。相手が悪い奴ならば塵あくたのようにしか感じないのだろう。そういう感じがよく出ている。アクロバティックな剣法の一例を挙げよう。悪人たちに身分を知られ、後手に縄で縛られた琴姫がどうやら牢を逃げ出して番人を当身で倒す。そして後手でその刀を取ると、縛られた手のまま刀をかまえて追手を三人ばかり倒す。助けにかけつけた味方の武士（やくざに扮している）が縄をといて刀を与えると「お前などがいらぬ邪魔をするな」とふくれて見せて、わざわざ刀を捨て、手刀で敵と渡り合い、相手の刀を奪って斬りすてる。そして、ニコツと味方の武士の方を見て微笑み、立てつづけに四、五人を斬ってしまう。又、ある時は長屋の子守を頼まれるが、子供を負ってデンデン太鼓であやしている間に敵に囲まれる。すると、又もや敵の刀を奪い、デンデン太鼓で背中の子をあやししながら相手を平げてしまう。全く板割浅太郎顔負けのはなれわざをやって見せる。大抵、女丈夫が主人公になる場

合でも、介添の男がいて、一番強い敵はこの男の方が倒すことになっているのがしきたりのようだが「琴姫七変化」では違う。介添の男は二番目に強い敵までを倒すことはみとめられたが、最強の相手は姫が斬る。他の相手の時にはあれほど簡単に片付けた姫も、この時だけは苦闘をする。大方組敷かれかつたり、足蹴にされよろめきながら必死の太刀で相手を斬るといような工夫がされている。

これもアクロバットの例といえよう。いずれにしても、琴姫の剣業を中心にした、マゾ的な魅力を最大に出そうとしているのが、この劇の特徴である。

ところで、今のシリーズには登場していないが、去年のシリーズに琴姫の相手役に応募して採用された川俣まさきという娘がいる。

この川俣は、琴姫の侍女役であるが主人と同じく旅の間だけはやくざ姿になっている。これがきわめてよかった。お連という、女やぐさに化けているため、男役でなく、男姿の女なのだがその感じがよく出ているのだ。かつらは丸髷くずしの一寸女らしさを残しており、顔のつくりも男役のようにきつい感じでなく色っぽさを出している。しかも、まだ少女なのでくずれた感じがなく、武家娘らしい凛々

しい所もある。これが手甲脚絆に白い太腿を出して、胸のあたりもやや豊かなふくらみを出しているが、全体的にきりっと堅い感じの男装をした琴姫と対照的で、二人並ぶと愛くるしい姉妹というより兄妹の感じになっている。このお蓮が一度、仇討をする場面があつて、両親をあこぎなやくざの親分に殺されたお蓮がぱったりとその親分に道で出あう。一対一だから剣を磨いたお蓮に親分は二、三太刀合せただけで討たれそうになってしまう。「さあ、いさぎよく斬られてしまえ」と、ドスを振り上げるお蓮に手を合せて命乞いをする。そしてだまし討ちにかけようとする。そこへ琴姫が現れ、その親分と悪大名の間に陰謀がある事をあばく。お蓮は、琴姫に迫ろうとする親分に自分の合羽をぱっと投げ、ひるんだ所を袈裟がけに一太刀。倒れる親分にたもとから小銭を投げ「お蓮、最後の供養でござんす」という。

このシリーズには、琴姫とお蓮の、主従ともつかぬ一種特別な同性愛的な雰囲気さえ漂ってくるようなエロチシズムも感じられた。これが現在のシリーズでは余り感じられなくなっている。女同志の一方、又は双方が男装した場合にかもし出されてくる、どこか甘酸

っぱいような不倫な感じ。倒錯的な感じは、劇作品でももう少し研究されてもいいと思う。この劇では、琴姫がきわめて清純な感じの美人であり乍ら、剣をとれば無敵という、おおよそ考える限りでの不敵さをもっていること。この矛盾した要素をよくつかんでいるから面白いのであって、これが余りに男性化した女にやらせたら効果がうすくなってくることはいうまでもない。映画劇作者は銘記されたい。それ故、女剣戟でも不二洋子、中野弘子などのように男らしい女優より大江の方が人気がある所以なのだ。ただし浅香は体質的にはぼっちやりとして女らしい。これは、セクシヤルな点ではいいとしてもやや不潔である。とはいえ大江もスタイルが悪いし、顔も長すぎる。もつと美人の剣戟女優が出てくることが望まれる。

女剣戟的な舞台、映画、テレビは、中心になるのは何といってもマゾヒズム、それに同性愛的な感じなのだという事。これは動かさないことなのだ。妙に芸術づくのは止めた方がいい。

2

ところで、笹千一氏のリストに多く出てい

る伏見直江、三城輝子、原駒子などは昭和初期に気を吐いた男装女優たちである。当時のことは余り知らぬ私には、これだけ豊富なリストを作られる笹氏に、羨望を感じる事が出来ないのだ。他の二人は知らないのだが、伏見直江だけは、今でもあざやかに記憶している。伏見直江というのはきわめて経歴が変わっていて、築地小劇場出身、山本安英、田村秋子などの大女優とならんでチェホフの「桜の園」に出て、可憐な娘役や水谷八重子が演じたハムレットの相手役のオフィリアなど、きわめて芸術的な出発をしている。ところが帝キネに移り、阪妻ユニヴァーサルを経て阪妻の相手役などをし「丹下左膳」の榎巻お藤などの役をやり、当時としてはエキゾ



チックな容姿が受けた。笹氏の挙げられた「旅鴉お妻やくざ」が何時頃の作品か知らぬ

が、やがて彼女は一人立ちをして女丈夫の役をしたことだけは知っている。戦後はたしか

女剣戦団をつくつて地方巡業をしていたが、出発点を考えると今昔の感があり、盟友、山本安英、田村秋子、後輩、杉村春子の今日を見てどう思っていることだろうか。ところで私の知っているスチールは「女国定」という作品である。これはP・C・Lの作品で、トッキーになってから始めて位のものであるが、多分昭和八年位のものか。

スチールは丸髷くずしの喧嘩髷にして大きなかんざしをぐっとさした伏見直江がきりっと手甲脚絆にわらじをめた喧嘩姿。着物は女物の派手な花模様に、胸元をたっぷりひろげ、たすきをしめている。そして腰にぐっとつつ込んだ長脇差に手をかけて不敵な眼差し

で見すえている相手は、油ぎった貸元風の男。伏見は片足をでんとその家の上りがまちを踏みしめている。如何にも伊達な鉄火な感じである。一寸くずれた感じで目は大きく、鼻は恰好よい程度につんと高く、口は小さいが肉感的である。むしろ、カルメンでもやれば似合いそうな彫りの深いエキゾチックな感じである。おそらくは朱唇火を吐くようなたんかが飛び出しているところなのだろう。艶麗と云う他に云い様がない。私は宇治みさ子の女俠客を高く評価していることは五月号に書いた通りだが、宇治の清楚という感じとは違って凄味が感じられた。宇治の場合は一寸痛々しい感じが魅力なのだが、伏見の姿は女一匹、今から血を呼ばずにはいけないという殺気だったものを与えた。事実そこに群がっている三下をはじめ親分も、この伏見直江に血祭りにあげられるという筋なのだろうと思う。

次に私が書きたいのは実は余り多くを知らぬ、この女優についてではない。「女国定」という題名から受けた連想をもとにしてなのである。「女国定」という言葉は女剣戟が国定忠治をやること。つまり国定忠治そのものを指す場合がある。次に忠治外伝というか、これの変型として忠治の情婦お徳を扱ったも

のがある。これは浪曲、講談で「お徳の仇討」といわれているものである。現在ではよくミ・ワカサ、島ヒロシのコンビがやっている。お徳が、二足のわらじをはいた卑怯な忠治の乾分が忠治を売ってしまったのを憤り、単身男姿になって殴り込み、その男を斬るという勇ましい話。おそらく伏見直江のもこれではなかったか。もう一つは「火の車お万」という、これも忠治の妾か浅太郎の恋人である女俠客の話。これにも色々の話があるのでよくは判らない。歌謡曲の中に永田とよ子が吹込み、不二洋子がせりふを入れた「女国定」というのがあり、これは「上州小町たあ昔のことよ、今じゃあ鉄火な火の車」という文句があるから、火の車お万を指しているのではないかと思う。で、私の見た女俠客映画のうちでは、宇治のものよりも興味深く印象に残っている「火の車お万」という作品について書いて見たのだ。

この映画が作られ、上映されたのは昭和二十九年の東映だった。当時、東映はまだようやく中村錦之助、東千代之介の若衆ラインが出来かかっていた頃で、その後における程に爆発的な人気を得ていなかった。そのためか小品的なものが多く浪曲入りのものを必ず一

本抱合せにしていた。この「火の車お万」はそうした一つである。監督は津田不二夫。主として教育映画を受けもたされていた人が、こういうものをやったというのも興味がある。主役のお万は、驚く人がいるかも知れぬが、メロスターの月丘千秋なのだ。月丘夢路の妹としてデビューして清純な娘役で通して来た彼女にこうした凄い役をやらせた東映は相当の勇氣がある。現在テレビで優しい母親役、年下の恋人をもつて悩む美しい人妻役、聡明で教養ある女流名士などの役をやっている彼女である。もうこの作品だけは二度と上映されることはあるまいから、くわしく論じたい。笹氏も見えておられぬようだし、本誌でとり上げたことはないと思われるから。

封切られたのは二十九年の十一月第二週だったと思うが新聞の広告で、もう一本の大友柳太朗主演のもの（題は忘れた）の陰にかくれたようにそう派手ではなかった。こう書いてあったと思う。「凄艶、斬りまくる！月丘千秋の女旅鴉！」。そして、黒い縞の着物に手甲脚絆の月丘が脇差を半眼にかまえて、相手の利腕をむんずと握んだスチールが出ていた。顔はそれほどはつきりしなかったが、何時もの千秋よりも姉の夢路に似ているような

印象だった。それからすぐ、NHKの何かの番組で姉妹対談があり、千秋は「今度、勇ましい役をやっているの」と恥かしげに話していた。

ストリーを紹介して見よう。上州国定村の一軒の造り酒屋に二人の娘をもった父（明石潮）がいる。姉のお万は先妻の子なのだが妹に後を継がせようとわざと酒を呑んだり、バクチをしたり男まさりと剣道を習ったりして父に愛想をつかさねるよう振舞う。そしてある夜、火事の時、火の中から子供を助け出したことから「火の車お万」という異名をとり、この機会に刺青を肌一面にする。そして父からは勘当されてしまう。一方、国定村には忠治（広沢虎造）の他にもう一人の悪親分（佐々木孝丸）がいて、これがお万を自分のものにしようと狙っている。

ある晩、賭場が開かれ、その親分もお万も出るが、いかさまサイコロでお万は金を全部取られてしまう。遂にお万は片肌ぬいで「これを賭けよう」という。ところがこれにも負け、にやりと笑った親分が暴れるお万をじり抱こうとする時、板割の浅太郎（高木二郎）が現れ、お万を助ける。そして二人は仲良くなる。やがて忠治一家は旅に出るが浅太

郎はお万に決して刀を抜かない事を誓わせ、指にこよりを巻いていく。その留守、悪親分は、忠治のいないのを良い事にしてお万の父に難癖をつけ、妹を奪った上、父を斬る。その知らせを受けてお万は父の遺体にとりすがって不孝をわびる。そして、はったと天の一角を睨んだが、やがてこよりをいさぎよく取ってしまう。次の場面はその悪親分の家である。佐々木孝丸は憎く憎くしい顔で「あの造り酒屋を手に入れる事が出来て、やがて父がいなくなればお万も気が弱くなって、こっちになびくだろう」というようなことをいっている。

次の場面はその家の門、見張り番が一人立っている。と、一人の人影がすくくとその前に立つ。三度笠で顔を覆っている。あとはきりっとした喧嘩支度。「手前は誰だ！」とふるえ声で門番が叫ぶ。すると三度笠をはずすとむしりのかつらにしたお万の顔が現れる。真白いすき通るように美しい顔、怒りに燃えた大きな目。きりりと結んだ唇、「美しき怒り」とでも名づけたいような表情。「あっ！手前は……」とおののきながら背を見せて中にかけて入る門番の後からぱっさり一太刀。その死骸を踏みこえて長脇差を手にしてかけ込

む。そして騒ぎに驚いて出て来た乾分共を斬りすて斬りすて、中に踏み込んでいく。

御承知のように東映の立ち廻りは、きわめてダイナミックで、一所に立ちどまって「エイヤッ！」などというものはなく、走りながら片手に持ったドスで左右にないでいくという形をとるものが多い。この場合も殴り込みであるから、そういう演出をしている。この立ち廻りに力を入れたらしく一時間半のうち十五分位持たせた。千秋のお万は、豊満な肉体の割に身軽に活躍してたが、やや汗ばむような感じも出していた。そして、同時にその汗ばみと共に、いささか甘いような体臭が匂ってくるような感じさえ与えた。月丘千秋という女優はそういう女優なのだ。手甲脚絆で白い太腿をあらわに出している。彼女は平素からスポーツが得意なだけによくひきまつた脚をして居り、すばらしいエロティシズムがあった。

そうしているうちに急を聞いて駆けつけた国定忠治一家が助太刀するが、浅太郎を見ると、お万は手をあげて「浅さん、御免よ！」と叫ぶ。この立ち廻りの中、お万が物を云うのはこれ一つである。「野郎どもかかつてこい」とか「ごめんなすって」とかタンカを切

るのもいいが、こうしてリアルにやっているのも面白いと思った。そしてあらかた乾分共を平げてしまおうとお万と親分との一騎打ちとなる。佐々木孝丸という人は、新劇運動をはじめた人の一人であり、独学でフランス語をやったスタンダールなども訳したことがあるというインテリなのだが、こういう卑劣な役をやっても仲々いい。一方の月丘にしても毛並がいい。こういう対決は悪くあるまい。丁々発止とやり合うが、お万は北辰一刀流の腕前、見事にしとめてしまう。そしてお万は浅太郎と抱き合う。やがて、旅立ちして行く国定忠治たちにまじって旅姿のお万もいた。というところで終わっていたと思う。

その後、月丘はこんな役をやったことはない筈だ。何時か新聞のテレビ版で、プロデューサーに一人ずつ自分のひいきのタレントを挙げさせ語らせるのがあったが、その時月丘千秋を挙げた人が「こんな美しい人に一度でいいから時代劇で刀を使わせたい」と云っているのを読んで、この人は、この「火の車お万」を知らなかったのではないかと思った。こういう思いがけない映画も作って見たらいいのではないかと思う。

これも未見のものが戦前、轟夕起子の主

演した映画で、彼女のデパートガールが空想して、国定忠治になったりするのがあったという。浅丘ルリ子などは勝気な感じなので、やくざ姿など似合うと思う。

それから最近、レコード歌手でやくざものを歌う女の人が多くなって、渚幸子というのは常に自ら女やくざの恰好をしている。松山恵子も歌によってはやくざ姿になる。藤野たつ美という美人歌手は、やくざの歌を歌うにも女姿だが、こういう人にこそ男装をさせた。美人歌手といえば、この頃冴えなくなった藤本二三代は地方では、よく女剣戟そのものの大立廻りを、だしものにするということだ。まだまだこの分野での探究は残っていると思う。

3

それでは、ここで比較的最近に属する女やくざ姿が登場する映画を見よう。最近の作品では、真正面から女やくざが主人公になっている月丘や宇治のようなものは少いようだ。二つに分けて(一)コミカルなもの。(二)現代劇の中で、女剣戟の舞台が出て、その中に登場するものに分けられる。まずコミカルなものは、中田康子のものが挙げられるだろう。こ

れは東宝の「灰神楽三太郎」シリーズで、三木のり平の三太郎の恋人役のまりりん亭お紋という役としてである。このシリーズは相模太郎の浪曲をもとにして作られたもので、次郎長の乾分の中の、間抜けな三太郎の陰になり日なたになって助ける茶屋娘がお紋である。三十一年から三十二年まで四本製作されて、その度に男装して女やくざとして登場している。中田康子はグラマーで、現代劇では余りに淫らな感じがするが、このシリーズの扮装では三番目位からきりりとして割によくなってきた。最初の頃、わざとふざけて腰を振ってモンローウオークをまねたりしていたが、後にはさっぱりと男らしいいなせな恰好で、却って女らしい色気を出していた。この人は唇にぬれたような色気があり、笑窪が意外なあどけなさを感じさせ、それが仁義を切ったりする時にすばらしく甘い、倒錯したエロチシズムをはじけ出させる。第四作「木曾の火祭り」では立ち廻りも板についてきて、勇ましい女やくざ役をこなしていた。中田はその後大映に出て、長谷川一夫主演の「関の弥太っぺ」(三十五年)では、大前田英五郎の娘として出て、やはりやくざ姿をしていたがカラーだったので、太腿の白い肌が印象的で、

紫色の着物とよく映っていた。

コミカルなものは、その後は大映の一手販売の感がある。三十五年の「お嬢さん三度笠」はそのいい例だろう。これは仁木多鶴子、弓恵子、宮川和子の三人が中心になってくりひろげられる。話の筋は、ある城の姫が自分の弟が幕府に謀反の疑がかけられていると知り、単身城を出て弟の所へ諫めに行く。一方、あるやくざの家が落目となり、他の新興やくざに狙われる。これを救わんと一人娘が、大前田英五郎に助けを求めに行く。更に、ただ一人の兄弟をさがしてスリをしながら旅を続け

第一弾

緊縛フォト・アラベスク

略号「あらべ」 定価五〇〇円

本誌の黄金時代のモデル嬢の素晴らしい緊縛姿ばかりを集めた句うばかりにあでやかにも美しいフォト集です。全巻二十六項目、七十七葉に亘り、文字通り表紙から裏表紙のハシに至るまで、すべて緊縛女体のむせかえるような、むんむんするムードで埋めました。まだお求めにならないマニヤの方は、是非コレクションの一端にお加えになって、その妖美のエキセントリックをお味下さい。

第三弾

緊縛写真グラフィ集

略号「グラフィ」 定価五〇〇円

絹川文代、大塚啓子、愛川悦子、桜井葉子、等の本誌で育てたベテラン・モデル嬢の活躍による最も優秀にして鮮明、且つ魅力的な緊縛艶姿ばかり百十五態を集録した「グラフィ」です。誌面いっぱいには所狭しと盛り上げる大型グラビアの迫力は、きつと皆さまを、この妖しい異常美の縛りムードの中へと誘い込むことでしょう。女体緊縛マニヤの皆さまに自信を以ておすすりめ出来るグラビア・フォト集です。

ぞ同志のでいりの時に、この姫も侍女を連れて応援に来る。その時、皆やくざ姿でやって来る。この真城は純日本的な可憐な容姿が売物だったので、思い切った扮装といえ、なよやかな感じとやくざ姿が奇妙な対照を作り出し、美しかった。大映はこの後、三人娘でもう一本「大暴れちやつきり娘」というのを作ったが、ここではやくざ等の場面は少く立廻りもなかった。この年には東映にニュー東映というプロダクションが出来、短い作品を大量生産したが、この中に次郎長シリーズがあり、その一つ「秋葉の対決」(という題だったと思うが)に花園ひろみがやくざ志願の娘で登場、勇ましい所を見せた。仁木らがあらわな太腿を出していたのに対して、こちらはきりっとした股引をはいて居り、本格的といえはいえよう。翌年になって大映では橋幸夫主演の「おけさ歌え」という作品を作ったが、これに出てくる市川雷蔵にからむ水谷良重の親分の娘が男装をしている。水谷良重という人は、やはり中田康子型で顔の造作がややぼんやりした、大柄な人だが、やくざ姿になると引きしまって来て、似合う。似合うという意味は男っぽいということ、私はむしろ似合わないような人に美しさを見出して

るわけだ。その点では水谷はたしかに似合い、貫録があった。三十四年に、母八重子が舞台で「女剣戟朝霧一座」という劇をやったが、その中の劇中劇に「国定忠治」をやった。八重子の方が、女らしいだけに色気があったと思う。次に大映では「旅はお色気」という作品を作っているが、主人公の武士にからむ女の一人に女やくざの親分がいて、これに真城千都世が扮して、若侍にからみついていったり、乳房を見せたり、女らしい色気を出すかと思うと単身、悪い武士共になぐり込んだりして勇ましい役だった。

翌三十七年には勝新太郎主演の「今宵限りの三度笠」という作品がある。この相手役には新東宝から移った万里昌代が出ている。たしか第一作のはずである。この作品は川口松太郎の原作で前年の夏、勝と水谷良重の共演で舞台でやっている。大映は最初、実演と同じ組合せを企画したが倒れ、次に仁木、近藤美恵子と移った末に三転、新東宝から来た万里にきまったもので男っぽい感じでありながらあのような試みをした新東宝で一度も男装をした事がなかった万里にとっては、初めての男装だった。余りに男っぽい感じだった彼女には、私は期待していなかったが映画を見て

女らしくなっていたのに感心した。前よりもやせて美しくなったので却ってやくざ姿が似合った。これは父を悪いやくざに殺された娘が、風来坊のやくざと組んで相手の親分を倒すという筋である。大映はその後、この種のもはなくなったようだ。

もう一つ書き忘れていたが、三十六年に東宝のシリーズに守屋浩の主演でふざけたやくざ映画があり、その一つ「泣きとうござんす」という作品で、浜美枝が親分の男まさりの娘になり、最後のでいりで可愛いという言葉がぴたりするやくざ姿になってチャンバラをする。さて第一のジャンルはこの位である。次に第二の劇中劇である。この方は本筋は割合、まともな場合が多いので思いがけない人が出ることがある。まず、二十六年松竹の「陽気な渡り鳥」という作品では、旅まわりの一座が出て来て、その中で淡島千景が女剣戟の座長として艶姿を現していたがやくざ姿はよかった。立ちまわりにまだ宝塚調が抜けないのは甘美でよかった。

それと前後して、京マチ子が大映「浅草紅団」でやはり女剣戟をやり、この方はダイナミックですご味があった。後述する「浮草」の中でも京マチ子は「国定忠治」をやって見

せるがその頃の新聞に「はじめての女剣戟役で……」などと書いていた。これは正確ではない。

三十一年、東宝「大暴れチャッチャ娘」では久慈あさみが座長、「関の弥太ッペ」かなんかを舞台でやって見せ、カラミを斬り倒す。仲々よかった。

三十四年、大映「浮草」の京マチ子、これは小津監督のもので、ちょっと珍らしいものだった。

次に三十七年、東宝「雲の上団五郎一座」の筑波久子、これは舞台姿はない。三十七年には、大映「新、悪名」近藤美恵子の座長。これは可愛らしく、痛々しいようなのがよかった。からみに対して「おめえら、命を大切にしなよ」というセリフもややかん高いのが女らしくて、もっと出場を多くしたらよかったと思う。

その他に美空のものがいくつもあるが、どうも彼女は特殊なのでまだ見落しがあると思うが、この位にしておきたい。

最後に、見守って行きたいものとして、松山容子のものをもう一度強調しておきたい。

(了)

新版分譲品案内

夫人の表情

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

バンド開股

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

バンド責め

略号

大手札 五枚一組 五〇〇円

モデル 東浦ひかる

バンド足挙

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

目下着用中

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

相撲禪着用

略号

大手札 11枚一組 一〇〇〇円

モデル 大塚 啓子

乳房いじめ

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

強烈エビ責

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 水本 茂美

ゴム衣緊縛

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 水本 茂美

六尺 禪

略号

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 東浦ひかる

蒲団に悶ゆ

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

悦虐の果て

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

椅子エビ責

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

六尺 禪縛

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

浦東の切腹

略号

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 東浦ひかる

浣腸シリーズ

略号

大手札 12枚一組 一〇〇〇円

モデル 梨花悠紀子

弓吊り責め

略号

大手札 二枚一組 二五〇円

モデル 梨花悠紀子

手足宙吊り

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 梨花悠紀子

強烈エビ縛

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

乳房責の苦悶

略号

大手札 二枚一組 二〇〇円

モデル 関谷富佐子

全裸ムチ打

略号

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 関谷富佐子

六尺 禪の女

略号

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 関谷富佐子

強打に泣く

略号

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 関谷富佐子

レインコートの拘束

略号

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 大塚 啓子

ゴム布に包まれて

略号

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 梨花悠紀子

狙われた和装の娘

略号

大手札 12枚一組 一〇〇〇円

モデル 愛川 悦子

裸女繃帯覆面

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

暗殺か、無理心中か……

灼熱の乗馬ズボン

——殉国の妖花——

藤 山 秀 緒

所は満洲。

この日の朝刊は、婦人将校の殉死を讃える記事で埋まった。

殉死——それは乃木大将夫妻以来何十年ぶりかで実行された「誠忠の極み」である。

しかも、それが、皇后附きの女士官であり、方法は切腹である。

当時の世相の中で、これが讃えられぬ筈はないのだった。皇后の死、そして葬儀が終わったとき、此の女将校の殉死が新聞の話題を浚ったのも不思議はなかった。

或る新聞は検死官の報告をのせている。

「松尾君子嬢は、自決現場から、私共の待っ別室へ担架で運ばれて来たが、発見が遅れたため、すでに硬直しており、全身を捻って、顔は苦痛にゆがみ、胸部に刺した軍刀は凝固した血のために抜取ることが難しく、腹部が大きく切開されているので、無理に抜取ることが出来ないもので、その形のまま検視した。この検視で、同嬢は、死後四―五時間を経過しており、死因は、出血多量と、内臓切損、精神的疲労による心臓麻痺と断定された。」

服装は、軍服を用い、白いワイシャツ、及び乗馬ズボンの前部を寛げ、左脇腹より右下りに大きく一筋、及び左腹部より臍部までの小さい筋、右脇腹より右肋骨へかけて切り込んだ物、及び胸部の突き傷、以上四回にわたる軍刀で自ら抉ったものである。乗馬ズボン内に失禁のあとがあるが、生存中のものかどうか明かでない。……」

この死には遺書があった。殉死であることは明かであった。しかし、松尾君子は、皇后と心中したのだ、そんな噂が、口から口へと

伝えられはじめたのも、その頃であった。

鞭のうたげ

それは或る寒い秋の午後であった。松尾君子という美貌の女性が、佐官待遇として皇后のお付き武官に任ぜられ、顔合わせのための茶会がひらかれていた。

皇后のやさしいまなざしに、君子は、ひそかな情熱を燃やししながら、着なれぬ軍服の肌ざわりをじっとかみしめるのであった。

男色家の皇帝によつては、満たされない思いを、レスボスの世界にもとめはじめている若く、あでやかな皇后の前に、凛々しい女将校の出現……。

皇后は、日本政府の粹な取りはからいに、どんなに感激したのか。

二人は仲よしになり、公式の行事のほかは姉妹のように睦みあった。

君子は皇后の空虚な心の中に喰入り、サジステインとして次第に皇后を白熱のプレイへ誘導して行く。皇后と、彼女しか入ることを許されない官廷の地下室。

そこには、夜毎、妖しいプレイの花が咲き競うのである。

レザーフェチの皇后にとって、君子の乗馬

靴は憧れてやまぬもの。やがては、ご自身も乗馬服に身を固めて、君子のブーツへ頬づりするのだった。二人は固く相擁して互いの魂をまさぐる。

乗馬ズボンがもつれあい、ブーツが妖しく響いて、プレイは第二段へとすすむ。

乗馬ズボンの汚れるのもいとわず、皇后は床にのたうち、

「キ、君子……はやく、しばって！」

切なげに呻いてバラ色の頬をひきつらせ、君子のブーツへ口づけする悩ましさに、君子もつい釣り込まれて用意のベルトを力一杯、皇后の五体に喰い入らせてしまう。

凄絶な鞭うち。

ピシリッ！

「ア、アーッ！」

ピシリッ！

「ウウーッ！」

「これでもかッ！」

「ア、アアッ……もっと……もっと！」

美しい頬がゆがんで、皇后はのぼりつめ、そして悶絶する。

……その絶入る姿を、ジッと見つめる君子の目は……。ああ、君子は本当に興奮したのではなかった！

君子の使命

二人のプレイは日ましに激しさを加え、一年たったいまでは、責めの極致を演出するよな日々である。

乗馬服の上から、トレンチコートを着せ、その上から革ベルトで血も通わぬほど力一杯しばってシャワーをあびる。トレンチコートが水をふくんで、ごわごわと全身にまつわりつく。

君子は、濡れた床に皇后を押倒して、乗馬靴でふみつけながら、機会を覗うのである。彼女の使命……。それは皇后暗殺なのだ。

軍部は、中国人の皇后を暗殺し、日本人を後妻として皇帝にすすめ、更に一步、日本へ近付けようと企んでいるのだった。

その企てが、正当であれば、君子の働きは「殉国」の名に価する行為なのだ。つまり、軍部は、彼女と皇后を心中させ、それを故意に隠して「殉死」の線を出す。ひとは、「殉死」が表向きで、「心中」が、その裏の事実だとして感知するだろう。

そうすれば「暗殺」の疑惑までは思い及ぶまいとの、三段がまえの計画なのだった。

君子は、新しい王道楽土を、日本のために

役立てる布石となるのである。

なんで命を惜しもうぞ！

当時の思想では、

君子のこの生きてかえらぬ暗殺行も、神国日本の人柱として、全く自然のこととして受入れられたのだった。

二人の、夜毎のプレイの模様は、君子から詳しく司令部に報告される。

司令官和田順は、機熟したのを知って、君子を呼び、遂に「暗殺」を指令したのである。

「暗殺」の日は、とりもなおさず君子にとっても最期の日となるのだ。

「皇后のお供をして死にます」

心中とも、殉死ともとれる微妙な遺書が作られ、軍服の奥ふかくしまわれた。せめて、真新しい軍服を着けたかったが、それは許されない。プレイの汗を吸った服が

君子——カーキ色軍服



彼女の意味深長な死に一役買うからだ。

彼女は、今宵かぎりの命を、じっとかみしめるように、うつむき加減に自室を出た。

処刑

一年間、睦みあった仲である。いかに君子が祖国愛に燃えたとして、やすやす殺せるものではない。しかも、「ごく自然に責め殺す」などということも果して君子にできるのだろうか。

皇后は、革製で上が飛行服、

下が乗馬ズボン仕立てになった特製の責め衣に身を固め、ヘルメットをかぶって完全武装していた。

激しいプレイがはじまった。

女飛行士と女将校は、その美しいはえぎわに、早くも玉の汗をうかべ、妖しいレスリングにのたうち廻るのだ。

「と、とうッ！」

「ううっ……」

「なんのッ！」

「ああッ……」

「ゆ、ゆくぞッ！」

「ム、ムムウッ！」

「やあッ！」

どさり、どさり、と長靴をつけた四ツの肢がからみあい、やがて、皇后は君子の膝の下に組み敷かれてしまう。

「ああッ、ゆ、ゆるして！」

「降参か！ 降参するかッ」

「……は、はい」

皇后は、苦しむように頬をひきつらせながら、降伏する。

しかし責めは終わっていない。これからが、降伏者への処刑である。

革ベルトが、皇后の部厚い責め衣の胸や、大腿に喰込んで、俵のように曲線をくくり出している。

ベルトは、落下傘着用の際のように、体にあわせて作られているので、君子は、皇后に装着を命じ、皇后が屈辱に堪えながらベルトを引緊めるのを見ているだけでよかった。何時でも、皇后自身がしめたのは、どれもゆるいので、いちいち、きつく締めつけることは忘れなかった。

「女囚一号、いまから拷問する」

君子は、軍人らしくきっぱりいって、皇后を立て、背後から鞭をあげた。

背をしたたか打たれ、皇后は

「アウッ！」

と呻いてよろめく。

すかさず、肩口を、ピシリ！

「ムウッ」

「見苦しい！ しっかりッ」

君子は、皇后に、「最後の願い」を叶えてやるため、皇后を這わせて跨った。

やがて、二人の長靴がきしみ、特殊な仕立ての責め衣とキュロットが、互をしっかりと

包みあい、そして炎となって燃えさかった。

しかし、君子は、地下室の薄暗がり、じっと身をひそめている雨宮大佐の姿を見た。

いつのまに入ってきたのであろうか。大佐は、君子に、はやく決行せよ、と合図しているのだった。

祖国のため、とはいえ、女性としての恥しさ、情なさ、君子を身悶えさせた。ああ、こんな処まで、来なくてもよいのに。君子はきつと、御命令を守りますのに……。

うらめし気に君子は大佐を見、そして喘ぎつつける皇后を見た。君子の右手には一かたまりの布片が握られている。

君子は、一旦その布片を自分の口へさし入れて唾液にまぶしたのち、次々と皇后の口へ押込んで行った。

「あううッ……」

皇后は、苦しみはじめた。でも、布片は、あとからあとからその口へ押込まれて行く。

……もう声も出ない。飛行服に身を固め、全身にベルトを巻きつけた皇后は、飛行帽からのぞく黒髪、ひきさくばかりに見開いた両の目、血の気の失せた頬を、脂汗にまみれさせながら、長靴を、両の肢を、虚空に泳がせて苦しむのだった。

「くっ、くっ……」

のどが、異様な音で鳴った。まだ生きている。一分、二分……。

悶えた、痙攣にかわった。

皇后の顔に、一瞬無念の形相がうかんだ。

君子は、顔をそむけて、その場に崩れた。

やがて、皇后は、最後のあがきにのたうちそして、がくりと床に俯伏した。皇后は、薄れ行く意識の中で、君子の役割をさとしたのであろう。その眼は、君子を怨む眼ではなく、深い深い憤りを、陰謀という、黒雲のような怪物に、たたきつけるかのように、見開かれ、濃化粧が、その恨みの激しさを妖しくきわ立たせているのだった。

殉 死

「見事だった。必ずやる、とは思っていたが、あれほど皇后の心を捉えていようとは。」

「ああ、恥しい。恥しい……。大佐殿……。」

松尾は、必ずやりとげましたのに。あのような処をご覧になりますとは。お疑いからですか。お恨みです……。」

「イヤ、疑いからではない。君には、まだ使命が残っている筈。それを完全に仕遂げるには、雨宮が必要なのだ。」

「……？」

「遺書の真実性を盛るためには、それは、君の体の中へしまわれねばならんのだ。」

「え！」

「君は、自分の死に、切腹を選んでいるのじゃないかね。」

「……。」

「悪いと思ったが君の室を覗き見た。そして君の覚悟を知った。烈しい切腹の稽古だった。この覚悟なら、仕損じはすまい。しかし、女の身で切腹というからには、万が一ということもある。生き恥をさらしてはならぬ。そこでわしが来た。」

「では、御介錯下しますか。」

「松尾、人目を避けて死ぬ者に、介錯などはない。介錯はせぬ。だが、ついていて最後まで、励まし、力づけて、死が完全に遂行できるようにする。腹を裂く刃は、君ひとりのもの。雨宮の刃は、励ましの言葉なのだ。わしのいうことをして死んでくれ。いいな……。」

「はい。この期になって、未練な真似は致しません。御命令通りに……。」

「よし。では、準備してくれ。」

わるびれず、君子は、軍服の前を寛げた。

「皇后に跨れ。跨って切るのだ！」

「大佐殿！ そ、それはお許し下さい。松尾君子には、とても、そのようなことは、できません。」

「……では、絶命する時は、必ず折重なつて倒れてくれ。稽古と違って、介錯なしの切腹は難しく、苦しいものだ。落着いて……落着いて、決行せよ。」

「はい。きつと、きつと、立派に切ってお目かけます！ この室は、皇后がベルを押さなければ誰も来ません。どんなに、どんなに長くかかっても、必ず、死んでおめにかけます。」

「すまぬ……。護国の人柱として、潔く散ってくれ。」

「はい！」

君子は、しびれる全身に、たとえようもない絶頂感を味わいながら、乗馬ズボンをずらして腰のあたりに、ベルトをしめ直した。

ネクタイをほどき、ワイシャツの前ボタンをはずして腹部をあらわし、用意の短刀をハシカチで巻いた。切腹である。

君子は乗馬ズボンの膝をついた。

数秒ののちには、その雪白の肌は唐紅に染み、軍服に包まれた全身は煮えたぎるのである。

君子は、低いが、力のこもった声で、天皇陛下万歳！ といった。

雨宮は、心で泣きながらも、君子の氣をゆるめないために、わざと邪慳に振舞う。

「松尾！ 死におくれたかッ」

「えッ！」

「さあ、ためらうな。勇ましく、切れ！」

君子は、くやしさに歯をくいしばった。なんの、死におくれようぞ！

「大佐殿！ 行きますッ、……オウッ！」
左脇腹へ突ッ立て、興奮に肩をふるわせながら、

「こ、これより、ヒ、引廻しますッ」

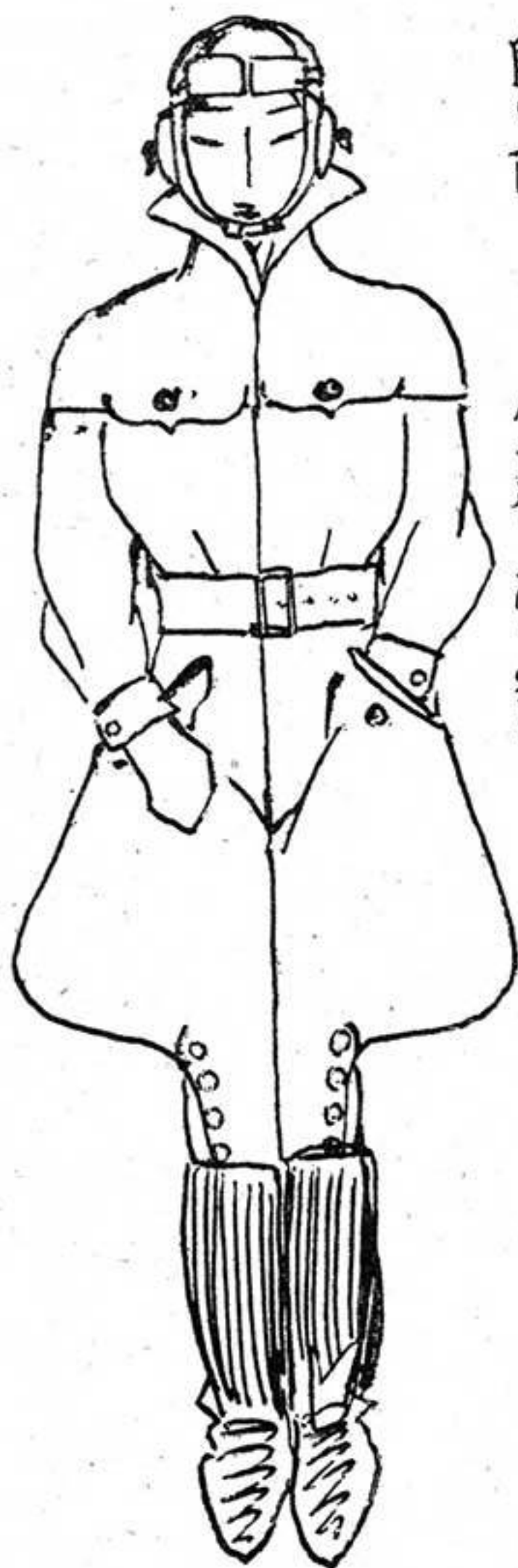
ウッ、といったきり、呻かず、唇をかみしめた君子は、やや下目に、右下りに短刀を引いた。

血汐が湧き、ぼたぼたと床へしたたり落ちて行く。乗馬ズボンへ伝って行く朱の色のあざやかさ。

「あううっ、い、いざ、傷口を……傷口をッ！」

女の切腹では、引廻したとき、検死が傷口をしらべ、まだ死にきれぬうちに引揚げるとか。

君子は、その「凶礼式」の作法を守って、



自下——全部革製

苦しみつつも、乗馬服の前を押しひろげ、乗馬ズボンを押下げて、ふるえる左手で、朱に染まった切り口へ手をかけ、

「う、うううッ！ むむうっ、ひ、開かぬ、なんのッ！」

腰をしごき、ややもすれば、すくみがちになる五体にむち打って、行儀正しく傷口を押しひらこうと悶えるのだった。

「あうッ、ムムム、む、む、ウーッ……」

ずぶ、と音を立て、傷口は血みどろの脂肪層をのぞかせはじめた。

「う、うーむッ、ウ、ウ、こ、これしきに、み、見て、見て、うむうッ、グエーッ……」

作法通り体をのけぞらせる気丈の君子。

卑怯者！！

「松尾！ そんな浅傷では、死ねんぞ！ だから、切腹は難かしいのだ。その傷では、この上切る力もなくなり、苦しんでいるうちに見されて死に損う。最もまずい切り方だ。卑怯者！」

「ヒ、卑怯者と……。い、いや、卑怯と、いわれて、死ねない！ どうすれば、どうすれば、いいの！」

「ふかく切るのだ！ 腸を切る。それでこそ赤心をあらわす、覚悟の切腹だ。できるか？」
「……むむ、出来ます！ こ、こうしてッ」
矢庭に君子は臍下の短刀を引抜き、もとの

左脇腹へ、ぐわッと突込んだ。力一杯たたきつけるように突っ立てた刃……。

「ううッ！」

流石に今度は激しく呻いた。そして喘ぐ。

「うっ、うううッ……」

眼を据え、歯をくいしばった物凄さ。

しごくように腰をうかせると、ぐッ、ぐッと次第に傷口は大きく割れ、君子の苦痛はつのって行った。

「う、うううむ、た、大佐殿……こ、これでも……」

大佐は黙然として答えない。

すばらしい。女の身で、こんなにも気丈夫な……。でも、いま褒めてはならないのだ。

叱咤し、むち打ってでも、手当のできぬだけの深傷を自分で負わせなければならぬのだ。

「ああ、こ、これでもかッ、な、なんの、なんの、くじけません！ せ、戦場の自害……そ、そうだ！」

歯をくいしばって、腹に喰入っている短刀を両手に握った君子は、

「ウ、ウムーッ！」

悲痛な叫びとともに、臍下から、今度は右上へかけて、がばと引いた。

君子は、目がくらみ、どっと横倒しに床へ

倒れていた。

最前の傷口が、更に大きく引裂かれて、血の香りが、部屋一杯に漲るのだった。

君子の表情は蒼白にかわり、そのはえぎわには脂汗がつぶつぶと鈍い光をうけている。

「凶札式」では、傷口さえ検死に見せれば後は介錯をうけても、急所を自らかき切っても、方法は自由な筈であった。

しかし、大佐は、作法通り

「お見事」

とはいってくれないのだ。

はっきりと見もせず、「浅い」という。

女ながらも武人の切腹、なんでこのまま死ねよう。

血紅化粧

右手は突込んだ短刀をにぎりしめ、左手は噴き出す血汐を抑えるように、傷口をおぼっている。

「ウーッ、大佐殿！き、切りました……お、女の切腹……。ひ、卑怯者が、キ、切りとげましたッ……こ、これでも、これでもッ！」
こわばる舌。でも誇らしげに大佐を皮肉った気丈の一言である。

乗馬ズボンも、長グツも、いいえ下半身は

すべて唐紅であった。大佐は、

「その腹の中へ、遺書を入れるのだ！」

ああ、その遺書は、上衣のポケットに入っている。ふるえる手が、上衣の胸をまさぐった。

「むう、む、むう……」

肩で喘ぎながら、血みどろの手が、遺書をつかんだ。

大佐は一切手伝わない。血痕をつけてはならないので、君子からは、わざと離れて立っている。

「影の人」とわかっていても、いまの君子には恨めしい。

「うッ、うッ、た、足らぬ、足らぬ、も、もっと、もっと！」

起直ろうともがきながら、一旦遺書を床に置き、君子は短刀に再び両手をかけた。

「ム、ム……、ウウッ、ウーッ！」

ごろごろと床をのたうちながら、ああ、彼女の刃は上向きに肋骨を切り上げていた。

「アウッ、くく……ッ」

美貌は苦痛にゆがみ、のけぞるたびに乳房が、軍服の間からこぼれている。

きびしい訓練に堪えて来た女将校の意識は明瞭そのものであった。

彼女は、ふるえる手に遺書をつかむと、傷口へ押しあてた。

入りそうもなかった。

のけぞって、傷口を拡げようとしたが、彼女のこの動きは、かえって臓腑を煮えたぎらせ、彼女は

「ウッ、ウッ、ウウッ……ッ」

と呻き、苦しげに胸をまさぐって、ガバガバと床に胃液を吐いてしまった。

「ウウッ……」

うめくたびに、ガーッと粘液が乗馬ズボンに伝う。

ああ、腹切りとは、こんなにむごたらしいものなのだ。でも、このような苦しみがあればこそ、腹切りは、その光栄ある死が約束され、死んで行く身に最後の誇りが刻みこまれるのである。

気丈な君子は、一人うなづいて、右に短刀左に遺書を握りしめ、顔をひきつらせながら呼吸をはかっている。

大きく息を吸おうとしているが、断末魔の呼吸は、早く、細くなるばかりである。

それでも、気を取り直し、一つ大きく喘いだ。その時、右手の短刀が、こじあけるように傷口を抉ったのである。

【分譲女体切腹写真】

若妻の切腹

大手札四枚一組 四〇〇円

略号「わか」

モデル 甘木 春子

介添切腹

大手札四枚一組 四〇〇円

略号「あか」

モデル 甘木 春子

自刃悶絶

大手札五枚一組 五〇〇円

略号「せよ」

モデル 大塚 啓子

避暑地の切腹

大手札五枚一組 五〇〇円

略号「せひ」

モデル 絹川 文代

ダブル切腹

大手札二枚一組 二五〇円

略号「せる」

モデル 絹川 文代

苦悶切腹表情

大手札五枚一組 五〇〇円

略号「せく」

モデル 梨花悠紀子

絞首処刑

大手札三枚一組 三〇〇円

略号「こう」

モデル 絹川 文代

悦楽血紅切腹

大手札三枚一組 三〇〇円

略号「はろ」

モデル 梨花悠紀子

血紅切腹図絵

大手札三枚一組 三〇〇円

略号「おせ」

モデル 大塚 啓子

マニヤの切腹

大手札三枚一組 三〇〇円

略号「まに」

モデル マニヤ某女

「あうッ！ ウムッ！」

海老のように、くねる体を、渾身の力で押しかえす。のけぞらせようとしているのだ。

目もくらむばかり、凄惨な、そして輝かしい光景であった。

遺書は、左手で、傷口へ押入れられ、

「おうっ、おうっ、うむうっ……」

呻きと共に、打ち込むように腹中へ没して行く。

「松尾！ 皇后の側へ行くのを、忘れたか」

大佐は再び心を鬼にして叫んだ。

のたうち廻りながら、二人の男装の麗人の間は一間あまりひらいていたのである。

のたうちながら、君子は皇后の黒革の責め衣にすり寄って行った。

断末魔の苦悶のさまを、ありありと残して

責め衣姿の皇后は、あられない形で倒れ、

その倒錯的な服装と俟って、妖しい魅力が、無残な死体を包んでいる。

ひきずるように軍刀を左に握って、すり寄

った血みどろの女将校は、

「い、妹！ し、心中する君子の心……ゆ、許して、許してッ！」

責め衣姿の皇后にのしかかるようにして、君子は軍刀で死体を突いた。

「と、とうッ！ オウッ、ウーッ」

革の責め衣が、ズブッ、と音をたてた。

無我の表情で、男装のレスピアンは軍刀を握った。

まだ温か味の残る皇后の死体は、右に、左に、大きくゆれた。それは丁度、苦しみにのたうっているかのようなだった。

皇后の脇腹からも、血が流れた。

女ながらも

「うっ、うっ、うーっ、あうッ、タ、大佐どの……。こ、これでも……。使命は、終りませんかッ！」

「使命はすんだ。だが、この傷のまま、死を待つなら半日はかかる。いま、発見されれば助かる見込みさえある。ウワ言にでも、秘密を洩らしては重大だぞ。さあ、早く死ぬのだ。これしきに力つきて、急所もわからなくなっただのかッ」

「ああッ、う、恨めしい……。大佐殿……。よ、

よく切ったと、な、なぜ、いって、下さいません！　そ、それを土産に、うっ、うっ、喜んで、喜んで、散りますものを……。こ、この上は、この上は、あ、あなたの……指令は、受けません！　お、女武者の最期、せ、戦場の自決……こ、こうしてッ！」

齒をくいしばり、皇后の死体に突立つ軍刀を抜取って、まなじりを裂いた君子は、凛々しい軍服の胸に切先をあてがって、

「あっ、雨宮大佐！　女ながらも松尾君子の断末魔、わ、笑って、笑って見物なされよ。天皇、陛下……万歳……アッ」

ぶすっ、ぶすっ、と軍服が裂ける音。

「ウーウッ」

腹から絞り出す凄惨な苦悶の絶叫である。

肩、胸、腰、そして両の肢……。みんな激痛にのたうっている。

乳下の一抉！

この一突きは致命傷になる！　と判断した大佐は、はじめて言葉を和げた。

「松尾！　見事だったぞ！　君の心を励ますために、雨宮は、心ないことをいった。ゆるしてくれ。その一突きは、君を苦悶から解放してくれるだろう。……男も及ばぬ切腹の見事さ、最後まで失わぬ武人の誇り、これで、何

もかも計画通りだ。松尾！　有難う……。雨宮の、心からの敬礼を、うけてくれッ！」
長い長い拳手の礼。

わずかに、心臓をそれて、死にきれぬ君子の耳に、雨宮大佐の感激が伝わって行った。
「ウウッ、や、やっぱり、うーむ、そ、そ、そうでしたか……。せめて、せめて、うむ、お、男と同じ、せ、切腹して……。男、男装のまま……。うっ、うっ、行、行きます……。むむっ、み、未練ながら、ハ、母を、母を呼ばせてッ！」

「ああ、なんという気丈さだ！　呼びつづけたまえ。声をかぎり！」

君子は、母の名を絶叫した。堰を切ったように、君子は呻き、のたうつのだった。
やがて、四肢のうごきは、痙攣にかわっていく。

そっと合掌して地下室を去る雨宮大佐。

君子は、皇后の死体にのしかかるように、死を早めんものと刃を抉る。両眼をひらき、苦痛にゆがむ頬、くいしばった口もとをついてほとばしる断末魔の呻き。もう舌がこわばって物いい得ぬ君子であった。何事か絶叫して虚空をつかんだ彼女は、崩れるように倒れ伏した。

松尾君子は、死んだ。気丈な死であった。生きようとする肉体を、自らさいなみつづけ、そして死の谷へ突きおとして行った。

彼女にとって、祖国の為という言葉は、絶対の意味をもっている。その目的が、正しいにせよ正しくないにせよ、彼女は命令のままに、命をなげうって御奉公をなしたのだ。一すじの真心が、目的の正邪を越えて、彼女の勇敢な自決を、永遠の美しさに高め、そして倒錯美の妖しい挽歌が、乗馬ズボンや乗馬靴に身を固めたこの男装の麗人の最期に一層の迫力を加えているのだった。

二人の死体は、遂に午後まで、発見されることはなかった。

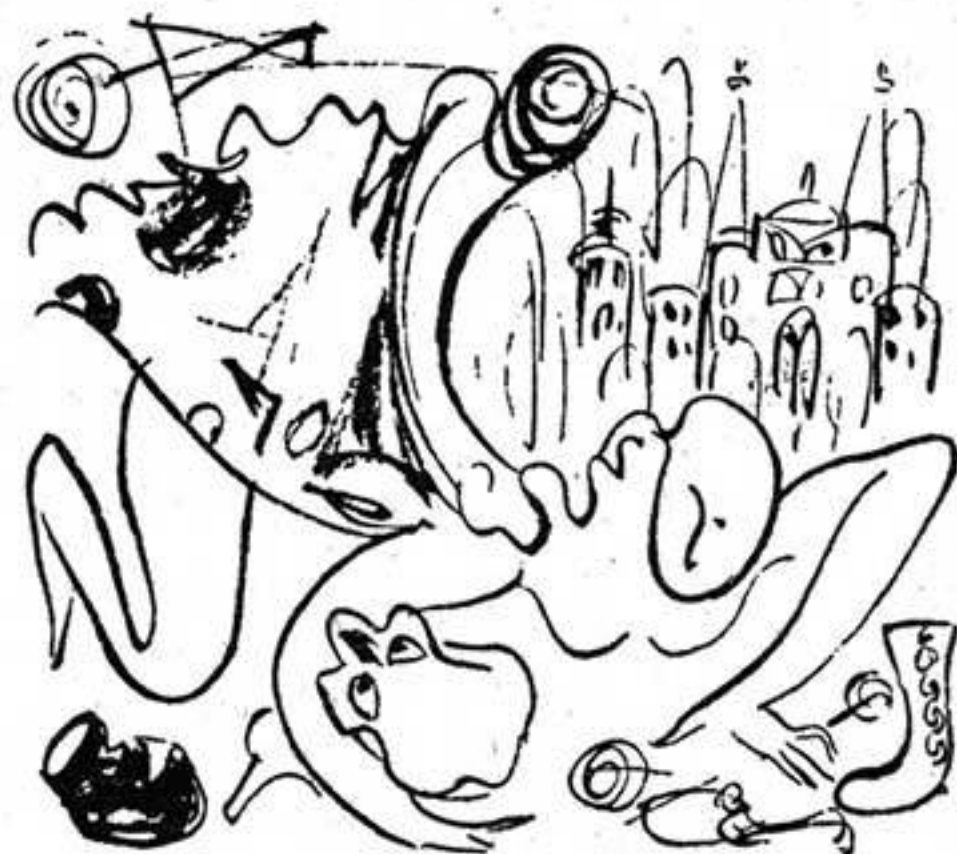
奥深い宮廷の密室が、発見を遅れさせたのだった。

もちろん「蔭の人」雨宮大佐の存在も、遂に知られずにすんだ。

宮廷内は、狼狽し、そして皇后の死は、急病、君子の死は殉死、としなければならなかった。

そして血染めの軍刀や軍服は、護国の女神の遺品として展示され、人々に深い感銘を与えたのである。

(おわり)



検 便 随 想

栗

瀬

長

また夏がやって来た。海に山に、今をはやりのヴァケーションかバカンスか知らないがともかくも行楽のシーズンだ。

それにしても、毎日の新聞を賑わす食中毒の記事の何と多いことか。言い合わせたように、下痢、腹痛、発熱、そして集団とくる。そして必ず保健所が活躍して、検便となるのである。

毎日のようなこれらの記事に、当然馴れっこになっている筈なのに、私はこの検便という文字を見る度に、ハッとするのである。た

った五行か十行の中毒記事、僅か一段で、社会面の下隅に追いやられていて、而もたった二字の検便という文字に、どうしてかくも心が乱れるのであろうか。

便、即ち排泄物は、汚く穢れたもの、という固定観念が、それを他人に見られる羞恥心ということなのだろうが、検便は浣腸と相俟って益々私の心をしめつけるのである。

私が四才の頃、何の病気で浣腸されたのかは覚えていない。ただ、ちよび髭を生やしたちんちくりんな医者がやってきて、いやがる

私を家中総出でなだめさせた挙句——家中総出がいたく私の羞恥心をかき立てたものだが——なんと女中にイルリガートルを高々と持たせて、私に浣腸したものだ。

注腸が終って、おまるにまたがせられ、衆人環視の中に排泄させられた、その水様便をみんなが代る代るのぞき込んでいた有様が、まざまざと私は思い出すことができる。

「あら、お昼にやったおそばだわ、こんなにそのまま出てるわ」

私の目にも、それは一糞位に切れ切れにな

って、浣腸液と黄色い便の中に、黒々と、浮んでいたのを覚えている。あつ、これが私の記憶する最初の検便の思い出なのだ。浣腸され、便がのぞき込まれる、子供心に何と残酷な羞恥を覚えたことであろうか。

その後も幾度か浣腸された。嫌がるのを無理に。そして、医者、母に、姉に、そして仕事の上とはいえ、女中に結局は検査された訳である。検微鏡検査までは行われなかったであろうが。

小学校に入る頃となると、愈々定期的に検便が始まる。年一回、春頃、封筒に、ボール箱の、丁度画紙が入っているような丸い箱が入ったのが渡され、名前を書いて明日もってくるように言い渡される。

あつ、恥ずかしい、又便が見られる、そうした羞恥心をかき立てられる私は、内心どきどきしながらも、何も口にすることも出来ない。だまってランドセルにしまうだけ。そして、若し、出なかったらどうしよう、先生に叱られるかしら、そんな心配ばかりが頭にひらめく。一方、腕白小僧達は、

「ワァー、きたねえな」

「明日は、教室中、におうぞ」

「うちの犬の入れてこうか」

などと大さわぎなのを、私は黙ってながめているだけだった。

ところがさあ大変、どうしても容器にとらねばと思えば思う程、便秘してしまって便が出ないのだ。便所でいくら力んでみても、とうとう泣き出してしまったのを母が見つけた、

「しょうのない子ね、さ、いいから一寸横になって、浣腸してあげるから」

という訳で又してもイチジク浣腸のお世話になった挙句、母が上手に容器に採ってくれたものである。

その頃、私は体操の時、軽い脱臼をして、数日入院したことがあった。病院というのはおかしな所で、外科的治療であるにもかかわらず、尿から便から、血液までも一応調べようとする。或いは母が健康診断の意味で要求したのかも知れないが。

何れにせよ、看護婦さんから、採便容器と割り箸が渡され、

「大丈夫？ 歩けるわね、お便所でこれに少しだけ採ってきてちょうだい。」

というわけで、出たくない便を、うんうん言いながらやっとしたのである。さて、水洗便所の、少し溜った水の中に、小さな山を築

いている便を、さてどの位採っていいものやら今迄、母にやってももらっていた私は、わしだけがどの位か分らない。若し少なすぎても一度とか、出なければ浣腸などと言われたは大変とばかり、容器一杯にとったものだ。さて、回診の時看護婦さんに渡してホッとする間もなく、検温に来た彼女は、ゲラゲラ笑いながら、

「坊や、あんなに要らないわよ、少しいっただしよう、小指の先位でいいのよ」

そう言われた時の恥ずかしさ、穴があったら入りたいとは、その時の気持を正に言い表わした言葉であった。

長じて私は、徴兵年令引き下げのため、旧制高校在学中に入隊せざるを得なくなった。

その入隊の第二日、

「全員、営庭に整列」

何事ならんと一列に整列した私達の前にあらわれた衛生兵は、厳かに宣うたものだ。

「貴様等は幹部候補生である。帝国軍人の指揮官たらんとする者は、身体に何等の欠陥があってもならん。伝染病がないか、これから検便を行う。いいか。全員、袴、袴下、褌をとって、一名宛前に出る。そこに白墨で丸が四つ書いてある。いいか。後の二つの丸の上

に右足と左足を置き、両手を前の二つの丸の上につく。分ったな。よし、始め。一番、今井。前へ。」

かくて、生れてはじめての四つんばい検便がはじまった。恥づかしいとか何とかいった感情は、一切が権力の下に押し流されてしまふ軍隊、人権という言葉は、遠い彼方にあつた。ぐずぐずしていれば容赦なくビンタが飛んでくるのだ。

あつ、何と素晴らしい光景であろうか。満十八才の若者達が百名、全員下半身裸体のまま、一列に並んだ光景は、凡そ現在では想像も出来ないのではなからうか。

遂に私の番が来た。

「三十八番、栗瀬、前へ。」

梨花悠紀子逆吊り写真特集

大中判印画紙焼付
各集五枚一組 一〇〇〇円

第一集 略号(さか)

両足首括り逆吊り

第二集 略号(させ)

逆吊りの女体折檻

第三集 略号(さと)

手足逆宙吊り

足首を揃えて括られた縄を滑車に連結されて、足を上に上げて逆さに吊り下げられた美少女梨花悠紀子は、両手を背中につぶれんばかりの縄目肌を喰ひ込んで、全体重を両足首の縄で支えて痛さを耐えている梨花悠紀子。

逆さに吊りにあえぐ梨花悠紀子に、手は、情容赦なく竹の棒で女体のあらゆるところを叩き、こじ入れ、踏みつけ、激しい折檻を加える。美しい彼女の姿、美しい吊責めフット。

両足首と両後手首を括った縄を滑車に連結して、じりじりと宙に吊り上げてゆく。顔、胸、腹を下にして、足首と背中を上にして宙に浮いてゆく梨花悠紀子。柔肌には恐ろしい程縄がうずまいて、吊責めによって鮮明な印画紙焼付に

もう何人かに踏まれて薄くなった白墨の丸印、足の位置の間隔は一米もあろうか。両足を開いて置く。前方五十糎位の所にある両手の位置の間隔も五十糎位。ああ、私はあわれにも下半身裸体のまま、四つんばいにさせられたのである。突然、ピシャツと尻がたたかれ、「膝を曲げるな膝を。もっと、シャキッと尻を上げろ。」

何と恥づかしかったことか。生れてはじめての事故、思わず膝を曲げてしまったが、成程これでは肛門が下向きになるわけだ。

「ハイッ」

と返事して、膝をのばした途端、上向いた肛門にグツとばかり検便ガラス棒が突き込まれた。次の瞬間にはもう引き抜かれて、

「三十九番、黒田、前へ」

その手馴れて手際のよいこと、恥づかしさも忘れて感嘆したものであった。

近くは、一昨年であったが、山形で旅館従業員、女子をも含めて、四つんばい検便が保健所の男子職員によって行われ、人権蹂躪として問題になったことがあったのはまだ耳新しい。

それにしても、最近、何と集団中毒、或は赤痢の多いことであろう。昨今の帝国ホテル従業員の集団赤痢などは、オリンピックをひかえて、国際的信用問題にまで発展しかねない。政府は、ホテル従業員の強制検便実施を強く考慮中といわれるが、果してどんな方法が取られるのであろうか。さなきだに、女子従業員不足の折柄、毎月一回の強制検便では女子は辟易するのではなからうか。

修学旅行、寄宿舎、寮の赤痢も毎日の新聞紙上をにぎわしている。女学生、女子寮などの検便は、どのようにして行われているのであろうか。まさか四つんばいに行われまいか。急を要する場合、便秘で便が秘結しているような場合、どんな処置が取られるのであろうか。寡聞にしてその実情を知らない。誰方かの体験手記を望むのであるが。



〔告白〕 自己愛の記録

渡 部 か ね

リーンの回転椅子のついた三面鏡、デコラ張りの洋服ダンス、茶わん、皿、ナイフ、フォーク、お茶、インスタントコーヒ、砂糖つぼ、調味料などが、小じんまりと入った食器戸棚、その上のオールウェーブラジオ、本箱、食卓そして赤い花模様の座布団など――

男の人がみたら、ああ何と女くさいと感じるだろうと思われるこの部屋に、今たった一人の女が座っているのです。

わたし一人しか住んでいないこの八畳間を隅から隅までみまわしました。たしかに誰もいません。私たが一人なのです。ひっそりとした孤独な若い女の部屋の隅々までが私の視線に入ってきます。真赤なカーテンのかけられた南の窓、グ

わたしは、ふと奇妙な衝動にかられ、ぴつたりと窓のカーテンを閉めると共に、入口の戸の錠を下しました。そして再び自分の部屋の中をきよきよと見まわし、蒲団の入った押入れもあけてみて、誰もいないことを確

かめると、
「誰もいないのよ、わたしひとりだけなのよ」

と自分自身にいい聞かせるのでした。
私は、体につけているものを一枚一枚脱いでゆきます。三面鏡だけがそれを知っていました。見ていました。正面から、そして両側面から、六つの眼が私をみています。スエーターをぬぎ、スカートをはずし、シュミーズを脱ぎました。ブラジャーをはずした時、思わず私はわが身を小さくして、乳房をおおうように胸を両手で押さえました。

じっとそのままだった時、三面鏡にうつる私のパンティが、真白なそのパンティが

なにか不潔なもののように感ぜられて、私はあわててパンティをぬいってしまったのです。

生れたそのままの姿、おおそれは何とすばらしい造化の力でしよう。真黒い髪、美しい富士額、濃いまゆげにすんだ瞳、程よく高い鼻に愛らしい口もと、細い首すじは白く、大きく張ったバストには。ピンク色の乳首が二つ、斜め上をむいてあどけないばかり。

細くしまったウェストから、ヒップにかけての盛り上りの真中に、お臍がグツとひっこんで、陰翳を作っています。むっちりとした太股から、急に細くすんなりとのびた二本の足、マニキュアした足の指が又可愛い。

この自然の姿、わたしは何も物おじする必要はないのだ。恥しがる理由もないのだ。こう自分に言い聞かせると、しばらくの間じっと直立不動の姿勢で立っていました。

美しい、我ながらきれいだと思いました。映画でみる女優さんの誰にも負けはしない。こう言ったら恐らく笑われるでしょう。しかし、今三面鏡にうつった自分の姿にた

ただ私はみとれているのです。

ふと悪魔がささやいたのでしよう、私は姿勢を崩してみます。後をむいて、ふり返った私の眼には、真白な首すじと、程よくカーブした背中、そしてきゅっとしまつて、つき出した二つのヒップの双曲がゆれています。

横すわりに座った時の腰の崩れた線のなやましき。おおむけに寝た時のバストの盛り上にうっとりとしてから、思いきって、両足を上げてみました。両足を思いきり開いて、あまりの姿に恥づかしくなるとびおきるのでした。

今度は再びひざをきちんと揃えて座り上体を前に深くかがめて、思いきりお尻を突き出してみました。どんなすごい恰好だろうと思つて、そつとふり返つて三面鏡をふり返つた時、鏡の真中に、ピンクに咲いた私のアヌスをはっきりと写し出された時の驚き、その瞬間に、私は子供の時された浣腸の記憶がまざまざと思い起されたのです。

あの時の恥づかしさ、それがジーンと脳裡にひびくと同時に、この美しい体を、誰か恥づかしめてくれる人はないだろうか。ああ、いじめられたい、思い切り辱ずかしめられた

い。

この可愛いらしいアヌスに思い切り太い浣腸器が押し込まれたら、この美しい二本の足を荒縄で縛つて、皮バンドで思いきり、私のヒップが鞭打たれたら、真白な背中に馬のりになって、直径一センチもあるような大きな艾でお灸をすえられたら、私の美しい鼻をペンチでぐいぐいとひねり廻されたら、そんな思いもよらぬ空想が次から次へと浮んでくるのです。

不図気がついてみると、頬は上気して真赤、白い肌もやはりかすかに赤らんで、それがカーテンを通してくるやわらかい初夏の日差しにてりはえて、まるでルーベンスの絵をみているよう。又しても私はうっとり眼を細めて我と我が身をいとおしむのでした。

「バックション」

初夏とはいえ、さっきからの一糸まとわざる裸身はひえてきました。

大きなクシャミに、やっと我に返った私は、大あわてで、下着を着けはじめるのでした。

女子バレー部の罰則

あるフェチシストの夢

並 原 睦 夫

私が三年前の春、このK高校女子バレー部の監督として就任以来、今日まで行った公式試合は計四十三回。そのどの試合にも一度も負けたことなく、文字どおり不敗の成績でK高バレー部の名を日本中にとどろかせたことのできたのは、ひとえにハードトレーニングの成果であるとともに、私が苦心して考案し、厳重にそれを実施してきた次のような罰則のたまものであることを認め、ここに日本バレー活動の発展のための資料として、謹んで報告いたします。

第一条 トレーニングに遅刻した者

一日五時間のトレーニングを、合理的に、みっちり行うことが、部員の技術を向上させるための第一条件であることは、申すまでも

ありません。そのため、練習時間に一分でも遅刻した者から、それは罰されなくてはなりません。放課後、午後四時きっかり、二十五名の部員は全員、ただちに練習にとりかかれる準備をおえて、バレー・コートに整列を完了すること。服装は、白の鉢巻、白の運動シャツ、黒のブルマース、黒の運動靴。なお、冬の期間は、黒のストッキングを用いる。

遅刻者は、練習や日によっては罰則施行の終了後、部室の清掃当番をしなくてはなりません。部室というのは十坪ほどの倉庫を改造したものでシャワー室、更衣室に分かれており、明るいPタイル張りの床になっています。広いシャワー室は一名「おしおき部屋」とも呼ばれ、部員の罰則実施場に用いられるため、第三条以下にのべ

れらるるように、「受刑者」たちによって、かなり汚されます。それらをすべて水を流し、ピカピカ光るように仕末しなくてはなりません。

三十分以上遅刻した者は、この清掃作業を下半身裸になって行わなくてはなりません。たとえ同性たちの前であっても、短い運動シヤツの下にむき出しのお尻をつきだしての床掃除は堪えられない屈辱です。

監督の私は、バレーのボールを手にして受刑者たちの間をぶらぶらと監視し、動作の鈍い者には「もっと活発に！」「力を入れて！」とかいって、後からそのすべすべした柔かいヒップにむかつて力をこめてボールを投げつけます。みるみる薄赤く色づいたお尻をなでながら痛そうに恨めしそうに見上げる者、中には中心を失ってビシヨビシヨに汚れた床の上に、はらばいにのめってしまう者もあります。しかしこの時間中、受刑者たちは一言も口をきいてはなりません。もし声をたてたり、ものを云ったりした者にはさらに、汗と泥とで汚れたブルマースで、さるぐつわをされるといふ罰が加わります。

第二条 トレーニングを休んだ者

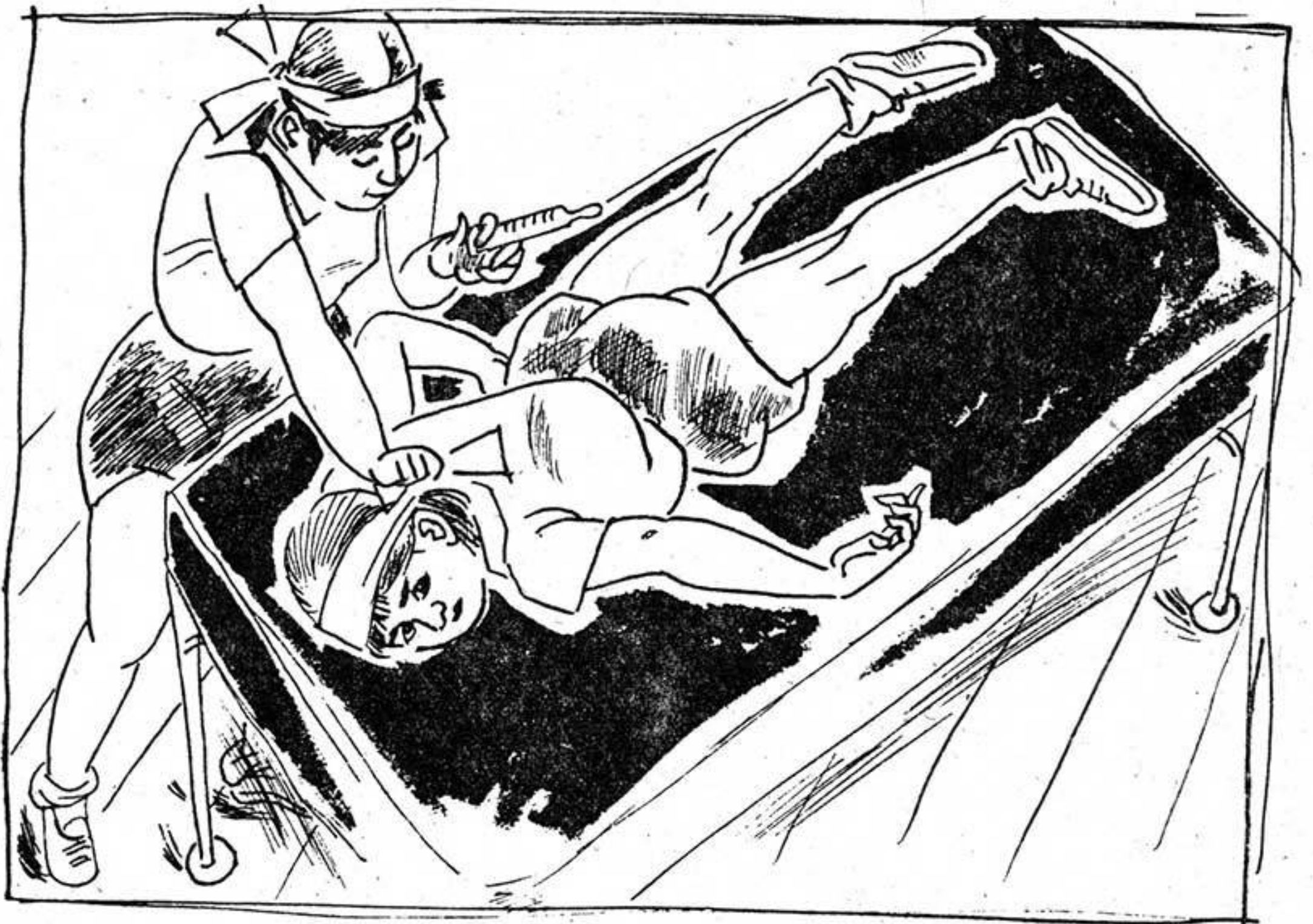
遅刻してもそれぐらいの罰ですから、まして五時間の練習をそつくり休む者にたいしては、もっと厳しい罰が用意されています。四時の点呼のさい、メンスのために休みたいことを申し出た部員は、三年生のキャプテンによって身体検査をうけ、メンスであることが確認されます。その上で、二時間の間「只今メンス中」という赤札を首にかけてコートのおそばに直立して見学することが許されます。

そのさい、ブルマースを脱いでメンスバンドを着用したまま立たなくてはなりません。練習は運動場の片隅にある電灯の設備のついたコートで行われますが、放課後、他の一般の生徒たちの目にもふれる場所です。恥かしい赤札をかけて、黒やピンクの月経バンドを穿いて立つということは、若い乙女たちにとつて堪えられるものではありません。よほどの苦痛でもない限りみんなはメンスをおしてトレーニングに参加することになります。その他、病気や外傷などのため、正式に医者の診断書を提出して欠席した者は、再びトレーニングに参加することができるようにはじめてから一週間は、真紅のブルマースを着用しなくてはなりません。これは他の部員にたいして、休んでいて申し訳ありませんという心からの謝罪を表わすしるしになります。

無断で休んだ者、つまりサボった者にたいしては、次の日のトレーニング中、トイレにゆく時間を与えられないという重罰が行われます。五時間中フルに練習にはげまなくてはならないからです。人間は生理的に夕方から夜にかけて一回は尿を排泄するようにになっています。それを禁じられた受刑者たちは必死になって汗を出し、生理的排泄を少しでも少なくしようとがんばります。しかし冬など五時間の野外のトレーニング中、それをひきのばすという苦心はなみ大抵ではありません。全身汗みどろになって顔を紅潮させ、九時の終了の笛が鳴るやいなや、「ウワァーッ」と奇声をあげて宙をふむような恰好でトイレにつっ走ってゆく姿が二、三人はみられます。しかし、ほとんどの受刑者たちは、努力も空しくトレーニング最中に粗相してしまうことになります。ある受刑者は、迫ってくる尿意に全身をこわばらせて、足をバタバタこきざみにゆすりながら努力し

ていますが、「アウツ」という叫びとともにブルマースの中で立ったまま洩らしてしまいます。またある受刑者は、ボールをレシーブしようと前に転んだ瞬間、ついブルマースを濡らしてしまい、そのまま、その場にじっとうずくまっています。しかし、いずれにしても、濡らしたブルマースは穿き代えることは許されません。股下から太腿、足先にかけてびっしり濡れたまま練習はつづきます。

この罰則にたいして、最近では誰かが前もってオシメをあててくるという工夫をはじめました。これは本人の自由です。しかぶって下半身をぶざまに濡らすという屈辱をうける代りに、高校生にもなって赤ん坊のようにオシメを穿くという精神的な屈辱をうけることになるからです。練習おわって、トイレの中でこっそりブルマースを下げて、汚したオシメをはずすという姿



を人に想像させるだけでもかなりの罰に相当します。

このオシメによる防衛が彼女らの一部で工夫されたはじめには、厚いゴムのカバーを用いていたらしくて、動くたびにゴボゴボという音がきこえたりしてその効果は十分でした。しかしそのうち頭のいい子はビニール張りのパンティ型のオシメカバーを用いるようになってきました。これでは罰の効果がおちることをおそれて、私は練習時間中、さまざまな言葉で精神的に羞恥をおこさせるようにしました。

オシメを穿いてきている受刑者は、お尻のあたりを気にして、ブルマースの上からそっと手でおさえてみたり、妙にヒップがふくらんでいるところからすぐに発見できます。私はそばへいって腰のあたりをジロジロみつめたり「オシメの感じはいかが？」と大きな声でよびかけたりします。時間のおわりごろになって、コート隅にいつて複雑な表情で棒のようにつつ立っているのは、目下、オシメの中に洩らしている姿勢であることもわかります。「や

っているな。赤ちゃん、匂うぞ」とか「そら洩れてきた！」とかせせら笑っていいじめてやります。受刑者は火のように赫くなって、オカッパの髪をひらひらさせて逃げてゆきます。

第三条 練習試合に負けた者

毎週一回、土曜日には紅白試に分れて練習試合を行います。これによって実戦の呼吸を教え、デリケートな作戦のコツを指導するためです。これがお互いの馴れ合いにならないようにするには、罰を重くすることが大切だと思います。

この試合に負けたチームは翌日の日曜日の練習にさいして、ブルマースの代りに白いズロースをはいてトレーニングに参加しなくてはなりません。高校生ともなると、肉づいた太腿を露わにさせるブルマース姿にさえ羞恥をおぼえる年頃。それが白昼のもとで、ズロースだけということになると、それは下半身を裸にされているのと同じ程度の屈辱感をおこさせます。豊かなヒップを包んで、太腿をパチンとゴムで締めているブルマースも、ズロースと似たようなものといえはいるのでしようが、彼女らにとって、それはあくまでプライベイトの下穿きということの意味がちがってくるのです。私はこの効果をもっと強めるために、そばによってからかいます。

「汚ねえズロースだな。」「ああ、黄色いシミがついてる！」

また試合に負けたほうのチームは、さらに個人別に罰が加えられます。試合でエラーをするというのは、身のこなしが重くて鈍いためであるから、これを身軽に敏しようにするために与えられる罰です。エラー一回につきイチジク浣腸一本ずつが与えられるのです。試合は二十一点で勝負がきまりますから、一試合で二十一個のエラ

ー、つまりそれだけの数の浣腸がいります。試合終了後、個人別に計算され、部室の入口で配分されます。ふつう一人平均三、四個ですが、ときには十個ぐらいの数を一人でかかえてベソをかいている者もいます。これまで最高十六個もとった者もいます。ツルツル光ったイチジク浣腸をうけとった者は、すぐに片隅のカーテンのかけにゆき、ブルマースを下げて自分で注入しなくてはなりません。勝ったほうのチームの当番が二人これに立会って確認します。そしてそのあと、負けたチームの九人は運動服のまま、堅いリノリウムの床の上に並んで正坐させられ、反省会が開かれます。

十分間、目を閉じて手を膝の上において、静かに今日の試合のことを思い出して反省しなくてはなりません。他の部員はそれを取りまいて自由に見物することが許されます。体や足を一寸でも動かさうものなら、監督の私は手のボールをガンと力一杯、頭とか乳房めがけてぶっつけてもよいことになっています。静かな、スリルにとんだ数分がすぎます。五分近くもたつと全員の呼吸が緊張してくるのが感じられます。正坐させられている部員の表情が真剣に紅潮し、やがて顔に汗が滲んで蒼ざめてきはじめる……そして夜の静寂の中に、誰かの「ハアッ」という吐息につづいて、その息づまる緊張が破れます。時間が極限に達したらしく異様な響をたてて悪魔がとび出してくる音。あっちこっちで連鎖反応のようにブルマースの中でどろどろと溢れ出る悪魔たちの音が鳴りひびき、花恥かしい乙女たちの心に強い反省の効果をあげてゆきます。たとえ厚手のブルマース布地でも、防水してない布は、びっしりと濡れて床の上に黄色い液を点々とこぼしつづけます。

十分間たつと私は「よく反省したか」とたずねます。一人づつ汚

した床の上に両手をついて「ハイ、今後十分に気をつけます」とあやまって会は終ります。

イチジク浣腸とはいえ、一回に十数本もつめこまれた部員などは、坐って一分もたないうちに、こみ上げてくる腹痛にたえかねて腰をモジモジさせはじめます。私のボールは「反省態度が悪い」ととんでいってハチマキしている額の正面にぶつつかる。するとドンと後はぶざまにひっくりかえって、両脚を開いたまま一度にどつと粗相してしまい、その洪水の中に手をついて反省していた者もあります。

第四条 公式試合でエラーした者

はじめにものべたのべたように、これまで県下、地区、全国あわせて四十三回の公式試合に出場し、不敗であったことが監督たる私の誇りですが、しかし全試合に勝ったとはいえ、一試合に十点ぐらの失点があり、その失点に責任のある選手は、きびしく罰されなくてはなりません。

これは試合から帰ったあと部員はすべてセーラーの制服に身を正して部室に集合し、いとも厳肅にとり行われます。エラー一回に付五〇パーセントのグリセリン液一〇〇CCの計算で準備されます。私は正面の椅子に坐り、全員のとりまいてる中で受刑者は一人づつ罰をうけるのです。部員たちから「おしおき台」と呼ばれている黒いゴム布りのベッドの上にねかされ、キャプテンと副キャプテンによって尻の下にざぶとんを三枚重ね、花模様の華かなビニールが当てがわれます。その間に一〇〇CC用の大きな浣腸器にたっぷり液を入れた係りの部員がそれをキャプテンに手わたします。台の

上のセーラー服の可憐な受刑者は両手で顔をおおい、耳のはたまで真赫になってかたくなっています。「準備完了」

私は静かに、「反省液を入れなさい」と命じます。キャプテンはなれた手つきで注入を開始し、一同は息をつめてみまもっています。人によっては、三〇〇、四〇〇CCとつぎつぎに一〇〇CCづつ追加されてゆきます。全身を汗びっしりにして歯をくいしばってがまんしている受刑者。……おかつぱの髪は乱れ、のたうつたびにスカートがめくられて太腿が露出してきます。呼吸がはげしくなってきます。そばでストップウォッチをもった部員が片手にさしこみ便器をもっていて、いざという時にスカートを汚さないように注意しています。みるもいたましい三分間がすぎて、スリップなど肌に汗でびっしりとりまとわりついています。五分間たったら、大きな声で次の反省の言葉を三回くりかえしてたのむと、その罰が幾分減じられるようになっていきます。

「十分に反省しました。反省液を出したいと思いますので、先生、お願いですからオシメをあてて下さい。赤ん坊のようにオシメカバーを穿かせて下さい」

肩で息をしながらハアハアと息もとぎれとぎれに、この反省をのべるとき、一言でもいいそこねたら、またはじめからいいなおさなくてはなりません。

あるとき、キャプテンの三年生が三〇〇CC注入されるようになったことがあります。彼女は豊かな肢体の持主で、高校生ばなれした技術をもっていたのですが、その日が丁度生理日で、エラーを三回もくりかえしたのです。罰の執行は私が代り、わざと荒々しく注入した液の刺激で、だれの目にも三分間ともてないように激しくう

めきつづけていました。五分たったところは完全なグロッキーで声もでないほどでした。しかしキャプテンでも罰に加減はできません、数回、泣きそうな声で反省の言葉をくりかえさせられたのち、やっとならして、下級生がいそいで花柄のユカタ地のオシメを三枚重ねてあて、その上からアメ色のゴムのオシメカバーを穿かせかかったところであつたに粗相してしまい、スカートまで汚してしまったことでもあります。

さらに、公式試合でエラー回数最多だった選手にたいしては、最高の罰が与えられます。おしおき台に横になり、そばには一〇〇CCCのイルリガートルが用意されます。そして受刑者の口の中には試合中穿いて汗と泥とで汚れたブルマースがつめこまれてさるぐつわされます。両手両足が大の字にひもで固定され、ヒップだけがざぶとんで高くもちあげられます。つまり全身は弓のようにそ

りかえったハリツケになるわけです。イルリガートルの反省液は、受刑者の腹を、みるみるうちに蛙のようにならまさせてゆきます。オシメをたのむこともできません、三分とたたないうちに公開されたこの重罰はおわってしまいます。この最高の罰を三度とうけた部員がいけないというところからみても、いかに効果があるかがわかります。

★

以上、私の考案しました罰則をのべてきましたが、おきづきのうに退部者にたいする罰が設けてありません。しかし、現にこの三年間、一人の退部者もいなかったということを私に不思議に思っています。全部員がこのバレー部をいかに愛しているかという証拠だと考えてもよいと思います。

本誌最近号在庫案内

本誌の最近号は、左記の通り在庫しておりますから、欠本は売切れにならない中にお申込み下さい。送料は当方にて負担いたします。故、代金のみお送り下さい。尚昭和35年5月号以前の号は全部売切れとなり、残部は一冊もございません。各月号の総目次は次号誌上より漸次掲載の予定です。

昭和35年6月号 (特価一五〇円)
昭和35年7月号 (特価一五〇円)

昭和35年8月号	(特価一五〇円)
昭和35年9月号	(特価一五〇円)
昭和35年10月号	(定価一四〇円)
昭和35年11月号	(定価一四〇円)
昭和35年12月号	(定価一四〇円)
昭和36年1月号	(定価一五〇円)
昭和36年2月号	(定価一五〇円)
昭和36年3月号	(定価一五〇円)
昭和36年4月号	(定価一五〇円)
昭和36年5月号	(定価一五〇円)
昭和36年6月号	(定価一五〇円)
昭和36年7月号	(定価一五〇円)
昭和36年8月号	(定価一五〇円)
昭和36年9月号	(定価一五〇円)
昭和36年10月号	(定価一五〇円)

昭和36年11月号	(定価二〇〇円)
昭和36年12月号	(定価二〇〇円)
昭和37年1月号	(定価二〇〇円)
昭和37年2月号	(定価二〇〇円)
昭和37年3月号	(定価二〇〇円)
昭和37年4月号	(定価二〇〇円)
昭和37年5月号	(定価二〇〇円)
昭和37年6月号	(定価二〇〇円)
昭和37年7月号	(定価二〇〇円)
昭和37年8月号	(定価二〇〇円)
昭和37年9月号	(定価二〇〇円)
昭和37年10月号	(定価二〇〇円)
昭和37年11月号	(定価二〇〇円)
昭和37年12月号	(定価二〇〇円)
昭和38年1月号	(定価二〇〇円)
昭和38年2月号	(定価二〇〇円)
昭和38年3月号	(定価二〇〇円)
昭和38年4月号	(定価二〇〇円)
昭和38年5月号	(定価二〇〇円)
昭和38年6月号	(定価二〇〇円)
昭和38年7月号	(定価二〇〇円)
昭和38年8月号	(定価二〇〇円)

悦特第一集 (特価一五〇円)
悦特第二集 (特価一五〇円)
悦特第三集 (特価一五〇円)
悦特第四集 (特価一五〇円)
悦特第五集 (特価一五〇円)
S特第四集 (特価一八〇円)

☆

体験告白

溺

死

体

鷺

野

時

江

その人の眼つきは、なにか尋常でないような気がした。何処かピントが合わなかった。でも、尋常でないといえば、私の方だって、大きなことがいえた義理ではない。お互い何処か狂っているのだ。

始めに逢ったのは、米子駅の一番ホームの時計の下だった。会社の帰りだから午後六時。ホームはごったがえしていた。ハンドバッグを抱え直して時計の下に立つと。横合いからスーッと近づいて来て、

「時江さんですね？」

手紙で打合わせた通りに、グレイの夏服で、本を二冊抱えている。上ぜいはあまりないが、ガッチリした肩巾が眼についた。

あんなに情熱的な手紙をよこしたのにもかかわらず、逢った第一印象はなんとなく、もの憂そうで、口数も少くなかった。すぐ駅を出て、近くの『グリーン』という喫茶店に入った。宮本というその人は、注文したコーヒーが運ばれてくると、ミルクも砂糖も入れず、ブラックのまま飲んだ。

「相当変った人だなー」とは思ったが、しか

し、不快な感じは少しもなかった。唯だなんだか暗いといった印象と、偏執的な感じがあったのはやむを得ない。

宮本は、安来市の、ある新制中学の教師だということだった。

「学校の教師なんて、息苦しいですよ」と、ボサッとした調子でいったが、彼のような性癖の持主にとっては、そうだろうと肯けた。その時私は何気なく、

「あなたの学校、男女共学ですか？」

どうしてそんな事を尋ねたのか、自分でも

判らない。彼は頭をもたげるように私を見て、否定も肯定もせず、

「つまらんですよ」といった。

別段会話は弾まなかったが、彼は少しイライラして、落着かない様子に見えた。時々光る眼で私をジッと見たが、喫茶店を出ると、「じゃあ、いずれ是非……。又そのうちお手紙しますから……」

それだけいってあっさり別れた。しかし、その翌日、私が会社から帰えると、もう速達が来ていた。

日曜日の午後逢いたいという文面だったが、その日曜日は明日だから、私は、宮本の勢急さに驚いた。しかし彼を避ける気にはなれなかった。宮本はそれ迄に私が交際した他の男性にはない、なにか一本気なところがあつた。その余裕のないムキな感じが好ましく思われたのだ。

日曜日は朝から、小雨だったが、出かける頃には雨は上がった。私は絹のワンピースで家を出た。例の時計の下で、この日彼はパリのレインコートを着て鞆を持って立っていた。

「松江に行きましょう」

顔を合せると、イキナリ彼はそういった。

「松江？」

「ええ、ボートに乗りたいのです」

「ボートなら、米子にだってありますわ」

「いや、宍道湖で乗りたいのです」

彼はハッキリそういつて、サッサと先に立った。私はそんな断定的な彼の態度が面白かったし、彼にひきずられて行くのが楽しかった。しかし、松江でバスを降りても宮本は、一向湖の方に行こうともせず、グルグルと商店街など歩き廻った。日曜の商店街は雑踏していたし、私はだんだん神経が疲れて来た。だから肩を並べて黙って歩いている彼に、そっと尋ねたのだ。

「ボートにお乗りになりませんか？」

「や、まだ早いんです。ボートは日の暮れ方に限りますからね」

昂然とそんなことをいった。変人には違くないが、そんな一風変わった調子に、私は又グイと、たぐりよせられる思いだった。そして今日はもう彼の気が向くままに、黙ってつき合うつもりだった。

それからもまだ商店街を歩き廻って、いい加減くたびれた頃、宮本はやっと、宍道湖の方へ足を向けた。そろそろ涼風が立って、なほほど雲がかすかに色ずき始めた。

私達は、大橋の近くからボートに乗った。

原色で塗り立てられた真新しいボートの胴には、『出目金号』と白く書いてあった。金魚の一種には違いないが、一寸とボートの称号には、ふさわしくないように思った。

彼はしっかりした手つきで漕ぎ出したが、一言も口をきかなかった。あまり黙っているので心配になって話しかけても、何か上の空の様子で、返事もろくにしない。私はだんだん不安になって来た。

真夏なのに、湖の上は風が相当強かった。

私達のボートは川下のほうに流れるように早やかった。日曜日だけに大分ボートが出ていたけれど、それはみんなもう私達とは逆に引揚げてゆく舟ばかりだった。暫くして、どこだろう？ 葦が茂っている。その葦の茂みの蔭まで来ると、宮本は漕ぐのを止めて、オールを引きあげた。

「中休みですの？」

「……」

黙ったまま、彼は立ち上った。ボートはグラグラゆれる。その眼を見た時、私はハッとした。キュッと体が縮みそうだった。彼が鞆から出したのは荒縄だったのだ。その縄を持ったまま、彼はゆっくり私に近よって

「どうなさるか？」

一切無言だった。彼の手が触れそうになった時、私は後に身をひいたが、グラグラと、今にも顛覆しそうに揺れるので、しっかりボートのへりにつかまった。スカートを乱したまま……。

小さなボートの中で、巧みに中心をとりながら、宮本は私を縛ろうというのだ。まさかボートの中で、そんなことが行われようとは思わなかったから、私は仰天してしまった。それに、抵抗すると、今にも顛覆しそうだったから、私は彼の意志通りにグルグル縛り上げられて仕舞ったのだ。両手は後手にねじあげられ、彼は容赦なく縄を締めた。だから、胸にもお腹にも、荒縄がグイグイ喰いこんで私は歯を喰いしばっても、自然に呻き声が出た。

宮本はボートの底に転がった私の上に、レインコートをすっぽりかぶせた。そして、ボートは再び動き出したのだ。

頭からレインコートをかぶせられて真暗になると、スーッと恐怖がしのびこんで来た。縛られた経験はあったが、場所がボートの上だけに、なんとも収拾のつかぬ、混乱でジーンと耳鳴りがしてくるのだ。

船底に転がっているのだから、直接波のぶ

つかる音が、耳や頭に飛び込んでくる。泳げない私にとっては、まったく船板一枚の下が地獄なのだ。いや、たとえ泳げたにしろ、こうがなじがらめに縛られていては、どうするものではない。

被虐の悦びを求めて、その悦びをもたらしてくれる男性を、あれほど求めた私だけれどまだこんな恐怖の経験はなかった。ジーンと軀中の毛穴が粟立ってくるのだ。

だが……。その恐怖の底に、やはり甘美というにはあまりに恐怖が強かったけれど、その戦慄が強ければ強いほど、それに伴う悦びも強かったのだ。苦痛や恐怖と一緒に、まるで影のようにそれを伴ってくる快感――。

両手がしびれて来たが、私はまだ芋虫のように転がされたままだった。宮本は黙々と、ただひたすら、ボートを漕ぎつづけているらしい。辺りには波の音だけが満ち満ちて、単調なオール音が、繰り返されるばかりなのだ。まるでそれが永遠につづくようにさえ思われて、私はたまらなくなって叫んだ。「ねえ、止めて！ 私をどうするの？ ボートを戻して頂だい！」

オールの音が止んで、顔の上のレインコートが、少しばかりめくられた。眼の前に、汗が流れた彼の顔があった。

「ねえ、どうするの？ 後生だから縄をほどいて！」

「駄目だ。どうしてって？ それはね、君はもう死体なんだから……僕は自分で殺した女の死体を、これから湖のまんなかに捨てにゆくとこなんなんだ」

私はあッと言葉に詰った。宮本の言葉も思いがけなかったが、そういった彼の表情は、まるで狂人のようにニタニタと笑っていたからなのだ――。

「いやッ 怖いわ！ 岸に戻して……」

「怖い？ フッフッフ、そんなことはないよ。

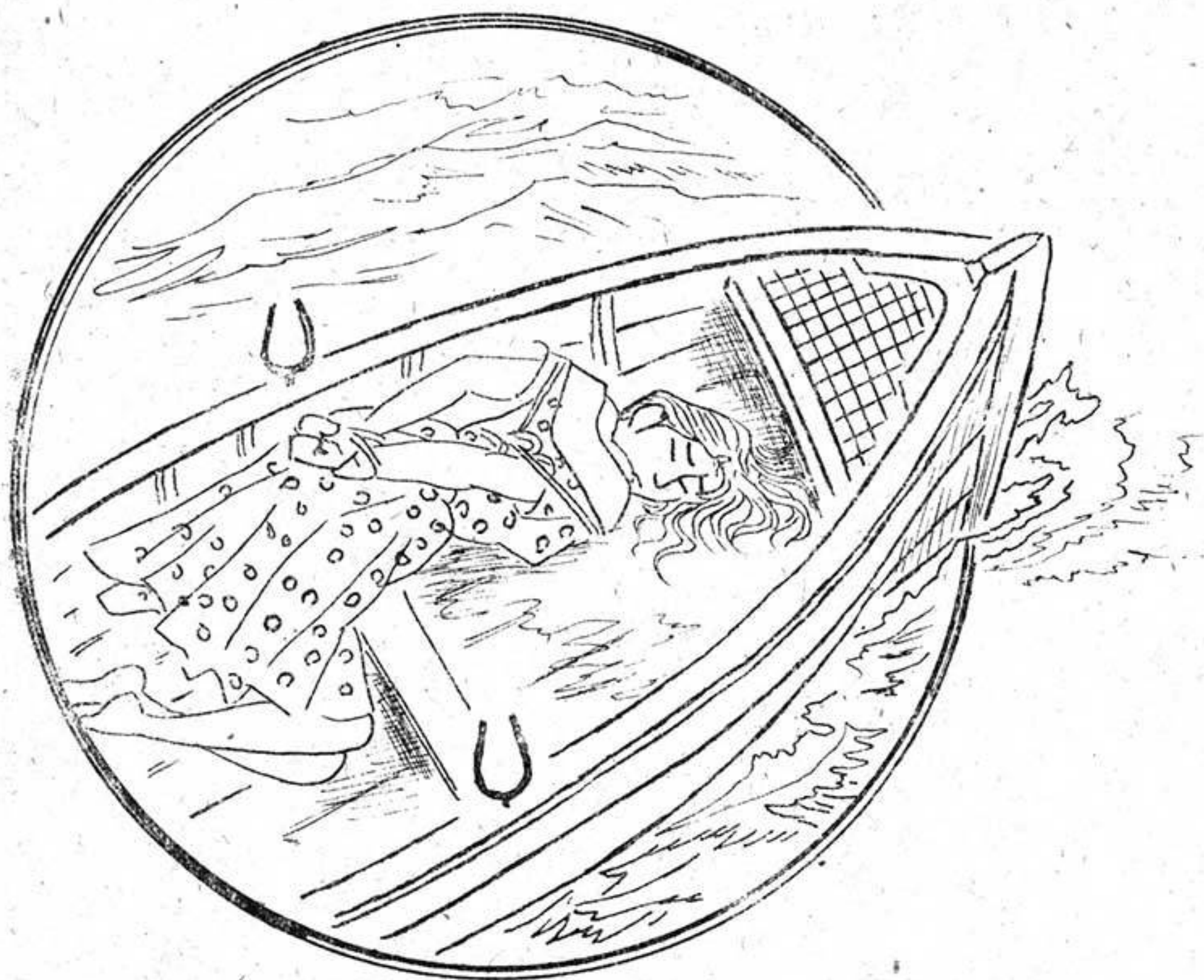
君はもう死んでいるのだから……」

そういつてから、彼は急に手をあげて、空を指した。

「ほら、ごらん、まるで血のように赤い夕焼けだ！」

子供のよう嬉しそうに、彼はそう叫んだのだ。

がなじがらめに縛られた私にも、その夕焼けの色が見えた。本当に、彼がいったとおり、血の色のような朱の雲だった。荘厳な落日。



美しかった。「マゾにとりつかれた女を焼き

つくす火の色だ」と、私は思った。

私はその時、もうわけの判らない、無茶苦茶な感動に酔っているようだった。身体の苦痛は忘れて仕舞っていたのだ。ぼんやり、いやうっとり、宮本の顔をみつめていた。

彼も放心したようにオイルの手を休めて、西の空を凝視していた。我を忘れたようなその表情に、夕焼の反映がうつっている。その少しばかり口をあけた表情が、私は急にいとしく思われたのだ。

「宮本さん！」

「シーッ！」

彼は唇に指を当てて背中を丸めた。

「喋っちゃいけない、黙って！ ほら、船が追っかけてくる！ ね、

聞えるだろう？」

彼の真剣な調子に、私はドキドキしながら耳をすませた。確かに、ポンポンポンと、景気のいい発動機の音が聞えてくる。

「ほら、あれは水上警察の巡視船だ。僕を追跡してくるんだ！ 逃げよう！」

再び、顔の上にレインコートがかけられて、ボートはグイグイと水を切った。発動機の音は間もなく近づいて、何事もなく私たちのボートの傍を通り抜けて行ってしまったが、宮本はまだ懸命に漕ぎつづけているらしい。

もう、湖のまんなかに近いらしい、だが、まだボートは一直線に漕がれるばかりなのだ。

もう、夕陽は沈んでしまっただろう？

と、私は思った。いや、まだかすかに、私の死体の上に、その残光を投げているかもしれない。

私は船板の底の、水の色を思った。そしてその深い深い紺青の湖の底に、こんなにもグルグルに縛り上げられた私の死体が、オモリをつけられて、垂直に、何処までもどこまでも落ちてゆく光景を脳裡に描いていた。

(おわり)

〔図書紹介〕

ある女囚の記録

この辱しめと苦しみ

大 熊 正



拷問の禁止とは

「公務員による拷問及び残虐な刑罰は、絶対にこれを禁ずる（憲法第三十六条）」

拷問は昔から自白を得る手段として広く世界各国で行われてきたが、近世になって基本的人権の一つとしての身体の自由の保障が強化されると共に漸次その影を秘そめて来た。我が国での明治の初年までは改正律例三十八条が「凡そ罪を断ずるには口供結案に依る」と所謂糺問主義手続を定め、拷問も法制上公認されていたが、明治九年の太政官布告八六号で、「凡そ罪を断ずるは証に依る」と改め

られ、更に明治十三年の太政官布告で拷問は正式に廃止され、明治十五年施行の旧刑法では公務員の拷問行為を罪と為し、それが現行刑法に引き継がれて、その一九五条では、公務員が暴行陵虐の行為をした時は七年以下の懲役、ということになっている。

これらのことから分る通り、拷問は我が国では明治憲法時代から既に罪とされ、禁止されていたものである。ところが実際には刑事被疑者に対する捜査官による拷問はある程度公然の秘密とされていた。それで現行憲法では、そういう過去の事実に鑑みて、特に他の条文では例を見ない程の強い調子で、拷問

は絶対に禁ずる、と規定したのである。絶対に禁ずるのは、他の基本的人権の場合のように公共の福祉によって制限されるようなこともなく、いかなる口実によろうとも、行為そのものが許されないという趣旨である。

この規定は人権の保障という意味から当を得たものであるが、他方批判もない訳ではない。その批判とは、拷問は明治以来犯罪であるのに、今改めて態々その禁止を憲法の明文に掲げるのは、いかにも今迄刑法の規定が実際に守られず、拷問が公然と行なわれていたことを自認するようで、国としては甚だ体裁が悪い、というものであるが、これは前記の

次第であって見れば止むを得まい。いわば一種の国の恥部というべきか。

実際にあったこと

ところで、昭和の初め頃といえば、我が国では軍部が満州事変を起して大陸侵略に手を染めたすぐ前の時期で、その頃の我が国には経済的には不景気のドン底で、街には失業者が溢れ、東北地方には婦女買いが出没し、思想的にはファシズムの嵐が吹き荒れて、言論の自由や出版の自由等は枯葉のように吹き捲られて、民権は弾圧され官権が濫用された。暗い陰惨な時代だったといわれています。

次にお話しするのは、そういう時代に、一途の正義感からコムニズム（共産主義）のシンパサイザー（同情者）になった一人の若い美貌の女性が、弾圧に屈せず節を曲げなかったために、官権からこずかれ、ひどい目に遇わされた、その受難の一駒です。ここでちょっと荒筋を申して置きますと、ある日寝込みを襲われて、寝床の上に起き上ろうとするところを二、三人の「洋服」に素早く押え込まれて後手に結え上げられたところから、警察では三人の刑事から横面を張られたり髪を宅られたり、果ては着衣を剥がれて全裸にさ

れた上、手足を結えられて、竹の棒で「女として到底口に出せないような」恥ずかしい思いをさせられ、気も動転せんばかりに腕き乍ら、次第に意識は混沌として行く。公判廷ではこの白色テロを暴露したり（裁判長の顔はパット赦くなって、俯向いたという）治安維持法の徹廃を叫んだりしたので、改悛の情認められずとして懲役四年の実刑を受けて呆然とする。市ヶ谷刑務所に収容されて、そこでは看守長に睨まれて、手錠の制裁罰を受けたり、それから地方の刑務所に汽車で護送される時、大阪駅で五十がらみの一乗客から深編笠を捲られて罵られるのをジッと耐え忍ぶ、という様な記録である。

逆戻りの危険

これは、特定の人達が登場する一つの例に過ぎませんが、その頃同じような憂目に遇わされた犠牲者は全国を通じると何百人何千人あるいはもっといたのかも分らないし、当時の思想警察、特高警察というものの片鱗を示すもので、更に大事なことは、戦後も先頃から児童の福祉を守るということで、又もや出版の自由に対する一種の弾圧的な考えが鎌首を揚げ出しているという事実と関係が深いと

いうことです。

それで、これから御紹介するような悲しい記録も、単なる過ぎ去った昔のこととして、忘れてしまふ訳には決して行かない。それと同じような強権による圧迫思想が陰に陽に今鎌首をもたげているのです。

前置が長くなりましたが、次にその少女の記録から抜粋して御紹介しましょう。

就 縛

七月十四日（昭和五年）の午後一時ごろ、昼食をしようとして、田中が台所へいった。私は奥の六畳でねていた。少女たちは中の間にいた。すると、たちまち足音がみだれて、田中が台所からはしってひきかえし、おくの窓口からとびだした。不意の物音におどろいて、ねていた私は、やおら身体をおこそうとすると、はや、座敷の縁からとびあがった洋服におさえられていた。少女たちは、窓からとびだしたり、便所にかくれたりしたが、みんなとらえられた。私はおさえられたので、もがいたが、二三人かかって私を後手にゆわえあげてしまった。

かくて、私達はついに検挙されてしまった。今度の公判にまわった主要な問題は、以上ま

でのことであつた。

凄惨な辱かしめ

検挙されると、府中のけいさつ署にいれられ、二三日して上野公園のうらの谷中署にまわされた。毎日やけつくような炎熱がはずき、検挙されるまえから、からだの具合のわるい私は、留置場にいられると食物がほとんどたべられなくなった。

捕まってから十日くらいたって、けいし庁の特高係が三人きて、私を二階の調べ室に呼びあげて、しらべだした。私はかれらの顔を見て、反感に口をぐっとつぐんだ。私のまえには頭が中心がうすくはげた五十年配の警部がいた。私の右には三十代の色のくろいチョビひげをはやした、すぐにもえものにとびかかるうとする猛犬に似た巡査部長格の男がおり、左にはそれより一寸年下で実直らしいたくましい体格の男とがひかえていた。

私はかれらの誘導尋問になにひとつこたえなかった。すると、右がわにひかえた猛犬に似た男は、すっと立ちあがって私の頭の髪をむずとつかんだ。
「よし、なめるならなめろ！ こっちの手をみせてやる！」

とさけぶと、さっきから腕がなっていたらしく、ほかほかと私の頬をなぐりつけた。すると、左がわの男がたちあがりさまに足で私の背中をけりつけた。すると前にいた警部もやおら立ちあがって、窓のむこうがすぐちかく民家の二階になるので、向うからのぞきこまれるのをおそれカーテンをおろした。そして、竹刀をもってくると、頭からたたきつけてきた。私は三人の大の男にかこまれて、頬げたはゆがみ、髪の毛はひきつかまれたままばりばり音をたててぬけ、背中足蹴をくらって硬直し、頭はたたきのめされて意識がしだいにくらくなくなっていく。

すると、かれらは、こんどは私をまっ裸にし、捕縄をとりだして私を後手にゆわえあげ、結え目におもい机をしぼりつけようとしたが、それがうまくいかないの、私をなぐりつけ、けりつけ、ついに足までしぼりあげて、さかきにもちあげた。逆さにつるそうとしてあたりを見まわしたが、そこには十二、三貫目の私の体重にたえるだけの釘がなかったの、舌うちして私を畳のうえになげつけると、こんどは竹の棒をもってきて、女としては口にいえないような惨虐なはずかしめをしかけた。私は気がてんとうするばかりにもがいた、

それもうまくいかないの、かれらはこんどは私の上に馬のりになって、両手で首をしめた。

「墮ちろ、おちろ、地獄へおちろ」

手も足もゆわえあげられたままの私は、抵抗する余地は一寸もなく、かれがしめつける手の中で、意識はしだいにこんとんにおちいった。

しばらくして、私が息をふきかえすと、こんどは私をおこして、手足をしばったままですわらせ、肢の肉の上をふろしきにつつんだ鉄棒で力まかせにうちはじめた。みるみるうちに股はあかくなり、紫いろになり、ついにどすくろくなって、はれ上ってきた。いたさに息もたえだえになって私はなきさけぶが、かれらは肉がみだれとぶまでは手をはなそうとはせず、打ちつづけた。

そのうち、さすがにかれらもつかれて、看守をよんで、足も腰もたたない、古綿のようになった私を、留置場へなげこんだ。

翌日、また私を調室につれだすと、きのう打った股の肉が、どすくろくはれ上ったうえを、また鉄棒で小ずきはじめた。私の肌の肉は、皮膚のあつみが抵抗するためとびちらないが、内部ではずたずたにちぎれていく。

いくら職業とはいえ、なきさけぶ私を平然と見おろして、まるが石工がのみをふるうように、こつこつと生身の肉をちぎっていくこのひとたちは、そもそも何者であろう。これまで一面識もなく、何のかかわりもなかったものが、とつぜんあらわれて、私をころすまでいためつけるこのあらくれた手は、何の表現であろう。

私は脳天をつきぬけるいかりにかられながら、意識はしだいに混とんにおちいついていった。

こうした白テロがもとで、私は警察の留置場で寝こんだまま、おき上ることもたち上ることもできなくなった。食物はもとより、湯も水ものどを通らなかつた。からだはしだいに衰弱していくばかりとなった。……十八日の夕方、私は担架にのせられて、付近の病院にいれられた。

市ヶ谷刑務所へ

九月中旬に退院して、それから一かかえの薬壇をもって、方々の留置場をまわされ、十月末に起訴されていよいよ市ヶ谷刑務所へいくことになった。私は留置場の壁に、やせた肩をなげかけ、いまさら、意地もはりもすて

てないた。しかし、その下からわき上ってくる理性に制せられた。

「行こう。人生とは峻厳な規律である。」

十月二十七日、あまたの薬壇をかかえたまま、私は市ヶ谷刑務所の門をくぐった。

婦人の看守にむかえられて、編笠をかぶりながい廊下をあちこちまがり、沢山の門をくぐって、ついに女区にでた。その庭で、もってきた薬壇を、ほとんどすてさせられた。

私は西がわの舎房で、一番はしに収容された。死線をこえてここまできて落ついてみれば、何よりもまず、私はかなしかった。飽くまでやると争ってきたものの、さてこの頂点にたつて、過去と将来とを展望すれば、いかりとかなしみとが交錯してやまない。ある時は革命の情熱にもえ上って興奮し、ある時は白色テロルの残虐に興奮し、さてある時は、故郷にわびしくくらす両親のおいた姿をおもいやり、ある時は一緒にいた者たちの、細々とした心ずかいと思ひ出にふけり、しみじみと涙した。

再び捕われる

（それから病を得て保釈中、行方をくらましたが又捕まる）

夕方、あわただしい足音が廊下にみだれたので、私ははっとして、寝ていたからだをおこした。と、もう障子があいて、五六人の大きな洋服姿が室内におどりこんだ。裏口のまどにも、髭面が三つ四つのぞいていた。

「行こう。」

ちかづいた男は私の手をとって、おだやかにいった。逃げる隙はなかった。私はもはや観念し、かれに手をひかれたまま立上った。

前原署について、私が自動車からおりようとする、一人のふとった刑事がずかずかとすすんできて、大きな拳固をつきだすと、ポカリ……と私の顔をなぐりつけた。いたいと思うまもなく、今度は反対の顔を又、ポカリとなぐった。私の眼から、思わず涙がこぼれた。ふとった刑事はふうふうあらいい息をふいて、私をにらみすえた。

するとそこへ、わかい巡査がきて、私の帯をつかんで、なかへ引ずりこみ、調室へつれていった。私は調室のまんなかになたされ、ふとった刑事と、わかい巡査が、左右から、力一ぱいになぐりつけてきた。私は眼をこじって、かれ等のおもうままになぐらせようとした。なぐりかたがあんまりはげしいので、立っていた私はよろめき、椅子の上におっ倒れ

た。すると、外でながめていた者たちは、どつと歓声をあげた。ついに私は、顔桁がゆがみ、頭の方々にいくつも瘤ができて、気がとおくなってしまうた。

六日の末、私は前原をたつて、二人の特高に伴われ、市谷刑務所にとどけられた。

手錠罰

市谷刑務所では、まえにいた監房に、また入れられた。称呼番号も、以前の五二番がそのままのこっていた。

あるとき、隣房と会話をかわしていると、ことりと音がして、視察窓があいた。私はいそいで壁ぎわからとびのいて、まどを見た。二つの白い眼が、窓のなかにひかっていた。

私はあかい顔をして、口をゆがめた。しかしもうおそかった。看守部長は、看守長にいいつけて、私を房から引き出し、手錠をはめさせた。あつい皮の帯で胴をしめて、その帯に両手をしばりつけるのであった。両手はすこし後にまわって、捻じ加減になった。私は手錠をはめられたまま、房へかえされた。夜になると、私は畳んだ布団に身をなげかけて、ねむろうとした。手首に錠前の金がかいこんで、いたがった。窓から、蚊が沢山はいりこ

んで、私の顔や手や足を、ちくちく刺した。あつさといたさと、不自由さで、私はねむらずにあかした。夜が白むと、頭がぼんやりして、心臓が小刻みにはやくなっていた。午後、看守長の前に、私はよびだされた。そのときはもう、腹の皮が背骨にびたりくっついて、蒼白な顔に、冷汗がながれ、房のなかにぐったりうち倒れていたものであった。手錠はその日に、解かれた。

公判は十一月十八日に、東京地方裁判所でひらかれた。私は、警視庁特高係からうけた暴逆な白テロを暴露した。裁判長の顔は赫くなつて、ぐつと唇を噛みしめていた。苦痛と、憤怒が読みとれた。だが、結果は懲役四年の判決だった。

赤い着物

二月十五日の午後、看守部長が調室によび出した。そこで訊問と身体検査をうけて、今までの衣服をすっかりぬぎ、紅殻いろの懲役囚の衣服を着せられた。房にかえると、私は鏡の前にいって、あかい着物をきた自分の姿をうつしてみた。愧かしいという気もないし、いやな感じも起らなかった。落着くところに落着いた、当然な感じが、心を平靜にさせて

いた。翌朝、被告より一時間はやく起された。私は起きるとすぐ、髪を受刑者達が結っている銀杏返しに結った。幼い時田舎で育ったので、小学校にはこんな髪を結ってかよっていたから、私には造作なく結えた。あかい着物をきて、銀杏返しに結って見ると、年よりは随分わかくみえた。

汽車護送

三月の十二日に私は広島県の刑務所へおくられることになった。夕方暗くなつてから、私は監房をでた。非番の看守につれられて玄関にゆくと、前から顔を見知っている男子のわかい看守長がたっていた。彼はこれから広島へゆくことをのべ、私をつれて、まっていた自動車にのった。私につづいて、五十年配の男子の看守がのった。外には雪がふっていた。空からたえず落ちて来る、ちぎれ綿のようなものが、地上に深く積っていた。それをかき分けて、自動車は進んで行った。夜の東京の街は白く鎮まって、クリスマス飾菓子のようにだった。自動車はその間を縫って、東京駅についた。

東京駅にはいつもより人が少かった。それでも私が編笠をかぶり、旅行のために青い着

物をきているので、人々の眼が珍らしげに注がれた。私は、見たい人はよく見とくがよい、〇〇〇〇子は今こんな姿になっていると、肩を張って、人々の視線の中につたった。別に悪びれた感じも湧かない、卑下もない。これも亦峻厳な、人生の規律だという感慨しかなかった。

時間がきて、汽車にのりこんだ。汽車の中でも、私は編笠を被った儘であった。車内の人々が眼を光らせて、私の様子に注意したが、それもちぎりに止んでしまった。ただ私の近くにいた五、六才位の女の子が、しきりに編笠の下から、私の顔をのぞき込んで眺めた。汽車が進行し出すと、私は座席に腰をおろし、むかいあった看守長とすずかに話した。私の横には看守がいて、きちんと身装を正し、いかにも謹厳そうに、膝の上に手を重ねて黙々としていた。

編笠をはぐられる

大阪駅に汽車がつくと、若い「女」を連れ、五十年配の洋服の男が、私たちの座席の窓から顔をだして、赤帽からトランクを六つか七つ位うけとった。それを私たちの頭上の網にのせた。そのあとが、看守長の横が空いた

ので、その席へ腰を下した。彼はじっと私をながめ、それから看守長にはなして行つた。

(彼は大分酔っていた)

彼は、私の方に、もうろうとした酔眼をむけて、大きな眼玉をむき出しににらんだ。

「こりゃ男ですか、女ですか。ハア、女ですね。女が罪を犯して、こういう姿になるということは、まったく以て、みるに堪えられない」

そういつては尚も、私を睨んだ。

午になって、看守長が汽車の弁当を買って私にくれた。私は遠慮なくそれをくった。すると、例の男は、私の箸の揚げ下しをじっとみつめて、又しゃべり出した。

「ハハア、お上には、かように立派な弁当を、この罪人を買っておやりになる。まったく、勿体ないことだ。それにこの女は、平気でくっている。」

彼はそい云って、フと手を伸べて、私の被っている編笠をはぐって、顔を出してしまった。そして、ぺろりと舌を出した。

「何だ、大きな顔をしているぢやないか、こいつ——」と大きな声でどなった。

彼の声で車内の人々は、急に私の方に視線をあつめた。私はいそいで、編笠をもとに直

した。もっていた弁当箱を、彼のあから顔に投げつけようかと身がまえた。唇がひき吊つて、涙がしきりにこぼれた。しかし、私は又思いかえして、しずかに箸をおき、弁当箱をしまった。

牢格子の中で

広島についたのは、十三日の午後六時頃であった。刑務所の中にはいると、私は一応調べを受け、七番という称呼番号をあたえられ、青い着物をまた赤い着物にきかえた。私をつれた若い看守は、私に手足をあらわしてそれから監房にいれた。房の中には、畳が二枚しいてあった。その周りは板間になっていた。全部で四畳半位のひろさで、二方が板壁になり、他の二方には大きな格子がはめて、外に紙張の障子がしめてあった。十燭の電灯がついていたが、非常にくらい感じがした。「ひどく、田舎のおくに来たものだなあ」私は房の中にちょこんと坐って、はじめて溜息をはいた。その中に看守が食事をもってきた。私は箸をとり上げて、食事にかかった。飯は挽割麦四分六分で、硬くてボロボロこぼれた。お菜は大根の切手を醤油で煮て、その上に豆腐の二種立方位のうすい切れが、一切おいた

きりだった。みんな冷たかった。私は負けてはならないと勇気を出して食事を頑張った。さっぱり味がわかなかった。そして嘔むのにかなり骨がおれた。

私がここに来て最も惧れたのは、肉親にあうことだった。誰か、家の者が面会にでもきてくれたら、私は氣絶するかも知れないと思う程恐しかった。あれ程、私のことを心配した両親や弟妹達に、何といて慰めたらいいか、言葉がわからなかった。彼らの切なる期待を裏ぎって、私はついにここまでできてしまった。赤い着物を着、髪はひきつけの銀杏返しに結び、赤い前掛をかけて、腰には手拭を折って挟み、そうして牢格子の嵌った暗い房の中で、ちっと真田を編んでいる私の姿を見たら、両親達はどんな氣持になるだろうか。

暗い谷間

(その中、軍需品の下請作業で忙しくなった)

軍需品の製作を刑務所にまでもちこむというのは、あきらかに戦争準備で、刑務所は軍需製作の予備軍となったのだ。その中残業がはじまった。正味十四時間も一日中にはたらくので、なかなかつかれた。夜、ころがるよ

切腹とその姿態の雑感

浜路 貞之助

若く美しい女性が、髪は日本髪、白羽二重の振袖に白足袋をはき、自らの手で自らの左腹部に深々と九寸五分を突きさす。サッと飛び散る真赤な血汐が振袖を染める。唇をかみしめながら、一文字に右脇腹に引廻せば、グワッと切り口が開き、腸が露出し、ひざにたれ下る。

こうした美女の切腹場面を夢見る私に、七月号の芹沢伊保様の「私の無惨絵」は素晴らしいものでした。長い黒髪を白いリボンで結び、白装束に白足袋姿で一文字に切腹血はひざから白布に伝い流れ、腸が溢れ出ています。首を刎られた死骸は腹に刀をつきたてたまま、ドッと倒れ伏す。又、洋服姿の切腹もありましたが、私はやはり和服ものが好きです。

内臓露出の凄惨な場面は、三十七年二月号にも「切腹のSM性」と題し、沖田寿様が美姫城主の最期を描いておられます。こ

れは落城の場面で、炎える城中の一室で腰元と共に美しき姫が白の振袖のひざを白布で結び、柱に上半身をくくりつけ、十文字に切腹し更に乳を突きさしている絵です。十文字ですので、大腸小腸、更に胃まで露出しています。

三十六年六月号には、法谷四郎様の「文芸作品に於ける『切腹』の描写について」という一文にさし絵がついています。日本間で女性が一文字に切腹し、横に倒れ腹部から腸が露出し流れる血汐の中でウネウネとうごめいているという構図でした。自殺である切腹ですので、やはり腸その他の内臓は露出するのが当然でしょう。それ位切らねば、とうてい死に到る事は出来ないと思います。

切腹の姿は、やはりこうした凄惨な情景になるのが、あたり前のようです。芹沢様や沖田様も、こうした考えのもとに切腹画

うにして寢床にはいると、朝まで夢もみないでねてしまう。

六月二十何日かに映画があった。この日は残業をやめて、六時半ごろから映写がはじまった。その前に、支所長が挨拶した。「……刑務所で見せる映画は、何も娯楽や余興ではない。みんな真面目に考え、真面目に更生してゆくための、おしえを持つものとして見てもらいたい。だからみる時、手を叩いたり、声を出したりしてはいけない。」最初に東郷元帥の国葬の実写があった。それから、南洋委任統治の諸島の実写があった。

今や、プロメシウスは谷間にころがりおち逆境と失意の時代がわれわれにきた。けれども、地球はつねにまわっている。われわれにあすがこない、どうしていえよう。もくもくと社会ではたらいっている民衆との連帯性をわすれず、進路の喪失をきたさず、私は解放の日までこの牢獄を家とし、刑期に堪えていこう。

以上は、「愛は牢獄を越えて（中本たか子著）」（五月書房、一四〇円）からの抜粋です。この本は好著と思われまので、志ある方は同書を読まれることをお勧めします。

をかかれた事と存じます。唯場面が場面です。誌上ではなかなか実現出来ないのかもしれない。しかし私達切腹愛好者はそこまでして貰いたいと願っております。

さて、では一文字腹の場合は、どの位の内臓が露出するでしょうか。いろいろの書の中に記してあるのを読んで総合すれば、小腸、大腸、腎臓、脾臓等でしょう。深く腹部大動脈及び大静脈まで切断する位の深さで長さも腹部全面にわたるものでなければなりません。十文字腹に切腹すれば、更に脾臓、横行結腸、胃、肝臓等も露出するであります。こうした内臓が血汐にまみれて白衣や白足袋、白布を紅に染めながら流れ溢れて、その血の海の中に横たわる武家娘や腰元、こうした画をお二方に描いて貰いたいと思います。沖様が美姫城主の最期と一緒に送られた残り五枚の絵を、ぜひとも誌上にのせて下さる様、編集部の皆様にお願ひ致します。

坐り方も正坐から正坐をくずした一般の女坐り即ち横坐りとも言われるもの、たてひざ、あぐらは白足袋が前方に位置し、したたる血汐に染まるだろうと思えます。此の他立腹もあり、これは最も露出した内臓はたれ下り、腸等は他のどれよりも多く露出することでしょう。

四馬様の切腹画も血汐が飛び散り、ドツと溢れ流れる様は描けておりますが、腸は露出していません。分譲品にはあるのですが、奇クファンの中には入手出来ない事情の方も多いのですから、此の様な絵も描いて切腹ファンの夢をみたして下さい。切り国から露出した腸のクローズアップも又一つの方法でしょう。切腹そのものが、血汐にまみれるものです。決してきれいごとではありません。真実の姿を追えば追う程、凄惨なものを要求してくるものです。奇クの分譲品の中に、近頃、こうした腸露出の写真が出てきたのは、一步真実の姿に近づいてきたものと言えます。

松竹映画の「切腹」の中で、竹光で切腹し血がどつと噴き出て白装束を染める所があります。もし竹光でなく真刀で真一字に引きまわせば、腸がうねうねと血にまみれて膝の上に流れ出るでしょう。

正坐から始まり、死に到るまでの切腹姿態を連続で血紅をトリックで描き出されたら、全国の切腹ファンは感激の涙を流すことでしょう。とても一冊の奇クでは満足できず、十冊ぐらいいは買い求めるだろうと思います。切腹研究家の中康弘通様始め、須藤律夫様、法谷四郎様、折伏下男様の御健筆を祈ります。

病院残酷物語

△続・看護婦さんとの会話▽

山

岸

操

看護婦さんとお付き合いも随分深くなった。今日も女二人、お話しがはずんで、山盛り一杯のおせんべいももう残り僅か。女同志だと、思いきった話も出るのだけれど、公開を憚かって、その一端をのみ御披露に及びたいと思います。題して病院残酷物語――。

「映画の残酷物語見た？」

「ええ見たわ、すごいよね」

「私って、案外平気だったわ」

「そうお、平常手術やなんかで、血をみることも多いからかしら」

「そうね、それもあるかも知れないわね。だ

けど概して女の方が、いざっていう時には勇気のあるものよ。週刊誌の映画評だったかしら、はじめは女の人は手で顔を覆ったりしているが、指の間からそっと見てる、その中、だんだん身体をのり出して……なんて書いてあったつけ、かえって男の人の方がそわそわしてたらしいわ」

「そうね、毎日血をみてるんだもの。私の主人なんか、時々お台所を手伝うなんていっていたずらして、庖丁で指なんか一寸切ってごらんない、それマーキュロだ、繃帯だって大さわぎよ、男の人の方が血を、とってても

わがるわね」

「私なんか、血をこわがっていたら、商売にならないわ、ホホホ……」

「商売といえば、貴女なんか、随分残酷だなあとお思になることがよくあるでしょ」

「そりゃもうしょっちゅうよ。お気の毒だなあ、可哀そうだなあと思うことがよくあるのよ。でも、そんな気はいを見せると、かえっ

て、赤くなったりされるでしょ、だから、冷たい位平然とした態度をとるのよ」

「どんな時？ 貴女産婦人科だったわね」

「一番可哀そうに思うのは、はじめての妊娠

の方ね。大概、お母さんか、最近では御主人がつきそってこられるわね。みてるとすぐ分るわ。青い顔して、待合室の一番すみっこでじっと下をむいて、付添ってきた方が、耳もとでそっと話しかけてもただうなずくだけ、こんな方はきつと初産婦なの。どう、貴女も経験者ね」

「全く、その通りだわ。何だかこわくって、はずかしくって、みんなが自分の方ばかりみてるような気がしたわ」

「そんな事ないんだけど、そんな風に感ずるのね。順番がきて、山岸さんなら山岸さんどうぞと呼ぶでしょ、なかなか入って来ないのよ。受付の窓からのぞいてみると、付添の方が耳もとで何かゴソゴソ話してるよ、何言ってるのかしらと思うわよ」

「ああ、あの時ね、何と言ったらいいかしら、診察ってどんな事をするんだろう。こわさと心配でどうしたらいいか分らないのよ、私、夫と一緒にいったんだけど、夫は何も知らないし、大丈夫だ大丈夫だとだけ繰り返すんですよ、何が大丈夫なのか、ちっとも分りやしないわ」

「最近では初産婦って、言い合わせたように和服でくるのね、今からお腹が大きくみえるわ

けじゃなし、和服でなくたっていいのに、かえって、ぬぐのが大変じゃないかしら。それがいい合わせたように、裾の前を両手で合わせながら入ってくるのよ。どうせ今すぐぬがされるのと思うと、おかしくって……」

「まあ、それこそ残酷ねえ」

「だってしょうがないじゃないの。そのために診察うけに来たんでしょ？」

「で、それから？」

「まず問診でしょ。先生は、真面目くさった顔してカルテに記入してらっしゃるわ。御健康ですか？ 最後の月のものは？ 胸がむかつくような事は？ おりものは？ 食物の好ききらいの変化は？ なんて。その答えが蚊の泣くような声で、殆どききとれない位。いかげんな所で、では御診察致しましょうとなるのよ。さあ、これからが大変、私の役目よ。こちらへどうぞってわけで、衝立の陰の脱衣室へ導いて、下着をお取りになって下さってわけ。もじもじしちゃって、なかなかはかどらないのよ。洋装だったら、スカートだけでしょ。和服ときたら帯が邪魔になつて、そりや大変なのよ。あの、パンティも取るんでしょうか、なんて子供みたいな事を質問する方もあるわ。大概、私に見えない

ように、後を向いてそろそろぬいでるけど、どうせ、すべてを私に見られるのと思うとおかしくなるわ。手を引っぱるようにして、診察台に寝かせるんだけど、青い顔してるんや、真赤な顔してるんや、何れにせよ平静な方って殆どないわね」

「ほんと、あの時の氣持ってないわね」

「貴女もそうだった？ 胸の所に下るカーテンがあるでしょ。あれを下げて、御診察ですから、お楽な氣持で、力をぬいて下さいね。母親のようにつて教えられたけど、そんな具合で、静かに着物の前を開いて、両足を……」

「あっ、あそこのにせるのね、あれ、だんだんせり上って、開くじゃないの。すごい恰好になるわね、ほんとに切なくて」

「そりやそうよ、両足をきちんと合わせてたら、診察できないじゃないの。ハンドル一つで上げ下げも、開閉も出来るのよ。両足を四十五度に上げ、六十度に開かせた所で先生をお呼びするわけ。先生の手がふれると、言い合わせたように、みんなピクッと全身が痙攣するわね。可哀そうだなあと思うわ」

「貴女、妊娠したらどうする」

「平氣よ、といいたけれど、さあ、自身だったらどうかな、やっぱりビクッとするんじゃない



ないかしら」

「まあ、案外純情ね、オホホホ……」

「診察なんて普通はすぐですものね、御目出とうございます。御妊娠三カ月です。御出産予定日は……なんて言われて、帰ってゆく時の嬉しそうな顔ってないわ、十分程前の姿、みせてあげたい位」・

「まあ、残酷ね。中絶の方も随分あるんでしょ？」

「ええ、希望者は随分多いわ。だけど、うちの病院は、そりゃ中絶にはうるさいの。優生保護法のすべての条件に、完全に合わないし決してやらないから、実施したのはごく少いのよ。大概あやしげな所へゆくらしいわ」

「あれ、危いんでしょ」

「そりゃそうよ、人間の身体って、自然に出来るようになってるのよ、それを無理に下すんでしょ、技術的にもしっかりしてなければ勿論、消毒等の設備も完全でなければいいし、それよりも人道的問題よ」

「むづかしいのね」

「そりゃそうよ。受胎した以上、もう立派な一個の人間よ。下した胎児って見たことないでしょ。こわいみたいに一個の人間よ。この時こそ、残酷だなあと、しみじみ思うわ。私には出来ない、どうしても隋胎なんていやだわ。そう、こんなことがあったわ。カトリックの信者の方だったの。カトリックって、あのほうとても嚴重でしょ。丁度その方、結核の気味でね、産めば結核は必ず悪化するわ、それに脚気でね、あの恐ろしい子癇の起る疑もあって、先生も、これは産んではいけないとおっしゃったの。カトリックでも、強盗なんかに強姦されて出来た時、今のように母体に危険がある時などに限って隋胎も許されるんですって。所が、所がなのよ、頑としてその方下さないっておっしゃるの。神様からさずかった子供です。立派な生命をもった人間です。たとえ私に若しもの事があっても、人

為的に一個の生命を無にすることは出来ません。手をつくすだけ尽くしてみても、私の生命に異常があるうとも、或は子供ともども命をなくしても、それは神様がお許し下さいます。どんな事があっても、下しませんとはいきません。これにはさすがの私も頭が下りましたわ」

「それで、どうだったの」

「ええ、驚きましたわ、勿論、月に二回は診察を受けに来られましたし、先生もありとあらゆる手を下されました。でも最後まで余断は許されなかったんですけど、カトリックの立派な信仰をもってらしたんでしょね、結局立派な女の児を産まれましたっけ」

「まあ、よかったわねえ」

「残酷物語が、大変なお説教になってしまったわ。残酷といえは、子宮癌、乳癌の手術は大変よ。そりゃ癌でも、喉頭癌、肺癌、肝臓癌、直腸癌なんかはあまり助からないわね。でも胃癌、子宮癌、乳癌は、早期に発見さえすれば先ず大丈夫だから、御安心下さい、って言っても、後が悲惨だから、まあならない方がいいわ。当り前の事だけど。勿論、手術も大がかりで大変よ、だけどそれにもまして後がねえ。子宮癌の手術したら、もう子供は

出来ないでしょ、もう一人ほしいなんていったって駄目、乳癌の手術のあとはそりゃお気の毒よ。切開のあとの傷あとは勿論、お乳はペッチャンコになって、そら、何とかいう映画があったでしょう？」

「ええ、乳房よ永遠に——」

「そうそう、それぞれ、あんなわけよ。女の命、見るも無慙ってわけだわ。貴女が一番残酷に感じたのは何？」

「そうね、さっきのお話のはじめての診察だわね。想像も出来ない恰好させられたんだもの。それから、浣腸だわ」

「そらはじまった、余程、浣腸がこたえたらしいのね。浣腸なんて、日常茶飯事で何でもないじゃないの」

「そりゃ貴女はそうなのよ、御商売柄。でも普通はそうじゃなくってよ、人にお尻を見られるだけでも大変な苦痛なのに、事もあるうちに、浣腸器を挿しこまれるんですもの」

「そんなに深刻に考えなくってもいいんじゃない。貴女、そんなに浣腸が気になるとは、さては、浣腸のファンになったわね」

「まあ、いやだわ、浣腸なんて、思い出しても身ぶるいするわ」

「どうしてどうして怪やしいものよ。女って

あの刺戟を覚えると、やめられなくなるっていうことよ。病院でみた浣腸のお話してあげましょうか」

「まあ……」

「ほら、身体をのり出してくるじゃないの」「うそ、うそ、いやだわ」

「だけど、今日は駄目、もう帰って、今夜の夜勤の準備しなくちゃいけないもの」

「そう、そりゃ大変ね、明日の朝まで？」

「とんでもない、今夜夜勤で、そのまま明日は日勤、明日の晩じゃなくちゃ開放されないわ。貴女のおすきな浣腸も二、三本やらなければならぬでしょ。浣腸のお話は又今度までお預けよ」

「じゃ、今度は、浣腸の種々相ってわけね」

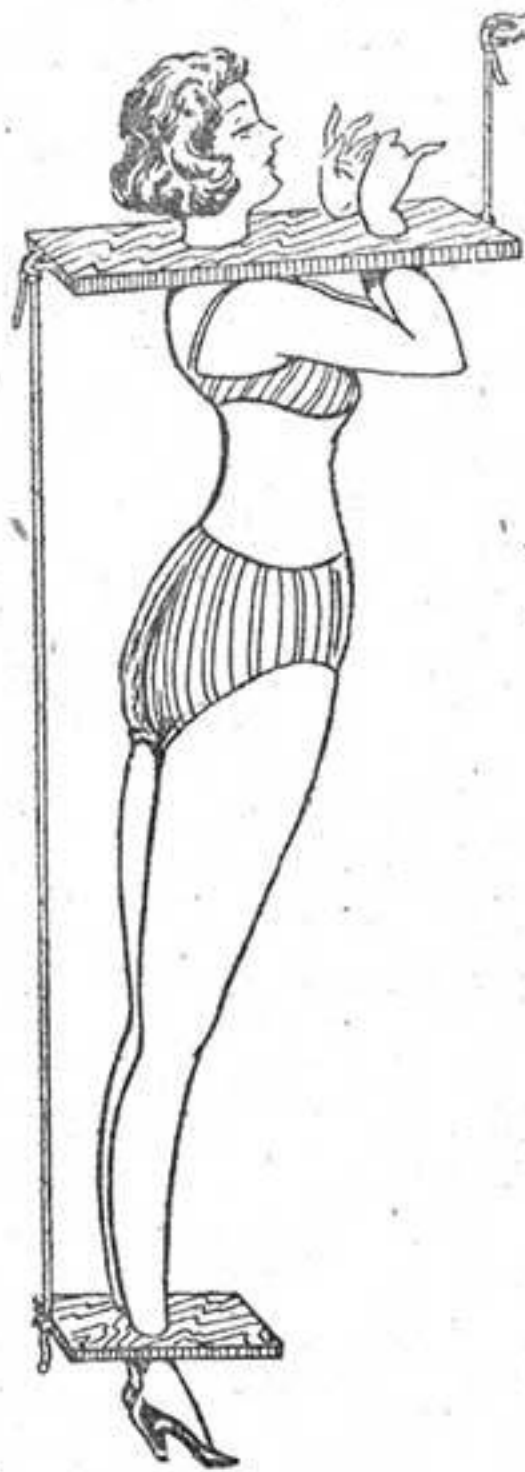
「ホホホ、大変なテーマになったわね。患者さんの反応をみながら、お話の種作っておかなくちゃならないわね」

「たのむわよ、ホホホ。じゃさよなら、無理なさらないで、おからだお大切に」

「貴女も便秘などなさらないように、ホホホさよなら、アバヨ。又こんど」

(おわり)

「臨月腹」に期待して



瀬 沼 四 郎

安原さゆりさんをモデルとした「妊婦新作フォト」(九カ月)の六葉(略号「やま」と「やむ」)は、何れもマニアを十分満足させるすばらしい作品だと思います。かく申す小生も、感激して筆をとっている一人です。

半年近く前に発表された、児玉昌子さんの妊娠ヌードは、この種のものの先例を奇クの上で開いた点で、画期的な意義を持ったと言えます。しかし、今度の安原さんのものは、それにくらべて、モデルの腹の大きさといひ、

画面の鮮明さといひ、さらに数段すぐれた出来ばえと言わなければなりません。モデル、提供者、編集部の方々に、心からの感謝の意を表する次第です。

特に、熟れ切った大きな瓜のような妊婦の腹の感じが、実にリアルに写し出されています。全くすばらしいの一語に尽きます。さらに嬉しいことには、臨月の作品の次号発表が予告されていることです。

「臨月腹」——という言葉は羽村京子さんの

発明だったと思いますが——の妊婦のヌードは、いわば妊婦マニアの夢だと言えましょう。それがいよいよ実現される、この一カ月間の待ち遠しさを小生はどう表現したらよいでしょう。

大体妊婦のヌードなどというものは、現在では恐らく、普通の方法ではまず入手出来ないものですから、非常に貴重なものです。普通の人にとっては、妊娠した妻を撮る以外には殆んど実現の可能性のないものです。この点、敢えてそれを発表されたモデル、提供者と編集部の方々の英断に敬意を表する者です。感謝の言葉は数々ありますが、次に幾つかの希望を申し述べてみたいと思います。

第一に、少なくとも発表されるものについては、必要な個所は見えないようにして、全身像を発表出来るようにして欲しいことです。新作品でも顔の方は、黒いマスクでモデルが誰か分らないようにしてあります。私たちがマニアはモデルの顔を見たいのではありませんし、プライバシーの上から言っても、これは当然のことです。それなら、体の見せたいいけない部分についてもそれ相当の配慮をして然るべきです。夫婦であれば、完全な全裸を希望される理由もよく分りますが、発

表されるものだけは、ポーズを工夫するなり、布片で蔽うなりして、最小限度、隠すべきところは隠した方がよいと思います。そうして、文字通り、頭のとっぺんから足の先までの全身を画面に入れて下さい。今のところ、妊婦写真については読者有志の提供に頼っているのですから、これから撮影される方に希望致します。

第二に、ライティング（照明、採光）およびバック（背景）の処理に難点があるのではないのでしょうか。バックに室内の家具や建具がごちゃごちゃと写っていたり、明るい窓を

背景とした逆光のものが多いのは残念です。この点も撮影者の方に一考を求めたいと思います。

第三は、編集部の方への注文ですが、この種の作品を、分譲品としてだけではなく、モデルと提供者のお許しを得て、本誌グラビヤにも是非発表していただきたいことです。勿論毎月でなく、またただ一葉ずつでもよろしいのです。妊婦の腹、ことに「臨月腹」の美しさを読者すべての方に鑑賞していただくために。このことは独り妊婦マニアだけの希望ではないと信じます。これによって、奇くは

出して、全裸の腹部をあからさまにさらけ出した若妻の大胆なポーズ。一見して、その腹部の巨大さに、マニヤの血を躍らすことと必至の貴重な文献、妊婦ヌード。

妊婦しぼり (九カ月)

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
安原さゆり 略号（やむ）

全裸ですつくと立った妊婦を側面からキヤッチしたので、見事な膨らみを見せた妊婦九カ月の丸い腹部が、ぷっくりとつき出て、いささか垂れ気味となり産み月の近いことを如実に示している。

妊婦新作フォト

京都市在住の一読者の方の御好意により妊婦のヌードと妊婦の全裸緊縛写真の提供を得ましたので、ここに分譲写真として発表いたしました。マニヤの方々の御気に召しコレクションの一端に加えていただければ幸いです。

妊婦ヌード (九カ月)

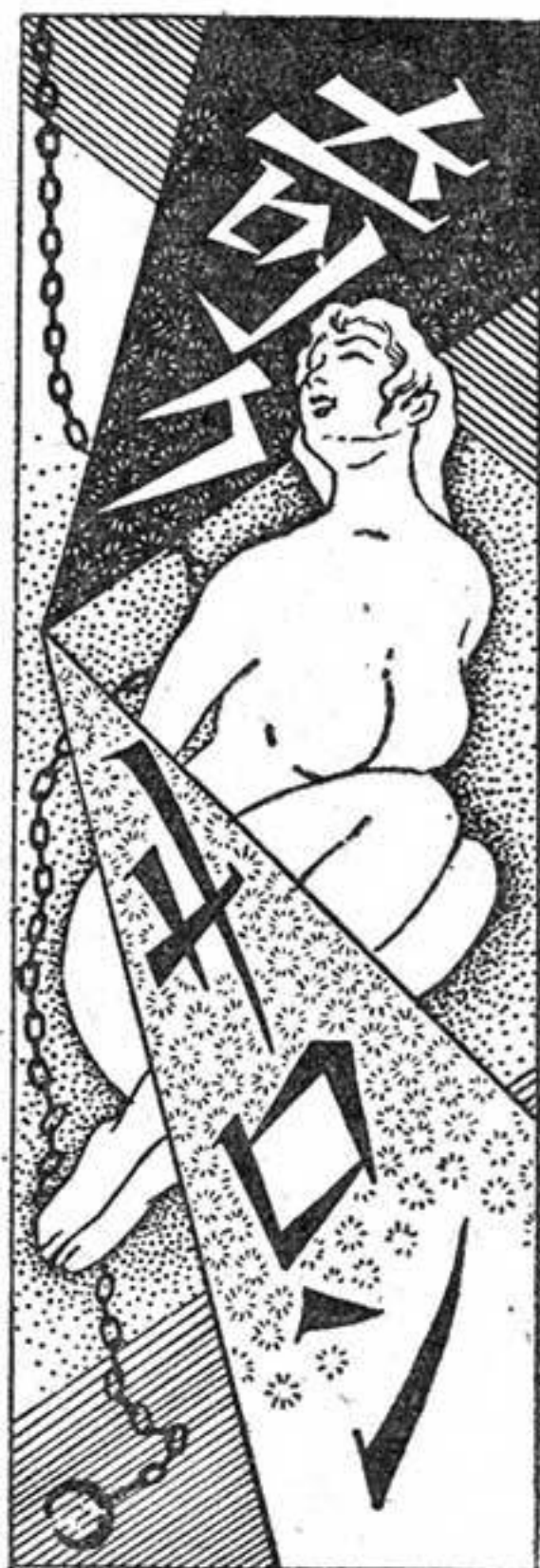
大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
安原さゆり 略号（やま）

妊娠九カ月の便々たる大きなお腹をつき

いよいよ特殊誌としての異色を深め、新たな声価を増すと思います。是非実現して欲しいと思います。ただ小生としては、花田一郎さん（六月号「妊婦写真雑感」）や鹿島隆二さん（八月号読者通信）などのように妊婦の腹を割くことには余り興味はなく、もっぱら「鑑賞用妊婦」でよろしいのですが、場合によっては妊婦の切腹物とか、もし可能ならばですが、縛りだけでなく吊りを加味したものでも結構です。

以上、新作品への感想と、勝手かも知れませんが幾つかの希望とを述べました。同じモデルによる「臨月腹」の作品に近く接するところ出来るのは望外のよろこびです。大いに期待し、首を長くして待っています。

最後に、妊婦マニアの一人として、より多くの読者の方が、ぞくぞくと、若い妊婦のヌード作品を発表されますよう。さらには、編集部カメラ陣による妊婦ヌード撮影のためにモデルとして協力される妊婦が出現しますよう、特にこれらを通じて、すばらしい「臨月腹」を鑑賞させて下さるよう、切望して筆をおきます。（小生の好みは、むしろ縛りなしのものです。そういうものも発表して下さい。）



奇ク発刊以来の庄巻と期待していた「花と蛇」が再び誌上にあらわれたので、全く、うれしくてな

りません。一時は中断されたものと諦め失望していただだけに、再登場の喜びは一しおでした。特に八月号掲載の分は（羞恥地獄の章）繰り返し読んでも胸が躍ります。

京子の出現により次号あたりで完結を予想されますが、私の秘かな願いは、京子が静子令夫人の救出に失敗（例えば桂子の胸に短刀が突きつけられるなど）して、彼女まで捕われの身となり、ズベ公や川田達にさんざん罵られ、全裸に剥がれたあげく、口から溢れるほど鱈腹塩水をのまされ、排泄強制の仕置きを受ける羞恥責絵図です。八月号の裏表紙の広告を見て、四馬孝氏描く浣腸責絵図が好評と知り、大いに意を強くしました。

○ 前回の「か6」が想像以上の出来栄えに、すっかり感激していた私は、今回も大いに期待しているものです。（S・M生）

○ 最近、奇クにオシメやオシメカパーマニヤの方がふえて、手記や告白などとともにときどき写真や絵がみられるようになってきたことは喜ばしいかぎりです。そこでこのさい、全国数多くのマニアのために、次のような写真か絵を作っていた（もし奇クにのせにくければ代理部販売の写真にでも）お願いいたします。1、女学生浣腸責め、セーラー服の可憐な女学生が地下室につれこまれ、スカートをまくられて、これから一〇〇ccの浣腸をうけようとしているところ。固い台の上に手足をしぼられて真白いズロース（パンティは不可）がいたいたい。やが

てズロースを下げられ注入。そのあと嫌がる腰に花模様のオシメが当てられ、ゴムカバーをびっちり穿かされる。時間とともにスカートの裾を乱してのけぞって苦しみながら堪えられない欲求に放心したようにカパーの中に洩らしてしまう……。2、バレー選手の浣腸責め、白いシャツに紺か黒の運動ブルマーの一人の女生徒が五〇ccの浣腸責めにあうところ。ブルマーが下げられ、白にお尻にさしこまれるガラスの光り。やがて起こってくるはげしい便意にもだえる表情。しかしブルマーの下にオシメを一枚あてられたきりで、やがて次の瞬間におこるシーンを予想して身をくねらせてがまんしているところ……。3、男のオシメ責め。若い青年が罰に浣腸させられ、女たちからオシメとゴムカバーを穿かされる。しかもその上からレースのついたパンティやら黒いズロースや黒いストッキングを穿かされてしばらく……。4、いろいろな種類のズロースやブルマーや、オシメカバーや月経バンドを干してあるところ。または女性や男性が穿いているところ。これだけ多くの写真や絵をのせていられる奇クに、これまで定

型的なズロース（木綿やネル）やブルマーの写真がないのはおかしいと思います。それから8月号に人工便について便りをのせられた方へ。私もゼリーを浣腸器で注入したことがあります。ウドン、コンニャクなど形の大きなものをどうして入れられているのか、その方法についてもっとくわしくお知らせ下さると有難いのですが。人工便は匂いの心配がないので、町の中でも電車の中でも、いつでも少しづつ排出して愉しめるので便利です。そのさい、できるだけ大便と同じような感覚を味あいたいの、そのような便のつくり方をどなたか御指導下さる方はいらませんか。（N・S生）

○ 昼は美術学校のモデル、夜はナイトクラブで唄って踊るチャームイグな娘さんが変質者の手にかかり生血を吸い取られて惨死する。彼女の死体は巧みな加工で蠟人形に仕立てられ、音楽付きの移動装置で他の先輩たちと混って舞台を廻る。深夜、偶然恋人の行方を求めてその場に忍びこんで来る男。するといきなり機械が急停止したそのはずみに、首だけが胴

から外れてドスン！と男の眼前に転がり落ちる。床に転がってじっと天井を見つめている生けるが如き女の生首の大笑し！正に生首マニヤにとっては心臓も停止せんばかりのショッキングなシーンです。「生血を吸う女」(伊)にはこの外SM場面がワンサ盛沢山とあっては奇ク愛読者特に生首マニヤたる者には見逃すことのできない異色篇です。今迄に女の首を扱った映画も東西通算するに十指に余るように記憶しておりますが、これ程マザマザと女の生首のもつ妖美感を強調した映画は将来はいざ知らず、かつては一本もなかったことを保証できると思います。

女斗彦氏の賞讃された「武士道残酷物語」の斬首シーン。あれは予告篇だけのもので、本篇では自主的にカットされており、それをお目当てに高い料金をフンダクられた私など、二、三日余憤がおさまらなかつた程のイカサマシーンでした。スチール写真も同断で、地上に転がる男女二つの生首など本篇からはキレイサッパリと拭い去られていたのですから全くもってその悪くどい製作。宣伝態度たるやテキヤにも劣る行為ときめつけざるを得ませんでした。新東宝が

吉例とした怪談週間のお家芸をかつての同社専属スターぐるみ着服した大映の「怪談鬼火の沼」と「囁く死美人」の二本立。これも大蔵氏のカツドーヤ根性ムキ出しのエロ・グロ・アブシーンは全く影をひそめ、愚にもつかないスリラー仕立(つまり本物のお化けの出ない怪談映画)とした事で、芸術大作主義とやらを呼号する永田ラッパ長を始めスタッフ連中の企画の貧困ぶりの方によほどダツとさせられました。八月号のグラビヤ「打首の処刑」は出色の出来栄で大いに想像力を刺激させられた楽しいものでしたが、又一面渴いている処へウイスキーでも呑まされるような焦燥感をもともないました。我々マニヤの歓喜は、それ以後の展開にあるのですから、強いて目かくしを外さぬ迄も、斬り落された女の生首が、獄門台や三宝の上に据えられたり、頭髪で吊るされたりしているシーンを是非とも実現化して頂きたいものです。

女斗彦様のいつに変わらぬ豊富なアイデアに対してここに敬意を表するものです。今度は短かくとも本格的な読物にして頂けたらばと思います、かつ氏の筆力から推してその可能性も充分と信じて疑わぬものです。一層の思索力を駆使されんことを熱望して止まぬ次第です。(新潟市寄附町八前川成雄)

今年になって興行女相撲の活動が報道されはじめました。キャバレーのショーとして、女相撲団の一行がかかり、また別の一行と思われまます女力士の力持ちスナップが新聞に掲載されておりました。も早や興行女相撲は衰滅したとも思われましたが、未だ健在であることは大変喜ばしい限りであります。ただ、不安に思われますことは、旧態以前としてシャツとパソツの上に褌をしめたショーとしての取組、腹上の餅つき、五人の女力士を持ち上げる力持ち、などで果して一般の観客を引き付ける力があるかということでありま

東浦ひかる強烈縛特集

第一集 略号(うら)

後手吊り足挙げ縛り

大手札印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

第二集 略号(うり)

二つ折りエビ責め

大手札印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

第三集 略号(うる)

足挙げ椅子責め

大手札印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

奇ク愛読者の皆様、その後お変わりありませんか。最近では女角力マニヤの方が男の方も又女の方も、共にたくさん読者通信へ顔を出していただき私達同女うれしく思います。又最近では、東浦ひかる様の

相撲褌フオトも出来、私達にはうれしく思います。何んと申しまして女性も裸身に褌一本となり、乳房もはちきれんばかりにもみ合、又立褌を引合い、褌が乳房の下までゆるんで両力士共力のあるかぎり、組取合ったあぐく二人共かさなり合つて土俵下へころがるのも、私達同好のねがいでありま。近頃は私達同好の方もたくさんおられるようになりましたが、一度女角力後援会とか、女角力友の会でも作りたいと思ひまして皆様にお呼びかけ致します。皆様の便りを心よりお待ちしております。部不二夫

はじめてお便りします。京都にいる雑誌関係のものです。仕事上いろんな風俗雑誌を見るうちに貴誌を知りました。私個人は女のシバリなどはあまり趣味がありませんが、貴誌には女相撲のマニヤのグループがあるようで、わたしも出身地のH市で高校時代相撲部をやっていましたので面白く思いました。古本で雄松北良彦さん(お名前からすると滋賀県の方ですか)の高校女子相撲大会などみまして、いかにも僕たちの高校大会

のころを思い出したものです。さてところで記事やさしえや通信をみますと、褌のしめ方がいろいろですが、相撲褌のしめ方はきまっています。ご存知ない方にはわかりにくいと思ひますので一寸申しあげます。これがちがいますといかにもダラケたことになり、ちゃんとマツチができないのです。今スポーツ店を出している相撲褌はやわらかいのやかたいのやいろいろですが巾は大体四十五センチになっていきます。長さは少年用から成人用までいろいろですが、成人用は四メートル五五です。これは腰にまわす回数で多少で合わせられます。高校以上のマツチではあまりやわらかいみじかい褌ではムリです。少年用はマツチのとき褌をとらせませんから形だけのものです。どうでもいいのですが、さしてしめ方ですが、二人でしめます。一人ではとても力が入りません。四十五センチものを二ツに折り、大体アゴの下くらいにさざえてマタに入れます。前袋はこの二ツ折りですが、両ハシを内側にすこし折りこみます。これで袋らしくなり十分に陰部がおおえるわけです。尻の下をくぐるところは八ツ折りです。これは前袋の下で両方

三条春彦画

極彩色印刷

時代物責絵巻

画帖

詳細解説付 八枚 一組 三〇〇円 略号「時代」

か又一方から二度折りますと、すでに二ツ折りになっていますから23で八ツ折になるわけです。後の立褌もこのまま、つまり八ツ折です。これを背で右にまわしますが、ここで四ツ折にもどします。これ以外の中ではよくないと思ひます。腰に一、二回まわしてからアゴのところにさざえていた前下りを下し、その上に又一回まわします。このときよく前下りをひきあげて前袋をしめるのです。股間はすこしきつ目にした方が僕はよいと思ひます。選手によってゆるくしてありますがダラシない感じ。さて更にもう一回腰にまわすときに前下りに二ツ折りを四つ折りにして右腰にはさみますと前袋の上に三角形のところができます。最後の結びは後三ツになる直前でまわして来た褌の先を二ツに折り(八ツ折になる)これで立褌をすくい、肌には力にまわして上げ、ここでぐいぐいと引き上げておいて結ぶのです。結び

目は七センチぐらい出るのがよく、これは自分の体にあわせて何回もしめるうちに前下りでかげんします。以上、前下りが二ツ折り、前袋が二ツ折りの両端折込み、尻の下から立褌が八ツ折り、横回しは四ツ折り、三ツのむすびは八ツ折りで、これを守らぬとヤカマしくいわれるものです。又じっさい経験上、こうしないと何かダラシない感じになるのだ。奇譚クラブの皆様も相撲褌の図はこういう風に正しくお書き下さい。しかし相撲褌は女性には大分痛いのでありませんか。では皆さまお元気で。(東京八村山宏)

皆様失礼させていただきます。私は若いサラリーマンの御主人様におつかえいたしております、いやしい三十才になる女奴隷でございます。この度ご主人さまのお許しを得まして、皆様にお慈悲を下させていただく事になりました。私の人生の悩みであったマゾ性も

現在の御主人様との御出会いによりバラ色ともいえる物に変わりました。私の奴隷としての教訓を朗読いたしますと、一「私は奴隷です。犬、馬以下にいやしい物です。二「私の名前はゴロです。ゴロと呼ばれると「ヘイ」といって土下座し犬のようにチンチンをいたします。」三「私は常に丸裸で働きます。」四「外出の時は裸の上にレインコートを着け、必ず赤い襪をし

人様も気を悪くありません。私にこれから浣腸責にするといわれ今用意しております。これをぜひ読者通信にのせて下さい。でないといは又折檻されます。御主人様が私を呼んでおります。私はこれから浣腸をしていただきます。で……（東京都練馬区八女奴隷、ゴロ）

暫らく病気で誠に失礼致しました。編集同人の諸氏はじめ愛読者皆さんのご健康を祝福申し上げます。奇クの愈々御発展を衷心からお慶び致します。編集の御都合を伺い今後ドシドシ拙作を御笑覧に供し度いと存じておりますので宜敷お願い申し上げます。（岸本青柳生）

山内洋子様「奇ク」ファンの一人ですけれどもよろしくお願い申し上げます。実は七月号を拝見しましたところ貴女の手紙が掲載されているのを見て、逸る胸を制御できず、貴女に一身の願いをかけて筆をとった次第でございます。どうぞお許し願いたいとおもいます。小生は杉並区に住む二十二才をむかえるつまらない男性ですけれ

大好評！ 妊婦緊縛秘蔵写真分譲

ここに分譲いたします妊婦写真は、読者有志の提供になる二十才の美貌の若妻をモデルとしたものであります。本誌上に広告以来圧倒的なお申込が未だにあとを断ちません。膨満した便々たる腹部は正に妊婦マニヤ垂涎のものであります。緊縛マニヤにとっても、決して見逃すことの出来ない逸品といつて過言ではありません。是非一見をおすすめていただきます。

○妊婦の股間縛（九カ月）

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

児玉昌子 略号（にふ）

○妊婦の股間縛（六カ月）

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号（にと）

○妊娠八カ月の股間縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

児玉昌子 略号（には）

○妊娠八カ月の縛り

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

児玉昌子 略号（にあ）

○妊娠五カ月の緊縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

○妊娠前のスード縛

児玉昌子 略号（にこ）

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号（まさ）

○妊娠初期の緊縛とヌード

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号（ぬろ）

○分娩後縛り

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号（につ）

○分娩後股間縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号（にて）

ど、一昨年頃よりこの本を見るようになって、自分の性向を知りました。空想の世界にしか存在しないと思っていた女性がこの世にあられることがわかり、サジスチンの女性に憧れてきました。何んとかめぐり会いたいと尋ねまわってきましたが、できず独り悩んできました。独りでなげいていても決してめぐり会うことはできません。自分を考えて観ると以前には女性に対して、反抗的、挑戦的であつたように思っております。でも本を見るようになってからは、むしろ美しい女性との間に主従の関係におかれることを強く望むようになりました。映画や、本で見るように、男を責めるのを見るとエキサイトして困ります。特に「奇ク」に見るような、人間馬の調教などや押えているのを見ると胸が熱くなり居ても立ってもいられなくなってしまうのです。もちろんマゾプレイに憧れてきました。夢にみていることは、美しく、虫も殺さぬやさしく清い女性に責められることです。かつてなことと言って申し訳ございませんが、直接に傷跡を残すようなプレイや、危険なことは余り望みません。もっと快感を覚えるような、そしてサジスチ

ックな言葉で責められることに憧れています。ある時は恐れたり、また挑戦的である男を組み敷いて責め、泣かせ、酷使する女性、女王様になり拍車とムチで強いる美女に憧れてきました。最近では自分よりもずっと年上の麗人に責められたいと願っております。太く美しい肢体とボリウムある体で苦しい言葉優しく、いつまでも許さないで責める美女が何所かに居ると信じております。その女王様が貴女であると思っております。今奉仕人があるそうで御座いますね、どんなに幸か言い尽せないにちがいないであろう。まことに恐れ入りますけれど、ぼくを貴女の奴隷にして責めていただけないものでしょうか。ぼくは貴女に仕えるために生れてきたのだと信じております。勿論すべて服従することをお誓い致します。どんなことがあるとも決して迷惑をかけるような行動をとらないことを約束いたします。(東京八湊相一)

○ 私は女性の尿に大へん興味を持つ尿フェチシストの一人です。私は女性におしめカバーをさせて、無理矢理水物を飲ませて放尿に致せたり、冷い床の上に長時間女

東浦ひかる『黒フンドシの女』分譲中

第一組

尻に喰い込む黒フン

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

略号「とし」

第二組

股に喰い込む黒フン

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

略号「とひ」

性を縛って置いて、忍え切れず、洩らすのが見たいと常日頃願っていますがおしめカバーだけはマニアの女性を見つけないければならず、まだ実現していません。それでもたった一度きりですが、私にとって何物にも換えられない、貴重な経験があります。二年前、私が奇譚クラブを全然知らなかった時の事です。友人が車を貸してくれろというので、喫茶店のウェトレスをしていた、道枝(仮名)をさそってドライブに出かけたのです。最初は札幌国道を余市迄行って、帰りに小樽で昼食を取り、アイスコーヒ等を飲んで、その足で定山溪中山峠に行く事になりました、途中ジュースを飲んだり、アイスクリームを食べたりして、石山町(札幌市街から五キロ程)に来た頃は、出発してから四時間半くらい過ぎてきました。私も尿意を催してきましたが、道枝は私以上に尿意が強いらしく、小金湯附近に来た時はしきりに尿意を訴え始めました。私はその時から道枝に洩らさせて見たいと思いはじめ私と道枝とどちらが早く耐え切れなくなるかやってみたのです。そして何とか理由をこじつけて道枝をだましながらか、ついに中山峠の登り口あたり迄来ました。道枝はもう我慢が出来ない様子で「ああ、私もうだめ……もれる。もれる」と言いながら身をよじらせてあえぎ出しました。私は内心「しめたゾ」と思って車を横の草むらの中に乗り入れました。道枝はよほど苦しいのでしょう。顔を赤くして、歯を喰いしばって、涙を流しながらうめきました。道枝はついに耐え切れず、「ああ」と言っ顔をしめたと見るや、私の期待通り、シーッという音と共に

雪崎京人提供

女相撲力闘図

B5判 感光紙焼付

(二五種×一八種の大判)

四枚一組 一〇〇〇円

略号 「す4」

女相撲ファンの愛読者の方々のために、雪崎京人氏が特に提供されました豊満な美女二人による女相撲の力闘図であります。誌上公開が許されませんが、御希望の方に焼増いたします。いずれも筋肉の躍動する迫力に満ちた傑作ばかりであります。

組んだ時、投げを打った時、倒れた時など、すべて極めて大胆なポーズばかりを選んであります。B5判の大型複製による迫力のある女相撲をお楽しみ下さい。

に、いきおい良く、下着のすそや、彼女自身のブラウス迄ぐっしり濡れるほど、相当量の尿をもらいました。私はそのなんとも言えない快感に我を忘れて酔い知れしました。その時の生温い思い出は今こうして体験記を書いていてもありありとよみ返り、私をそのとうすいの中にさそい込むのです。きつ

とオシメカバーの中は、濡れたおしめが取り換えを待っているでしょう。今は私の希望を満してくる女性も居なく、一生懸命探しているのです。道枝とはその後話すらしてません。結局彼女はマニアではなかったからです。私のおしめもそろそろ冷くなり始めました。そろそろ取り換えなければ、風邪をひくと困りますので、この手紙も終らせてもらいます。簡単に書きましたが、同好の方に何かの喜びを受取っていただければ幸いです。(北海道八高宮健二)

私は三十四才独身のマゾ男性ですが、物心ついた幼い頃から女性の下穿きに異常な強い執着を憶え、内心ひそかに臭気漂う使用後の物を得ないと思ひ煩うばかりで、実際に入手の機会もなく、空想だけの世界、見果てぬ夢と今日迄悩んで参りました。それも世上によくあるパンティ泥のように盗んで獲得するということとは私の場合異質のもので、絶対の付加条件が伴わねば意味をなしません。つまり、それはサジスチックな女性の方の着用なされたものであつて、サド女性から蔑すまれ汚辱を受ける手段として着古され汚れた

ショーツなどを嗅ぎ噛みしめさせられる浅ましい行為を命令され強いられることは最高の恍惚境を得られるのです。又私は口と胃袋を雑巾や便器代用として奉仕致すよう命ぜられましたら、気の遠くなる程の幸せに咽び泣くことでしょう。(東京八森一夫)

本誌の表紙はビーズリーの絵のような味を出すの良いと思っております。よく本誌は写真が少ないという意見がゆわれておりますが、僕としては量よりも質で行くべきだと考えます。本誌が他のカストリ雑誌と異なる点は質に有るのであります。内容を特定の読者を対しようにするようしほったため、ごらく雑誌のもつ通俗性がそれ自体もつと高い美学のようなものになろうか(昇化)してしまつたのだと考えます。日本には通俗の美学という小伝統が有ります。「親のいんがが子にたりたり」の見せ物のよびこみには日本人の伝統的美意識・情緒といひましようか、そのような感覚にピッタリ来るものが有るのです。本誌の貴ぞく性とはその美学なのです。このような雑誌の中でも最もハイスサイテイ・クラスに類するものでしょ

う。名前もあかさずにカッテなことはかり言いました。カッテいいでにもう少しカッテのおしうりをやってみましょう。家人がねているのでゆっくり書けるのです。僕は一度若の女の人をしばって勝手にしてみたいのです。浣腸やおむつせめのことを考えるとゾクゾクしびれます。腸の内を薬液が走ってやわらかいぼったりしたおながうねうねと波うつさまはどうでしょう。グッしよりぬれそぼったオムツを丸いすべやかなおしりからはぎとる時の気持は——乳房にかけたなわが深く深くいこむあのいたいたしさ——美しいはなをつまんでポッカリわれるくちびる。(はなせめもすきです)——なめらかなおしりを手の平でピシヤピシヤたく。——サドもえらかったしフロイトもえらかったと思ひます。ああ、その生命力。しかし僕は四十五キロそこそこのやせっぽちです。生命だけが自然の法則です。へりくつですね。自分でも何をいつているのかわからな。誰か僕のパートナアになつてくれる若い女の人いませんか。乱ぼうはしません。すこし虫がよすぎますね。第一貴女は僕の名前も知らない。住所もしらない。札幌

ですよ。テレパシーが有ると良
いですね。毎日ねてばかりいます。
夢をみるのが好きです。貴女と僕
とプレイしないで夢の話でもしま
しょうか。清い交際。ときどき会
ってわいだんしたり『キタンクラ
ブ』を借りあったり。どうも調子
にのってしまいますね。僕は世紀
末の虚無思想を持った青二才のロ
マンチストであります。時々小説
を書いております。絵と同じにま
ずいです。文は人なりといいますが、まったくまずい小説です。創
造は神せいな業です。僕は小学生
のような作文を書いては消し書き
ては消しております。(札幌市八
柳亭智▽)

○
奇々数年来のファンです。貴誌
のご発展を心からお慶び申し上げ
ます。多数の愛読者の方々の好み
により御誌のグラビアや分譲写真
のヌード化はいたしかたない動行
とあきらめつつ過している、着衣
縛りの愛好者です。勿論着衣にも
色々ありますが、小生のは特に近
代的な洋装のお嬢さんです。たま
たま誌上で柴島さんの通信を拝見
して我が意を得たりと、急に嬉し
くなりペンを執りました。最近モ
デルを止めておられる様ですが、

館典子さんの庭園で撮られた一連
の写真、ファッションモデルとか
承りましたが、さすがに洗練され
たその洋服姿と令嬢風の気品ある
顔立ち、正に小生の好みにピッタ
リで、比類のない貴重な写真と大
切にしている次第です。小生あま
り苦痛を与えたり傷つけたりする
責を好まず、きれいに着飾ったお
嬢さんが座って、高手小手縛りの
縄尻を短かく柱につなぐれ、何と
かして縛しめから逃れようと、必
死になって身悶えをくり返す。而
し柔かい肌の急所急所を巧みに括
られた縄は、解けるはずがなく、
とうとう力尽きた様に柱に寄りか
かり、ぐったりと観念の眼を閉じ
てしまう。こんな場合を空想した
り、自分で下手な鉛筆画を書いた
りしてなくさめている次第です。
柴島さんも空想だと書いておられ
ますが、こんなお嬢さんとお友達
になれたら夢かも判りませんが、
。大阪市内に勤める一サラリー
マンです。近畿在住の女性で同好
の方、お友達と二人でもなお結構
です。一度お目にかかれたらと思
います。誌上での連絡お待ちし
ます。(大阪八木原生▽)

「妊婦新作フォト」のモデルの安

原さゆり様、お写真を興味ふかく
拝見しました。臨月間近い妊婦の
よく熟れた巨大な果実を思わせ
る、ぶっくり膨らんだ丸い腹部の
魅力は、妊娠している女性の裸体
を見たいという男性の方々の願
いをたっぷり満足させるでしょう。
ことに、(やま)のうち、首輪な
しで正面からとった、顔をあおむ
けて口をひらき笑ったような表情
になっていたのが、一番いいと思
いました。室内の自然光でハーフ
トーンになっているのも、画面の
美しさを倍加して効果的です。お
そらくご夫婦の間がらでしょう
か、安心して妊娠しているからだ
をすっかりさらけ出して撮影され
ていらっしゃる。それがこうして
満天下に発表されて、好事家のあ
くなき鑑賞に供せられる。思っ
てるだけで、何という素晴らしい
マゾ感でしょうか。あなたは勇敢
にもそれを実行なさったのです
わ。臨月の写真が予告されていま
すので、それがもっともとすば
らしいことを期待していますわ。
(羽村京子)

○
日毎に暑さが加わり真夏が思い
やられますね。つい先週まで目を
奪うほど真紅のバラが咲き競って

いたと思ったら、昨日ふとみると
もう無情な風におおかた花が散っ
ていました。七月号待遠しく思わ
れました。お便りするのが少し遅
れましたが、通信ページに女の方
のサディストのお便りがあるかと
思い楽しみにしておりましたが、
果してあり、私は胸がときめくの
を感じました。品川区の洋子様と
いう女ご主人様の文章大変嬉しく
何回も読みなおし、いつか洋子様
とご一緒にプレイの手ほどきを受
けている自分の姿を空想いたし、
とても興奮を覚えました。銀座の
バーのホステスという洋子様の境
遇、現在の私と同じ職場ではあり
ませんか。案外私の知っている方
かもしれませんね。是非一度お逢
いしたいと思えます。洋子様のご
住所お教え願えたら、どんなに光
栄かと思えます。よろしくお願い
申します。私を飼育し残酷にいじ
めて、かつ可愛がって下さる世の
サド女性の方々、私めを是非一度
試して下さいませんかでしょうか？
きっとお気に召すと思います。い
やご満足いくように私めは心から
一生懸命に努力いたします。女ご
主人様のお気を損ねたり、女ご主
人様に反抗したりした場合は、ど
うか思いきりお仕置をし、いじめ

てやって下さい。そうすればこの私はどんなに幸せかと存じます。私は普通のマゾ男性よりもっと変っており、平凡な打ちや単なるいじめられ方では満足できないような傾向が見られるのです。まあ極端に言えば、重症だと思えます。でも私は普通の人間ですが。私は女ご主人様のご用便の後始末などさせて下さればもう気も遠くなるほど幸せです。そして長い間ハイヒールをはいた、むれた臭うおみ足を口へつつこまれて、心ゆくまでペロペロとおなめしたいのです。ああどうかこの様な私の哀れなマゾヒストの切なる（空しいかも知れないが）願いを叶えて下さる女性の方はおられますか、私は一生サド女性の出現を待ちわびます。私の理想の女性を若くて美人にこした事は有りませんが、とに角能動的で、気性の激しいグラマー、サディストの幻の面影をいつも顔に浮かべながら昼も夜も街を歩いても、いっどこでも、私についてまわるのです。まず、女ご主人様に早く飼って頂かねば私は精神的にも安定した生活が営めないのです。どうか心からサド女性のお便り（ご住所をお教え願う事）お待ちしております。（東京／＼T

・S生V

KKファンの皆様、並びに編集部の皆様、お元気ですか。小生三年來のファンです。（くわしく言えば三年と四カ月）だが読者通信欄は初めてなのでヨロシク。さて小生は三十三才のチョンガーです。幼い頃からなぜゴム製品に対して異常なほどに執着を持っています。KKを初めて古本屋で見つけた時に自分の様な性癖をフェチマニヤと知り、自分だけがこの様な性癖と一人ではやんでいました。が、KKのおかげで同好？の志が多くおられることを知り、また恥じる必要もないことがわかり、大いに安心した次第です。ゴム製品にミリキを感じるのは、先ず第一にやはりオシメカバーですね。それとメンスバンド、小生はズロース型の前開きでない黒ナイロン製で股のところにゴム布が張ってあって、その上にやはり黒の替ゴムのついてるバンドを持っています。但しこれ一つです。これは薬局で買ったもので、買う時に店内に頼まれたと言って他に入用品と一緒を買いました。が薬局の若い娘さんが応待に出てきた時はホントウに顔がホテッテ弱りました。

分譲品御注文の栞

○代理部の分譲品は、すべて前金にて御注文願います。直接の訪問並に代金引換はお断りします。
○御注文品は注文書到着と同時に発送申し上げます。但し品切の分は暫時御猶予願います。

○御送金は、現金書留（封筒は一枚三円にて局で売っています。小為替、定額小為替（小額のときは御便利です）振替（用紙は郵便局にあります）切手代用（十円、二十円、三十円、四十円などの切手で、絶対紙にはりつけないで送り下さい）等を御利用願います。

○御注文品は、雑誌では何年何月号、或は略号の付してあるものは略号。フォートの類はすべて略号をお書き下さい。品名をお書きになると間違いが起り易いので、必ず略号のみ、お書き願います。

○送料は日本国内に限り、すべて当方にて負担させて頂きます。但し速達並に書留それに外国便は、実費御負担下さい。

○局留にてお受取り希望の方が増えてきておりますが、せいぜい御利用下さい。御注文の際、お受取りにならぬ郵便局名（特定局でも結構）とお名前（仮名にて可なれど市販の認印なんかを準備し

た方がよい）とを当方へ御連絡下されば、その御指定の局に局留としてお送りします。別に局からは通知がありませんから、局へ出向かれて、お名前をいってお受取り下さい。局での郵便物の留置期間は十日間です。十日間を過ぎると差出人へ返戻されます。

○御注文の宛先は大阪阿倍野郵便局私書函第十四号、天星社です。（今度郵便局からの通達で、私書箱番号を明記するように依頼されましたので右の通りお願いいたします）

○尚、御注文の際、若し代品として第二希望品がございましたら添記頂けますと、万一、分譲中止、品切などのとき、迅速に処理できて助かります。

○分譲品の新しいものは、毎月号の誌上で『新版案内』として発表しております。又、古くなりまし

たものは漸次打ちりにします。○御注文の宛先は必ず楷書で、はつきりとお書き願います。肩書きがございましたら、それも忘れ

なくお書き添え願います。○御注文者の御氏名は絶対に他へ洩らすようなことは致しません故に御安心下さい。封筒は用済後は漸次焼却しております。

○金額にして五千円以上のフォートをまとめて御注文の際は、金額に応じて優秀フォートのサービス品を贈呈させていただきます。

た。だが別にあやしむ様子もなく普通の態度だったのでホットしました。やはり男性には買いにくいものです。どなたかコレクションで余分に持っておられる方が有りましたら別けて頂けませんか。オシメカバーかまたは前開きの広巾ゴムのバンドがほしいのですが。それから編集部への質問。モデルの着用で不用になったオシメカバーまたは日頃御愛用のメンスバンドなどおゆすり願えないでしょうか。それからオシメカバー及び替ゴム用の薄いゴム膜などは大阪市内では何処に売っているでしょうか、誌上で発売して下さい。どうかフェチマニヤの小生のために聞きとだけ下さい。貴紙の発展をお祈りしてペンを置きます。(大阪市西淀川区八桂木健二)

七月号の四馬孝氏的美鼻汚辱、美貌翻弄は大へん興味をひかれました。美女の鼻孔を耳鼻科で使う鼻鏡でひろげる絵や写真ものせてもらいたいものです。私は美しい女性の鼻孔愛撫に興味をもっており、奇クにしても、そのような絵がのっているもののみを買ってあります。美しい構図のものにして下さい。四馬氏のはかの絵はどう

もそそのものがないと思います。どうも投稿の中には実際の経験なのか想像なのか判然としないものも多いようですが、私のはありふれた事実だけを書いてみます。私は旧制の中学二年頃から、美しい女性の特に美しい鼻の持主、また特に鼻孔の美しい人にひかれるようになっていました。小鼻の肉づきがよく鼻すじが通って卵形の鼻孔であり鼻毛がはえず鼻粘膜がほの桃色に清潔であること、そのような美女の鼻孔をあかすのぞきこみたいという欲望がありました。美しい妻を得て、私の好みを満足させていますが、妻は夜風呂に入りますと必ずきれいに自分の鼻孔を洗ってくれます。私は風呂上りのままの妻の鼻孔を鼻鏡でおしひろげ、右、左と交互にのぞきこむのです。そのつぎに人さしゆびを鼻孔に入れていじりまわすのです。首をのけぞらせて妻は眼をつぶって弄ばれるままにしています。しばらくすると小鼻も赤くなってきました。私は妻の頭を抱きかかえるようにして舌を鼻孔に入れて鼻中隔、鼻粘膜となめるのです。それから静かにガーゼで妻の鼻孔をふいてやります。時には小指に

全裸の縄目

略号 (みい)

大名刺 三枚一組 二〇〇円
モデル 平野 笑子

全裸の羞恥

略号 (みろ)

大名刺 五枚一組 三〇〇円
モデル 田原美佐子

全裸股間縛

略号 (みは)

大名刺 五枚一組 三〇〇円
モデル 岩井 知子

全裸後手縛

略号 (みに)

大名刺 三枚一組 二〇〇円
モデル 平野 笑子

寝台の全裸

略号 (みほ)

大名刺 三枚一組 二〇〇円
モデル 平野 笑子

全裸股間縛

略号 (みへ)

大名刺 五枚一組 三〇〇円
モデル 絹川 文代

股間しばり

略号 (みと)

大名刺 五枚一組 三〇〇円
モデル 絹川 文代

椅子開股縛

略号 (みち)

大名刺 三枚一組 二〇〇円
モデル 絹川 文代

紅をつけて鼻孔内をいどったりすることもあります。鼻は女の一番美をあらわすところ、クレオパトラの鼻が低かったら世界の歴史が変っていたらうと言われる位です。私は毎夜妻の美しい鼻を弄びながら、よろこびにひたっています。私だけでなく多くの男性が美女の鼻孔を愛撫しのぞきこみ、いじりまわすような事をして

最近KK誌に我々鼻マニヤをよろこばしてくるものが豊富になり誠によろこばしいことです。また全国の鼻マニヤの方々のお便りも数多く見られ大変心強く思っております。しかしその読者欄での

いると思うのですが、私のような趣味の人は少いのでしょうか。

(岩手八生)

て私の心の中のひっかかりが完全に取れたような気がします。私はSMプレイに関してはそのように思います。SMプレイはあなた方ご夫妻のような夫婦間において行われる場合には問題はありませんが、例えば通信文にありましたY氏の飼育する女性が、そういう性格を持ち合せていないとするなら、そういう女性を強制的に飼育

前略ごめん下さい。暑い毎日で
ございます。八月号いつもと変ら
ず胸をおどらせ、頁をめくりまし
た。この気持は誰でもが同じの事
と存じます。ぜひ今後とも私達のよ
いよりどころとして貴誌の発展を
そして女性化せん望の私の様なオ
コシマニアの同好誌として、あら
れる様お願いします。再度無理な
お願いを申上げて、くどいやつだ
と思われるのでしょうか、私の以

○ 六月号の△告白▽の頁に投稿さ

れました「葉村佳子」さん。あなたの手記を僕は胸おどらせて拝読致しました。あなたの愛らしいツボミもまだ開花してない胸の奥に秘められたマゾの心には頭の下がる思いです。振り袖もあでやかに花もはじらう乙女を、細引きで胸高に後手、高手小手に縛って自由をうばい、僕はそんなあなたを見おろして次の責めの手を考える。そして縛られたあなたは縛られる時に、少し反抗したために胸元も乱れて赤い襦袢が少しのぞき、あきらめた表情で座り次の責めを待っている……ああ考えただけでも僕は気が遠くなりそうです。ぜひあなたとのこの夢の実現する日にくるのを指折り数えて待っています。僕は毎週月曜日の午後六時頃三ノ宮の「神戸国際会館」の正面で待っていますので、もし時間があればきて下さい。その際あなたは左手に「週刊誌」右手に「白い手袋」を持っていて下さい。僕の方から探がして何げなく声をかけますから。尚もし会えないかもしれませんので、貴女の方からも何か適当な連絡方法があれば、次号の「読者通信」の頁でぜひお知らせ下さい。それでは貴女との会える日をたのしみにペンを置きます

尚広島県の沢原洋子さん、よろしかったら次号でお便り下さいね。

(奈良市八片山純一)

七月号拝見しました。例により真先に読者通信欄を開きました。小生禪に強い関心を持つ者です。銭湯などで若くたくましい男性の禪姿にあった時の喜びは何物にもかえられません。禪を常用する人の少いことをいつも残念に思っています。最近の下着売場等に女性用の禪が目につきますが、どうして男性の禪がないのでしょうか。日本古来の優れた下着がだんだんなおざりになっていくのが残念でなりません。私は越中禪(モッコ)で銭湯にゆきます。越中禪はさすがにも着用するにも能率的で現代の生活には最も優れた下着だと思います。禪愛好会を作りなおざりになっている禪をせめて我々(男女)だけでも、復活させようと思っておりますが、どのような方法で、実行しようかと迷っております。貴誌に禪(女性)姿がないのに私は残念に思っております。特にモッコ状の女性の禪姿が見られないので、これからも載せていただきたく思います。時々グラビヤに女性の禪姿が見られますが、これも

限定版特別号 第四弾

『緊縛フォトと緊縛画帖』

残部僅少 / 定価五〇〇円 略号(別特)

三十六葉に及ぶ四馬孝描く粒選りの傑作画集のケンランたる陳列に加えて、本誌の発掘した新人モデルである、四方清美、花本京子、柳初子、山路ミヨ子、館典子、熱海容子、前本妙子、浜千代子、大井小夜子、加茂良

子等の新鮮な悦虐姿態と加賀利江子、藤田節子、萩千恵子、桜井葉子、絹川文代、大塚啓子、須川令子などの代表的ポーズによって味をつけました。どうぞ御一見下さるよう、おすすめします。

ヘソの上部まで締めているので感情がうすれます。禪姿になわを締めたグラビヤまた男女のマゾ・サドにも男女両方にモッコを着用させたグラビヤなど、どうでしょうか。(大阪府八海原博二)

妊婦のフォト、本当に楽しく拝見いたしました。尚小生は妊婦のヌードばかりでなく、不義を犯した若き腰元風の美女が、薄い長襦袢の前を剥がれ、八、九カ月の膨張せる腹部を突き出されて、後手に立木に弓なりに縛られて、御年寄風の老女にムチ打たれ、今にも、ずりこけんばかりの湯文字に

恥かしさとウラミのこもる眼差に見つめている様の姿の写真か、或は絵など切望しております。妊婦ヌードよりも、このような幾分和服をまとった肌襦袢を或いは長襦袢などを肌もあらわにつけた妊婦の「縛り」姿の方が特にミリョクを感じます。(福島県八泉一郎)

ヒントを一つ提供します。よろしければ御採用のほどを。題を「臨月」ともして、四、五枚の絵物語としてグラビアのような立派な紙を止める。絵を主として物語は絵の下の一部にする。毎号物語

をかえる。一例を述べますと、戦国時代、これはもちろんフィクションで、城主が重病にかかって、床にふせたきりになっている。小国で戦えば破れることはわかってる。(一)、若奥方出陣の舞い(臨月の上に白たえの衣、胸高に前結びの白たえの帯をききとしめ、衣のすそは長く引いている)(二)、出陣の用意(腹帯をへそのすぐ下ほどまで腰元が巻いている)(三)、奥方奮戦(敵將の胸中を鎗でつらぬいている)(四)、奥方切腹(腹帯をプップと切りおとし、短刀を豊満な腹につき立てる)(五)、腰元切腹(奥方は切りさいて、子宮が出ている。腰元の一人も豊満な腹を切っている)その他、京舞妓(鏡の前、風呂の中、双子腹の切腹)など如何でしょうか。(大阪市八一愛読者より)〇

本郷綾子様、佐藤良子様。"奇ク" 同好ゴムマニヤの皆様へ。私はヌメヌメとムチムチするゴムが大好きで、何よりもゴムを愛して居ります。私は夏でも冬でも、ほとんど何時でもメンスパンパを着に使用して居ります。それも生ゴム製のバンドです。ですからパンティはなく、全部バン

ドで代用して居ります。それほど月経帯が、ゴムが、好きなのです。

日曜日の休みには一週間分の月経帯をお洗濯して、わざと黄色いヌメヌメしたゴムを表側に干しておきます。私の家の前はバス通りで人通りが多いので、男の方が洗濯ものを見て何んだろう、変なものと言った顔で、じっと私の月経帯を、バスの停留所でバスを待って居る間中、眺めて居る方が居ます。

バス停前の私の家は、洗濯物干が路上にあるのです。二階から見ると、先日は男の方が私の月経帯の替ゴムをグイと引張ってちぎって行かれたのです。私はびっくり致しました。

その男の方は何を思われたのでしょうか。月経帯をよく見るとゴムが半分破り取られて居るのです。

それから、私はゴム製の大人用おしめカバーをずい分、方々探して三枚三種持って居りますが、奇ク同好の方々でずい分大人用ゴムおしめカバーを探してらっしゃる記事を見て是非お教えしたいと思えます。奇クの為に、同好のプレイのために、佐藤良子様、私の住む神戸方面ですと、国鉄三ノ宮駅前

(南側) ところが百貨店が一番解り良いと思います。

このところ百貨店の四階中央ベビー用品売場、おむつカバーのケースに一種大人用と特記して黄色総生ゴム製大人用おしめカバーを売出して居ます。価格は三百五十円でした。遠方の方は郵送もしてくれれると思います。私も時々愛用して居ます。おやすみの外出にタイトスカートの下に着用します。だけどゴムがムチムチキュキュと歩く度に音を立てますので、人に知られないか心配です。本当に上等のゴムで出来たカバーです。日本赤十字指定のニシキゴムの製品です。

同好の皆様是非お試し下さって私達の「奇ク」を通じて大いにプレイを楽しみ奇クへ投稿して下さい。とりとめもなく失礼しました。(ゴムカバーの好きな大西良子)〇

はじめて御便り致します。私三十二才のサド女性でございます。小柄で体に自身はございませんが、もし誰かマゾ傾向の方、女性から囁かれ、いじめられるのを喜ばれる方、便器になりたい方が露出症の方なら嬉しいのですが。

私自身かなり強い露出症の女です。もしよかったら結婚前提の御交際致したいと存じます。年令は問いません。住所は編集部より回送してもらって下さい。お便りお待ちしております。(大阪市城東区八村松芳子)〇

八月号の読者通信で、布施の門田様御夫婦のお便り、興味深く拝見いたしました。私は二十六才になるB.Gです。以前に同じ役所に勤めている上役の方と趣味を同じくするところから親しくなり、その後、私が只今の会社に移るようになってからも、その方とはおつきあいしておりますが、一度門田様ご夫婦のような方と一緒にプレイしてみたいと希望しております。私は露出癖が強いので、できれば、同じ趣味の方とご一緒したいと常々願っておりますが、まだその希望は満たされておりません。数年前一度奇ク編集部の方に、私達のプレイの場面を写真にとつて頂いたことがあります。勿論モデルとしてではありませんでしたので、彼の希望もあって、誌上にはのりませんでした。その後、私一人で編集部をお訪ねしたことがありますが、モデルにしてほし

いと、なんとなくいいそびれて、内心モデルになつてみたいという淡い希望も果されませんでした。その頃は、私も若かったので身体にも自信がございましたが、今では誌上にのせてもらう自信はありません。只、門田様のような方々と心ゆくまでプレイをしたいと思っています。実は私は大の恥かしがり屋で内気ですので、よほど相手の方から積極的にされないと、駄目だと思ひます。少しばかりプレイの写真もございますし、お逢いできたら、お見せできると思ひます。どなたか、一緒にプレイできる方お便り下さいませんか。(大阪市福島区八高田章子)

○ 最近の本誌の分譲品で出されている妊婦フォトは全く素晴らし。最初は小生も特別に妊婦について関心を持っていなかったが、児玉昌子さんのまんまるくふくらんだ豊満なお腹を見せてもらってから、一遍に妊婦ファンになつてしまった。それから、町をゆく女の人の中に、妊娠中の人が殊によく目につくようになった。最近暑さのかげんで、ムウムウとかいうワンピース型の単服や妊婦服を着て外出する人が多いので、

まるで、ボールのようなお腹を薄い布一枚を透してつき出して歩いている人があって、目を楽しませてくれる。先日市場へ買物へ行くと二十四、五才ぐらいの体格のよい奥さんが産み月ぐらいのお腹をかかえて道を歩いているのに出会って、思わず立ち止まって眺めたものである。ピンクのワンピースの布地もはちきれんばかりにお腹がせり出てまことに見事であつた。色が白くて体格がよいので一層立派なお腹で、こんな人をモデルにしたらなあと思つた。児玉昌子さんも美貌だし、お腹の恰好もよく、立派なフォトであつたが、まったく妊婦服の魅力ははかりきれないものがあることを知つた次第である。(神戸市八高一郎)

○ 小生はマゾ、裸女血斗愛好者です。従つてどうしても我田引水になる事かと思ひますが、そこは一読者としての琴線に触れるものを見出していただければ幸いに思ひ、又強力に我々の希望を押し進めて欲しいと思ふものです。先ず鋭い刃物を持った美女血斗ものが途切れ途切れなのが全く残念です。なんとか毎月必ず一作品だけでも掲載されないものだろうか。

読通欄によると相当数のマニヤの方があると思われ、他の類似誌の真似のできない貴誌の独だん場かと思ひます。その特色を思いきり延ばして欲しいものです。マゾ関係の分譲品について希望者が少いとこの事です。マゾ絵の間口が広すぎるのではないのでしょうか。読者の希望から作っているのしょうが、犬の真似をするとか、足を舐めるとか、ハイヒールで蹴とばされるとか等は小生は興味がありません。否興味はありますが、買ってまで見たい気になれないのです。経済的問題ではなくてマゾ絵としての濃度が稀薄だという事です。おおよそマゾと称する人間で共通した好みと最終のイメージは、美しい女性に馬乗りに組み敷かれ征服されたいという事です。前記のものは、その中間的過程であつて、どうしても線が弱いと思われまふ。物は試しです。馬乗りオンリーの線で短期間でよいから企画してみれば如何ですか。これは新規の希望ですが、女性が女性を征服するシーンでも、何んらかの形で現実的な裏づけで欲しいと思ひます。例えば上になつた女性が下のものより身体も大きくて強そうかどうかです。これが逆だと何か作

為的でピンときません。そんな意味で絹川嬢が小柄な梨花嬢あたりを馬乗りに組敷いて散々に屈服するシーンを連続写真で出来たら、価格の如何を問はずどんなに素晴らしいかと思ひます。特に正面と背後からのものが魅力あるものです。以上、好き勝手な事ばかり書かせていただきましたが、奇クを唯一の頼りとしている者からです。奇クに溶け込んでゐる者としての真実を述べたつもりです。小生等の希望の実現を鶴首して待つものです。(東京都八生)

○ 私は女性の禪に興味を持っております。先日は私書函の番号を間違えるなどして、果して無事届くものかと心配していたフォト、無事到着して、ほっとすると共に、上々の出来ばえに、なるほどKKでなければという思い方でした。しかしながら、私として一言申し上げたいと思うのは、女性が嫌う禪ではありませんが、東浦、関谷の締め込み方に、もう少し真剣味がほしいと思ひます。東浦さんのあのボリーウムを生かすのは、もうすこし横禪を上の方にして、後はしっかりと横禪にねじ込むか、立禪で結ぶかしてほしいものです。

関谷さんの方は、前に回して左腰のところにはさまれてありますが前禪の下を通していたら、もっと美しかったに違いありません。やはりモデルとしては関谷さんのフオトが一段と上であり、写真の明るさもあの方がよかったと思います。大塚啓子さんの六尺禪のバックは尻のひねり方が上手で尻の割目にくい込んだ立ミツは素晴しかったです。概して大塚さんのものは、ポーズが生き生きとして力が入っていて、よいと思いました。次に希望したいのは、場所も砂浜か、どこか庭の土の上だったら、最早や完璧ではないでしょうか。三月号、四月号等の読通に出されている東京の村田さんあたり、相撲帯をつけて土俵上で禪美を見せただけだと、念じております。全国の禪美、女斗美ファンの御多幸を祈ります。(佐世保八毛)

〔今月の新版〕

月経帯(バン)フオト

モデル 大塚 啓子

新しいメンスバンドを購入しそれによって新しい趣向のバンド・フオトを作成しました。

○ダイアナ・デラック

ス・バンド (黒色)

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号 (たい)

○ローズ・パリス・ソ

フト・ネット・バンド

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号 (たね)

○ローズ・パリス・バ

ンド

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号 (たね)

○ローズ・パリス・バ

ンド・バンロン・フ

ラワー

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号 (たう)

○着脱・ダイヤナ・デ

ラックス・バンド (黒)

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号 (たか)

○鑑賞、ダイヤナ・デ

ラックス・バンド (黒)

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号 (たあ)

利生▽

小生、奇クに初めて接したのは、今から約五年前の三十三年に、ふと田舎の書店の店頭で目にとまったのが、やみつきで、それ以来現在に至るまで、あらゆる機会を通して愛読させて貰っておりすが、未だにどうしても、思いきって、通信欄へたよりをする事が出来ず、今回始めて思いきって筆をとった次第です。小生は現在学窓を巣立って約三年間、ある会社に勤務する身長一七五センチの二十五才になる平凡なサラリーマンですが、平凡な安月給の生活の中に、わずかでもいこの場をもたせ、食べるために稼ぎ食べるために生きていく様な生活を、せめて自己の趣味或は興味等を生かす事によって、うるおいを持たせようと心がけている者です。しかし小心者で意志薄弱なために幾度か交際或は文通してみたい衝動にかられた方々を通信欄に見出して、どうしても、筆をとる勇氣がなく、そのため、焦そうの日々を送っている次第です。小生はかなり偏向的な方で肉体的な責めや同性傾向は全く興味がなく、異性の精神的な苦痛に対する責めに最大の関心を持

っております。具体的にはっきり申し上げると、若い女性に対して、女性が同性にさえ見られたくない浣腸を施し、場合によってはオシメを当てて赤ちゃん同様の取扱いをする……等と考えただけでも、ぞくぞくして来ます。今迄何度も奇クで同様の読物を読んで誰かとプレイをしてみたいと思いが、筆をとる勇氣がなく過してき、ました。小生の願いは只の一度でもよいから、同好の女性と前記のようなプレイをしてみたいということ。どうか小生の願いを叶えて下さらないでしょうか。(東京都中野区八桜川英夫▽)

愛読者の皆さま、今日は。私もこの欄のお仲間入りをさせて下さい。二十一才のBG。まだお勤めに出てホヤホヤですので、至極ゲンキでゴキゲンです。一つお願いがあるのですが、人生について、(大ゲサかな?) まだまだ無智な私達女性を、啓発して下さる方っていないかしら。この欄を大いに活用して、編集部の方々も支部とか、何々クラブとかいうものを作って下さったら。どこか、余り大きくない喫茶店で奇譚クラブ友の会なんて会合を持ったら、どうかしら。

【映画通信】

東山映史

復活した新東宝映画

エロ・グロを売物にした新東宝映画がまたゾロ登場している。題して「女犯の掟」これに「女・女・女物語」がつく二本立を見た。「女犯の掟」は小林悟監督、「女・女・女物語」は武智鉄二演出となっているが、本当の監督は小林悟が演出している。本土を遠く離れた孤島、本土との連絡船は十日に一度しかない。この島の女は他国の者と結婚できない。そして、この島は巫女が支配しているという古い因習の島。東京のストリッパ・エマはこの島の女を母親とした外人との間に生まれた宿命の子、そして母親が死に、エマは遺言により、骨を島に埋めに行く、だが、島の掟を破った母親の骨を埋めさせない。この妖

艶なストリッパが島へ舞い戻ったことで事件が起きる。東京から画を描きにきた青年は、島の娘リカと恋仲になる。だが、彼女は巫女になる女で、他国人との恋は許されない。そして、巫女になる修業がはじまる。新入小原絹子のリカは滝に打たれたり、半裸体にされ、背中をムチ打たれる。ムチあとが背中を走る。チョッピリ乳房が見え、サジステイックな中に色っぽいシーン、暴行シーン、裸体、エロ、グロのシーンをふんだんに見せるところは、新東宝映画にふさわしい。

かつての「九十九本目の処女」に出てくる無気味な巫女を演じる五月藤子がやはり気味の悪い老婆の巫女で活躍している。エ

私の友達なんかだったら、ジャンジャン出席すると思うわ。先ず手はじめに、地元の大坂から、はじめたらどうかしら。北の喫茶店で、とても静かないところがあるの。この通信欄で場所と日時を発表して下さったらきつと沢山の人が集まるんじゃない。そしてどんなことでも、ジャンジャン話し合ったらどう。こんな私の提案はトッピかしら。編集部の方の決断さえあつたら、来月からでも、すぐ出来ることだと思ふの。喫茶店だったら、会費も、二三百円ですむじゃないかしら。そして、その会合の様子を誌上にのせたら面白いと思うわ。そんな発表があつたら、私第一番に寄せてもらつつもり。奇クを読んで本当に面白く、私達の未知のことが余りにも沢山あるので、人生勉強の一つとして愛読しています。その上、直接いろいろとお教えして頂きたいことがありますので、こんな提案をしてみます。誌上でも結構ですから、私の提案に対しての反響をお寄せ下さい。編集部の方々に、御一考をお願いします。（大阪市北区八麻生順子）

毎月多くの困難を克服してアイ

デアに満ちた奇クを発行して下さい。そのことを感謝し、今後益々貴誌のご発展を祈るものであります。さて、過日、マゾ絵画「まか」を送って頂きましたが、全く待望久しき絵の出現遂に來るといふ感じでした。まず「人間トイレ」の方、仰向けになった男の顔の上にパンティをずり下げ、またがり、今まさに排泄せんとする姿、次の瞬間、彼は、この美しい女性の排泄物を顔にまともに浴びせかけられる事でしょう。すばらしいの一語につきます。次に「椅子の上に仰向けに顔をのせた上に腰を下した」方ですが、これ又、小生の前から待ち望んでいた絵でした。男の顔が完全に豊満なお尻の下に敷かれ、まともにその重圧を受けている。お尻の割目をはっきりえがき出された点、特によいと思います。この絵から、いろいろと想像をはたらかせます。この男、このままだでは窒息してしまいますので、女王様の特別のあわれみをもって少しお尻を浮かせ下さいます。やとと重圧から解放された男は、大きく息を吸い込むでしょう。その時、当然女王様のお尻の強烈な臭気が彼の鼻にしみ通るでしょう。ただこの絵で一つ欲をいわせて頂

マの女優も妖艶な姿態で楽しんで、ギューギューと縛りあげられ、武智鉄二演出の「女・女・女物語」が最近の「残酷物語」シリーズのサジステック映画の決定版といえよう。この作品の縛りシーンの秀逸は美女の縛りシーンの撮影風景である。長襦袢一枚にむかれた女性が部屋の中へつき飛ばされてくる。「逃げようたって逃がすものか、このアマ、縛りあげてやるぞ」というセリフで、彼女の腕が背中へねじ上げられる。そして細引が、彼女の胸から二重、三重と回され、後手に縛りあげられる。チョットとドキンとするシーンである。だが「これは縛り写真の撮影風景です」という説明でホッとする観客もあっただろう。だが、その縛りの過程は中々迫力がある。長襦袢の女のつぎに黒いスリッパ一枚の女が、「亀の子しぼりにガンジガラメに縛りあげてやるう」というやり方

で、ギューギューと縛りあげられていく。モデルの女性も痛そうで顔をしかめている。女の二の腕に縄がギリギリくいこんだところがアップになる。大型画面で、色彩がついているだけに、かなりサジステックで強烈である。緊縛された背面の両腕にガッチリと縛られている。次の女性も両足までガッチリ縛りあげられている。柱に緊縛されている女、吊り責めのような女、そして和装縛りの女は身もたえするところなど。和装縛りマニアには大いに喜ばれる演出である。そして「ご苦労さん」と一万円札？を三枚ほど渡されながら縄をほどいてもらうというオチもついている。ファストシ

ければ、女王様がスリッパをたくし上げて、パンティのままでもたがっている、もっと実感が出ると思います。衣類が一枚でも少ない方が、嗅がせられる臭気は強いわけです。そして最後にはパンティもとって、このようにまたがられることが、M男にとっては最大のプレゼントではないでしょうか。M画、Mフォートの注文がうんと少いそうですが、少数愛好者のためにも今後とも、すばらしいM画、フォートをお願いします。(京都八田中M夫)

私は偶然の機会から奇クを知り、それ以後奇クを愛好している一人の男性です。もっともまだ奇クを読み出してから日は浅いのですけど、なぜ、もっと早く奇クを発見しなかったかと残念に思っています。大分方々の古本屋も探し回ってみました。昔の古い号は中々見つかりません。なんとか数年前のものを入手したいと思っていますが、余り大きな都会ではありませんので、手に入れることは出来ません。私の関心を持っていることと申しますと、一番目は浣腸です。これは相手にすることも、或

いはただ浣腸をするという事だけではなく、相手に対して強制的にしてみたり又されたりする両方に対して関心を持ちます。それから次に、これも間接的には浣腸と関係のある事です。アヌス責めにも興味を持っています。第三番目には、女性の下着、その中でも特にパンティ等女性の下半身を掩っている下着類に関心をいだいています。しかも、それは洗いたての新しい物よりも使用した後の物の方が私はより強い興味を抱きます。(岡山市八滝川三夫)

暑さきびしき折柄、読者の皆さま、お元気ですか。いつも皆さまから何かとはげましのお手紙なんか頂きありがとうございます。私も最近、少し身体が暇になりましたので、出来れば一度読者の女性の方とお話したり、或はプレイに興じてみたいと思います。お待ちしております。どなたかそういう御希望の方がございましたら、編集部でお便り下さいませ。よろしく。京阪神在住の女性読者の方でしたら、年令にかかわらずお逢いしたいと思えます。お便りお待ちしております。

(大阪市八塚啓子)

本誌最近号総目次

○昭和三十八年八月号

(定価二〇〇円)

第一グラビヤ

猿ぐつわの魅力(一)、革手套に抱かれて(絹川文代)(二)、責めプレイの法悦境地(梨花悠紀子)(三)、透明の息苦しさ(梨花悠紀子) 豊満緊縛ポーズ、四、二ツ折りの縄目(東浦ひかる) 五、豊かさの強調(大塚啓子)、麗姿悶悦三様三態(絹川文代) 足吊りの白肌(絹川文代) 重圧に泣く女(梨花悠紀子)

巻頭口絵

美の破壊(鼻責のポーズ) 八四馬孝画 〇おもり責め二題、ぶらんこ、はんもつく 八四馬孝画 〇空気ポンプ(浣腸責め) 八四馬孝画 〇マゾ画、首絞めのプレイ 八四馬孝画 〇子画 〇鼻料理の第一歩 八四馬孝画 〇切腹——女志士の自刃 八四馬孝画 〇案、滝れい子画 〇あどけない瞳 八四馬孝画 〇不二男画 〇

第二グラビヤ

責めの第一序曲 八四馬孝画 〇立木縛りに晒す 八四馬孝画 〇マゾフォト(馬乗りになられた男)、(長靴の下に伏す) 八四馬孝画 〇

夫婦のSM写真(打首の処刑) 読者の提供フォト 〇新宮明夫 〇藪蚊責め 八四馬孝画 〇

本文

巻頭告白と感想「奇クの読者になるまで」……遠藤保。八四馬孝画の手記 〇鎌倉の思い出(輝裸女争斗のこと)……井内左右子。手記「愛のイメージ」……浦田紀夫、水沢雅美。 〇「告白通信」魅せられた鼻責……湯谷照夫。奉行所女吟味始末記……本田由郎。 〇「生首通信」私の無惨絵に寄せて……蒲原茂雄「奇譚三十九夜」物語(第二十七夜)……辻村隆。マニヤ通信「被虐モデル志願」……遠藤百合子。映画にみるアブ空想の世界、死の谷……中谷均哉。読者の告白「腹を切る女」……藤代悠三。長篇SM小説(宇宙のどこかで)……佐治麻造。サジスチック・ストーリーシリーズ「女家庭教師」……西条悦美。近代史に拾う女腹切……数寄咲。花と蛇(第五回)……団鬼六。SMF小説、雪夫人図絵……芳野眉美。当代女武勇列伝(伊集院典子の場合)……諸岡堅雄。マゾ、マゾ&マゾ……平伏人。魔女伝説秘話「魔女マドレーヌ」……近藤一。自伝的中篇小説「妄執」

(或るクリスタルマニヤの告白)……堀夏彦。ガン作マニヤのノート(私のバーでの会話)……芳野眉美。読者通信。

○昭和三十八年七月号

(定価二〇〇円)

第一グラビヤ

特選グラビヤ・セクシオン。諦観とロマンの期待(絹川文代) 凌辱料理の調理台(梨花悠紀子) 柔肌の起伏(大塚啓子) 破られた下着(大塚啓子) 首枷の悦虐風景(四方清美) 手首とくさり(絹川文代) 鉄枷と鉄鎖(梨花悠紀子)

巻頭口絵

アイデア画「オラン・ウータンの檻」(四馬孝) 鼻責マニヤ 八四馬孝 〇鼻汚辱 〇八四馬孝 〇鼻責マニヤ 〇八四馬孝 〇女体切腹画 〇八四馬孝 〇腹切の介錯 〇(滝れい子画) 鞭打の法悦境(四馬孝) 這い寄る蛆虫(四馬孝) 女性自刃「落城の姫君」(四馬孝)

第二グラビヤ

エビガニの恐怖(梨花悠紀子) 麗身ポーズ十二態(絹川文代) 全身緊縛の表情(大塚啓子) マゾフォト「犬になりたや愛犬に」(小沼正三) 縄目にあえぐ豊胸(梨花悠紀子)

本文

八四馬孝 〇あられもなき争斗。奇クに捧ぐ私のアイデア「悦虐いろは絵巻」……佐々木ツトム。八四馬孝 〇者通信 〇かそけき願(柴島令子) 〇奇譚三十九夜物語——第二十六夜—— 〇辻村隆。私の無惨絵……芹沢伊保。田園手帖 〇被虐愛さんげ 〇……万田不仁。吊責、見たり聞いたり試したり……阿久津猛。悲愴美の世界「殉国処女譜」……中康弘通。浣腸漫記 〇某月某日 〇……栗瀬長。縛り過程の較差について……牧高志。ゴムマニヤ通信……吉村俊一、柴山武。 〇「告白」悦楽の園……平伏人。鼻のプレリユード「鼻の国」……島ヒロシ。花と蛇(第四回)……団鬼六。八四馬孝 〇読者の通信 〇「フェシスト行状記」……並原睦夫。女相撲熱戦譜……女素舞マニヤ。八四馬孝 〇女相撲結成頭末記……岡平吉夫。マゾヒズムへの孤独な願望……福田久文。 〇(告白) オムツへの郷愁……多摩宏。奇妙なお礼参り……大中忠。 〇「緊縛研究講座」縛り方教室……柴利好。長篇SM小説、宇宙のどこかで……佐治麻造。八四馬孝 〇体験記 〇ある彷徨……岩崎美佐子 〇映画「私は死にたくない」について

て……遠藤一。絹川文代さんへ、モデルとしての美貌……逢坂太郎。読者通信。

○昭和三十八年六月号

(定価二〇〇円)

第一グラビヤ

美貌への冒瀆と汚辱、(一)、鼻のいたぶり(絹川文代)(二)、赤のテロプと黒のアミ(梨花悠紀子)(三)鼻責めの第一段階(梨花悠紀子)夫人被虐図(痛打に耐えかねて)△若妻の艶姿をみる△(関谷富佐子)柔肌と縄のコントラスト(大塚啓子)白の祭壇に上ったイケニエ(大塚啓子)令嬢夢幻の構想(館典子)

巻頭口絵

アイデア画「くつわ」(四馬孝画)女体洗礼式、口中蠟燭責め、(四馬孝画)妊婦の切腹「豪勇、巴御前」(滝れい子画)女体切腹「娘覚悟の切腹」(四馬孝画)新人責画「二本の煙草」(黒川不二夫画)マゾ画、奥方小姓を馬にする(滝れい子画)MS画「浴槽の女神」(四馬孝)第二グラビヤファッションモデルの悦虐プレイ(一)、狙った美しいペット、(二)、

可愛いSの関係(三木、浜田)マゾフォト「ブロースをかぶせられる」「人間椅子の恍惚境」(絹川文代)エビしばりへの序曲(梨花悠紀子)責めの疲れに呆けて、(水本茂美)豊満への羨望と抵抗(大塚啓子)

本文

風俗文献研究「白首百態」……樋口逸馬。女が動物にかえるとき……羽村京子。読者異常体験記、熱い鞭……狩井麗作。KK通信、マゾヒズム雑考……大倉安男。サジスチック・ストーリー「元美の反抗」……大中忠。サジズムと変形譚……千草忠夫。当代女武勇伝……諸岡堅雄。△風俗読物△剃刀と美女……川野京輔。サジスチック・ストーリー、薔薇虫……仏光刀四郎。女体切腹秘帖「遙かなる山河」(後篇)……飯森潔。△読者体験記△「夫婦のSM写真について」……新宮明夫。「奇譚三十九夜物語」(第二十五夜)……辻村隆。女相撲雑感……岡平吉夫。ガン作・マニヤのノート……芳野眉美。絹時と私(被虐愛さんげ)……万田不仁。「告白」夢見る乙女の想いと願い……葉村佳子。創作、砂土の塔(我が妻、奈津子の

記)……篁久治。読者通信。

○昭和三十八年五月号

(定価二〇〇円)

第一グラビヤ

華麗なるファッション・モデルの縛りプレイ、(一)、サジスチンと可憐なパット、(二)、責め疲れた愛情の交錯(三木、浜田)猿ぐつわのための鼻なぶり、美貌と美しい鼻の翻弄(絹川文代)緊縛のスロークー・ライン(大塚啓子)ロープの乳枷(愛川悦子)

巻頭口絵

アイデア画、倉庫の中の美しい荷物(四馬孝画)舌吊りの構想、鼻を灼く(四馬孝画)異色責画「乳首のおもり」(クロード・コガ)無頼の徒に取り囲れて(黒川不二男画)女体自決画「差し違え」(四馬孝画)マゾ画「ヘッド・ロックスの法悦境」(滝れい子画)

第二グラビヤ

麗貌と怨嗟のまなざし(絹川文代)水責めと水垢り(大塚啓子)和装縛りの美的感覚(館典子)マゾ・フォト(人間馬)△ハイヒールの汚辱△(絹川文代)長襦袢と縛めに耐えた表情(梨花悠紀子)太股と足首のアップ(梨花)ムチ

打ちに悶える岡谷夫人(関谷富佐子)

本文

あるミミック師の最後「死霊の谷間」……野中愛三。ガン作・マニヤのノート……芳野眉美。△女と女の血斗、娘切腹、女の生首△シリーズ、「駿府城女曾我」……牧真二。ふんどしをしめた女の美にとりつかれた愚者のたわ言……室井英山。サジスチック・ストーリー「美しきなき声」……伊関康明。蠅子の足……芳野眉美。おむつ受難記……原田美子。「奇譚三十九夜物語」(第二十四夜)……辻村隆。長期刑へのあこがれ……花田一郎。結婚(木枯しの草)……久留木栄。女人切腹秘話「勝子の最後」……堀川七郎。小説、十字架の妻……竹谷十三。読者告白浣腸の旨酒に酔いしれて……竹野圭子。女性男装管見……田島直士。バンドフォト雑感……安田高夫。愛の惑い(被虐愛さんげ)……万田不仁。ルポ、女房連の女相撲……丸山景三。銀杏屋敷の女……三条卓史。春霞六尺二景……百田章二。△モデルの手記△いけにえの幸福……大塚啓子。読者通信。

四馬 孝画

美処女羞恥責『悦虐絵巻』

△美しき嗜虐の生贄▽

A5判感光紙極鮮明焼付五枚十組 五〇〇円

略号

「えつ5」

○第一図から第五図まで、以下解説文通りの責画を分譲いたしますから、打切りにならない中、お早目にお申込み下さい。

第一図 淫辱全裸の仕置にされる

捕われの令嬢

豊麗花を欺く絶世の美貌と肉体に恵まれた深窓の令嬢緑川雪絵は、その比い稀れな天性の美貌と肉体の故に、嘘虐的で好色な富豪や有閑マダムを会員にもつ秘密クラブの経営者香蘭の狙うかけがえのない獲物となり、香蘭の手先になって働くズベ公達の一味によって彼女達の仕掛けた巧妙な凌辱の罠に陥り、香蘭の邸宅に誘拐され、嗜虐的な秘密ショートの

スターとなって稼ぐよう強要されているのでした。

だが、この世の穢れを知らない情純で淑やかな深窓の乙女が、どうしてこんな無法なことが聞けましよう。ただ許しを乞うのみでした。しかし、それが目的の淫虐な彼女達によって許しましよう。業を煮やした彼女達によって拷問部屋のような地下の密室に拉致された捕われの哀れな令嬢は、香蘭の

「そんなに私の命令が聞けないで強情を張るんなら、生れたままの素っ裸に剥いて、徹底的に折檻しておやり」

という命令で、政子を首領とする数名のズベ公達に手を取り足を取りされて、

「お願いです。それだけは、許して、許して下さい……。ア、アッ、あれエーッ、もうやめて、それだけは、ね、お願い、後生ですから、とらないで、ね、お願い、かんにんして、かんにんして……」

と、身も世もあらぬ羞恥に切なく身をもんで悩乱する花羞しい美処女の必死の哀願も空しく、深窓の令嬢にふさわしい華麗な衣裳が下着が、まるで花卉をむしりとられるように剥奪されてゆき、そして、遂に汚れを知らぬ乙女の、最後の羞恥を蔽っていたナイロン・パンティまでが、すでに膝頭のあたりまでズリ下げられています。そして全裸に剥かれた哀れな美処女の目の前には、これからそれに乗せられるであろう三角木馬が飾られています。

第二図 排泄強要の飽くなき淫婦

の奸計

全裸に剥かれた哀れな絶世の美処女は、あれから三角木馬をはじめ、いろいろな責め道具でなぶり辱しめられたのですが、それでもなお、水々しい乙女の羞恥を失わず彼女達の命令を拒み続けています。だが、香蘭や政子は、この獲えた生贄を一思いに責めて息の根

を絶つようなことはしません。一度徹底的に責めると、地下室から解放して豪華な寝室で二、三日充分の休養と栄養のある特別食を与えて、その心身の回復を計ります。しかし、万一逃亡したりすることのないように衣類は一切与えませんが、部屋の中を汚さないようにと、半透明のビニールで出来ている禪のようなおむつカバー一枚だけを腰にしめさせられています。でも一定の時間がくるとズベ公の誰かがトイレに行かせてくれるので、たとえ、その時間が予定より相当遅れても、雪絵はかつて一度もこの奇妙なおむつカバーを汚したことはありませんでした。

そして今度は、どんな悪企みがあったか、雪絵は昨夜から塩辛い食事を無理に食べさせられたというのに、水は一滴も与えられませんでした。ですから、今日は昼近くになると、咽喉が灼けつくように渴き、様子を見に来た政子に、おそろおそろ水を求めました。すると政子は、水を飲ましてあげると言いながら、雪絵を地下室に連れ込み、二人のズベ公に手伝わせて、奇妙なおむつカバー一枚の雪絵の豊麗な裸身を拷問椅子に坐らせ、見るも浅ましい開股の姿で拘束したのです。

それが終ると、政子がズベ公の一人に何事

か耳うちをして立去らせますと、間もなく香蘭が先刻のズベ公に水の一杯入ったバケツと大きなヤカンを持たせて入ってきました。やがて政子が片手で雪絵の髪をつかみ、美しい顔を仰向けにすると、「横着をすると、こうするのよッ」といいながら、いま一方の手で雪絵の豊満な乳房をつねります。香蘭は香蘭で、その形のよい雪絵の鼻をつまみ、愛らしい紅唇を無理にあげさせると、大きなヤカンの口を差し込んで、塩の混入したその水を無理矢理注ぎ込みます。

そして、いま見るこの絵は、すでに大量の塩水を飲まされたときみえて、あのなだらかな曲線を描いていた雪絵の牛乳を塗るかためたような真白なお腹が、プックリと膨らんでおり、乳房をつねる政子の手に、思いきり力が入っています。

第三回 羞辱排泄の哀願に苦悶する令嬢生贄

絶世の美貌とヴィナスにも比すべき豊麗な肉体に恵まれた慎しみ深い捕われの令嬢雪絵は、塩水を無理強いされた後、またもや全裸にされて拷問柱を背に、かろうじて爪先が床に届く恰好で縛られていました。足許には、

いま脱がされたビニール製の奇妙なおむつカバーが落ちています。

どんなに大量の塩水を飲まされたのでしょうか、その乳白色のお腹が、愛らしいお臍がせりあがるほど……まるで臨月近い妊婦のお腹のように異様なまでに大きく膨れかえっています。そして、あれからどの位の時間が経過したのでしょうか。当然のことながら、雪絵は激しい尿意を催して苦しみ出しました。だが、人一倍水々しい羞恥心の強い乙女の身がどうして現在わが身を責めいたぶる毒蜘蛛のように淫虐な女達に向って、その羞しい苦しみをお口にすることができましょう。足の指先に力を入れ、歯をくいしばるなどして、解放されるまでこらえようと必死になって耐え難い生理の欲求と戦いました。

だが、我慢できないものは我慢できないのです。容赦なく募り、そしてその排泄を迫る想像もできないほど激しい尿意に、雪絵は豊麗なその腰をモゾモゾさせ、まるで寒くてたまらぬというようにガクガクふるえ出すと、遂に死んでも口に出すまいと、いじらしいほどの努力を重ねていた羞辱の哀願が、雪絵の口から洩れ出しました。

蚊の鳴くような細い声で、ようやく口に出

した「トイレに行かせて下さい」という哀れな訴えも、ただ彼女達の嘲笑をうけるだけでした。「もうそんなに？」とか、「まあ、もうとてもですって！ホホホ、あきれ返った恥知らずのお嬢さんねえ」とか、「ほんとに、たしなみがないのねえ、そんな浅間しいことを口走らずに、癖の悪いお口をすぼめて、許されるまで我慢なさいよ」

実に意地の悪い嘲罵を散々浴びせたあげく私達の家畜になることを承知したら許してあげると、言い出したのです。肉体的な苦痛なら、どんなことにでも耐えぬいてきた雪絵でしたが、乙女心の羞恥には勝てません。香蘭の言い出した通りに泣きじやくりながら、嗚咽に舌をからませ、「ペロという一匹の牝犬となつて、御主人様の命令に絶対服従します」と、やっとなつてよくように誓うのでした。

その情景は、あまりの羞しさに伏せた黒いまつ毛の美しい瞳から真珠のような大粒の涙を流して深々と首をうなだれる雪絵。大きく膨れ返ってせり上ったお臍の辺りに煙草の火を近づける政子。その極度の羞らいに、火の出るほど真赤に染った雪絵の顔をのぞきこみながら、太くて長い曳鎖のついている頑丈な犬の首輪を無理に見せようとしている中国服

の香蘭。

第四回 牝犬ペロの誕生とその調教

巧妙な淫婦達の罠に引かかって捕われの身になってから、これまでずいぶんと何ものにもたとえ難い羞しめを受け続けたとはいえ、しかし、それらはすべて香蘭や政子などのズベ公達の暴力によって、無理矢理押しつけられた末の事でしたが、それが排泄強要の悪企みによって、ペロという牝犬になりますと宣誓してから、今度はより耐え難い行為を、それも自ら演じなければならぬのです。

「三遍廻ってワン」の次は砂の入った小箱にまたがって、四つん這いの姿で犬の真似をせよと言われては、もはや到底令嬢育ちの雪絵の耐えしのべる苦痛ではありませんでした。

心の底から許しを乞う雪絵の嗚咽の懇願もこの毒蜘蛛のような淫婦達の前には何の効果もありません。「そんなに箱にまたがるのが嫌なの？ そうだったら、四つん這いになって部屋の中を十回廻ってごらん！そして私と政子の処に来たときは、お顔をあげて、大きな声でワンと鳴くのよ。それが上手にできたら、トイレでも何処でも貴女の好きな処へ行

かせてあげるわ」という香蘭の言葉に、もはや一刻の猶予もならぬほど限界に達した尿意の苦痛に、その香蘭の言葉を唯一の頼りに、「一刻も早くこの責苦から解放されてトイレへ行きたい」というただそれのみを願って、膨れ上った大きなお腹に情容赦なく迫ってくる尿意の苦痛を必死にこらえながら、夢中で四つん這いになりました。

「あら、ひざをついたら駄目よ、四つ足をしっかり立てて、その重そうなお尻をしっかりと持ち上げて這うのよ」「ペロ、何よ、そのさまは！もっと、もっと、手も足も開くのよ」非情で冷酷な命令が次々と飛び出します。

そして、一刻の躊躇も許さないので。香蘭と政子の手にする苛酷な鞭が、瞬時のためらいも許さぬほどの速さで、そのムッチリと円く盛り上った豊満なお尻に、烈しい音を響かせてせきたてるのです。

ついに雪絵は、彼女達の望む四つん這いの恰好になって、冷たい地下のコンクリートの床の上を這い回りはじめました。首輪から床に落した太い鎖を引きずりながら……。

この場面の絵は、両手両足を大きく開け、高々と持ち上げられた円い豊満な雪絵のお尻の上に水の入ったガラスのコップが乗せら

れ、口には例の輝のようなビニール製のおむつカバーがくわえさせられており、背後に立った中国服の香蘭が鞭の先で雪絵のお尻を小突き、政子が砂の入った小箱を指さして笑っています。

第五回 華々しい羞恥地獄の饗宴

これは一見して秘密ショーの舞台とわかる光景です。この秘密クラブの会員である大勢の富豪や有閑マダムたちが、ギラギラと目を輝やかせて、またたきもせず舞台を注視しています。その舞台の上には、中央に運び出さ

れた拷問台の上に、ビニールの大きな布が敷かれ、その上に頑丈な犬の首輪だけを嵌められた令嬢牝犬ペロ、いや今では、このクラブのナンバーワンスター、パール由貴と、その名も改められている緑川雪絵が、仰向けに寝かされています。

否、ただ寝かされているわけではありません。その天与の傑作ともいふべき見事な形でくびれた胴から、大きく隆起している豊満なお尻を宙に浮かせ、まぶしいまでに成熟した雪白の太ももを左右に開けさせられ、天井から吊り下っている鉄のパイプに、その高々と持ち

上げられた両の足首を左右別々にくくりつけられているのです。

香蘭が妖艶なその肢体を、ほんの申訳のよくな布切れで作られた乳当てと、ストリッパーの使うバタフライ、それに黒の網目のストッキングと踵の細いハイヒールをつけただけの恰好で、鞭を弄びながら客席に向かって何か口上を述べています。政子が雪絵のお尻のところにしゃがみながら、いま一滴も残さずに注入し終った巨大イルリガールから、悪魔のような長い嘴管を、ほくそ笑んで見入っている。

四馬 孝画

// 凄艶、妊婦の切腹 //

A5判感光紙極鮮明焼付

四枚一組 五〇〇円

略号「せつ4」

切腹ファンの方々の要望にこたえて、ここに全部時代風の濃艶にして凄絶な、妊婦の切腹場面を公開いたします。

一、雨の夜の祠

横なぐり雨の降りしきる祠の前で、うら若

き町家の女、雨中に見守る一人の武士の前で上半身裸でぶっくりと膨らんだ腹部に、脇差しを臍下に突き刺す。縁の板の上に激しく流れる血汐。男まさりの妊婦の立腹。

二、不義はお家の御法度

美男の小姓と通じて妊娠した美貌の腰元、見届けるお局に見守られての切腹。白足袋、白装束の上半身を肌ぬぎとなり、短刀にて妊婦腹の左脇臍下から右脇腹へかけて、真一文字にきりきりと切りさばく。溢れる夥しい血汐の中に腸が傷口から顔を出している。

三、殿のための殉死

殿の急死に気も動転した側女が、身籠つてはちきれそうになった腹部を、白鞘の守刀で切り裂く悲壮な覚悟の自決。白装束に白足袋姿で、上半身は裸体、腹部膨満。

四、産み月婦の切腹

暗夜の邸内、東屋の前で豊満な肉体の若妻が大刀の柄を地面に支えて、臍下を一突き悲壮な切腹。産み月の巨大な腹部からは、血汐が滝のように地面へ流れる。長襦袢を僅かに腰に巻いたままの裸体姿。

今月の新版案内

全裸股間縛

略号

(せら)

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 関谷富佐子

豊かな白い肌、典型的なマゾヒスティンである自称するだけあつて、責められる時の表情はマニヤの琴線をゆするものがある。これは関谷夫人の緊縛フォトとして、とっておきの傑作で、皆さまの尽きせぬSの泉をこんこんと溢れさせる魅力を持ってあります。縄とムチに喘ぐ夫人の姿にSムードの感激を新たにして下さい。

強烈エビ責

略号

(えり)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

最近一層の柔軟さを増してグラマーぶりを発揮する彼女を、二つ折りに折り曲げて、強烈なエビ縛りにして放置すれば、膝小僧を顎につけて悶えながら、この苦痛から逃れようと全身をうねらす、その動きをキャッチして皆さまのSムードにマッチしようと狙ったものです。

浣腸器と女

略号

(ほの)

大手札

三枚一組 三〇〇円

モデル 絹川 文代

ベッドの真白いシーツの上に後手にきびしく縛り上げられ、口には汚れた豆しぼりの手拭がびったりと掩れている。下げられたパンティ、浣腸器がこの捕われの美女のヒップに向って、徐々に執拗な触手で迫ってくる。

裸身の晒し

略号

(わあ)

大手札

三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

バタフライも剥ぎとられて、全裸の姿態をさらして後手に吊られた魅力的な臀部を、ぷりぷりと固肥りに引き締ったヒップを皮のムチで思いきり引っぱると、肌を真赤に染めて、全身をくねくねとくねらせて身悶えぬく均整のとれた美しさが、ぐっとしびれるように胸にくる。

白フンドシ

略号

(ふん)

大手札

四枚一組 四〇〇円

モデル 大塚 啓子

きりりと尻の割れ目に喰い込んだ晒、二つの丘がぐっと盛り上った見事さは、禪マニヤの胸を高鳴らせることでしょう。女性禪マニヤの方々からの要望を十分にとり入れて作成した新しいセンスの禪

黒フンドシ

略号

(くふ)

大手札

四枚一組 四〇〇円

モデル 大塚 啓子

清潔な白の晒襦に對して、前袋の端が股のつけ根に喰い込むばかり、びったりと締め上げた黒フンドシの魅力、背後は紐のように細くねじ上げられた黒布が、ぐいと双丘の割目に喰い込んで、一段と豊かさを誇張している。いずれも姿態に研究をこらした新作です。

鼻の穴責め

略号

(なく)

大手札

三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

ぐいと上向いた顔の中央に、ぽっかりと開いた二つの穴、この可憐な鼻の穴に對して、器具を挿し込み、むくり上げて、鼻の穴をいたぶりつくす穴責めフォト。今度、マニヤのアイデアによって新しく撮影したものです。

鼻なぶり

略号

(ない)

大手札

三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

そら豆のような鼻の穴を上向か

鼻責の陶醉

略号

(なは)

大手札

三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

さて、私の鼻はどうでもして頂戴と観念のホゾを固めた若い女性の鼻に對して、恍惚境の表情を求めて鼻を弄ぶ触手、鼻を男の手にゆだねて、うっとりとの被虐の味をかみしめる女の顔。

腹を切り裂く

略号

(やい)

大手札

三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

下腹に刺す刃

略号

(やお)

大手札

三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

柔肌を切る

略号

(やえ)

大手札

三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

代理部分讓品案内

股間縛法悦境裸身

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 略号(めこ) 絹川 文代

禪女女血斗場面写真

大手札 五枚一組 五〇〇円

モデル 略号(らは) 絹川 文代、大塚啓子

吊り打ち責め

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 略号(やり) 関谷富佐子

相撲禪の女

大手札 五枚一組 五〇〇円

モデル 略号(そい) 東浦ひかる

浣腸実施中

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 略号(かみ) 東浦ひかる

強制空気浣腸

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 略号(かく) 東浦ひかる

百C Cの浣腸

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 略号(かな) 東浦ひかる

浣腸責の極

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 略号(かむ) 東浦ひかる

大の字逆さ吊り

大中判 三枚一組 四〇〇円

モデル 略号(つり) 梨花悠紀子

立木宙縛り

大中判 三枚一組 四〇〇円

モデル 略号(くた) 梨花悠紀子

凄惨、乳房責

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 略号(とい) 梨花悠紀子

妊婦の緊縛

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 略号(にむ) 永田 節子

全裸の仕置

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 略号(すお) 東浦ひかる

血紅女体自害

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 略号(ひち) 大塚 啓子

女体切腹マンドラ

大手札 五枚一組 四〇〇円

略号(あま)

悲愴女体自決

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 略号(ひい) 大塚 啓子

哀艶女体割腹

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 略号(かつ) 梨花悠紀子

凄惨血紅女体立腹

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 略号(ひさ) 大塚 啓子

バンド着用フオート

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 略号(めい) 梨花悠紀子

バンド着用の縛り

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 略号(めい) 梨花悠紀子

バンド着用の縛り

大手札 四枚一組 三〇〇円

モデル 略号(めは) 梨花悠紀子

女性の六尺褌

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 略号(ろく) 大塚 啓子

ゴム・マニヤ

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 略号(こむ) 梨花悠紀子

メンス・バンド

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 略号(めす) 梨花悠紀子

ゴムカバー着縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 略号(かは) 大塚 啓子

脱がされたバンド

大手札 二枚一組 二五〇円

モデル 略号(めに) 梨花悠紀子

アテゴムの猿ぐつわ

大手札 二枚一組 二五〇円

モデル 略号(めほ) 梨花悠紀子

変態強盗侵入

大手札 十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 略号(こと) 絹川 文代

和洋争斗場面

大手札 六枚一組 五〇〇円

モデル 略号(らり) 田中芳代 外

裸女争斗場面

大手札 十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 略号(らし) 田中芳代 外

〔新版分譲品案内〕

○女体争斗場面十二態

大手札印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円
略号「おん」

モデル 春日ルミ、愛川悦子

○おムツの股間しばり

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円
略号「むく」 東浦ひかる

○強烈責め、被虐の果て

大手札印画紙 五枚一組 五〇〇円
略号「りお」 梨花悠紀子

○豊満乳房いじめ

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円
略号「とお」 大塚 啓子

○強制浣腸三態

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「きか」 絹川 文代

○激痛！逆エビ責め

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円
略号「きえ」 大塚 啓子

○美貌の裸身に縄目

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「きん」 絹川 文代

○腰元、吊り責め

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円
略号「こり」 村井知可子

○腰元間諜の拷問

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円
略号「こく」 村井知可子

○ゴムぐるみ人形

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円
略号「こみ」 東浦ひかる

○ゴム包みの束縛

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円
略号「こは」 東浦ひかる

○ゴムと女体のアツプ

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円
略号「こあ」 東浦ひかる

○パリスバンド前開き

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「おい」 東浦ひかる

○パリスバンドの縛り

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「おは」 東浦ひかる

○パリス携帯用白バンド

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「おか」 東浦ひかる

○サカエ軽便型バンド

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「おた」 東浦ひかる

○パリスSSバンド

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「おこ」 東浦ひかる

○パピアバンド（大型替ゴム）

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「おし」 東浦ひかる

○サカエバンド（百合）

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「おえ」 東浦ひかる

○珍品鼻責鼻料理

大手札印画紙 六枚一組 六〇〇円
略号「はか」 大塚 啓子

○女体格闘場面写真

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号「めと」 絹川文代、大塚啓子

○禪美と禪縛り

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「ふし」 桜井 葉子

○浣腸器嘴管挿入

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「しか」 梨花悠紀子

○浣腸後便器使用

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「まる」 梨花悠紀子

○浣腸後おしめ使用

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「しめ」 梨花悠紀子

○浣腸排便強要

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「はへ」 桜井 葉子

【新版】 女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選 大手札印画紙(9×13寸) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ(愛川)
E 2	仕置を受ける裸身(大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌(愛川)
E 4	ムチに耐える美肌(関谷)
E 5	豊臀と豊胸しほり(愛川)
E 6	捨身の後手観念像(大塚)
E 7	足から眺めた裸身(水本)
E 8	全裸エビ責尻強調(関谷)
E 9	ハリツケられた娘(大塚)
E 10	強烈後手高手小手(愛川)
E 11	責め抜かれた疲労(梨花)
E 12	逆エビにもだえる(大塚)

E 13	拘禁された美囚女(大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛(愛川)
E 15	海老責に泣く足首(大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ(愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘(大塚)
E 18	美しき全裸股間縛(大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ(関谷)
E 20	ベッドにもだえる(関谷)
E 21	身体中に強烈な縄(愛川)
E 22	放置された海老責(東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる(東浦)
E 24	ローソクで責める(大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ(絹川)
E 26	足指先に漂う媚態(関谷)
E 27	後手吊り正面裸像(関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛(東浦)
E 29	女体の全部を晒す(愛川)
E 30	激しいムチ打の果(関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ(東浦)
E 32	投げ出した脚線美(絹川)
E 33	脐中心の腹部緊縛(梨花)
E 34	セーラー服の哀歓(梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部(関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女(梨花)
E 37	制服の女学生縛り(梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻(関谷)

E 39	痛打にくねる裸身(関谷)
E 40	乳房に加える金具(大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔(大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む(大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身(梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶(大塚)
E 45	敷布の上にのびて(絹川)
E 46	鼻いじめのアップ(梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄(東浦)
E 48	縄にくびれる裸身(東浦)
E 49	椅子に晒された女(大塚)
E 50	脐そうじをされる(大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う(絹川)
E 52	火のついた煙草責(四方)
E 53	踏みつけられた胸(梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘(大塚)
E 55	手足猪吊りの美態(絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛(絹川)
E 57	諦めた観念全裸像(水本)
E 58	縄にもだえぬく姿(絹川)
E 59	黒髪を吊られた女(大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ(絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身(竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す(竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目(大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会(絹川)
E 65	野外の後手宙吊り(梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中(四方)
E 67	室内の後手宙吊り(梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態(梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ(大塚)

E 70	足の裏ハネ操り責(梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み(竹本)
E 72	野外の逆さ吊り責(梨花)
E 73	梯子責にあう美女(梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる(梨花)
E 75	娘十六縛り加減(花坂)
E 76	踏みにじられた顔(大塚)
E 77	逆エビに反る足先(大塚)
E 78	両手吊りのお仕置(絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻(梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像(大塚)
E 81	食卓上の縛り人形(大塚)
E 82	むしられる下着(大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り(梨花)
E 84	寝台上の若妻狂態(関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り(東浦)
E 86	輝姿後手縛り吊り(東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒(関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図(大塚)
E 89	令嬢後手高手小手(絹川)
E 90	脐部乳房強調緊縛(東浦)
E 91	責衣にくるまれて(東浦)
E 92	全裸逆エビ責め(水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ(梨花)
E 94	全裸後手縛り晒(関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ(関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ(東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り(梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡(関谷)
E 99	豆しほりの猿轡(絹川)
E 100	強烈縛り脐いじめ(東浦)

読者原稿募集

△体験、告白、手記▽

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかあったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるものたえ、どうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用篇には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語▽

御自分の描く夢をまとめて下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さい。

さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポート・マニヤ通信▽

新聞記事、週刊誌記事等でお持ちの事項、或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。◎尚、以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作成の各種フォトを贈呈いたします。

△読者通信▽

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に對する希望や御意見、感想、思文通、或いは読者相互間の交歓、面談の許す限り、つとめて掲載いたします。

書下し原稿募集

新しい風俗雑誌として新発足する本誌のために、新鮮にして読者の大歓迎するよう、新鋭にして原稿をどしどしとお寄せ下さい。左記の要項にて御応募下さい。どうか奮って御応募下さい。

募集要項

一、原稿の内容は風俗雑誌の尖端をゆく本誌にふさわしいもの。二、原稿は小説、創作、研究、資料、連作、告白、紹介、論説、といったものを始めとして、浣腸、女装、美腹、フェチ、女相撲、女闘美、女連した身体各部に對する狂崇等に関するものを含めます。

一、表紙、口絵、挿絵、或は写真なども御遠慮なくお寄せ下さい。二、原稿の枚数は別に定めません。三、原稿の短くても、自由です。尚、都合によつては、便箋や鉛筆がきで、未発表のものに限り、必ず自作品に、締切は特別に定めません。掲載可能な作品は、最近号から漸次発表いたします。四、優秀作品の投稿者は、表紙の裏面に、題材を提供して、稿を御依頼することがあります。五、採用原稿に對しては、相当の原稿料をお支払致します。六、一、誌上での匿名は御自由です。又、他稿者や寄稿家の住所本名は絶対に他へ洩すようなことは致しません。故に御安心下さい。

奇譚クラブ編集部

☆本誌御愛読の榮

予約料

一月分 (1冊)	二百円	送共
三月分 (3冊)	六百円	送共
半年分 (6冊)	千二百円	送共

本誌は各地書店にて毎月二十五日一斉に発売致しますが、若し入手困難でしたら、直接発行所へ代金御送りの上お申込み下さい。予約お申込みの場合は発行と同時に、厳重包装の上、急送申し上げます。尚既刊号の内、在庫分は別項に一覧表を掲げてあります故、御注文頂き次第に急送いたします。

☆代理部分譲品についての案内

○本誌代理部分の譲品は、最近分譲品案内並に読者通信欄の記事中に広告してあります。他に「代理部分譲品総目録」を準備しております。一、代理部分譲品は、お申込み下さい。二、譲品は、お申込み下さい。三、譲品は、お申込み下さい。四、譲品は、お申込み下さい。五、譲品は、お申込み下さい。六、譲品は、お申込み下さい。七、譲品は、お申込み下さい。八、譲品は、お申込み下さい。九、譲品は、お申込み下さい。十、譲品は、お申込み下さい。十一、譲品は、お申込み下さい。十二、譲品は、お申込み下さい。十三、譲品は、お申込み下さい。十四、譲品は、お申込み下さい。十五、譲品は、お申込み下さい。十六、譲品は、お申込み下さい。十七、譲品は、お申込み下さい。十八、譲品は、お申込み下さい。十九、譲品は、お申込み下さい。二十、譲品は、お申込み下さい。二十一、譲品は、お申込み下さい。二十二、譲品は、お申込み下さい。二十三、譲品は、お申込み下さい。二十四、譲品は、お申込み下さい。二十五、譲品は、お申込み下さい。二十六、譲品は、お申込み下さい。二十七、譲品は、お申込み下さい。二十八、譲品は、お申込み下さい。二十九、譲品は、お申込み下さい。三十、譲品は、お申込み下さい。三十一、譲品は、お申込み下さい。三十二、譲品は、お申込み下さい。三十三、譲品は、お申込み下さい。三十四、譲品は、お申込み下さい。三十五、譲品は、お申込み下さい。三十六、譲品は、お申込み下さい。三十七、譲品は、お申込み下さい。三十八、譲品は、お申込み下さい。三十九、譲品は、お申込み下さい。四十、譲品は、お申込み下さい。四十一、譲品は、お申込み下さい。四十二、譲品は、お申込み下さい。四十三、譲品は、お申込み下さい。四十四、譲品は、お申込み下さい。四十五、譲品は、お申込み下さい。四十六、譲品は、お申込み下さい。四十七、譲品は、お申込み下さい。四十八、譲品は、お申込み下さい。四十九、譲品は、お申込み下さい。五十、譲品は、お申込み下さい。五十一、譲品は、お申込み下さい。五十二、譲品は、お申込み下さい。五十三、譲品は、お申込み下さい。五十四、譲品は、お申込み下さい。五十五、譲品は、お申込み下さい。五十六、譲品は、お申込み下さい。五十七、譲品は、お申込み下さい。五十八、譲品は、お申込み下さい。五十九、譲品は、お申込み下さい。六十、譲品は、お申込み下さい。六十一、譲品は、お申込み下さい。六十二、譲品は、お申込み下さい。六十三、譲品は、お申込み下さい。六十四、譲品は、お申込み下さい。六十五、譲品は、お申込み下さい。六十六、譲品は、お申込み下さい。六十七、譲品は、お申込み下さい。六十八、譲品は、お申込み下さい。六十九、譲品は、お申込み下さい。七十、譲品は、お申込み下さい。七十一、譲品は、お申込み下さい。七十二、譲品は、お申込み下さい。七十三、譲品は、お申込み下さい。七十四、譲品は、お申込み下さい。七十五、譲品は、お申込み下さい。七十六、譲品は、お申込み下さい。七十七、譲品は、お申込み下さい。七十八、譲品は、お申込み下さい。七十九、譲品は、お申込み下さい。八十、譲品は、お申込み下さい。八十一、譲品は、お申込み下さい。八十二、譲品は、お申込み下さい。八十三、譲品は、お申込み下さい。八十四、譲品は、お申込み下さい。八十五、譲品は、お申込み下さい。八十六、譲品は、お申込み下さい。八十七、譲品は、お申込み下さい。八十八、譲品は、お申込み下さい。八十九、譲品は、お申込み下さい。九十、譲品は、お申込み下さい。九十一、譲品は、お申込み下さい。九十二、譲品は、お申込み下さい。九十三、譲品は、お申込み下さい。九十四、譲品は、お申込み下さい。九十五、譲品は、お申込み下さい。九十六、譲品は、お申込み下さい。九十七、譲品は、お申込み下さい。九十八、譲品は、お申込み下さい。九十九、譲品は、お申込み下さい。一百、譲品は、お申込み下さい。

奇譚クラブ 定価二百円

九月号 (第十七卷第九号) (通刊 第百八十号)

昭和三十八年八月二十日印刷
昭和三十八年九月一日発行

編集印刷兼発行人 箕田京二

大阪阿倍野郵便局私書函第十四号

発行所 天星社

(振替口座大阪五〇〇四二番)

(昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別扱承認雑誌 第一二二二号)